

キューバ日本人物語

倉部きよたか



キューバ日本人物語

はじめに

移民史は、つまるところ、それぞれがどう生きたかの積み重ねであつて、その難題にあえて挑戦。「キューバ日本人移民名簿」にまとめた千百人を超える一人一人について、生きた証を、一行でも二行でもわかることがあれば、とはじめました。そして、ほぼ半年、千百四十五人を書き終えました。これまで、日本からキューバに入った日本人の数を千百三十九人としてきましたが、今回、確認作業を続けているうちに、姓名や出身地の誤りに加え、重複や欠如にも気づいて、現在(二〇二〇年九月一日)のところ、総数を千百四十五人に訂正しています。いうまでもなく、日本人移民史として対象にしているのは、日本人、つまり一世だけですが、二世も何人か記憶に残る人として取り上げています。移民の歴史は、移民会社による集団移民の場合には少ないながらも外交記録が残っていますが、個人による渡航や呼び寄せの場合はそれがありません。キューバの場合、集団移民はによる小川移民が七十五人、榎本愷きざしによる榎本移民が十七人、そして海外興業による契約移民が三百九十三人(第十八回までが三百八十人)と半数足らずで、海興移民のなかにも渡航のために海外興業の斡旋を利用しただけの人がずいぶんいました。だから、足跡を手繰ることはけっこうきびしくて、それでも、ふとした数字や少しの言葉(記述)にもヒントはあつて、想像を逞たくましくすれば実像もぼんやりとながら見えてくる、そ

れがまたたのしく、内藤さんといっしょに「キューバ日本人移民名簿」をまとめたあと、司馬遷の『史記』ではありませんが、名簿の一人一人がどんな生き方をしたのか、「キューバ移民列伝」を刊行するのが約束でした。そのために内藤さんには、百人近いか、かれらの「ひととなり」を手紙で教えてもらっていました。だから、もちろんこれは内藤さんとの協働作で、ペーパーにこそできなかったものの、なんとかネットを通じて発表できてほんとうにうれしい。また一つ肩の荷が下りて、内藤さんにも、お世話になったあの人この人にも、冥途で顔向けができると思います。

列伝

宮下幸太郎

石川県羽咋の人らしいが、「若狭の幸太郎」と名乗っていたともいうから、あるいは福井の人だったかもしれない。若い頃に横浜に出て外国船に乗り組み、下働きからはじめてアルゼンチンで機関士の資格を取っている。一九〇〇年頃にハバナ港で脱船、そのまま住みついてランチを購入し、ハバナ港での旅客の送迎をはじめた。一時は十艘近くを持って繁盛したらしい。晩年はハバナ港対岸のカサブランカ(Casablanca)に移って食料品店を開いていた。キューバ婦人と結婚。子どもはなく、原因は胃病というから胃潰瘍か胃癌だったのかもしれない。一九二一年前後に死んでいる。夫人のその後もわからず、幸太郎の墓所も見つからないが、位牌がハバナの慰霊堂の二号セルに納められている。キューバ政府は、「一八九八年入国」とディアリオ・デ・ラ・マリナ紙に掲載の「Osuna Y.」を最初の日本人移民として、一九九八年に「キューバ日本人移民百年祭」を開いているが、この人物は漢字名はもちろん、出身府県も上陸後の様子もまったく不明で、これを嚆矢とするには、その根拠にかなりの無理がある。いまのところ、ぼくはこの宮下幸太郎が最初の日本人移民だと考えている。ふつうブラジルやペルーでも移民記念祭が開かれるのは、日本人会など日本人や日系人の側からの希望や働きかけがあつて、当事国政府も動くものなのに、キューバの場合、キューバ政府が率先して音頭をとっていた。こ

た構図は戦前のもつと露骨だった。あまり知られていないが、メキシコでは日本人会が日本海軍の対米軍事作戦の先駆けに利用された例もある。メキシコ革命最中の一九一三年から一四年にかけてのことで、将来の日米戦争を想定した軍部は、日本人会の組織を使ってメキシコに日本の軍事拠点を築こうとした計画があった。もちろんこれはあまりにも幼稚で、実施されずに終わっているが、そうした動きが日本政府と軍部にあつたことは事実であつて、それと同じ理屈で、よく似たことが、いま、日本政府と財界によつて進められている。つい半世紀前に、まったく同じことをして借款の負債を抱えてしまったのに、それを繰り返そうとしている。結果は明らかで、また、税金が財界に流れてしまうことになる。それは別として、最近わかつたことだが、地理学者の志賀重昂が一九一四年のキューバ紀行の随想を、一九一五年（大正四年）一月十二日から十七日にかけて東京朝日新聞に連載している。志賀はハバナ港で宮下のランチに乗り合わせたらしい。そして、本人から聞いた話として「宮下というのは旧姓で、そのときは若狭幸太郎を名乗っていた。十五歳で横浜に出て、十八歳で水夫になり、その後、上海からカナダのモントリオールを経てアルゼンチンに入り水兵になったが、海軍内で抗争があつたため、それを避けウルグアイのモンテビデオに逃れ、そこからハバナに入った。二十三年前のことで、ハバナではスペイン婦人のセラウイナと結婚、ランチを二隻購入して乗船客の送迎をしていた」と記している。そのとき宮下は五十四歳だった。これがほんとうだとすれば、宮下の

キューバ入り、つまり、キューバへの日本人移民の嚆矢は一八九一年前後のことになり、十年もさかのぼることになる。ぼくは嚆矢さがしにこだわらない。ただ、間違いは糺さないとけない。歴史の検証に確定はありません。これからも新しい「手」で新しい事実が掘り起こされることをねがっています。

大平慶太郎

この人のことを記した史料は断片的だがけっこうあって、一八六五年（慶応元年）、現在の長野県飯田市に生まれている。飯田から西に妻籠に出る街道の峠のかりに大平という宿場があったが、もともとの出自はそのあたりかもしれない。神戸商業講習所（のちの神戸商業学校）卒業後、横浜正金（のちの東京銀行）に入り、数年後にメキシコに渡っている。当時、正金の支配人をしていたのは、のちに二・二六事件に斃れる高橋是清で、かれを通じての「移民依託研修生」という名目でのメキシコ行だった。移民会社による日本からメキシコへの移民の送り出しは一九〇一年にはじまり、一九〇四年以降、本格化しているが、その後わずか三年で打ち切られている。大平がメキシコからキューバに移ったのはそんな一九〇五年のことだった。メキシコ・シティーを中心に四、五年の滞在だったと思うが、その間、日本の移民会社と関係していたかどうかはわからない。キューバに入るとすぐにハバナ旧市街（Habana vieja）の目抜き通



左から三人目が大平慶太郎そして夫人、右端が長男忠男

り、オビスポ (Obispo) 街とヴィジェガス (Villegas) 街の交差点の北東角に竹細工店を開いている。日本から取り寄せた既製品だけでなく、神戸から職人を呼び寄せ、独自商品もつくって売り出した。これがあたり、さらに日本から陶器や電気器具、綿布なども取り寄せ、店の名前もエル・ソル・ナシエンテ (El Sol Naciente、朝日、旭日) と改称、横浜の桃井商会と提携して規模を拡大し、品数の豊富なことで知られ、キューバ人に人気の店だった。なかでも「ヨケル」(避ける)のブランドで売り出した蚊取り線香はハバナで知らない者がなかったという。

一方、ハバナ東郊のカンポ・フロリド (Campo Florido) に農地を購入して牧畜と農業をはじめたが、土質が悪くて中断、そこに除虫菊を植え、蚊取り線香をつくったのだった。しかし、一九三〇年を境に砂糖価格の下落でキューバ経済が悪化、さらにアメリカの干渉でキューバ政府がすべての輸入品に百パーセントの関税を課すよ

うになったため商店経営が難しくなり、多額の負債を抱えたまま、大平は体を悪くし、日米戦争がはじまる少し前に、長男忠男と次男麟三にあとを託し、夫人といっしょにキューバを去った。長男忠男は日本生まれの一世、二男麟三はキューバ生まれで、二人で店を続けていたが、ともに戦時収容で一九四一年十二月十二日に逮捕され、第一回収容者として翌年四月十六日にイスラのプレシディオに収容された。ただ、忠男は一年足らずで釈放され、四三年の日米捕虜交換プログラムの第二次交換船で日本に戻っている。日本の外務省筋が動いたのだろう、帰国後すぐに外務省に出向いている。その報告で日本政府も収容の実態を知ったのだった。戦時収容はその後も続いて総数三百五十人にのぼっているが、終戦以前に釈放されたのは、忠男ただ一人だった。麟三は戦後も店を続けていたが、カストロ革命で店舗を接収され、一九六六年に裸一貫でアメリカに亡命した。ただ、大平慶太郎にはもう一つ別の顔があつて、一九二四年から二六年にかけて十八回にわたって続いた海外興業移民の現地代理人をしていた。といつても移民送出しに直接手を染めたわけではなく、ハバナ港で移民を受け入れ、当時はラス・ビジャス州だったトリニダー（Trinidad）の砂糖耕地に送り出すというだけのかかわりだったが、砂糖耕地での労働事情が悪く、移民のほとんどは数カ月、あるいは数週間で逃亡、そのため移民の間に大平の評判はよくなかった。また、キューバでの日本人会は、最初、ハティボニコで生まれている。その期日がわからないし、その後の動静もわからない。それが発展したのだろう、

一九二七年一月二日付でハバナに玖馬日本人会が榊原利一を会長に設立されている。しかし、大平はこれには参加せず、対立するかたちで、同年、仲間三十四人と玖馬昭和会という別組織をつくり、その趣意書のなかで、日本外務省に対して、キューバともつと交流を深めるために通商条約を締結するよう訴えている。二〇年代はじめにハバナに設置された日本領事館は数年で閉鎖されていたから、その復活を要求するものだったと思うが、日本外務省とのつながりが深い人だった。いまも同じような気がするが、戦前は、移民社会（日本人会）と日本政府の出先機関、つまり公使館との関係はべたべたで、移民会社と公使館そして日本人会の上層部は、言葉は悪いが、三者つるんで移民を食い物にする、そんな構造がふつうにあった。とくにブラジルでは顕著で、何度も社会問題になり、それに反対した者は嫌がらせを受けたり、三浦鏗のように国外退去させられたりしている。ただ、キューバの場合はもともと移民数が少ないことであって、そんな様子は見られない。忠男の釈放、帰国に動いたのも日本外務省が収容の実態を知りたかったからで、慶太郎や忠男の方からの働きかけでなかったことがわかっている。

宮城勝

沖縄県国頭郡大宜味間切塩屋村（国頭郡大宜味村塩屋）の人。名前は勝次郎が正しいが、なぜか「勝」を名乗っていた。一九〇七年にメキシコからキューバに入り、ハバナや西のピナル・デ

ル・リオ (Pinar del Rio) にいたが、二年後の一九〇九年にイスラ・デ・ピノス (Isla de Pinos) に渡っている。イスラは石灰質土壌の島で、浸食されたあとに硬い部分が小山をつくって、島全体に松の木が林立していたことから日本人は松島と呼んで親しんだ。そのイスラに入った最初の日本人だった。といつても農業をしていたわけではなく、アメリカ人の家庭で働いていた。コシネロだったか、ハルディネロだったか、それともその農園で働いていたのか、わからないが、二年後の一九一一年四月にキューバを離れて帰郷している。イスラはステイブンソンの『宝島』の舞台にもなった島で、十九世紀に入っても南半分は荒地のため未開のまま、北半分に点々と小さな村ができていた。しかし、一八九八年の米西戦争でアメリカの実効支配下に置かれ、カリフォルニアからのアメリカ人が入植し、あちこちにグレープフルーツの農園を開いていた。働いていたのはキューバ人だったが、そこに日本人も入ってコシネロや農場の日雇い労働で資金を貯め、土地を借り入れ、やがて農業をはじめようになる。

齋藤幸之進

福島県の人で、一九〇七年にアメリカからキューバに入っている。そのためか、少し英語が話せたらしく、中部のカマグエイ (シエゴ・デ・アビラ) のバラグア (Baragua) のセントラルで、ホテルの支配人をしながら製糖工場の労働監督をしていた。セントラルというのは製糖工

場を中心に開けた町のこと、キューバの地方を車で走るとわかるが、限りなく続く砂糖黍畑の果てに白い煙突が高くそびえると思つたら小さな町が見えてくる。キューバの中部から東部にかけての地方都市のほとんどはセントラルといつてもいいほどキューバは砂糖一本の国だった。工場で働いていたのはキューバ人や、ジャマイカ、ハイチから、サフラといつて砂糖黍の収穫期にやつて来ては帰つていくから「つばめ」と呼ばれた季節労働者で、日本人は、製糖工場の支配人の家庭に入つてコシネロをしたり、工場事務所のハルディネロになる者がほとんどだった。だから、斎藤のように労働者監督になるのはめずらしく、かなりの高給を取つて、事にも融通が利いたのだろう、のちに一九二〇年代に海外興業によつてトリニダーの砂糖耕地（砂糖黍農場）に送られた日本人には、耕地を逃亡したあと斎藤を頼つてバラグアに移る者が多く、斎藤もずいぶんそうした日本人の世話をしている。結婚はしていなかったようで、晩年はハバナの養老院で暮らして一九六四年八月二十五日に死亡している。収容は四二年十一月二十四日収容の第四回グループで、プレシディオでは五階にいた。

大平慶太郎妻

大平慶太郎夫人として、いろんな人の話に登場して、写真も残つていふというのに肝腎の名前もわからない。移民史は、ともすれば男中心の歴史だったからこんなことがあつても不思議

ではない気がする。もう一度、史料をきちんとあたってみようと思う。長野県の人。

清水幸吉

キューバ移民のなかでもたった二人しかいない大阪の人。日本人が日本国内を自由に歩きできるようになったのは一八七一年のこと、江戸期には通行手形と書いていた旅行鑑札規定が廃止されてからのことだが、その頃から商用を目的に旅芸人がアメリカに渡るようになっていく。そんな一人に大阪（難波）生まれのサチキチという軽業師がいて、一座を組んで西海岸から東海岸、さらにメキシコからカリブ海の島々を興行して渡り歩いている。いくつかの記録にナニワのサラキチと呼ばれて、皿回しが得意だったとあるが、これは「サチキチ」の間違いで、この清水幸吉ではなかったかと思っている。一九〇九年にアメリカからキューバに興行で入った二十九人のサーカス団の一員で、そのままキューバに居残った。その後の暮らしぶりはわかっていないが、写真と死亡診断書が残っていて、それによれば一九二五年十二月十一日、中部ラス・ビジャス（ビジャ・クララ）のサグア・ラ・グランデ (Sagua la Grande) で死亡、ハバナの日本人慰霊堂の303号セルに位牌がある。そういえばあの南方熊楠も一八九一年に留学先のアメリカからキューバに地衣類の植物採集に渡り、サーカス団の一人と知り合い、興行に同行してジャマイカやハイチなどを渡り歩いている。いまのジェット機時代よりあの頃のキューバやカ

リブは日本人にとってそんなに遠い国ではなかったのかもしれない。一八九四年には四百九十人の日本人移民がトリニダード・イ・トバゴの少し北にあるフランス領の小さな島グアドループに移民している。

清瀬貞雄

熊本県の人で、大陸殖民によるオアハケニヤ移民として、一九〇六年にメキシコに渡ったと思う。一九一〇年にキューバに転航、三十歳前後でなかったか、東部オリエンテのグアンタモ(Guantanamo)のセントラルで大工をしていた。キューバ婦人と結婚してそのままずっとグアンタモに住み続け、戦時収容でイスラに送られるまでは日本人との交際はいつさいなく、日本語もすっかり忘れていたという。ずいぶん貯蓄があったらしく、戦後は比較的裕福な暮らしをしていた。一九七九年十二月三日に死亡、九十七歳だった。娘が一人いたらしいが詳しくわからない。日本人が多くいたのは、カマグエイやラス・ビジャスなど中部のセントラルで、東部オリエンテにいたのは数人だけでひじょうにめずらしい。収容は第四回で四階にいた。

宮城文八

宮城勝と同じ、沖縄県国頭郡大宜味間切塩屋村(国頭郡大宜味村塩屋)の人。東洋移民合資

会社取り扱いのメキシコ移民として、一九〇七年五月十八日、神戸を出航、メキシコ北部コアウイラ州のラス・エスペランサス (Las Esperanzas) 炭鉱に入っている。二十一歳だった。ラス・エスペランサスはアメリカ人の経営する炭鉱で、設備は整っていたが、爆発事故が頻発して逃亡する者が多かった。契約期間は三年。これを最後まで務めたか、途中で逃亡したかどうか、一九一一年にキューバに入っている。その後のあしどりはわからないが、おそらく宮城勝を頼ってイスラに渡ったのではないか。キューバで死亡している形跡がないから帰郷したと思う。一八八六年八月十九日生まれ。

宮城代八

宮城勝や文八と同じ沖縄県国頭郡大宜味間切塩屋村 (国頭郡大宜味村塩屋) の人で、東洋移民合資のメキシコ移民として同航、一九〇七年に同じラス・エスペランサスに入っている。十八歳だった。キューバへは文八より一年後れで二二年に入っていて、やはりイスラに渡っていると思う。そして、文八同様、帰郷しているだろう。一八八九年三月二十一日生まれ。もう一人、同じ東洋移民取り扱いの同航移民に、同じ在所で二つ年下の宮城友八がいるが、この人はキューバには渡っていない。

福手房吉

岐阜県郡上郡嵩田村大字山田（郡上市美並町山田）の人。一九〇六年十二月十日、大陸殖民の第九回メキシコ移民として横浜を出発。契約ではコリマ鉄道の建設工夫だったが、途中で解約し、南部オアハカ州のオアハケニャ耕地への農業移民に切り替えた可能性もある。コリマに入つたのなら、翌年二月四日に建設現場に着いている。しかし、三カ月余りで工事が完了したため全員が解雇されてしまう。それがわかつていたから同行の移民監督は、オアハケニャへの契約切り替えを勧めたのだった。ただ、オアハケニャでも、やがて革命の動乱でゲリラの襲撃が続いて一九一五年にはセントラルが閉鎖されている。福手の場合、キューバに入ったのは一九一二年頃だから、おそらくメキシコではコリマに入り、その後、転々としたあとキューバに渡つたと思われる。キューバでは早い時期にイスラに移っているが、どんな暮らしをしていたのかはわからない。戦時収容では一九四三年二月の第七回収容でプレシディオでは二階にいた。このときの収容は沖繩の大兼久安吉と二人だけで、収容が後れたのはともに一八八一年生まれの高齢だったから。一九六七年九月五日にイスラで死亡している。家族は残っていないので独身で過ごしたと思う。

宮城当清

宮城文八、代八と同じ沖繩県国頭郡大宜味村塩屋（国頭郡大宜味村塩屋）の人。代八より六歳年上で、二人よりは五カ月あとの一九〇七年十月二十三日、横浜発の東洋移民合資の移民として、二人と同じメキシコ、コアウイラ州のラス・エスペランサスに入っている。キューバへは代八と同航ではなかったか、一九一二年に渡っている。二十九歳だった。すぐにイスラに移っているだろう。農業を続け、生涯独身を通して、晩年は原田茂作の農場に寄寓していた。七年十一月二十六日に死亡。イスラは北端の町ヌエバ・ヘロナから南に放射状に点在する開拓地に日本人が入って農業をしていた。原田はずつとのち一九二五年の海外興業移民でトリニダーの砂糖耕地に入ったが逃亡、先の斎藤幸之進を頼ったりしたあとイスラに渡って農業をはじめた。イスラ唯一の成功者だった。

広瀬久次郎

富山県新川郡舟橋村大字松林（中新川郡舟橋村）の人。一九〇六年九月二十六日、横浜発の東洋移民合資のメキシコ移民で、北部コアウイラ州のラス・エスペランサス炭鉱に入っている。三十一歳だった。年齢からいって故郷に妻子を置いての渡航だったにちがいない。一二年十二

月に三十七歳でキューバに入っているが、その後のことはわからない。たぶん郷里に戻っていると思う。

桜井幸之進

山口県の人。一九二二年十二月にペルーから転航、イスラに渡って農業をはじめている。沖縄の宮城勝や宮城当清と並んで日本人の先駆けとしてイスラの農業開発に貢献した一人だった。戦後は、収容で土地をなくしてしまつたからか、高齢だつたからか、ハバナに移つて五〇年頃に死亡していて。ハバナの日系人慰霊堂の第一号セルに位牌が納められている。ずっと独身だつた。ここで慰霊堂について少し話しておこう。キューバ日系人慰霊堂は仲間の浄財を集めて、六四年の暮れに完工している。その設計図が手元にあつて、間口四、奥行き五メートル、地下一階三・一メートル、地上二階八・三五メートル。キューバらしいすべて大理石を使つた四角な建物で、内部は中央に地下から二階まで螺旋状に階段があつて、周囲の壁に納骨房（セル）が埋め込まれている。その数は、地階は四辺に八房ずつ上下十段、一階は前後二辺に八、左右二辺に六房ずつ上下七段、二階は前後二辺に八、左右二辺に六房ずつ上下七段、三階は前後二辺に八、左右二辺に六房ずつ上下九段あり、総数は理論上は七百六十八房になるが、入口部分などは除かれるため、地階二百七十五、一・二階合わせ四百四十九の計七百二十四房が設えられている。そのなかに遺骨箱や位牌が納められるわけ



キューバ日系人慰霊堂設計図

で、遺骨箱はキューバ政府から寸法(27×31×47cm)が指定されている。また、地方の共同墓地で遺骨が特定できない場合や分骨しない場合は代わりに位牌が納められるが、これは日系人連絡会が決めたのだろうか、寸法(高さ17×幅10×厚さ5cm)が指定されている。

さらに、これにはびつくりしたが、被納骨者資格が日系人連絡会の会則の第五章「慰霊堂」で定められていて、「第十四条 キューバ日系人慰霊堂に納骨される者の資格は日系人及びその配偶者であつて、被納骨者の資格に該当する日系人とは第一姓が日本姓である者及びその配偶者である」第十五条 慰霊堂被納骨者資格は如何なる会議においても変更を許されない」と明記されている。つまり、いわゆる血統主義で、たとえば、日本人および日系人女性がキューバ人男性と結婚し

た場合、その女性は納骨されるが、子女は納骨できないことになっている。日系人会によくあることで、日本外務省の意向が働いているのだろう。そして、毎年一回、十一月の第二日曜に慰霊祭を開くことも決められている。連絡会といつても、実質やっていることはこの慰霊祭の開催だけで、内藤さんが会長をしていた頃は地方の人ともよく連絡を取り合つて情況をつかんでいたが、いまはどうか。連絡会とは名ばかりで、数少ない日本の財界とのやりとりのための名刺の肩書きに変わっているだけではないだろうか。納骨房も日本人移民には十分だったが、このままいけば「日系人」には足りなくなることは目に見えている。ここらで「日系人」も、もうやめてもいいのではないか、移民史にかかわつて半世紀、いま、そんな気がしている。

浦塚滝蔵

大分県日田郡三花村三和(日田市三和)の人で、ペルーからの転航者。一九一二年にキューバに入り、西部ピナル・デル・リオの鉾山の街ミナス・デ・マタンブレ(Minas de Matambre)で大工をしていた。二六年に妻マサエを呼び寄せ、勇、進、正雄、チツ子、ツギ子、ミヨ子、玉子の三男四女に恵まれている。収容は第六回グループで四階にいて、釈放後も変わらずマタンブレで大工仕事を続けていた。それができたのも収容中の留守を妻子が守っていたからで、独身者の場合はそれができずに土地や家財をなくし、戦後の再出発がたいへんだった。五六年

に妻マサエに先立たれ、七二年四月二十五日にあとを追っている。

貝原吉三郎

福岡県粕屋郡須惠村佐谷（糟屋郡須惠町佐谷）の人。ペルーからの転航で、一九一二年に入っている。三十八歳だった。しかし、メキシコ革命時の記録によれば、その後、一六年十一月二十一日に、メキシコ南部太平洋岸のサリナクルスからメキシコ湾岸のプエルト・メヒコに向かう列車に乗っていて、その列車が革命軍のゲリラに襲撃され、反物や現金など所持品を奪われている。のちに革命の動乱が落ち着いた二〇年代に、メキシコ政府は各国政府に対し、動乱による被害の賠償、清算のために在留者に被害状況の報告を求めている、その記録が外交史料館に残っている。一時帰国したあとの再入国の途中だったのか、それともメキシコに買い出しに行ったときの出来事だったのか詳しいことはわからない。二一年には中部ラス・ビジャス（ビジャ・クララ）サンタ・クララのセントラル・トリニダーにいたが、二八年頃にはシエンフェゴスで漁業をしていて同郷の百田政経を呼び寄せている。その後は東部のオリエンテ州のセントラル・バナスに移り、収容後もそのままいて、革命後の六二年七月十五日に死亡している。子どもなのかどうか、貝原勝夫という二世がいて、二〇年代か三〇年代にトリニダーで死亡している。



日本人会第一回支部長会議 (1932.5.22)、前列左から二人目が大槻吉貞

大槻吉貞

福島県の人。メキシコからの転航だったと思うがたしかでない。一九一二年にキューバに入ると、すぐにイスラに渡り農業をはじめている。イスラでのピーマンづくりの先駆けで、かなり手広くやっていたが、ニューヨーク市場での野菜相場の暴落で失敗。本島に移って各地を転々としたあと、ハバナの電力会社に電気技師として入った。かなりの高給を取っていたらしいが、技師の資格を持っていたかどうかはわからない。三八年に盲腸手術の手遅れで死亡している。

中沢保三

奈良県磯城郡耳成村（橿原市）の人。

一九一三年頃にキューバに入っている。メキシコからの転航だったともいうがたしかでない。たぶん日本からの直接渡航だと思う。ハバナで、職種はわからないが商店を開いていたようで、一五年に弟の勇三を呼び寄せ、二〇年前後に帰郷している。

井口善太郎

兵庫県の人。一九一三年、大平慶太郎の呼び寄せでハバナの大平商店に入り、竹細工師として働いていたが、独立してモンテ (Monte) 街に竹細工の店 El Kobe (神戸商店) を開いた。しかし、経営がうまくいかず、自宅の空き部屋を日本人に貸して暮らしの足しにしていた。その後、イスラに移って養鶏をしていたが、三一年六月七日に死亡している。キューバに入ったときにはすでに五十歳を過ぎていたのではないか。イスラに移ったときにはかなりの高齢で、その死を悟るかのように、最期はイスラの日本人を一人一人訪ね歩いて死についている。日本に妻子がいたかどうか、キューバでは独り暮らしだった。玖馬日本人会では最初の副会長をしていた。

石原某

兵庫県の人で、一九一三年にキューバに入っているが、名前もその後のこともわからない。

大平慶太郎に呼び寄せられた人だったかもしれない。

林磯吉

兵庫県の人で、一九一三年に大平慶太郎の呼び寄せでハバナに入っている。大平商店で働いていて、一七年に長男光逸を呼び寄せ、その後いくらししないで帰郷している。

榊原利一

名古屋市瑞穂区田光町の人で、東京に出て日本製粉に就職。正則中学の夜学に通いながら力行会に参加。一九一〇年に商業練習生としてメキシコに渡ったあと、二十四歳でキューバに転航している。一四年四月十四日のことで、大平商店に入って仕事を覚えた。住み込みで月給十五ペソだったらしい。三年後の一七年に妻マサを呼び寄せ、二〇年には独立してアバナ・ビエハ(旧市街)のオレリイ(O'Reilly)街の百二十番地に日本商店 La Flor de Tokio を開いている。福岡からは博多人形、京都から扇子、竹細工、漆器、瀬戸から陶器のほか、箱根の寄せ木細工まで取り寄せて繁盛、とくにオリジナルの蚊取り線香ドウルセ・オガル(甘美香)はキューバ人に人気でよく売れた。オレリイ街は東京でいえば銀座にあたる繁華街で、La Flor de Tokio はさしずめ四丁目の交差点にあたる一等地だった。二七年には玖馬日本人会をつくって初代会



榊原商店 La Flor de Tokio の跡

長に就いている。しかし、日米戦争がはじまると店舗が接収され、直前に妻マサは子どもを連れて帰国している。収容は四二年四月十六日の第一回収容で五階にいて、楽天的な明るい人で慰安のために演芸部をつくって部長をしていた。

釈放後は、四八年に、以前よりは西のエスパダ (Espada) 街に店舗を再開、二男菊夫も日本から戻って店舗内で時計の修理をしていたが、カストロ革命でまた店舗が接収されたため菊夫は帰郷。以来、独り暮らしをしていた。お会いしたときは九十三歳、日本人社会の最長老だったが、足腰もすっかりと七十代にしか見えず、かくしゃくとして「百歳まで生きて文化勲章を取りに行く」といっておられたが、二年後の八四年に急死している。「移民手記」の「二度の接収で我が活動も終わった」はその手記である。一八八九年五月五日生ま

れ。

高田留吉

福島県の人で、一九一四年にメキシコから転航、ハバナで資産家の家庭でハルデイネロ（庭師）をしていた。キューバ婦人と結婚して、四〇年に長男が生まれている。収容は第六回で四階にいた。釈放後はハバナ郊外のフィンカ・トレボル（Finca Trebol）で暮らしていたが、六〇年二月十日に死亡している。

新門亀

沖縄県中頭郡勝連村比嘉（中頭郡勝連町比嘉）の人。東洋移民合資か大陸殖民合資のメキシコ移民だろう。一九一四年に三十歳でキューバに転航している。その後のことはわからないが、いくらしらないでキューバを離れていると思う。

川上某

一九一四年頃に入っているが、姓と岡山県の出身とわかるだけ。ひよつとすればこの人ではないかと考えられる人が二人いる。ともに東洋移民合資のメキシコ移民で北部コアウイラ州のラ

ス・エスペランサス鉱山に鉱夫として入っている。一人は川上幸作で一九〇六年十二月十二日に神戸を発っている。岡山県の人。もう一人は川上吉郎で一九〇七年五月十八日に神戸を発っている。一八八五年四月生まれの岡山県川上郡玉川村下切（高粱市玉川町下切）の人。

田中一太

山口県の人で、一九一四年前後に入っているが、その後のことはわからない。

横川某

一九一五年頃に入っているが、名前もわからない。山口県の人。

神中某

広島県の人で、一九一五年に入っているが、名前もわからない。

田中米吉

広島県の人で、一九一五年に入っていることはわかっているが、その後のことがわからない。

伊藤良助

宮城県の人で、一九一五年に入っているが、やはりその後のことがわからない。伊藤喜平の縁戚だろうか。

唐戸金蔵

石川県羽咋町（羽咋市）の人。一九二五年に三十一歳で入っているが、二一年にキューバを離れている。

滝場某

一九一五年に入っているが、名前もわからない。福島県の人。

石川由太郎

静岡県の人で、一九一五年に入っていること以外、何もわからない。メキシコのラス・エスペランサスへの移民ではなかったか。

山梨元吉

静岡県の人で、一九一五年に入っている。メキシコのラス・エスペランサスへの移民で、先の石川由太郎と同航ではなかったかと思う。イスラに渡ってコロンビア地区で農業をはじめ、かなり成功して、二〇年代後半には本島の日本人の間でもその名はよく知られていた。二一年にはペルーから甥の山梨久八を呼び寄せているが、ほかにも駆け出しの日本人仲間の世話をよくしたらしい。革命後にイスラの日本人で一番の成功者となる原田茂作がトリニダー逃亡後、イスラに入って頼ったのもこの人だった。

河東某

一九一五年に入っているが、名前もわからない。大阪の人。

小川富一郎

この人については『峠の文化史―キューバの日本人』に詳しく書いた。キューバの日本人移民の代表ともいえる人で、もし長く生きていたらかなりの成功者になっていただろう。新潟県北蒲原郡新発田町上鉄砲町（新発田市諏訪町）の人で、一九〇六年、大陸殖民のメキシコ移民と



オアハケニヤの小川農場

して南部オアハカ州のオアハケニヤ砂糖耕地に入り、契約期間を務めたあと、周辺に農地を手に入れ、四十人前後の日本人仲間と農場経営をはじめている。しかし、四年後にはメキシコ革命が起り、ゲリラの襲撃が続いて閉鎖。仲間四人とキューバに転航、シエンフエゴス西部のセントラル・コンスタンシア（カルメリナ）に入つて再開した。ただ、それも病気に斃れて頓挫している。あとを継いだのが同郷の榎本惺だった。少し離れたオルキタスに農場を開いたが、今度は世界恐慌による砂糖価格の暴落で失敗している。

この二人の呼び寄せで新潟から九十四人がキューバに入り、さらに妻や兄弟を呼び寄せるなどとして一九三〇年代には新潟出身者がいちばん多かった。学校を出たぼくが移民史をやってみようと、最初に出会ったのがこの小川富一郎だった。かたちになるのにあしかけ十年近くかかっているが、親族、縁戚からも

親しくしていただいたからか、齢柄からいってもなんとなく自分の祖父のような気がして、ルーツさがしのようでしたのしかつた。いい勉強になったと思つている。移民といえ、苦難、流浪……というイメージがつきまとう。ぼくもそんな目で追いはじめたのだが、いろんな軌跡、航跡を見ていくうちにその能動性に気づかされた。富一郎もそうだった。一七年十一月二十九日、鎌倉腰越の鈴木療養所で死亡している。

小川喜一

小川富一郎の従弟で、富一郎がはじめたメキシコのオアハケニヤの農場に呼び寄せられ、一九一五年にキューバに同行。二十一歳だった。セントラル・コンスタンシアでの農場経営に加わつたが、農場は富一郎の死で破綻。その後、ダイナマイトを使つて魚取りをしていたのが失敗して右手を負傷、手首から先をなくし農業ができなくなつたため、シエンフエゴスに移り、同郷の榎本惺の援助を受けてサン・フェルナンド (San Fernando 152) 街に日本商店 El Nippon を開いて、富一郎の妻子といっしょに暮らしていた。いまでいえばスーパーマーケットのような店舗で、当時はめずらしく繁盛したが、船舶火災で日本からの輸入商品が被害に遭い、保険をかけていなかったため負債を抱えて閉店、ハバナに移つた。妻ミヨセ、長男アンヘル武、長女エバ英子、そして富一郎の妻秀野と長男太郎、長女富美がいたが、秀野は三八年に、富美は



小川一家と高橋豊作（後列左）、右端が喜一

三九年に死亡、太郎はパナマの日本公使館に就職したため、喜一一家だけになり、喜一は手が不自由だったためアンヘルとエバが弁護士事務所働いて家計を支えた。

その後、戦時収容では喜一とアンヘルが第六回収容で、エバも二世女子だったにもかかわらずハバナ西郊のカンブレヘラに収容されている。戦後は五七年に、アンヘルがスペイン語の速記者として国連に採用されてアメ

リカに出国。喜一はハバナの日本大使館で働いていたが、六八年に妻ミヨセとエバといつしよにアメリカに亡命、喜一は七〇年に死亡している。アンヘル妻は中野新蔵の二女。新潟県北蒲原郡新発田町（新発田市諏訪町）の人。

高橋豊作

熊本県阿蘇郡錦野村外牧（菊池郡大津町外牧）の人。小川富一郎より五カ月後れの一九〇七年四月二十六日、横浜発の大陸殖民第十回メキシコ移民としてオアハケニヤ耕地に入っている。富一郎との出合いの経緯はわからないが、契約満期後も富一郎の産業組合に参加し、キューバにも同行、コンスタンシアに入り富一郎の農場経営に参加していた。富一郎の死後は日本商店 El Nippon に出資、共同経営していたが、のちに別れてコンスタンシアの近くのタマリンドで米作をはじめた。これはかなり成功したようで、その後、農園を開いたあとも米作は続けている。二八年に妻サヨを呼び寄せ、日米開戦でイスラに収容されたが、戦後もずっとタマリンドで暮らしていた。タエ子、タカ子、秀雄、スミ子の一男三女をもうけ、長男の秀雄は革命時に革命軍に参加していたため、ゲリラ狩りに来た政府軍に家も農園を焼かれている。また、三女のスミ子は三つ子を産んで話題になった。秀雄は革命後も軍に在籍し、八〇年代には大尉に昇進していた。子どもたちが独立したあとは、夫人のサヨさんと二人で、近くのヤグアラマスに



右から、豊作、サヨ夫人、内藤五郎

移っている。八二年に訪ねたときは九十七歳で、体はすっかりしていたが、目は少しの光しか受け付けず、耳も夫人の声さえ聴き分けるのが難しい状態で、詳しく話を聞くことができなかつた。八六年七月二十五日に死亡。

夫人のサヨさんは一九〇三年生まれの十八歳年下で、その後も元気にしておられたが、二〇〇〇年前後に亡くなっている。収容は第三回グループだから地方では注目されていた一人だったと思う。吉村半次郎同様、オアハケニヤ以来、終始、富一郎と行をともした同朋で、耳さえよければオアハケニヤのことも詳しく聞くこともできたが残念だった。お会いしたときも、手造りの粗末なテーブルの前に座り、背中を丸

めて俯き加減に一点を見つめたまま、風の気配をさぐるようにするだけで、だから背丈もわからなかったが、百六十センチあったかどうか。人の生きる歴史の重さを実感したのは、あのときがはじめてだった。いまも心の奥の額縁にきちんとおさまっている。

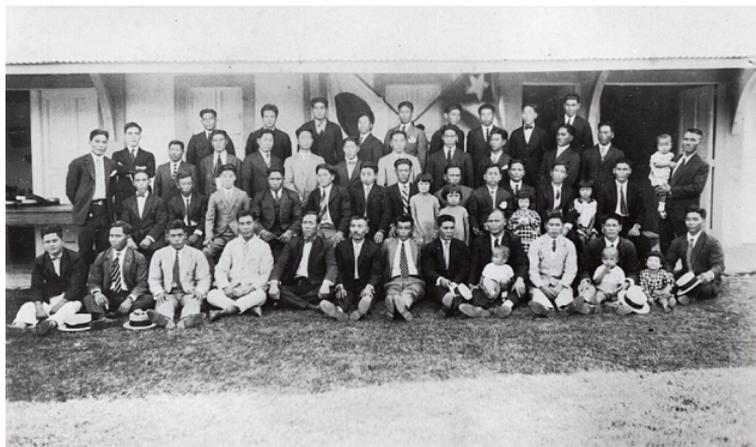
吉村半次郎

小川富一郎より一月早い一九〇六年十月二十五日、神戸港発の大陸殖民第八回メキシコ移民としてオアハケニヤに入り、契約期間を終えたあとは、高橋豊作らと富一郎の産業組合に参加。革命ゲリラの襲撃で崩壊後は一五年に富一郎、高橋豊作に同行、キューバに渡り、コンスタンシアに入っている。富一郎の死後、しばらくは高橋らといっしょにカルメリナの近くに残ったが、その後、中部ラス・ビジャス(サンクティ・スピリトゥス)州ハティボニロ(Hatibonico)のセントラルに移っている。製糖工場で働きながら貯えた資金で大型バスを買い入れ、サンタ・クララの西のランチュエロ(Ranchuelo)からハバナまでのバス路線を開設したり、サグア・ラ・グランデに移ってエラード(アイスクリーム)の製造販売を手がけ、何人もの従業員を使つて成功した。収容は第六回で。釈放後もサグア・ラ・グランデでエラード販売を続けていたが、革命で接収され、六五年には妻ツマを喪つたためキューバを見限り、六八年にアメリカに亡命、サンフランシスコに落ち着いた。当時、ぼくも余裕がなくて、うかがって、直接、話を

聞くことができず、八三年に富一郎の孫にあたる小川順子さんがアメリカに留学していて、代わりにインタビュしてもらったことがあった。その録音テープがいまも手元に残っている。映像の伝える力が大きいのはもちろんだが、音声だけというのも、情景を思いのままに浮かべることができるからか、かえって胸を打つものがある。一時間ばかりのテープだが、富一郎が結核でコンスタンシアの農場経営を断念して日本に戻る場面になると、声を詰まらせ、聞いていても胸が熱くなる。それから四年、サンフランシスコの自宅で縊死している。目が不自由だったとは聞いていたが、何人も孫子に囲まれた穏やかな老後だったというのに、何があつたのか、百二歳の往生だった。熊本県八代郡栗木村（八代市泉町栗木）の人。

岩崎庄平

吉村半次郎と同郷、熊本県八代郡栗木村（八代市泉町栗木）の人で、生家も近い。同航だったと思う、一九〇六年十月二十五日、神戸港発の大陸殖民第八回メキシコ移民としてオアハケニヤに入っている。乗船名簿では吉村と同じ二十一歳だから一八八五年の生まれだろう。誘い合つての移民だったにちがいない。メキシコでのことはよくわからないが、契約満了後は吉村同様、富一郎の産業組合にいたのではないか、同じ一九一五年にキューバに渡っている。いっしょにコンスタンシアのカルメリナにいただろう。小川農場崩壊後はラス・ビジャス（サンク



ハティボニコの日本人（天長節記念の集まりで、1926.10.31）、前列左から八人目

ティ・スピリトウス）のハティボニコ (Yatibonico) に移り、収容までセントラルで働いていた。たぶん吉村といっしよだったと思う。一九二六年に呼び寄せた妻サダメとの間に晴、等、初美、繁、健、ヨシコの四男二女をもうけている。

収容は第六回で、釈放後はセントラルでの仕事が無くなったため、東部オリエンテのオルギン (Holguin) に移ってエラードの製造販売をしていた。その後、ハティボニコに戻ったのか、日にちはわからないがハティボニコで死亡している。初美と繁（四四年）、健（四四年）は戦前に、ヨシコは五八年に亡くなっているが、長男晴と二男等はオルギンでいまま健在でおられると思う。

中沢勇三

奈良県磯城郡耳成村山之坊（橿原市山之坊）の人で、一九一五年四月四日にキューバに入っている。一足先に

入りハバナで商店を開いていた兄保三の呼び寄せだった。その後、二〇年前後に保三は帰国しているが、そのあとを引き継ぎ、斎藤弥一の妻だった斎藤ヨイと結婚している。しかし、商店の方はうまくいかなかったようので二六年に店を閉め、元外務大臣だったか、コルティナ宅のハルデイネロをはじめた。長年働いて、信用を得たのだろう、コルティナが娘たちのパドリノ（名付け親）になり、その援助で娘たちは上級学校に進学でき、戦後は大手銀行に就職していた。めずらしい例で、かなり裕福に暮らしていた。それでも革命後は、娘の一人がアメリカに亡命している。勇三は七一年九月にハバナで死亡、妻ヨイも半年後の七二年三月三日にあとを追っている。収容は第六回で四階にいた。革命後だろうか、「岡本」に改姓している。ヨイは弥一がメキシコに移民したあとオアハケニヤに呼び寄せられたのかもしれない。弥一との娘八重子を連れて二〇年にキューバに入っている。八重子は小島三八一と結婚。小島は七一年に死亡。小島と弥一は、収容時には老齢ということもあつたが、唯一の例外として、コルティナの保証で収容を免れている。

柴田新太郎

一九一五年五月五日に二十八歳でメキシコから入っているが、メキシコでのことはわからない。ただ、同航の高山猪熊は一九〇七年に東洋移民合資のメキシコ移民で北部コアウイラ州の

ラス・エスペランサス鉱山に入っているから、たぶん柴田もそうだったのだろう。キューバではイスラに渡って、戦後もイスラのフィンカ・フカロ (Finca Jucaro) にいたが、その後、シエンフエゴス (Cienfuegos) に移って六五年十月七日に死亡している。神奈川県足柄上郡松田町松田惣領の人で、キューバには家族はいなかったようで、メキシコに渡る前に郷里に妻子がいたのかどうか、曾孫が海老名市に居られる。収容は第五回で二階にいた。同郷の人に中村直八がいる。

北崎政次郎

福岡県糸島郡北崎村宮浦 (福岡市西区宮浦) の人。一九〇七年、東洋移民合資のメキシコ移民として北部コアウイラ州のラス・エスペランサス炭鉱に入っているが、数カ月で逃亡、メキシコ各地を転々としている。ラス・エスペランサスはアメリカ資本の炭坑で、メキシコ資本のそれと比べれば格段に設備も整っていたが、それでも爆発事故が続いて、契約中途で逃亡する者が多かった。北崎も放浪の終てにパンチョ・ビジャの革命軍にも参加している。そんな日本人はけっこういて、報酬次第で、きのうは政府軍ならきょうは革命軍、と渡り歩く者もいた。キューバには一五年五月五日に入っている。同航に柴田新太郎、別府貞治、須山藤太郎、高山猪熊がいる。柴田、須山のあしどりはわからないが、北崎はたぶん別府、高山といっしょだったのだ

ろう、本島各地のセントラルを渡り歩いたあとシエンフエゴスで漁師をしている。その後、ハバナとは反対のカリブ海に面したバタバノ (Batabano) に移り、渡辺国一といっしょにキューバ人を使って沖合での鰹の一本釣りをはじめた。シエンフエゴスよりバタバノの方がハバナ市場に近かったからだが、当時のキューバの漁業はほとんどが個人によるごく沿岸での漁撈だったから、北崎は成功した。そうして多くのキューバ人漁業者を育てている。それが評価され、カストロ政府はかれを主人公にしたドキュメンタリー映画までつくっている。七六年四月三日にハバナで死亡。弟の好助は二一年に、善三は二六年に呼び寄せられ、ともにバタバノで漁師をしていたが、四四年と八三年に死亡している。歴史の検証に「もしも」は付きものだが、それでももしもメキシコ革命がなければ、おそらくキューバ移民もなかっただろう。それを混乱のメキシコを逃れて好況の噂のキューバに渡った。成功できるはずだった。だが、日米戦争と革命という二つの想定外によって元も子もなくしている。一方、メキシコに残った者にも収容という障碍はあった。ただ、キューバのようなプレシディオ (監獄) への強制収容とはちがって、メキシコシティへの一家移転という集住措置だったため、幸か不幸か、戦後もメキシコシティでそのまま暮らし、事業をはじめて成功した者が多かった。実際、いまのメキシコシティの日系人のほとんどは、いわゆる中産階級に属している。皮肉な歴史のいたずらだった。「革命」をどう見るか、つまるところ、それは好き好きだ。バチスタからカストロに代わったから

と云つて、キューバの富が増えたわけではけつしてない。水が流れるように高いところから低いところに富が移動しただけ。その高低の中の下あたりに日本人移民はいた。資産家だったわけでもなく、せいぜいがクリーニンク店や理髪店、雑貨店、青果店といった自営業だった。それでも接収は避けられなかつた。真偽のほどは定かでないが、ヘミングウェイの『老人と海』のモデルはこの北崎だというのが日本人仲間の伝説になつていた。長男は一時日本に戻つて教育を受けたあと、戦後はハバナの日本大使館で働いていたが八〇年代に死亡、二男はアメリカに亡命、長女は日本に戻っている。

別府貞治

一九一五年五月五日にメキシコから北崎政次郎、柴田新太郎、須山藤太郎、高山猪熊といつしよに入っている。メキシコでのことはわからないが、北崎と高山は一九〇七年に東洋移民合資のメキシコ移民として北部コアウイラ州のラス・エスペランサス炭鉱に入っていて、逃亡のあとパンチョ・ビジャの革命軍に参加していたから別府も同じような足どりだったのかもしれない。キューバでは二七年前後にはシエンフエゴスで漁師をしていたことがわかつていて、詳しくわからないが、ごく早い時期にハバナで死亡していて、慰霊堂の第二号セルに位牌が納められている。家族はいなかつたと思う。福岡県の人。

須山藤太郎

一九一五年五月五日にメキシコから北崎政次郎、柴田新太郎、別府貞治、高山猪熊といっしょにハバナに入っている。別府同様、メキシコでのことはわからないが、北崎と高山は一九〇七年に東洋移民合資のメキシコ移民として北部コアウイラ州のラス・エスペランサス炭鉱に入っていて、逃亡のあとパンチョ・ビジャの革命軍に参加していたから須山も同じような足どりだったと思う。キューバではラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のセントラルにいたのではないか。二一年に妻ヤエを呼び寄せ、一郎、ミサオ、健二の二男一女をもうけている。収容は第六回で三階にいた。七一年七月十五日にトリニダー（Trinidad）で死亡。福岡県朝倉郡大庭村入地（朝倉市入地）の人。ヤエは八二年に死亡している。

高山猪熊

北崎政次郎同様、一九〇七年に東洋移民合資のメキシコ移民として北部コアウイラ州のラス・エスペランサス炭鉱に入っているが、数カ月で逃亡、各地を転々としたあと、同航だった北崎といっしょにパンチョ・ビジャの革命軍やカランサの憲政軍に傭兵として加わっていた。柴田新太郎、別府貞治、須山藤太郎とはラス・エスペランサスでいっしょだったのか、革命軍で

知り合ったのか、一五年五月五日、五人いつしよにキューバに入っている。二十七歳だった。その後、東部サンチアゴ・デ・クーバのマタンブレ Matahambre 鉱山にいたが、カマグエイ（シエゴ・デ・アビラ）のセントラル・バラグア (Baragua) に移り、農地を借りてセントラル向けの野菜栽培をはじめた。それが成功して、二五年に母ツル、翌年には妹松枝を呼び寄せ、さらに弟二人と同郷人も農園に呼び寄せている。三八年に農作業中に足に傷を負ったのが悪化し破傷風で死亡。その後、家族はどうなったか、わからない。鹿児島県始良郡重富村平松（始良市平松）の人。

田島又兵衛

メキシコ移民だが、いつ入ったのかわからない。おそらく東洋移民合資のラス・エスペランサス移民だったと思う。一九一〇年に革命の動乱がはじまると政府軍の艦船にコシネロ（料理人）として乗り組んだ。当時、日本は日露戦争でロシアに勝ったことから、日本人は強いと見られたらしい。人気があつて、敵艦の攻撃を受け、メキシコ人水兵が逃げ惑うなか、一人甲板に出て、「撃てるものなら撃ってみろ」と仁王立ちになったとか。以来、水兵から一目置かれるようになったという伝説を持っている。キューバに移ったのは一九一五年のことで、二十四歳だった。セントラルを転々としていたが、一時、薪炭販売をしたあと、ハバナのメルカド・ウ



田島又兵衛（右）と内藤五郎

ニコ（公設市場）に青果店を開いたのがあたって、ずいぶん繁盛したらしい。弟の庄三郎を一七年に呼び寄せている。十六歳だった。また、二三年に妻のキヌも呼び寄せ、二女をもうけているが、キヌが死亡したため三九年に一家で帰国。東京の小石川に住み、弟が経営していたゴム製造所の工場長をしていた。戦後は北鎌倉にいたらしい。静岡県田方郡三島町（三島市）の人。

吉川勇平

一九〇七年四月二十六日、神戸発の大陸殖民第十回メキシコ移民としてオアハケニヤに入っている。当時二十二歳。二歳年上の妻ミヨカもいっしょだった。このときの移民数は男性千八百八十人、女性七十二人の計

千二百五十二人。女性がいたのは、移民地のいわゆる飯場での食事の賄い役として募集していたからだ。一九〇四年から続いた大陸殖民によるメキシコ移民はこれを最後に終わっている。オアハケニヤの製糖工場は、その後、革命ゲリラに何度も砂糖耕地が襲撃されたために閉鎖され、キューバに移転したことはすでに述べた通りで、吉川も一五年十二月二十五日にキューバに移っている。この一五年から翌年にかけてのメキシコからキューバへの転航が多いのにはそんな背景があった。ただ、妻のミヨカはどうしたのか、死亡かそれとも帰郷か、キューバには入っていない。その後、吉川はどこで身につけたのか、電気技師になり、カマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のセントラルを転々としていた。収容は第六回で。釈放後は、ほとんどの日本人は職を失ってたいへんだったが、吉川は腕がよかったのだろうか、すぐにセントラル・バラグア（Baragua）の製糖工場に雇われ、ずっと電気部門の支配人をしていった。五一年十二月にカマグエイのフロリダ（Florida）で死亡。キューバでは独身を通していった。熊本県玉名郡梅林村安楽寺（玉名市安楽寺）の人。

菅原文之進

メキシコへの最初の集団移民として一八九七年に南部チアパス州エスキントラに入った、榎本武揚の、いわゆる榎本移民の一人ではないかと思う。といっても、その三十五人のなかには



日本人会第一回支部長会議 (1932.5.22)、最後列右端の口髭の人

同じ宮城県出身者に菅原幸徳はいるが文之進という名前はない。幸徳によってメキシコに呼び寄せられた縁戚だったか。ただ、同一人物だったとしても年齢的に無理がない。また、一九〇六年の大陸殖民第九回移民のなかにも、宮城県志田郡や桃生郡から菅原姓が四人いて、清之進（志田郡鹿島台村）という人物もいる。

移民先は出発時にはコリマ鉄道の建設工事に入る「工夫」として契約していたが、すでにコリマ鉄道の工事が完了していたため、会社側の操作で契約が変更され、ほとんどが南部オアハケニヤの砂糖耕地に入ったことはすでに述べた通りで、一五年十二月六日にキューバに転航。イスラで野菜栽培と乳牛飼育をしていたが、土地を借りて

の小規模農業だったから、ほかの日本人仲間と同様、農閑期にはアメリカ人の農園でグレープ・フルーツの収穫作業で日銭を稼いで暮らしの足しにしていた。グレープ・フルーツの出荷用の箱造りにかけては右に出る者がなく、釘打ちが上手だったため「早打ち丈之進」の異名をとっていた。白人のアメリカ系キューバ婦人と結婚、二女をもうけている。キューバの日本人には、アフリカ系女性と結婚する者は少なかったが、白人系とのそれもそんなに多くなく、郷里から写真婚で呼び寄せるか、多くは独身を続けている。収容は第五回で年輩だったからか五階にいた。プレシディオでは各独房に二人ずつ入っていたが、五階のほとんどは一人で使っていた。七三年一月十九日にイスラで死亡、夫人はどうされたかわからないが、その後、長女はアメリカに亡命している。宮城県志田郡の人ではないかと思う。

加藤勇逸

一九一五年にメキシコから転航している。宮城県の人。メキシコには宮城県から加藤姓で数人が北部コアウイラ州のラス・エスペランサスや中部のコリマ鉄道の建設工事に入っているが、勇逸の名はない。キューバへは同県人の田口駒右エ門と同航だが、田口の名前も、もつとも多かつた一九〇六年と七年のメキシコへの移民名簿には見つからない。キューバでは、各地のセントラルを転々としたあと、オリエンテ（サンチアゴ・デ・クーバ）のパルマ・ソリアノ (Palma

Soriano) で理髪店を開いていたが、三〇年に実施された理髪師資格試験に落ちたのだろうか、営業ができなくなり、イスラに渡ってサンタ・バルバラ地区で農業をはじめている。同県人の遠山正治の死後、その妻タツオと結婚、憲逸、宮子の一男一女がいる。宮子は、革命後、イスラの行政官として赴任してきたマルティンと結婚。ハバナに移って共産党に入党したが、その後、離婚している。勇逸は七三年十二月二十一日にハバナで死亡。夫人のタツオは桃生郡川南村(登米郡迫町)の生まれで、一二年に呼び寄せられ、八七年に死亡している。

田口駒右工門

宮城県の人。加藤勇逸と同郷ではないかと思う。一九一五年に同じ船でメキシコから入っているが、その後のことはわからない。

加藤英一

岐阜県の人。農家の三男で、父は製糸工場を経営していた。三十人近い女工を雇い入れるなど、かなり大きな工場だったが、長男の源之助が県会議員選挙に出馬、落選したのを機に経営が悪化して倒産。英一は小学校の代用教員をしていたが、一九一五年にブラジルに行こうと神戸に出た。そこで父の取引相手だった京都の帯問屋の西村に会い、キューバの好況を耳にして、西村

に同伴、同じ一五年にキューバに入っている。ハバナでは、西村の紹介だったか、キューバ独立運動の父と呼ばれたセス・ペデスの孫カルロス・ミゲル邸でお抱え運転手をしていた。ミゲルは親日家で日本人が何人も雇われていた。ただ、ミゲル邸にはそんなに長くはいなかっただろう、モンテ通りで日本商店を開いていた井口善太郎のもとに身を寄せ、個人タクシーをはじめた。そして数年、仲間からの資金援助も受けてクリーニング店を開店し、繁盛した。二四年に妻チヨを呼び寄せて店舗を拡張、ガソリンスタンドと駐車場の経営にも手を伸ばしたが、これは失敗。転居、縮小してクリーニング店一本で再開した。郷里から土野矢之助や土屋来吉を呼び寄せ、三〇年代の不況の時代にもよく耐えていた。しかし戦争で中断。収容は最初のグループで四二年四月十六日にイスラに送られている。自治会長として収容所側との折衝や日本人のまとめ役としてよく努めた。釈放後はサントス・スワレス (Santos Suarez) 通りにクリーニング店を再開、戦後好況で繁盛し、鉄筋の二階家を新築し、一階に電気器具店も増設するなど、うまくいくかに見えたが、革命で接収され、すべてをなくしている。六三年には日本人移民慰霊堂の建設を呼びかけ、自らも基金を投じて浄財を募り、コロ墓地支配人のカルバイヨサの協力を得て、翌年、コロ墓地のほぼ中央に「キューバ日系人慰霊堂」を完成させている。六七年、自家の墓地を日系人連絡会に譲渡、家族と帰郷したが、一年を経ないまま郷里で死亡。戦前、戦中、戦後を通じてキューバの日本人社会に尽くした人で人望も厚かった。長男英二は、



日系人連絡会世話人会議 (1961.11.5)、前列左から三人目

それ以前、戦前の三八年に母や妹といっしょに勉強のために郷里に帰ったが、日中戦争に徴用されたあと、四八年にハバナに戻って父の仕事を手伝い、五七年に妻の直子を呼び寄せている。しかし革命後の接収でやっていけなくなり一家でメキシコに移った。英一もメキシコでいっしょに暮らす予定だったが郷里に戻り、英二一家だけがメキシコに残っている。メキシコの移民法が邪魔をしたのだろう。英二はメキシコシティで会社を経営していたが九七年に日本に戻っている。妹は六七年にハバナを出るときにロサンゼルスに移ったらしい。

原武一

佐賀県三養基郡北茂安村中津隈（みやき町中津隈）の人。一九一六年に、原作市、武藤琢一と同

船でメキシコからキューバに転航している。武藤は東洋移民合資のメキシコ移民で一九〇七年にコアウイラ州のラス・エスペランサス鉱山に入っているが、武一と作市のメキシコでのことはわからない。キューバに入ったときの武一の年齢は二十三歳、作市は三十五歳。二人は兄弟か、叔父甥の関係だろう。その後のあしどりもよくわからないが、武一はごく初期に中部カマグエイ（ラス・ビジャス）のモロン（Moron）で死亡している。作市は郷里に戻ったかどうかはつきりしないが、武藤は帰郷したのではないかと思う。

原作市

佐賀県三養基郡北茂安村中津隈（みやき町中津隈）の人。一九一六年に原武一、武藤琢一と同航、メキシコから入っている。三十五歳だった。ごく早い時期にキューバを離れていると思う。

武藤琢一

東洋移民合資のメキシコ移民で一九〇七年五月十八日に神戸を発ち、北部コアウイラ州ラス・エスペランサス鉱山に鉱夫として入っている。佐賀県小城郡北多久村多久原（多久市北多久町多久原）の人。一九一六年に原武一、原作市と同航、メキシコから入っている。三十歳だった。ごく早い時期にキューバを離れているだろう。

熊倉徳松

一九〇七年に東洋移民合資のメキシコ移民で北部コアウイラ州のラス・エスペランサスに入っている。一八七九年十月二十五日生まれで、キューバへは一六年に、小平悦吉、飯塚平吉と同航で入っているが、ともにその後のことがわからない。キューバでの死亡は確認されていないから、メキシコに戻ったか、郷里に帰ったか、あるいはアメリカに密行したか。栃木県下都賀郡吹上村千塚（栃本市千塚町）の人。

小平悦吉

福島県大沼郡川西村西方（三島町西方）の人。東洋移民合資のメキシコ移民でラス・エスペランサスにいたと思うのだが、たしかなことはわからない。一九一六年二月に、熊倉徳松（栃木県）、飯塚平吾（福島県）といっしょにキューバに渡っている。その後のことは二人同様、明らかでない。

飯塚平吾

小平悦吉と同郷、福島県大沼郡川西村大石田字上居平（三島町大石田字上居平）の人。東洋移

民合資のメキシコ移民で一九〇七年五月十八日に神戸を発ち、北部コアウイラ州ラス・エスペランサス鉱山に鉱夫として入っている。キューバへは一九一六年に、熊倉徳松、小平悦吉と同航。一八七一年五月四日生まれの子四十四歳だったから、たぶん郷里に妻子を残していただろう。キューバで死亡した形跡がないから、ごく早い時期に帰郷していると思う。

大兼久安吉

沖縄県国頭郡名護間切名護村（名護市名護）の人。東洋移民合資のメキシコ移民で、一九〇七年十月二十三日に横浜を出発し、北部コアウイラ州のラス・エスペランサスに入っている。ここは前にも述べた通り、爆発事故が多く、数カ月で逃亡する者がほとんどで、各地を放浪のあと革命軍あるいは政府軍の傭兵になる者がずいぶんいた。俸給がよかつたからで、大兼久もそうしていたと思う。一六年に、同郷の山入端萬栄、糸数宗吉といっしょにキューバに渡っている。その後、しばらく山入端といっしょにカマグエイやオリエンテのセントラルを転々としていたが、やがて別れてラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニコ（Hatibonico）のセントラルに落ち着いた。二一年、妻を迎えるために一時帰郷、戻るとイスラに移って農業をはじめた。そのとき、妻ウサの弟妹の住光、カマタもいっしょにキューバに入っている。収容は第七回で二階にいた。六三年二月六日にイスラのマッキンレー（Mackinley）で死亡、八十一

歳だった。ウサもその前後に亡くなっていると思う。正雄、正春、安雄の三男をもうけ、正雄と安雄はイスラに、正春は西のピナル・デル・リオに暮らしている。

山入端萬栄

大兼久安吉と同郷、沖縄県国頭郡名護村屋部（名護市屋部）の人。東洋移民合資のメキシコ移民だが、大兼久より少し早い一九〇七年五月十八日に神戸を発ち、ラス・エスペランサスに入っている。やはり逃亡して革命軍に入っていたらしい。メキシコでのことは上野英信の『眉屋私記』（潮出版、一九八四年）に詳しい。キューバへは一六年に大兼久、糸数宗吉と同行、最初は大兼久といっしょに各地のセントラルを転々としていたが、やがてハバナに戻ってドイツ公使館に運転手として入った。そこで家政婦をしていたドイツ婦人エリザベートと結婚。しばらくタクシー運転手をしたあと、ハバナ市内のサン・ラファエル街で竹製の自動車座席シートの製造販売をはじめた。収容は第一回グループで四一年十二月十二日にハバナで逮捕され、プリンシペに留置されたあと、翌四二年四月十六日にイスラに送られている。また、一人娘のマリアも二世だったのもかわらずパイ容疑で逮捕され、ほかの日系二世女子二人といっしょにハバナ西郊のカンブレヘラに収容されている。妻のエリザベートは一人家を守り、収容所へも手製の菓子を差し入れるなどよく通ったらしい。釈放後は座席シートの製造販売を再開した



山入端萬栄旧居

が、ナイロン製品が登場、同業者も多くなったため対抗できず、革命直後の五九年十月三十一日にハバナで死亡している。大柄の立派な体躯の人だったらしい。マリアはカンブレヘラ收容所の警護官と結婚。夫はバチスタ政府に深くかわっていたため、カストロ革命直前にスペインに亡命。萬栄の死後、エリザベートもマリアといっしょにドイツに渡り、その後、マリアはスペインのマドリッドに移っている。

糸数宗吉

一九〇七年十月二十三日に横浜を出発、東洋移民合資のメキシコ移民として北部コアウイラ州のラス・エスペランサスに入ったのも大兼久安吉と同じ。事故の多発や革命の動乱によって鉾山が荒廃したため、同地を離れて各地を転々

とし、一時、政府軍の傭兵として、革命の天下分け目の戦いといわれた北部サカテカスの激戦にも参戦していた。一六年に大兼久、山入端萬栄と同航、キューバに渡つて、西のピナル・デル・リオのマタンブレ銅山に入ったが、いくらもしないでハバナに戻っている。一八年に弟の宗重を呼び寄せ、山入端と三人でカマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のクナグアに移り、セントラルの砂糖黍農場で働いていた。工場の拡張最中で日本人も五十人前後いたらしい。最初は、日給二ペソ五十センチタボスから三ペソで雑草刈りや砂糖黍の植え付けをしていたが、その後、下請けで数十町歩にわたる農場経営をはじめている。数年でかなりの貯えができたようで、二一年に帰郷。宗重もすぐにあとを追うつもりだったが、二九年からの世界恐慌の煽りで砂糖価格が暴落、モラトリアムが発令され銀行預金が凍結されたため帰れなくなった。詳しくは後述。

前田朝光

東洋移民合資のメキシコ移民で、一九〇七年十月二十三日に横浜を発ち、ラス・エスペランサスに入っている。一八八八年の生まれで十九歳だったが、乗船記録では「戸主」となっているから結婚していたのかもしれない。キューバへは一九一六年に入っている。メキシコからの転航者のうち、この一六年のほとんどは東洋移民合資のラス・エスペランサス移民だった。かれらはキューバの好況をどこで耳にしたのか。逃亡後、単独行動をとっていたのでは情報は簡単

に手に入らない。逃亡も単独ではなく、まとまった行動で、その後もほとんど集団で行動していたと思う。メキシコ北部の町チワワはそうした日本人移民が集住していた町の一つだった。キューバでのその後のことはわからないが、妻も呼び寄せている。ただ、ともに、いくらもしないで帰郷していると思う。沖縄県国頭郡大宜味間切饒波村（大宜味村饒波）の人。

高野政喜

一九一六年にペルーから妻ヒロ子といっしょに転航している。日本からペルーへの移民は一八九九年に森岡眞の森岡商会の仲介で、新潟、広島、岡山、山口から七百九十人がリマ北方のサン・ニコラスやカニエテなどの砂糖耕地に入ったのが最初だった。ただ、砂糖耕地といつてもほとんど砂漠のような乾燥地帯のなかに開かれた耕地で、劣悪な環境から二百人以上が病死、また、契約内容のちがいがからほとんどが帰国を求めてリマ外港のカジャオに逃亡するという始末だった。その後、第三回移民からは明治殖民、東洋移民合資も加わり三社で送出国が繰り返されているが、状況が変わったわけではなく、逃亡が続いている。帰国した者もいるが、多くはアメリカをめざした。当時、東洋汽船が神戸、横浜からハワイのヒロ、サンフランシスコ、メキシコのマンサニージョ、サリナ・クルスを経て、ペルーのカジャオに至る南米航路を開いていて、アメリカ密行のかねらはその逆ルートをとるわけだが、アメリカへは移民規制で入

国できなかつたため、ほとんどは手前のメキシコに留まることになった。そこでキューバの好況を耳にしたのだろう。高野もその一人だった。高野がいつペルーに入ったのか、ペルー移民の乗船名簿が手元にならないからわからないが、ペルーに熊本から移民が入るのは一九〇三年の第二回移民以降だから、高野もそれ以降にペルーに渡つたのだろう。キューバでは、各地のセントラルを転々としたあと、ハバナとは反対のカリブ海に面したバタバノに落ち着いている。バタバノは漁村で、先行移民もいたから漁師をしていたと思う。転々とした暮らしに疲れが出たのか、妻ヒロ子は二一年に死亡。同年、郷里からキヨカを呼び寄せ再婚している。収容は第六回グループで四階にいた。高野は六五年三月七日に、キヨカは七九年に死亡。熊本県下益城郡隈庄町（熊本市南区城南町隈庄）の人。

加藤倉吉

高野政喜と同様、一九一六年にペルーから転航している。同航だったかもしれない。その後のことは詳しくわからないが、イスラのサンタ・バルバラ地区で農業をしていた。七八年九月十二日に死亡。福島県の人。同じ福島県出身で桑折の人に加藤倉蔵がいるが縁者ではないか。収容は第五回で二階にいて、自治会の委員をしていたから人望も厚かつたと思う。

半沢豊治

一九一四年にペルーのリマ北方百八十キロのパラモンガの砂糖耕地に入っている。ペルー移民としては中期のそれだが、労働状況は初期と変わっていないようである。半沢もやはり逃亡している。ペルーへは一八九九年の森岡商会による第一回移民を皮切りに一九二一年まで計七十五回にわたって約一万六千人が移民しているが、初期のほとんどは逃亡している。当時の世界経済は砂糖経済といってもいいくらいに製糖業が経済を左右していた。トップはもちろんアメリカだった。そしてキューバやジャマイカなどのカリブ地域、ペルー、ブラジルと続いていた。ペルーでの砂糖耕地はほとんどがリマ北部の砂漠地帯だったが、砂漠といっても無毛地帯ではなく、古くインカの時代からアングスを源に流れる河川から灌漑水路を引いて農地が開かれていた。ただ、この水路権が大資本に抑えられていたため、資金力がないと参入できず、砂糖耕地はペルー資本のほかには、イギリス資本とイタリア資本に占有されていた。日本人移民の導入を、青柳郁太郎を通じて森岡商会に働きかけたのはアウグスト・レギアだった。少しのちの一九〇八年にペルーの大統領となりその後二十年近くにわたって政界を牛耳る人だが、当時はペルー資本の砂糖耕地の支配人をしていて、その労働力不足の解消に日本人の導入を進めたのだ。そのように製糖資本をバックに大統領になった人で、文字通り、砂糖経済が国を支配

半沢豊治



メキシコからアメリカへの密入国ルート：途中、陸路には死の砂漠が、海路にはコロラドの湿地帯が待っていた

していた。初期の日本人移民には逃亡は多かったが、中期以降は留まる者も多く、そうした砂糖耕地では生産も増加、日本人移民の評価も高かった。そうして独立自営できるだけの力をつけた者もいた。しかし実現しなかった。水利権の問題で、新規参入が難しかったからだが、それ以前にかれらは出稼ぎ移民だった。早く稼いで郷里に戻らなければならぬ。半沢も同様で、好況の噂に惹かれて一六年にキューバに転航している。単独でなく、高野政喜や加藤倉吉もいっしょだったと思う。キューバ好況の噂を聞いたのはメキシコだっただろう。当時、ペルーからアメリカへの定番ともいえる密行ルート

があつた。ペルーのカジャオから東洋汽船の南米航路でメキシコのサリナ・クルスあるいはマサトランに入つて陸路を行くか、さらに小型船でカリフォルニア湾を北上して上陸するかの二つだが、陸路の先には死の砂漠が、海路の先には湿地帯が待っていた。それをなんとか乗り越えた者も国境を前にしてメキシコのメヒカリにはたくさんの日本人移民が留まつていた。キューバではすぐにイスラに渡つて野菜づくりをはじめ、二六年に妻ミヨシを呼び寄せている。実直な人で、戦前戦後を通じて農業を続け、七三年二月十二日にイスラで死亡。妻ミヨシも二年後にあとを追っている。イスラの農業の発展に大きな功績を残した一人だった。福島県伊達郡桑折村万正寺沼田（桑折町万正寺沼田）の人。第五回収容で高齢だったからか五階にいた。豊美、豊三郎の二男がいてあとを引き継いで農業を続けている。

岡田勘右工門

山口県大津郡深川村川原（長門市東深川）の人。一九一五年に妻ウメといつしよにペルーに移民。トルヒーヨ北方約四十キロのチクリン（Chilín）耕地に入ったが、いくらもしないで逃亡、翌一六年にキューバに転航している。ペルー移民は一八九九年の第一回移民には女性はいないが、一九〇三年の第二回からは女性もたくさん加わつていて、一五年には男性八百七十七人、女性二百三人の計千八十人が移民している。これだけ女性の比率が高いのはメキシコ移民

では考えられないことで、耕地への定住の促進と逃亡防止のためだったと考えられる。それでも逃亡が絶えなかつた。マリア・ルス号事件に見られたように、ペルーではこの三、四十年前までは中国人の奴隷労働も行なわれていた。キューバではラス・ビジャス（シエンフエゴス）のシエンフエゴスで、いわゆる波止場人足をしていた。角力好きの体格の大きな人だったが、温厚な人柄でだからも慕われたらしい。その後、エラード（アイスクリーム）の製造販売をはじめめて繁盛した。収容は第二回グループだから、それなりに地方ではめばしい人物とみられたのだらう。長人、チエ子、キシ子、ヨシ子、ナミ子のほか二男の三男四女をもうけ、戦後はサンタ・クララにいて五八年十月五日に死亡。ウメは七二年にあとを追っている。

岡田ウメ

一九一五年に夫勘右エ門に同行、ペルーに移民。チクリン耕地に入っているが逃亡。翌一六年にキューバに転航している。七二年一月十五日に死亡。山口県大津郡深川村大字川原（長門市東〔西〕深川）の人。

大久保彦吉

一九一六年一月二十日にパナマからハバナに入っている。ペルー移民だったかもしれない。

キューバでの詳しい様子はわからないが、本島のセントラルを転々としてカマグエイにいたのではないか。收容は第六回で四階にいた。六六年九月八日にカマグエイで死亡している。埼玉県の人。

阿部耕作

一九一六年五月十日にハバナに入っている。その後のことはよくわからないが、收容前にはカマグエイのプンタ・アレグレ (Punta Alegre) にいた。第六回收容者だが、五階にいたからかなりの高齢だったと思う。六八年に死亡している。福島県の人。

嘉陽宗智

一九一六年九月六日にグアテマラからハバナに入っている。グアテマラからの転航はめずらしく、この人だけ。移民史のなかにグアテマラ移民はあるが、日本から直接グアテマラに移民した人はいない。二国間に通商条約が結ばれていなかったからで、グアテマラ移民というのはじつはハワイからの転航者だった。日本からハワイへの移民は一八六八年の、いわゆる元年者からはじまり、その後、政府が推進した官約移民、そのあとを受けて移民会社を送り込んだ私約移民、そして一九〇八年からの自由移民を合わせて、二四年の排日法によって日本人移民の入

国が禁止されるまで二十万を超える日本人がハワイに渡っている。そのうち、一八九三年にハワイから転航したのがグアテマラ移民だった。W・H・ファーガソンの仲介で三回にわたって百三十人余が砂糖耕地やコーヒー農園に送られている。しかし契約内容とのちがいを訴えて、ほとんどが解約して耕地を離れ、アメリカに渡るためにメキシコに移っていた。ただ、そのままグアテマラに残った者もいて、嘉陽はそんな一人ではなかったか。キューバではどうしたわけか、「高嶺賀陽」と名乗っていた。詳しいあしどりはわからないが、収容は第九回グループだから、かなり高齢だったと思う。六五年六月十日にハバナで死亡している。独身ではなかったか。沖縄県の人。

原田曾次郎

一九一六年にメキシコから転航している。妻静子といっしょだったかどうか。たしかでないが、メキシコではコアウイラのラス・エスペランサスにいたと思う。また、キューバでの詳しいこともわからないが、二六年にはラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニコにいて、その後、カماغエイに移ったのか、三二年五月二十二日にカماغエイで開かれた日本人会の支部長会議の記念写真の最前列中央に姿が見える。これは各地の支部長のほかに本部のハバナの役員も参加していたから、この写真だけで原田の居処についてたしかなことはない。



日本人会第一回支部長会議 (1932.5.22)、前列左から三人目が原田曾次郎

ないが、周囲の顔触れから想像すれば、カ
マグエイのシエゴ・デ・アピラにいたので
はないかと思う。収容は第六回で二階にい
た。死亡日も場所もわからないが、日系人
慰霊堂のセル(納骨房)番号が二百八十二番
で、前の二百八十一が八〇年十一月二十五
日の死亡で、あとの二百八十三番が八年
一月十七日だから、その間の死亡だったと
いうことになる。大分県下毛郡城井村多志
田(耶馬溪町多志田)の人。

朝倉徳次郎

一九一六年にハバナ港で脱船、キューバ
に住みついた。その後のことはよくわから
ないが、写真が残っているからカマグエイ
(シエゴ・デ・アピラ)のモロンにいたと思



モロンの日本人、1930年代だと思う。左から二番目が朝倉徳次郎

う。第六回收容で二階にいた。福島県の人。「浅倉」を名乗っていたこともある。八一年二月二十一日にシエゴ・デ・アビラで死亡している。と思っていたが、ずっと以前の六九年八月二十八日に帰郷していて、二カ月後の十月二十四日に死亡している、と紺野滋氏が正してくれた。近著『知られざる福島移民』（歴史春秋社）に詳しく書かれている。

香川吾一

一九一五年にペルーに移民、リマ北方約六百キロのチクリン(Chiclin)の砂糖耕地に入ったが、逃亡。翌一六年にキューバに転航している。カマグエイのセントラルを転々としたあとラス・ビジャス(シエンフエゴス)のビオレタ(Violeta)に落ち着き、日本では鍛冶屋をしていたのか鉄工所に勤めていたのか、铸件技術が認められ、セントラルで俸給のいい職

を得た。その後、セントラルから農地を借りて野菜づくりをはじめ、これが競合がなくて成功し、野菜果物店も開いて繁盛した。妻子を日本に残しての渡航だったが、一七年に妻の静代、二七年に武茂と涉、二九年に芳枝、三五年に豊子、武茂の妻マツコ、茂と一家を呼び寄せ、さらに静雄、節子、時子の一男二女をもうけている。日本人移民のなかでも数少ないファミリー移民だった。七一年六月十五日にピオレタで死亡。夫人の静代は、八二年にお会いしたときもカマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のモロン（Moron）の節子のもとで、日本人最高齢で矍鑠としておられたが、九〇年に九十六歳で亡くなられた。広島県安佐郡可部町（広島市安佐北区可部）の人。

宇佐川弥六

一九一六年にメキシコからキューバに転航しているが、メキシコにはいつ入ったのかがわからない。ただ、一六年十月二十五日神戸発の大陸殖民第八回メキシコ移民でオアハケーニヤに入ったなかに同郷で、宇佐川伊三郎と太郎吉の二人がいることから考えれば、この二人の縁戚で、呼び寄せられたのではないかと思う。サンタ・ルクレシアのタポタルで十五町歩の土地を請負耕作していた。先の小川富一郎もそうだが、オアハケーニヤ移民にはこのようにして農場経営をめざす者がけっこういた。もし革命の動乱がなければきつとうまくいって、あの辺り、オ

アハカ州とベラクルス州、チアパス州の三州境には日本人経営の大農場がいくつも生まれてきたかもしれない。それが歴史のいたずらで実らなかつた。宇佐川も同じで、何度も革命ゲリラに襲撃、掠奪を繰り返されて耕作を断念、キューバに渡り、ラス・ビジャス（シエンフエゴス）のオルキタス（*Horquitas*）に入つて農業をはじめ、その後、ヤグアラムス（*Yaguaramas*）に移っている。いずれもオアハケニヤのアメリカ資本の製糖会社タバスコランド・エンド・ディベロップメント・カンパニーが移転したセントラル・コンスタンシアが所有していた砂糖耕地で、順調にいくはずだった。それが砂糖価格の暴落でだめになっている。そして収容。第六回グループで、釈放後もヤグアラムスにいたようで、革命前の五八年九月に同地で死亡している。広島県佐伯郡宮内村明石（廿日市市宮内）の人。

森平吉

一九一六年にメキシコから転航し、ラス・ビジャス（シエンフエゴス）のセントラル・コンスタンシアに入りハルディネロをしていた。宇佐川弥六同様、メキシコではたぶんオハケニヤにいたのだからがたしかでない。二四年に妻ハルとハルの弟萩原清治を呼び寄せている。収容は第三回で五階にいた。釈放後もコンスタンシアにいたが、ハルが五〇年に死亡したため、吉春、吉文、三枝子の二男一女とハバナ郊外に移り、七六年五月十日に死亡している。八十六歳

だった。鹿児島県始良郡霧島村重久（霧島市重久）の人。萩原清治の義兄かもしれない。吉春（アンヘル）は革命の地下活動に参加、八〇年代には大尉に昇進していた。メキシコでは小川富一郎がオアハケニヤでの契約を終えたあと、仲間の高橋豊作や吉村半次郎らと、製糖工場からの請負で農場経営をはじめたことは先に話したが、ペルーからも日本人移民を呼び寄せている。百人前後を導入する予定で、最初のグループの二十五人が一二年一月二十五日にオアハケニヤに入っている。しかし革命の動乱で農場は閉鎖、キューバに移転するのだが、この一五年から一六年にかけての時期にメキシコからキューバに渡っている者のなかで、日本からメキシコに移民した経緯がわかっていない者のほとんどはこのペルーからの二十五人のなかの人物だと思う。日本からペルーへの渡航者名簿、乗船名簿を調べればはつきりするだろうが、力が足りず、いまだにできないでいる。

榎本惺

新潟県北蒲原郡新発田町泉町（新発田市）の人。一八九二年、会津の生まれで旧姓安西だったが、新発田の榎本関蔵のもとに養子に入つて姓が変わっている。会津と北蒲原はともに阿賀野川流域にあつて、古くから「塩の道」を通じて行き来が盛んだった。一九一三年に小川富一郎の呼び寄せでメキシコのオアハケニヤに入っている。富一郎たちが共同でアメリカ資本の製糖会社

から土地を購入、請負で契約耕作していた農場だった。しかし製糖会社が革命ゲリラの襲撃で被害が続いたため閉鎖してキューバに移転、それに同行して富一郎たちも一五年にキューバに移ることになるのだが、榎本は一年後れで富一郎たちのコンスタンシアの農場カルメリナに入っている。二十四歳だった。しかし翌一六年には富一郎が結核療養で帰国、そのまま死亡したため農場は破綻、解散。同朋の高橋豊作は近くのタマリンドに移って、のちに米作をはじめ、吉村半次郎はハティポニコのセントラルにと離散したが、榎本は近くのオルキタス (Horguitas) に農場を開いて日本人移民の導入を計画。二〇年に一時帰国して郷里で十七人を募り、翌二一年、一足先にキューバに戻った。だが、その間に砂糖価格が下落してキューバ経済は大混乱に陥っていた。十七人に日本出立を留まるよう打電するが間に合わず、十七人にも苦難がはじまる。こうして富一郎にはじまったキューバでの日本人農場経営も失敗に終わった。事の実行者評に賛否はつきもので、榎本も非難に曝された。日銭の少なさに堪えきれずオルキタスを出ようとしたのを榎本が許さなかった、だからしかたなく夜逃げしたと酷す者がいた一方、いや、榎本は、しばらくは堪え一つにまとまって景気の回復を待とうとしたのだ、それを聞き入れなかったから榎本農場は崩壊したんだ、と護する者もいた。どちらが賢明だったのか多くの歴史といっしょでわからない。十七人のうち半数を超える九人が、その後、いくらもしないでキューバを去っている。ただ、榎本はその後も、富一郎の従弟で爆発事故で片手を失った小川喜一を



安洋丸の榎本怪

援助してシエンフエゴスに日本商店の開店をすずめるなど富一郎の仲間や呼び寄せた十七人への支援を惜しまなかった。その後も、二一年に呼び寄せた妻清といっしょにオルキタスで農業を続けたが、第三回収容でイスラに送られ、体を悪くし搬送されたハバナの病院で四四年八月二十九日に死亡している。清との面会は一度もなかった。サヨ、彦雄、三郎、五郎、ヨネ、トミの三男三女がいて、五郎は小学校教員をしていたときに革命運動に参加、ゲバラの部隊で地下活動をしていた。清は一九七八年に死亡している。

日野忠造

大陸殖民第八回メキシコ移民の一人で、一九〇六年十月二十五日に神戸を発ち、メキシコ南部テワンテペックのオアハケニヤの砂糖耕地に

入っている。十九歳だった。メキシコでのその後のことはわからないが、一六年に妻モモヨと娘の綾子と三人でキューバに転航している。綾子はモモヨの先夫との子どもで、モモヨはその先夫と同行、オアハケニヤに入ったのだろう。先夫は死亡したのではないか。オアハケニヤでは小川富一郎の農場にいつしよにいたと思う。キューバでもセントラル・コンスタンシアに入り、その後、各地を転々としたあとラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニコに落ち着いている。大工をしていた。綾子は上田唯次と結婚。忠造とモモヨは三年に綾子を残して帰郷している。福岡県浮羽郡船越村船越（久留米市田主丸町船越）の人。名前は「忠蔵」だったという人もいた。

日野モモヨ

メキシコのオアハケニヤで娘綾子を連れて日野忠造と再婚。一九一六年にキューバに同行している。三一年、忠造と帰郷。福岡県浮羽郡船越村船越（久留米市田主丸町船越）の人。

渡辺磯哉

一九一六年にメキシコから入っているが、メキシコでのことはわからない。小川富一郎がペルーからオアハケニヤに導入した二十五人の一人かもしれない。収容は第六回で四階にいたか

ら、收容時にはたぶん本島の地方にいて、七四年二月十四日にバタバノで死亡しているから、ずっとバタバノにいたのではないか。漁師をしていたのだろう。高知の人。

柄沢豊次

一九〇六年十二月十日横浜発の大陸殖民第九回メキシコ移民で、コリマ鉄道に入る予定だったが、すでに述べたように工事は完工していて過剰供給だったため、船上で契約を切り替えてオアハケニヤ耕地に入っている。二十六歳だった。契約を終えたあとは近くのサンタ・ルクレシア (Santa Lucrecia) の雑貨店を経営。その頃からメキシコ各地で政府軍と革命軍との戦闘がはじまり、革命ゲリラが市街の商店を襲撃する事件が頻発している。その被害の詳細が、のちにカランサ政府によって調査されているのだが、その記録によれば、柄沢も被害に遭つていて、一五年八月二十五日の夜、サパチスタ配下の三人に店舗を襲撃されて大量の商品を掠奪されている。また一九年一月二十日、午後十一時頃にも数名の兵士に襲撃され、さらに同年六月十日、午前一時頃にも兵士四人に襲撃されている。やっつけていけなくなったのだろう、数カ月後にキューバに転航している。キューバではラス・ビジャス (ビジャ・クララ) のサンタ・クララのセントラル・カラカス・クルセにいた。その後、ハティボニコに移って死亡しているが期日がわからない。長野県上水内郡神郷村南郷 (豊野町南郷) の人。

柄沢うめ

柄沢豊次の妻。一九一九年に同行してキューバに入っている。メキシコへは大陸殖民で入ったのではなく、あとで呼び寄せられたのだろう。豊次の死後、シエンフエゴスに移ったのか、六三年二月十八日にシエンフエゴスで死亡している。長野県上水内郡神郷村南郷(豊野町南郷)の人。

石田孫市

山口県の人で、一九一六年にメキシコから転航している。メキシコでのことはわからないが、大陸殖民第八回移民に同じ山口県出身の石田喜作がいて、その縁戚ではないかと思う。メキシコに呼び寄せられたのではないか。喜作はキューバには渡っていない。収容は第四回で五階にいた。釈放後はカマグエイにいたが、その後ハバナに移って、六五年一月二十八日に死亡している。

高田進

一九一六年にメキシコから入っている。メキシコでのことはわからないが、キューバではラ

ス・ビジャス(シエンフエゴス)のオルキタス(Horquitas)にいたようだから、メキシコではオアハケニヤにいて小川富一郎らといっしょだったのではないか。あるいはペルーからの二十五人の一人かもしれない。収容は第六回、二階にいて、七六年四月十九日にオルキタスで死亡している。熊本県の人。

吉沢正

一九一六年にメキシコから転航している。メキシコではオアハカ州の太平洋岸の港町サリナ・クルス(Salina Cruz)の岸本商会で店員をしていた。キューバではイスラに渡ってサンタ・バルバラ地区でアメリカ市場向けの野菜栽培をしていた。うまくいっていたのだろう、二五年に弟の治男を呼び寄せ、二六年には一時帰郷して結婚、妻榮を同行して戻っている。また、二七年には義姉だと思いがトクヨと甥の忠も呼び寄せている。その後、戦争前に妻と子どもを帰郷させ、自分もあとを追うつもりだったが、戦争がはじまったためキューバから出られなくなった。収容は第五回で二階にいた。釈放後、すぐに帰郷していると思う。実直で温厚な人でみんなに慕われたらしい。長野県上伊那郡七久保村(飯島町七久保)の人。一八九四年三月二十三日生まれ。弟の治男は二五年に海外興業の第十二回移民で、忠とトクヨは二七年に第二十回移民でキューバに入っているが、これは海興の募集に乗っかっただけで、実質は正の呼び寄せで自由



バナスのセントラルで、左から永井三雄〈広島〉、西村徳次郎〈熊本〉、三谷和吉、田吉伝蔵〈熊本〉、みんなハルディネロをしていた

渡航者だった。だからもちろんトリニダー Trinidad の砂糖耕地には入っていない。

三谷和吉

一九〇七年に大陸殖民第十回メキシコ移民でオハケニヤ耕地に入っている。三十八歳だった。契約満期後は周辺で農業をしていたのではないか。革命ゲリラの襲撃や焼き討ちが激しくなったため、一六年三月にキューバに転航。最初はハバナの富豪宅でハルディネロ（庭師）をしていたが、その後、ハバナ西郊のバナス (Banes) に移り、セントラルでハルディネロの監督をしていた。三三年頃に帰郷している。広島県沼隈郡千年村（福山市千年）の人。

三谷のように三〇年代半ばまでに引き揚げた人はそれなりの貯えを持って戻っている。それを、あと数年がんばってみようと残った者は、不況と収容、

そして革命に遭つて元も子もなくしてしまつた。

齋藤弥一

一九〇六年十月二十五日、神戸発の大陸殖民第十回メキシコ移民で南部テワンテペックのオアハケニヤに入り、妻ヨイを呼び寄せ、八重子をもうけたが離婚。一六年にキューバに転航している。ヨイは八重子を連れて二〇年にキューバに渡り、中沢勇三と結婚した。弥一は各地のセントラルを転々としたあと、カマグエイのシエゴ・デ・アピラに落ち着いている。収容時は、中沢が元外相のコレティナ邸でハルデイネロをしていたことから、弥一はコレティナの身元保証で収容を免れている。四四年にシエゴ・デ・アピラで死亡。新潟県北蒲原郡中浦村加治万代（新発田市加治万代）の人。娘の八重子は小島三八一と結婚してことから、小島もコレティナの保証で収容を免れている。この二人に加えて西村八郎とが一世男子としては例外の未収容者だった。

高野ヒロ子

高野政喜の妻。一九一六年にペルーから夫といっしょに入っているが、二一年にカマグエイのシエゴ・デ・アピラで死亡。熊本県の人。

窪田忠雄

一九一六年に小川富二郎の呼び寄せでセントラル・コンスタンシアの砂糖耕地の一つだった、カルメリナに入っている。十九歳だった。富一郎はカルメリナへ百人の移民導入を計画し郷里の新発田で募集。一六年三月二十九日に二十三人、五月二十七日に三人、十月十九日に二十四人、十二月五日に二十五人の三回にわたって計七十五人がカルメリナに入っている。しかし一年と続かなかつた。翌一七年八月に富一郎が結核療養で帰国、十一月に鎌倉で死亡したからで、その後、七十五人は各地に四散。窪田はカマグエイのハティボニコに移って、セントラルの雑貨店に入り、二八年に妻ヨシミを呼び寄せている。しかし三〇年代に入って不況が激しくなったためセントラルで仕事がなくなったのだから、オリエンテ（グランマ）のシエラ・マエストラにほど近いサン・ラモン（San Ramon）に移って農業をはじめた。そのかたわら雑貨の行商もしていたらしい。上背があり、柔道の心得もあつたようで、二一年に柔道家の前田光世、通称コンデ・コマが、ハバナのパイレーツ劇場で興業試合を開いたとき、その前座をつとめたこともある。収容は第六回で三階にいた。八二年五月四日に死亡。新潟県北蒲原郡新発田町旭町（新発田市）の人。カルメリナの小川農場に入った、通称、小川移民の最初の人で、富一郎とも近かつたから、詳しいことを聞きたくて八二年には訪ねる予定をしていたが、直前に亡

くなられてお会いできなかつた。夫人のヨシミは小川富一郎の姪で、ずっと元気にしておられたが九八年に死亡。民子、佳子、晃一、稲雄、君子の二男三女がいて、長男晃一は革命時には地下活動に参加していて、革命後、中尉に昇進している。

岩淵治郎吉

小川富一郎によるセントラル・コンスタンシアへの呼び寄せ移民、通称、小川移民の一人で、一九一六年三月二十九日にハバナに入っている、いわゆる三月組の一人。二十一歳だった。カルメリナ耕地崩壊後は、近くのオルキタスに移って農業を続けていた。榎本惺らといっしょだったと思うが、ごく早い時期にオルキタスで死亡している。新潟県北蒲原郡新発田町（新発田市）の人。

磯岡實一

小川移民の三月組の一人。富一郎の妻秀野の弟。三月組の一人として一九一六年三月二十九日にハバナに入っている。十八歳だった。カルメリナ崩壊後は姉秀野の家族に同行、シエンフエゴスに移り、榎本惺や高橋豊作の支援で秀野がはじめた日本商品の雑貨店エル・ニッポン（El Nippon）を手伝っていたが、二六年に帰郷している。新発田市寺町の福勝寺境内に小川富一郎



小川富一郎顕彰碑（新発田市福勝寺）

を顕彰する三メートル近い石碑が残っているが、建立に奔走したのはこの人だった。新潟県北蒲原郡新発田町旭町（新発田市）の人。

本間平治

小川移民三月組の一人。一九一六年三月二十九日にハバナに入っている。十九歳だった。小川富一郎よりは九歳年下だが幼馴染みで、カルメリナ崩壊後はマタンサスのセントラル・ティンガルに移ってハルディネロ（庭師）をはじめた。二一年に妻サクヤを呼び寄せ、有平、務、重雄、アンヘリタの三男一女がいる。収容は第六回で四階にいた。新潟県北蒲原郡新発田町東町（新

発田市)の人。日米戦争がはじまると、フィリピンのバターン攻略の死の行進で知られた本間雅晴が新潟県佐渡の出身で同姓だったため、縁戚と見られて、長男有平トマスは二世でキューバ国籍を持っていたにもかかわらず、日本人成人男性同様、逮捕、収容されている。また、サクヤも、二世の小川英子、山入端マリアといっしょにハバナ西郊のカンブレヘラに収容されている。残された務、重雄、アンヘリタは周りのキューバ人からの中傷に曝され、避けるためにサクヤの旧姓の中村姓を名乗っていた。その後、四四年に重雄は野球の試合に出るため仲間とトラックに乗って球場に向かう途中、交通事故で死亡。戦後、七〇年代半ばに、平治とサクヤはアンヘリタの家族といっしょにアメリカに亡命し、有平と務はキューバに残った。余談だが、本間雅晴は戦後のマニラ戦犯裁判で、死の行進の責任者として死刑を宣告されるが、刑の執行(銃殺)は、本間の命令で行なわれたマニラ総攻撃の同日、同時刻に執行されるなど、のちの東京裁判がそうだったように、アメリカによる一種、復讐劇だったと思う。新潟県北蒲原郡新発田町東町(新発田市)の人。

会沢国助

小川移民三月組の一人。一九一六年三月二十九日にハバナに入っている。仲間うちでは中堅にあたる三十三歳だった。カルメリナ崩壊後は各地のセントラルを転々としたあと、オリエン

テ（オルギン）のサン・ヘルマン（San German）に落ち着き、セントラルでハルデイネロをはじめた。どういう理由があったか収容は免れていて、戦後もサン・ヘルマンに暮らして七三年三月三日に九十一歳で死亡している。仲間の多くと同様、この人もまた生涯独身を貫いている。新潟県北蒲原郡新発田町麩屋町（新発田市）の人。

佐藤弘

小川移民三月組の一人。一九一六年三月二十九日にハバナに入っている。三十四歳だった。カルメリナ崩壊後は少し西のオルキタスに移っているが、かなり早い時期に同地で死亡している。榎本惺といっしょだったのかもしれない。新潟県北蒲原郡新発田町上鉄砲町（新発田市諏訪町）の人。富一郎とは同じ町内の生まれ。

嶋徳次郎

小川移民三月組で、一九一六年三月二十九日にハバナに入っている。十八歳だった。小川農場が崩壊後は各地のセントラルを転々としたあと、カマガエイで理髪店を開いていた島梅吉（静岡）を頼り、理髪技術を覚えて、のちに独立して理髪店を開いている。収容は第六回で二階にいた。生涯独身を通し、釈放後の四九年に死亡している。新潟県北蒲原郡新発田町下町（新発

田市大手町)の人。

新井田鉄治

小川移民三月組の一人で、一九一六年三月二十九日にハバナに入っている。二十二歳だった。カルメリナ崩壊後はずぐに帰郷したのではないか、その後のあしどりが見つからない。新潟県北蒲原郡紫雲寺村下中沢(新発田市下中沢)の人。紫雲寺村からはほかにも三人いるが、すべて収容前に帰郷している。

本間清作

小川移民三月組の一人。一九一六年三月二十九日にハバナに入っている。二十歳だったが、その後のことはいっさいわからない。おそらく帰郷したと思う。新潟県北蒲原郡松浦村小友(新発田市小友)の人で、番地まで特定できるから、いまでも訪ねればすぐにも確認できるだろう。小川移民についてはほぼ全員にそれはできるのだが、調べ歩いたのは四十年もむかしのことで、ネットも携帯もなかったからたいへんで、尽くせずに終わっている。ただ、いまはGoogle mapで特定できるし、場合によっては表札まで見てとれる。その後の調べで、戦後、メキシコのモレロス(Morelos)州トリニダー(Trinidad)のサンタ・ロサ(Santa Rosa)で農場を経営

していたことがわかった。

大江広三

小川移民三月組の一人で、一九一六年三月二十九日にハバナに入っている。二十三歳だった。その後のあしどりはわからないが、二一年に帰郷したことはわかっている。新潟県北蒲原郡松浦村八幡（新発田市八幡）の人。

高橋与四蔵

小川移民三月組の一人。一九一六年三月二十九日にハバナに入っている。戸主で、三十歳だったから郷里に妻子を残しての渡航だったと思う。カルメリナ崩壊後はすぐに帰郷したのではない。大江広三と同郷、新潟県北蒲原郡松浦村八幡（新発田市八幡）の人。

五十嵐吉次郎

小川移民三月組の一人。一九一六年三月二十九日にハバナに入っている。二十七歳だった。カルメリナ崩壊後はカマグエイのセントラル・ハグエヤルで農業をしていたが、二八年に帰郷している。北蒲原郡五十公野村下内竹（新発田市下内竹）の人。九八年だったか、新潟日報に

少し書いたことがあって、それを読まれた御子息の勝巳さんから連絡をいただいた。すぐに新発田にお訪ねすると、「父のただ一つの遺品です」と小さなノートを見せられた。吉次郎がキューバで使っていた家計簿だった。越後人らしい几帳面さで、日々の出納が事細かく記録されていて、驚いた。キューバでの十二年の暮らしが、数字になって並んでいたのだった。言葉でない、そんな人間記録もあつていいと思う。吉次郎にとつて、棄て難い、忘れ難い一冊だつたにちがいない。ただ、それ以外、ほとんどキューバのことを語っていない。吉次郎に限らない、キューバでお会いした新潟移民のだれもが、とくに男がそうだった。あの頃、勝巳さんは六十九歳だったから、吉次郎が帰郷してからの誕生だっただろう。どうされているか、またお訪ねしないといけないと思つている。その勝巳さんが一九九三年に自分史『五十公野山』上梓して亡父のことをこう記している。「父は十三年前に、九十歳で亡くなった。父は六人きょうだいの二男として、明治二十二年に農家に生まれた。小学校へも満足に行かれないままに卒業し、同じ村の自作農の所へ下男に出された。『実家に食う米がなくなると、婆が貰いに来て、きまりが悪くてしょうがなかった』と、いつか父が呟やいたことがあつた。こんなこともあつて、父はキューウバ島へ出稼ぎに出ることになった。筆舌に尽くし難い苦勞の末、所帯を持つために帰国したのが、国を出てから十二年後であつた。一緒に出掛けた人の中には、途中で挫折した人がたくさん出たが、父はよく辛抱して、まとまつたお金を持って帰国した。そして、

間もなく母と結したのである」。

菅原長吉

小川移民三月組の一人で、一九一六年三月二十九日にハバナに入っている。二十五歳だったが、その後のことがわからない。五十嵐吉次郎と同郷で、同じ頃か、それ以前に帰郷していると思う。北蒲原郡五十公野村下内竹（新発田市下内竹）の人。

清野藤三郎

小川移民三月組の一人で、一九一六年三月二十九日にハバナに入っている。二十四歳だった。たしかでないが、カルメリナ崩壊後はそんなに長くないうちに帰郷していると思う。北蒲原郡五十公野村山崎（新発田市山崎）の人。

清野藤四郎

小川移民三月組の一人で清野藤三郎の弟。一九一六年三月二十九日にハバナに入っている。二十一歳だったが、カルメリナ崩壊後はどうしたかわからない。兄同様、早い時期に帰郷しているだろう。北蒲原郡五十公野村山崎（新発田市山崎）の人。

長谷川与五工門

小川移民三月組の一人。一九一六年三月二十九日にハバナに入っている。磯岡貫一や嶋徳次郎と同じ、三月組では一番若い十八歳だった。カルメリナ崩壊後はイスラに渡り、サンタ・バルバラ地区で農業をはじめている。三月組には早い時期に帰郷する者が多かったがそうしなかったのは、もう少し留まり、まとまった貯えを持つて帰ろうとしたからだ、それを収容が阻んでいる。第五回で二階にいた。釈放後は肥田野龍次といっしょにピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スール (Consolacion del Sur) に移って農業を続けた。小屋掛けのような粗末な住居だったが、一つ屋根の下、二人仲良く暮らすけしきはまるで翁媪のようだったという。独身のまま五四年十一月六日に死亡。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野(新発田市五十公野)の人。

島津岩吉

小川移民三月組の一人で、二十一歳で一九一六年三月二十九日にハバナに入っている。カルメリナ崩壊後は各地を転々としたあと、カマグエイ(シエゴ・デ・アビラ)のモロン (Moron) で理髪店を開いていた。二七年に郷里から妻ナミを呼び寄せているが、六年後の三三年に二女

を残してナミは死亡。男手一つで二人の娘を育てた。収容中は次女の教父だった隣家のスペイン人が二人を引き取って面倒を見てくれていたらしい。第六回収容で二階にいた。釈放後もモロンで理髪店を続け、六八年に死亡している。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。その間に隣家のスペイン人も死亡。相続人がいなかったため、次女が財産を引き継いだ。長女は中野新蔵（滋賀県）の長男砂夫と結婚。その後、七〇年代に中野の家族といっしょに二姉妹もアメリカに亡命している。

島津二郎

小川移民三月組の一人で、一九一六年三月二十九日にハバナに入っている。十九歳だった。島津岩吉と同郷だが、関係がわからない。カルメリナ崩壊後はイスラに渡ったようで、ごく早い時期に死亡している。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。

肥田野龍次

やはり小川移民三月組の一人で、一九一六年三月二十九日にハバナに入っている。二十歳だった。長谷川与五エ門の項でも話したが、カルメリナ崩壊後はイスラに渡り、サンタ・バルバラ地区に入って農業をはじめた。だれもがそうだったが、長居する気など端からなくて、数年が

まんしたあとまとまった貯えを手に帰郷するつもりだった。それができずに収容に遭い、戦後は長谷川といつしよにピナル・デル・リオ (Pinar del Rio) のコンソラシオン・デル・スール (Consolacion del Sur) に移って農業を続けた。一つ屋根の下に二人仲良く暮らすけしきは翁媪のようだったと仲間が伝えている。七三年十二月十四日にコンソラシオンで死亡。新潟県北蒲原郡松浦村八幡(新発田市八幡)の人。ほかにも肥田野姓は何人もいるが、同郷でもなく縁戚でもない。生涯独身で、長谷川との暮らしを除けば孤高の人だった。収容は第五回で二階にいた。

菅井秀二

小川移民三月組の一人で、一九一六年三月二十九日にハバナに入っている。二十六歳だった。カルメリナ崩壊後はどこに移ったかはわからないが、一九年に妻のイワノを呼び寄せている。二歳年上だった。わかるのはそれだけで、キューバで死亡した形跡はないから、二人とも早い時期に帰郷したと思う。新潟県北蒲原郡笹岡村上坂町(阿賀野市上坂町)の人。

山崎武

小川移民の三月組。一九一六年三月二十九日にハバナに入っている。菅井秀二と同郷、新潟

県北蒲原郡笹岡村次郎丸（阿賀野市次郎丸）の人。カルメリナ崩壊後のあしどりがわからない。二十七歳で入っているから、郷里に妻子を残しての渡航だっただろうから、菅井夫婦といっしょに帰郷したのではないか。郷里には兄信昭の家屋敷がそのまま続いている。

小川秀野

小川移民三月組より三週間ほど前に、長男太郎を連れてコンスタンシアに入っている。小川富一郎の妻で、磯岡貫一の姉。富一郎の乗った移民船・東洋汽船の満州丸は一九〇六年十二月十日に横浜港を出て、翌年一月二十三日にメキシコのサリナ・クルスに入港している。そこからオアハケニャへは一日あるいは二日の距離だった。砂糖耕地での労働契約は二年、それを終えると、富一郎は仲間数人といっしょに製糖会社のタバスコランド・エンド・デイベロップメント・カンパニーの下請けで農場経営をはじめたのだが、そこに秀野は呼び寄せられていた。富一郎は一八八七年二月二十二日の生まれで、秀野は三日後の二十五日の生まれ。同じ町内の、二人は幼馴染みだった。秀野の生家、磯岡家は馬喰をしていたのではないか。新発田は長岡から村上に抜ける奥州路の街道筋で、明治の移民はそうした村々から多く出ている。人の行き来が盛んで情報が豊かだった。そんなところにしか明治移民は出ていない。商売柄、磯岡家は資力もあつたのだろう、秀野は高等女学校を終えたあと東京に出て創立ばかりの日本女子大学校に

入学。卒業したその足で富一郎のあとを追ってメキシコに渡った。一九一〇年前後のことだろう。一五年二月に長男太郎が生まれている。そのわずか二週間後に、富一郎はキューバに転航。秀野の方は、産後ということもあつたのか、そのままオアハケニヤに残り、十月に郷里の新発田に一時帰郷している。太郎のお披露目もあつたが、富一郎に代わつて、富一郎がキューバのセントラル・コンスタンシアのカルメリナではじめた独立農場への移民を募るためだつた。といつても、当時、個人では海外移民を取り扱うことはできなかった。外務省に会社登録し、募集人員と募集地域を申請、募集したあとはその人員に應じた保証金を納めなければならなかつた。そんなことを秀野一人ではできないはずがない。外務省との仲介にあつたのは渋沢栄一だつたと思う。磯岡の縁戚の一人が東京・飛鳥山の渋沢邸で執事をしていて、そんな伝があつた。募集人員は百人、そして七十五人が集まつた。それを見届け、秀野は、冒頭に記したように翌一六年三月にキューバに入っている。新しい暮らしのはじまりだつた。ただ、それも二年と続いていない。無理がたつたのだろうか、富一郎は結核に倒れて農場経営を断念、療養のため、翌一七年八月にキューバを離れ日本に向かう。そして横浜から、郷里に戻ることなく鎌倉腰越の鈴木療養所に直行、四十日後の十一月二十九日に死亡している。その間に七十五人も三回にわたつてコンスタンシアのカルメリナ耕地に入つていた。これが日本からキューバへの最初の集団移民となつた。だが、一年余りで耕地経営は崩壊、離散することになる。それから八



左から長男太郎、秀野、長女富美とコンスタンシアの支配人レミイ夫妻

年、それまでの私設移民会社を統合して国策会社になった移民会社・海外興業によって、ラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のトリニダダーの砂糖耕地に日本人移民が送られることになるが、その耕地経営も、もともとは富一郎が計画していたものだった。もし富一郎が斃れることがなかったら、キューバへの新潟からの移民はもっと多くなっていただろうし、キューバ移民のようすもいぶんちがったものになっていただろう。

富一郎死後の秀野は、太郎と長女富美を連れ、富一郎の従弟小川喜一の家族といっしょにシエンフエゴスに出て、日本商品の雑貨店エル・ニッポン

(El Nippon) を開いて暮らしていた。もちろん資力が十分でなかったから、富一郎の同志の高橋豊作や榎本惺の支援が大きかったと思う。しかし泣きつ面に蜂、三〇年代はじめに船舶火災で日本からの輸入商品が焼失、保険をかけていなかったため、負債を抱えて閉店。喜一家とともにハバナに移り、海岸通りのマレコン街のアパートに暮らしていたが、秀野は三八年四月十七日に、富美は翌三九年に死亡。一人になった太郎は仲間の支援でパナマの日本公使館に職を得てキューバを離れた。だが日米戦争がはじまると、パナマでも日本人の收容があり、アメリカに送られ一時收容されたあと、日米戦時交換船（第一次）で日本に戻っている。寺崎英成（一九三〇年代にキューバ公使をしていた）や娘のマリコらといっしょだった。そういえば、太郎の長女にはじめてお会いしたとき、秀野にそっくりなのにびっくりした。隔世遺伝のいたずらといってしまえばそれまでだが、太郎の、母への想いが姿になって表われた、そんな気がする。

肥田野鉄四郎

小川移民の一人で、一九一六年五月に横浜を出発している。ハバナ着はたぶん七月末だっただろう。十六歳だった。同行に、松永惣之丞、小坂栄寿計がいた。カルメリナ崩壊後のことはわからないが、日米戦争前の四〇年に帰郷している。榎本移民の肥田野有作は弟。新潟県北蒲原郡米倉村米倉（新発田市米倉）の人。

松永惣之丞

小川移民の一人。二十七歳で一九一六年五月に横浜を出発している。同航に、肥田野鉄四郎、小坂栄寿計がいた。コンスタンシアには七月末頃の到着で、カルメリナ崩壊後は各地を転々としたあと、ラス・ビジャス（シエンフエゴス）のビオレタ（Vieta）で農園を開いていた香川吾一のもとに入り、戦前戦後を通じてそこで働いていた。独身を通し六五年二月二十日に死亡している。新潟県北蒲原郡木崎村浦ノ入（新潟市北区浦ノ入）の人。収容は第六回で三階にいた。

小坂栄寿計

肥田野鉄四郎、松永惣之丞同様、小川移民の一人で、一九一六年五月に横浜を出て、七月末頃にコンスタンシアに入っている。十八歳だった。カルメリナ崩壊後は榎本惺のオルキタ耕地に移ったが、二一年には砂糖価格の暴落でオルキタも崩壊。その後、各地を転々としたあとハティボニコのセントラルに落ち着き、香川吾一の長女芳枝と結婚。収容は第六回で三階にいて、釈放後は、しばらく米作を試みたこともあったが、うまくいかず、シエゴ・デ・アピラに移ってエラードの製造販売をはじめた。これは成功したが、革命の接収で元も子もなくしてしまっている。七一年五月十七日に死亡。新潟県北蒲原郡新発田町下町（新発田市大手町）の人。喜久



前列右が秀野、左がミヨセ
後列左から高橋豊作、磯岡貫一、窪田忠雄、小川喜一

栄 (Marta)、美栄子 (Zita) の二女がいて、もう九十歳近いだろうが、キューバでは長生きできるからお元気だろうと思う。芳枝夫人は八二年にはいろいろよくしてくれ、その後も手紙のやりとりをして、ぼくには母のような人だった。たくさんむかし話を聞かせていただいた。それが『峠の文化史』にもつながっている。

小川ミヨセ

一九一六年七月に横浜を出発、コンスタンシア到着は九月二十日前後だっただろう。小川秀野の従妹で二十歳だった。のちに小川喜一と結婚。長男武 (Angel)、長女英子 (Eva) の一男

一女がいて、二人とも二世だったにもかかわらず、日米戦争時には収容されていた。革命後、アンヘルが国連に職を得てキューバを離れ、その後、七〇年か、一家はアメリカに亡命している。それからしばらくして喜一は死亡したが、ミヨセさんは二〇〇五年ごろまでニュージャージーで元氣におられたと思う。新潟県北蒲原郡新発田町東町（新発田市諏訪町）の人。

中村藤吉

小川移民十月組の一人。一九一六年十月十九日にハバナに入っている。二十一歳だった。カルメリナ崩壊後のことはわからない。ごく早い時期に帰郷していると思う。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。

大江亀作

一九一六年十月十九日にハバナに入っている。小川移民十月組の一人で、二十六歳だった。きびしくなりはじめたカルメリナの小川農場を早期に離れたのはこの人とその賛同者たちだった。コンスタンシアをあとにイスラに移り、サンタ・バルバラ地区で長谷川与五エ門や肥田野龍次といっしょに農業をはじめ、二六年に妻スエを呼び寄せている。スエは単独渡航でなく、海外興業移民に応募しての渡航だった。海興移民も終盤の頃では応募者が少なく、自由渡航者を

集めて送り出していた。亀作は第三回収容で、釈放後は、長谷川たちといっしょに、ピナル・デル・リオのコンソラシオンに移って農業を続けたが、革命後、土地所有はもちろん、家畜も五十頭までと制限されたためやっつけなくなり、七〇年代はじめに夫婦で帰郷、亀作は七四年二月十九日に死亡している。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。その後、スエは、アメリカに亡命していた長女のもとに移り、次男実は一人キューバに残り、ハバナの日本大使館に勤めていたが、八〇年代に妹（長女）を頼ってアメリカに亡命した。長男修は戦前に死亡していると思う。八〇年代にキューバからアメリカへの亡命が多くなったのは、七〇年代半ばに米ソ対立の狭間でキューバ政府は、革命後にソ連から受けていた援助、借金は借款を返すために、南イエメンやエチオピアに肩代わりの軍隊を送るなどして経済がさらに悪化、配給も制限され、生活が苦しくなったからだ。日本人もずいぶん堪えていたが、ハバナなど都会での暮らしはきびしく、亡命した人が多かった。亀作は郷里での死亡だったが、ハバナの慰霊堂には位牌が納められている。

金沢諭吉

小川移民十月組の一人で、一九一六年十月十九日にハバナに入っている。二十一歳だった。その後は多くの仲間と同じにカルメリナの小川農場の盛衰とともに過ごしただろう。崩壊のあ

とはカマグエイのシエゴ・デ・アピラに落ち着いている。そのまま郷里に戻ることなく亡くなられたようで、収容メンバーにも入っていない。二十年代の死亡だろうか、慰霊堂の第七号セルに位牌が残っている。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。

内田要之助

小川移民十月組の一人。一九一六年十月十九日にハバナに入っている。二十五歳だったが、カメリナ以後のことはわからない。たぶん帰郷されたと思う。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。

桑原寅造

小川移民十月組の一人で、一九一六年十月十九日にハバナに入っている。内田より一年年長だが、入ったときは同年齢の二十五歳だった。小川農場崩壊後も近隣か、榎本惺といっしょにオルキタスにいたかもしれない。二一年に榎本が呼び寄せた十七人のなかに妻のトラがいる。ただ、榎本農場もその年に不況で仕事がなくなり崩壊しているから、たぶん早い時期に帰郷されたと思う。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。

山口国太郎

小川移民十月組の一人で、一九一六年十月十九日にハバナに入っている。二十八歳だった。コンスタンシアのあとは金沢と同様に、各地を転々としたのだろう、ハバナに落ち着いていたのか、戦前もごく早い時期にハバナで死亡している。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。

川瀬吉次郎

小川移民十月組の一人。二十四歳で、一九一六年十月十九日にハバナに入っている。カルメリナ崩壊のあとは帰郷されたと思う。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。

渡辺鶴吉

小川移民十月組の一人で、一九一六年十月十九日にハバナに入っている。二十六歳だった。カルメリナのあとは多くがそうだったように各地を転々としたのだろう、マタンサスのカルデナスにいたようだ。漁師をしていたのだろうか。ごく早い時期に死亡している。慰霊堂の第一

号セルに位牌がある。新潟県北蒲原郡五十公野村下内竹（新発田市下内竹）の人。

相島豊三郎

小川移民十月組の一人で、渡辺とは同郷だが、少し年少の二十一歳で、一九一六年十月十九日にハバナに入っている。ただ、その後のことはわからない。早い時期に帰郷していると思う。新潟県北蒲原郡五十公野村下内竹（新発田市下内竹）の人。

高野寅次郎

小川移民十月組の一人で、一九一六年十月十九日にハバナに入っている。小川移民の最年少は十六歳だが、少し上の十九歳だった。カルメリナ崩壊のあとは、カマグエイのシエゴ・デ・アピラにいたが、いくらもしない一九年に死亡している。新潟県北蒲原郡五十公野村山崎（新発田市山崎）の人。

菊地武三

小川移民十月組の一人で、一九一六年十月十九日にハバナに入っている。三十一歳だったから妻子を置いての渡航だったか。小川農場崩壊後は帰郷していると思う。新潟県北蒲原郡五十

公野村古寺（新発田市古寺）の人。

天野熊太

小川移民十月組の一人で、十九歳で一九一六年十月十九日にハバナに入っている。その後は、カマグエイのシエゴ・デ・アピラにいたと思う。第六回收容で四階にいた。釈放後もシエゴ・デ・アピラにいて、革命前の五九年四月二十九日に死亡している。独身だったと思う。新潟県北蒲原郡五十公野村小見（新発田市小見）の人。

若月正朝

小川移民十月組の一人で、一九一六年十月十九日にハバナに入っている。二十五歳だったが、カルメリナ後のことはまったくわからない。収容されていないから、たぶん早い時期に帰郷しているだろう。次男だったが、現在も渡航時の所番地が存在しているから、縁戚もいらつしやるのではないか。新潟県北蒲原郡川東村南楯（新発田市南楯）の人。

築井広治

築井熊吉の長男で勇次の兄。小川移民十月組の一人として一九一六年十月十九日にハバナに

入っている。二十四歳だった。カルメリナ以後のことはわからないが、收容されていないから早い時期に帰郷しているだろうし、勇次がキューバに入ったのは二年で、その後もいつしよにいた気配がないから二一年以前に帰郷しているのではないか。新潟県北蒲原郡川東村上羽津（新発田市上羽津）の人。

宮村明治

小川移民十月組の一人で、一九一六年十月十九日にハバナに入っている。二十四歳だった。やはりカルメリナ後のことはわからない。收容もされていないから早い時期に帰郷していると思う。同郷の同姓に宮村留吉がいるが縁戚かどうか。新潟県北蒲原郡川東村下羽津（新発田市下羽津）の人。戸主で、渡航時の所番地が現存しているから御子孫が健在だと思う。

佐藤定太郎

小川移民十月組の一人で、一九一六年十月十九日にハバナに入っている。カルメリナ後のことはわからないが、渡航時には三十二歳だったから妻子を残していただろう。收容もされていないから、ごく早い時期に帰郷していると思う。新潟県北蒲原郡川東村板山（新発田市板山）の人。継嗣で所番地も現存しているから御子孫が続いているだろう。

加藤信造

小川移民十月組の一人で、一九一六年十月十九日にハバナに入っている。小川移民のなかでは最年長の三十八歳だった。戸主であり、年齢からいっても妻子を残しての渡航だっただろう。収容もされていらないから早い時期に帰郷していると思う。新潟県北蒲原郡中浦村荒町（新発田市荒町）の人。

下村与次

小川移民十月組の一人で、一九一六年十月十九日にハバナに入っている。二十三歳だった。コンスタンシアのあとは近くのシエンフエゴスでエラード（アイスクリーム）販売をしたり、その後は農業をしていた。二六年に妻ハルと弟の三太郎を呼び寄せているが、ハルはその後どうしたかわからない。収容は第四回で五階にいたから、少しは大きく農業をしていたと思う。老後は耳が聞こえなくなり、さらに視力も低下。郷里から甥が旅費を送って何度も帰郷を促したが、目も見えなくなり、一人で帰ることもできないまま断念。一九八一年一月十七日にシエンフエゴスで死亡している。新潟県北蒲原郡中浦村荒町（新発田市荒町）の人。八十年代に入ると、一世のほとんどが八十歳を超えるようになり、名簿を記録していて、年々、亡くなる人が

多いのに驚いていた。

下村盛次

下村与次と同郷の一八九七年生まれ。小川移民十月組の一人で、一九一六年十月十九日にハバナに入っている。十九歳だった。コンスタンシアのあとは各地を転々としてセントラルでコシネロ（コック）をしていた。収容は第六回グループで三階にいて、釈放後、キューバ婦人と結婚し、ハバナ南東約五十キロのギネス（Guines）にいたが、一九七四年五月二日に死亡している。風邪をこじらせての急性肺炎だった。新潟県北蒲原郡中浦村荒町（新発田市荒町）の人。

大沼次郎

下村たち同様、小川移民十月組の一人で、一九一六年十月十九日にハバナに入っているが、カルメリナ後のことはわからない。たぶんシエンフェゴス周辺か、ハバナ東方のカルデナス（Cardenas）で暮らしていたと思う。漁師をしていたのではないか。継嗣だったが、帰郷できずに、収容前の四年にカルデナスで死亡している。大沼もそうだが、戦前の死亡者はその土地の共同墓地に埋葬されることが多く、革命後の六四年にできたハバナの慰霊堂には、遺骨が収集できなかったため、ほとんどは第一号セルに位牌のかたちで納められている。新潟県北蒲

原郡加治村茗荷谷（新発田市茗荷谷）の人。

神田亀作

小川移民十月組の一人で、一九一六年十月十九日にハバナに入っている。二十一歳だった。小川農場崩壊後は各地を転々としてハルディネロ（庭師）をしていたが、カマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のバラグア（Baragua）のセントラルで広島出身の開田語作に会い、料理を習って、開田に代わってコシネロ（コック）をはじめた。二五年に郷里から妻トメを迎えて、そのままバラグアにいたと思う。三八年に帰郷している。新潟県北蒲原郡紫雲寺村福岡（新発田市福岡）の人。

藤間惣三郎

小川移民十月組の一人で、一九一六年十月十九日にハバナに入っている。カルメリナ後のことはわからないが、戸主で、三十二歳での渡航だったから、ごく早い時期に帰郷していると思う。新潟県北蒲原郡松浦村八幡秋田（新発田市八幡）の人。

新保与市郎

小川移民十月組の一人で、一九一六年十月十九日にハバナに入っているが、やはりカルメリナ後のことはわからない。三十六歳の渡航で、継嗣で、収容もされていないから、ごく早い時期に帰郷していると思う。のちの榎本移民の一人に同姓の新保孝太がいるが縁戚かどうか。新潟県北蒲原郡松浦村浦（新発田市浦）の人。

青野久四郎

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っている。だが、明くる年にはカルメリナの小川農場は小川富一郎の死亡で崩壊してしまう。百人を導入する計画だったが、中断して、実際に呼び寄せられたのは七十五人だった。それが、わずか数カ月で仕事をなくし放浪することになる。その後、青野はカマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のモロンに落ち着いている。といつてもセントラルには仕事はなかっただろうから何をしていたのか、うまくいっても、エラーード販売ぐらいしかできなかったと思う。二年後の一九年に死亡している。渡航時は二十二歳だが、戸主だったから早く帰郷するつもりだったにちがいない。郷里の家はどうなったか、旅券申請に記された戸籍は現存しない。新潟県北蒲原郡中浦村荒町（新発田市荒

町)の人。

木村喜一

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っている。カルメリナ後のことはわからないが、二四年に帰郷している。戸主で、渡航時には三十二歳だったから四十歳になっていただろう。妻子を郷里に残していたにちがいない。キューバで景気がよかつたのはバカ・ゴルダ(太った雌牛)と呼ばれた一九二〇年のごく一時期だけで、その後は戦後まで回復することがなかつたから、いい時期に見切りをつけたと思う。新潟県北蒲原郡中浦村荒町(新発田市荒町)の人。

五十嵐八百蔵

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っている。やはりカルメリナ以後のことはわからない。十八歳での渡航だが継嗣だったから早い時期に帰郷しているだろう。新潟県北蒲原郡松浦村浦(新発田市浦)の人。渡航時の所番地は現存しているから御子孫が続いていると思う。

渡辺鶴蔵

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っているが、やはりその後のことがわからない。三十一歳で、養子に入っているから妻子を残していただろう。早い時期に帰郷していると思う。新潟県北蒲原郡松浦村八幡（新発田市八幡）の人。

横山林次郎

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っている。二十八歳だった。小川農場崩壊後のあしどりはわからないが、収容以前に帰郷している。新潟県北蒲原郡笹岡村次郎丸（北蒲原郡笹神村次郎丸）の人。

横山福蔵

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っている。二十六歳だった。カルメリナ後のことはわからないが、横山林次郎とは同村だから、収容前に帰郷していると思う。新潟県北蒲原郡笹岡村次郎丸（北蒲原郡笹神村次郎丸）の人。

渡辺重治

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っている。二十六歳だった。二二年に妻のハツノを呼び寄せていること以外、詳しくわからない。収容前に帰郷していると思う。新潟県北蒲原郡笹岡村上山田（阿賀野市上山田）の人。

齋藤弥久太

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っている。二十三歳だった。小川農場崩壊後は各地を転々としたあと、ラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニコに落ち着きセントラルでコシネロをしていた。二〇年に坂田チジユが岩崎庄平と結婚するために呼び寄せられたが、結婚を拒否。その後、労働者監督をしていた山中福松の仲介で齋藤と結婚している。このとき齋藤は坂田のキューバへの渡航費を岩崎に支払っている。悪く解釈すれば、金銭で妻を買うということになるが、こういうけしきも移民社会にはよく見られた。その後のことはわからないが、チジユは戦前に亡くなっていると思う。また、長男も自殺していて、齋藤は収容から釈放後はシエゴ・デ・アビラにおいて、革命後の六八年七月にシエンフエゴスで死亡しているが、日にちはわからない。新潟県北蒲原郡米倉村米倉（新発田市

米倉)の人。第六回收容で三階にいた。

齋藤精五郎

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っている。二十四歳だった。小川農場崩壊後は近くのシエンフエゴスに移っている。收容は第六回グループでプレシディオでは四階にいた。釈放後もシエンフエゴスにいて、戸主だったが、一度も帰郷することなく、革命前の五八年八月三十一日に死亡している。新潟県北蒲原郡米倉村米倉(新発田市米倉)の人。移民といえば「次三男」という印象が強いが、小川移民七十五人中、戸主、長男は二十五人いる。

佐藤宏太

齋藤精五郎と同村で、小川移民十二月組の一人。一九一六年十二月五日にハバナに入っているが、小川農場崩壊後はどうしたかわからない。二十四歳での渡航で、継嗣だったから早い時期に帰郷していると思う。新潟県北蒲原郡米倉村米倉(新発田市米倉)の人。

星野留吉

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っている。継嗣で二十八歳だったから妻子を置いての渡航だっただろう。小川農場崩壊後はどうしたかわからないが、早い時期に帰郷していると思う。新潟県北蒲原郡川東村大友（新発田市大友）の人。小川移民七十五人のなかで、戸主あるいは継嗣だった者は二十五人、うち、キューバに残り骨を埋めたのは八人で、渡航時の最高齢は加藤信造の三十八歳だった。

荒井喜四郎

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っている。二十四歳だった。小川農場崩壊後はシエンフェゴスに移ったのか、ごく早い時期に同地で死亡していて、ハバナの慰霊堂の第二号セルに位牌が残っている。新潟県北蒲原郡川東村敦賀（新発田市敦賀）の人。養子に入った継嗣だったが、錦衣の帰郷どころか、身一つでさえ戻れなかった。

松田鷹松

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っている。二十五歳だっ

た。小川農場崩壊後はカマグエイ(シエゴ・デ・アビラ)のセントラル・クナグア(Cunagua)に移つたのだろう、二五年に同地で死亡している。新潟県北蒲原郡川東村下羽津(新発田市下羽津)の人。同じ下羽津の宮村明治、石井兵蔵は帰郷している。

石井兵蔵

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っているが、小川農場崩壊後は早い時期に帰郷していると思う。三十歳で戸主だった。新潟県北蒲原郡川東村下羽津(新発田市下羽津)の人。

井上留次郎

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っている。二十三歳だった。小川農場崩壊のあとは、ラス・ビジャス(サンクティ・スピリトゥス)のハティボニコや西のハグェヤル(Jagueyal)のセントラルを転々としたあと、カマグエイ(シエゴ・デ・アビラ)のモロン(Moron)の郊外で農業をはじめた。二一年に郷里から妻キクノを呼び寄せ、玉蜀黍や豆類、野菜などの栽培を続けたが、たいした貯えはできなかった。日米戦争がはじまると、ほかの日本人同様、イスラ・デ・ピノスのプリンシオ・モデロに収容されたが、長男敏雄(フラン

シスコ)も、キューバ市民権を持った二世だったにもかかわらずいつしよに収容されている。そうした二世はかれを含めて男子九人、女子二人の十一人いた。敏雄は、その後、四四年十月八日の明け方、喉元を絞るような叫声を發したきり死亡している。心臓麻痺だった。収容生活も一年半、体格のいい青年だったが、精神的に苦悩が積もり積もっていたのだろう。戦後は一家で本島西部のピナル・デル・リオのコンソラシオンに移ってハバナ市場向けの野菜の栽培をはじめた。そうして順調にいくかに見えた矢先、脳溢血に倒れて半身不随になったため農業を諦め、シエゴ・デ・アピラに戻り、結婚した長女夫婦といっしよに暮らしていた。一九八〇年三月八日に死亡。新潟県北蒲原郡川東村板山(新発田市板山)の人。

石山寿蔵

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っている。二十三歳だった。小川農場崩壊後は早くに帰郷していると思う。新潟県北蒲原郡川東村板山(新発田市板山)の人。同じ板山の人に、佐藤定太郎、井上留次郎、井上兵之丈がいるが、井上留次郎以外は帰郷している。

井上兵之丈

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っている。二十二歳だった。小川農場崩壊後は、やはり早くに帰郷しているだろう。郷里に戸籍が続いている。新潟県北蒲原郡川東村板山（新発田市板山）の人。

石井菊次郎

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っている。十八歳だった。小川農場崩壊後は、やはり早くに帰郷しているだろう。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。小川移民七十五人のなかで、五十公野村の人は二十人と一番多い。うち十三人が収容までに帰郷している。

浅香徳治

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っている。翌年には小川農場が崩壊、七十五人のうち四十四人が戦前も早い時期に帰郷している。浅香もその一人。二十九歳での渡航で、長男だったから郷里には妻子を残していただろう、早い時期に帰郷していると

思う。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。

増田倉蔵

増田三吉の次男で寅造の弟。小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っている。二十一歳での渡航だった。その後のことはわからないが、二二年にカナダ經由で帰郷している。兄の寅造は、榎本惺の呼び寄せで、二一年に榎本移民としてコンスタンシアの少し西のオルキタスの砂糖耕地に入っている。しかし、榎本農場もすぐに崩壊したため、たぶん二人いつしよの帰郷だったと思う。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。

島津甚三郎

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っているが、やはりその後のことはわからない。渡航時は十八歳で、早い時期に帰郷していると思う。同郷には島津岩吉、島津二郎、島津三一郎、島津三郎がいる。縁戚と思うが詳しくわからない。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。

宮村留吉

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っている。二十四歳だった。小川農場崩壊のあとは少し東のシエンフエゴスに移りハルディネロをしたあと、花づくりをしていた。収容は第六回で四階にいたが、収容中の四四年十月十五日にプレシディオで死亡している。キューバ婦人と結婚して一男一女がいた。長女は八〇年代半ばに母親を伴い一家でアメリカに亡命、長男は現在もハバナ近郊で暮らしている。新潟県北蒲原郡五十公野村江口（新発田市江口）の人。

馬場亮平

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っている。十九歳だった。小川農場崩壊後は本島各地のセントラルを転々としたあとカマグエイにいたらしいが、詳しいことはわからない。収容は第六回で三階にいたが、釈放後の四九年にカマグエイの病院で死亡している。収容中に悪くしたか、結核だったと思う。新潟県北蒲原郡五十公野村江口（新発田市江口）の人。

遠藤八十太

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っている。二十七歳だった。小川農場崩壊のあとは、カマグエイ（シエゴ・デ・アビラ）のプンタ・アレグレ（Punta Alegre）で理髪店を開業。二六年に一時帰郷して結婚し、妻スエを伴って再渡航している。収容時には、最初は囚人理髪師が収容棟の各階にキューバ人が一人ずつ四人配置されていたが、四五年四月四日からは、遠藤のほか、井上徳太郎、伊藤多次郎、田中保、竹本徳一、伊波蒲一、石川善俊の六人が、政府からの月五ペソの手当をもらって仲間の理髪にあたっていた。収容では独身者は資産をなくしているが、遠藤の場合は妻のスエが店を守っていたから、釈放後はすぐに仕事を続けられたが、それも革命によつて接収されている。六六年九月七日に死亡。新潟県北蒲原郡五十公野村江口（新発田市江口）の人。

熊倉敬一郎

小川移民十二月組の一人で、一九一六年十二月五日にハバナに入っている。二十四歳だった。ただ、その後のことがわからない。やはり早い時期に帰郷していると思う。新潟県北蒲原郡五十公野村上新保（新発田市上新保）の人。

石田勸助

一九一六年に入っていること以外、残念だが、何もわからない。大分県の人。

山本竹一

大陸殖民第十回メキシコ移民で一九〇七年四月二十六日に横浜を発ち、南部ベラクルス州のオアハケニヤ耕地に入っている。二十四歳だった。この第十回移民で大陸殖民によるメキシコ移民は終わっている。オアハケニヤの製糖工場はアメリカ資本の近代設備を整えたセントラルで、二年の契約を終えたあとも周辺に住み、仲間を組んで共同でセントラルから土地を借り砂糖耕地を経営する者もけっこういた。小川富一郎もそうした一人だった。それが続いている。しばらく成功者も出たかもしれない。だが、革命の動乱がそれを阻んでいる。ゲリラが出没して掠奪が繰り返されやっつけなくなり、ある者は帰郷、ある者はアメリカをめざした。といつてもハワイ、カナダ、メキシコからのアメリカへの転航は禁止されていたから入国はむずかしく、一時のところと目を向けたのがキューバだった。ちょうど砂糖景気に沸いていたときで、アメリカドルがそのまま流通していた。一五年前後にメキシコからキューバに入っている日本人はほぼすべてが大陸殖民か東洋移民合資、熊本移民合資による移民と見ていい。山本もそう

した一人で、一六年にキューバに入っているが、二〇年に帰郷している。一九一〇年代半ばからはじまった砂糖景気が翳りを見せはじめた頃だった。いい選択をしたと思う。山口県佐波郡出雲村（山口市徳地）の人。

赤間政

一九一六年十一月二十五日付で神奈川県庁から移民旅券が下りている。二十八歳で、渡航目的は「工業」となっている。キューバ入国は確認できていないが、名簿に加えている。宮城県名取郡長町郡山（仙台市太白区长町）の人。

北野惣吉

一九一七年三月にペルーから転航している。その後のことはあまりわからないが、収容が第六回グループだから、収容時には本島にいただろう。ハバナの南、カリブ側のバタバノにいて漁師をしていたのではないか。釈放後もバタバノにいて、五五年三月十日にハバナの病院で死亡している。出身も山口県としかわからない。

南善太郎

一九一四年にペルーのチクリン耕地に入ったが、すぐに離れ、アメリカに密入国するために仲間の中野莞一とパナマに移るが、そこで砂糖景気に沸くキューバの好況を耳にしたのだから、一七年五月三日にハバナに入っている。二人いつしよに各地を転々としたあと、カマグエイに落ち着き、モロン (Mron) のセントラルで食料品店を経営していた。店はけっこう繁盛し、中野はそれなりの貯えを持って帰郷、郷里で事業をはじめて成功したようで、南にも、いつしよにやらないかと誘いが来たが、残留を決め、セントラルの砂糖耕地で働いていた。刈り取った砂糖黍の重さを量る部署にいたらしい。その後、砂糖耕地の監督になり、そのかたわら、大型の牛車を三台購入し、砂糖黍の運搬業をはじめて成功した。真面目な人で、ずいぶん周りから慕われたらしい。二四年に郷里から妻イサを迎えている。第六回収容で、釈放後はカマグエイのプエルタ・フカロ (Puerta Jucaro) にいたが、イサは六六年に、南は七五年六月二十二日に死亡。二男三女がいる。福井県の人。収容は第六回で三階にいた。

市川喜太郎

一九〇八年頃にペルーに移民し、キューバに転航しているが、何年だったかわからない。一七

年に、妻はしのと、甥の勇之進と金藏を連れて再渡航している。そのときは三十歳だった。ハバナの南西のバウタ (Bauta) に土地を借りて野菜づくりをはじめ、車を使って近隣の町に売り歩いてきた。それでまとまった貯えができたのか、戦前に、はしのと金藏といっしょに帰郷したらしいが、はつきりしない。勇之進は一人残っている。三重県鈴鹿郡庄野村庄野（鈴鹿市庄野町）の人。

市川はしの

市川喜太郎の妻。一九一七年に夫といっしょにキューバに入っている。三重県鈴鹿郡庄野村庄野（鈴鹿市庄野町）の人。

市川勇之進

一九一七年に叔父の市川喜太郎に連れられキューバに入り、ハバナ南西のバウタで喜太郎家族といっしょに野菜づくりをしていた。その後、喜太郎家族は戦前に帰郷したが、一人残り、バウタで時計の修理店を開いている。小学校の教師をしていたキューバ婦人と結婚。第六回グループで収容されたあと、釈放後もバウタにいたと思うが、革命で政府に店舗を接収されたからか、マタンサスのオジョ・コロラド (Hoyo Colorado) に移り、その後、一家でアメリカに亡

命している。三重県鈴鹿郡庄野村庄野（鈴鹿市庄野町）の人。

市川金蔵

市川喜太郎の甥。一九一七年に再渡航の喜太郎に連れられキューバに入り、喜太郎のもとで野菜づくりを手伝っていたが、収容前に喜太郎夫婦といっしょに帰郷している。三重県鈴鹿郡石薬師村石薬師（鈴鹿市石薬師町）の人。

伊東進

一九一七年一月十八日にハバナに入っている。たしかなところはわからないが、いろいろと伝聞豊かな人で、日本では大学を出ていたらしい。女性との間に何か問題があったらしく、父親から、しばらく海外に出るようないわれ、キューバに流れてきた。仕事にも就かず、毎月、父親から仕送りを受けて暮らしていた。それが、父親が死んだのかどうか、仕送りがなくなったため働かざるを得ず、知人に紹介されて、オリエンテ（オルギン）のタカホ（Tacajo）のセントラルホテルの支配人として入っている。そのかたわら、セントラルのハルディネロの監督もしていたらしい。収容は第二回だから、それなりに注目されていた人物で、収容中は自治会の委員もしていない。釈放後はタカホに戻っているが、収容生活の疲れが出たの

か、体を悪くして、五五年十月十八日に死亡。生涯、独身を通していた。大分県の人だが、それ以上のことはわからない。

瀬在藤治

長野県上田の人。上田中学を卒業したあと、一時、樺太（サハリン）に渡って小学校の教師をしていたが、大平慶太郎の呼び寄せで一九一七年一月十八日にハバナに入っている。大平は、ごく初期に事業目的でハバナに入り、アバナ・ビエハに店舗を構え、日本からの輸入雑貨を販売して成功していた。その呼び寄せで入った者はけっこういて、当時、キューバに立ち寄った日本の文人や財界人の記録にもよく登場する。商売柄、入管との関係も深く、のちに海外興業のキューバでの受け入れ代理人となって、二四年から二年間、十八回にわたって続いた、同社によるトリニダーの砂糖耕地への日本人移民の導入の仲介をしていた。ただ、耕地での労働条件や情況がひどく、ほとんどが数週間、数カ月で逃亡し、キューバ各地を放浪することになった。そんなことから日本人の間での大平評も、善悪、きれいに二つに分かれる。瀬在は、大平の紹介でカماغエイ（シエゴ・デ・アビラ）のハグェヤル（Jaguayal）のセントラルに入った。大平の力だったのか、労働者監督とホテルの支配人を兼ねる仕事で、住まいもホテルのスイーツを与えられていた。日本人もたくさん働いていて、日本人には専用の宿舎が与えられ、コッ

ク付きの食堂もあったという。その後、一三年に一時帰郷して結婚、妻を同行、横浜を出たが、パナマに入る直前に妻が咯血、そのまま妻はパナマから日本に戻り、四年後に死亡している。そして三〇年に千恵子と再婚、暮れには長男敏夫が誕生している。しかし、三三年にセントラルが閉鎖されたため、モロンのセントラルに移った。当時のモロンのセントラルはキューバ最大といわれた近代的なセントラルで、そこでハルディネロの監督をしていた。そして日米戦争がはじまる。日本人会の役員をしていたためか、ハバナ以外では最初のグループの一人として逮捕され、ハバナに送られ、カステイジョ・デル・プリンシペに一時拘留されたあとイスラのプレシディオ・モデロに収容されている。カステイジョは政治犯の刑務所として使われていた。釈放後は、多くの日本人同様、モロンに戻っても仕事が無かった。ようやくカマグエイのベルティエンテス (Vertientes) の砂糖耕地に仕事を見つけ、単身、出かけた。馬を駆ってキューバ人労働者を監視する労働監督で、人道的に辛かったのだろう、体を悪くして半年でモロンに戻り、一時、街の花弁店に勤めたあと、長男敏夫のすすめで自宅を増築して写真店をはじめた。敏夫は小さい頃から写真が好きで撮影はもちろん現像にも詳しくかった。モロンは大きな町だったが、写真店がなかったので繁盛したらしい。ただ、それもカストロ革命で接收され、すべてが終わっている。六九年一月二十六日にモロンで死亡。詳しいことは妻の千恵子がその手記に遺している。革命政府による接収にはいろんなかたががあったが、瀬在一家の場合



日系人連絡会世話人会議 (1961.11.5)、前列左端

はこうだった。ある日、政府から指令を受けたというキューバ大家族がやって来て、家に住みはじめ。もちろん、店舗は取り上げられ、その一家が代わって支配人になり、瀬在一家は雇用者になる。つまり、突然、他人が勝手に押し入り、店を占拠して住みはじめたのだった。社会主義の歴史によく登場する言葉だが、これが「接収」の人間的なけしきだった。

榊原マサ

榊原利一の妻。呼び寄せで、一九一七年一月十八日にハバナに入っている。日米戦争直前に子どもたちを連れて帰郷したまま、戦後も戻っていない。愛知の人。

中野新蔵

一九〇八年にペルーに移民。一七年二月三日にハバナに入っている。シエゴ・デ・アビラで理髪店を開いて、二一年に妻キサと弟の音吉を呼び寄せている。音吉は戦前に帰郷。一家は戦後もシエゴ・デ・アビラに暮らして、中野は六四年八月二十二日に死亡、その後、キサはアメリカに亡命していた二女を頼って、残る家族とアメリカに亡命している。滋賀県伊香郡杉野村金居原（長浜市木之本町金居原）の人。中野は戦前戦後を通じて理髪業をしていたから、一九三〇年の理髪師資格試験には合格したのだろう。収容は第六回グループで二階にいた。

藤代健一

一九一七年にメキシコからキューバに入り、すぐにオリエンテに行っている。セントラル・マルカネで働いていたが、急病でサンチアゴ・デ・クーバの病院に運ばれて入院。退院後、そのとき知り合ったキューバ人看護婦と結婚し、同地で雑貨店を開いていた。しかし、病気が再発して二五年五月十七日に死亡している。結核ではなかったか。二男とMariaという娘がいた。千葉県の人。

吉猪部芦

一九一七年にメキシコから転航しているが、一九年に息子の芦部安夫、二〇年に甥の小林百輝を呼び寄せていること以外わからない。キューバで死亡している形跡がないから、戦前も早い時期に帰郷していると思う。長野県上伊那郡飯島村大字田切（上伊那郡飯島町田切）の人。

一 兎野中

一九一四年にペルーのチクリン耕地に入ったが、すぐに離れ、アメリカに密入国するために南善太郎とパナマに移るが、そこで砂糖景気に沸くキューバの好況を耳にしたらしい。一七年五月三日にハバナに入っている。二人いっしょに各地を転々としたあと、カマグエイに落ち着き、モロン (Moron) のセントラルで食料品店を経営していた。店はけっこう繁盛し、中野はそれなりの貯えを持つて戦前に帰郷している。郷里で事業をはじめうまくいったようで、南にも、いっしょにやらないかと誘っているが、南はキューバを出なかつた。山口の人。

兎玉児

この人は船乗りだつた。一九一七年にハバナで船を下り、イスラ・デ・ピノスに渡つて農業

をはじめた。収容は第五回で二階にいた。独身だったか、収容中に土地を守ってくれる者がなく、農地をなくしたのだろうか、釈放後はピナル・デル・リオのフィンカ・エラドウラ (Finca Herradura) に移っている。ぼくが訪ねた頃はほかの日本人同様、年金暮らしをしていて、八七年一月二十七日に死亡している。一八九五年十月十五日の生まれだから九十一歳だったことになる。広島県豊田郡沼田東村大字納所 (三原市沼田東町納所) の人。ピナル・デル・リオはイスラと土質がよく似ていて、農業のやり方も同じなうえ、イスラよりもハバナやニューヨーク市場に近かったから、イスラで野菜づくりをしていた日本人には、戦後はピナルに移る者がけっこういた。キューバの地名に、フィンカ (finca) という言葉がよく登場するが、農場とか、耕作地が開けている村、地区というくらいの意味。

中浜仙太郎

一九一七年にハバナで脱船している。児玉菊夫といっしょだったのだろうか。イスラに渡っていて、三一年二月七日にイスラで死亡している。和歌山の人。

神崎章

児玉菊夫や中浜仙太郎同様、一九一七年にハバナで脱船している。児玉や中浜はイスラに

渡っているが、この人はハバナの西、バナスのセントラルでハルディネロをしていたと思う。二六年に弟の武雄を呼び寄せていて、武雄もハルディネロをしていた。収容は第六回で四階にいて、釈放後はピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移ったらしく、四九年にコンソラシオンで死亡している。たぶん野菜づくりをしていたと思う。広島の人。

田島庄三郎

田島又兵衛と戸籍が同じで十歳年下だから、弟でなければ甥だろう。一九一七年五月二十五日付けで神奈川県庁から旅券が下付されていて、キューバに入っていると思うが確証がない。十六歳だった。静岡県田方郡三島町（三島市）の人。

林光逸

一九一三年に大平慶太郎の呼び寄せでハバナに入った林磯吉の長男。一七年に十五歳で父に呼び寄せられ、父と同様、ハバナのオビスポ街の大平商店で竹細工職人として働いていた。その後、三〇年に、砂糖経済悪化の煽りを受けて大平商店が閉店したため、加藤英一のクリーニング店や榊原利一の日本商店で働いていたが、三七年頃に帰郷している。兵庫県神戸市葺合琴緒町（神戸市中央区琴ノ緒町）の人。

八木源一郎

一九一七年九月二十一日に神奈川県庁から旅券が下付されていて、そのままキューバに入っていると思うが確証はない。二十三歳だった。店員として呼び寄せられているから、大平慶太郎が榊原利一の呼び寄せだったと思う。埼玉県入間郡東松山村（東松山市）の人。

中村直八

一九一七年九月二十一日に神奈川県庁から旅券が下付されていて、キューバに入っていると思うが確証はない。二十三歳で、同郷の人に柴田新太郎がいるから、その呼び寄せだったのかもしれない。ごく早い時期に帰郷していると思う。神奈川県足柄上郡松田町松田惣領の人で、地番は現在もそのまま、御殿場線の駅に近く、縁者かどうかわからないが、不動産会社のビルが建っている。

香川静代

香川吾一の妻で、一九一八年に呼び寄せられている。二十二歳だった。夫はラス・ビジャス（シエンフェゴス）のビオレタで野菜づくりをして、八百屋も開いていた。子どもは五人いて、



1982年には最高齢だった香川静代

芳枝、武茂、渉の上三人は郷里の実家に預けていたが、二七年に武茂と渉、二九年に芳枝を呼び寄せている。また、あとの豊子と茂の二人も、郷里に戻って出産して預けたままにしていたが、その後、三五年に呼び寄せている。そのため、子どもでありながら五人とも移民史上は一世扱いになっている。さらに、キューバで静雄、節子、時子の一男二女をもうけている。

七一年の夫の死後はモロンに移り、ぼくが訪ねたときは八十八歳で、最高齢者だった。お国柄もあるが、真夏というのにきちんと革靴を履き、少し背中丸くなりかけてはいたが矍鑠として、声も大きくよく通り、フストさんや芳枝さんに、あれこれ、忙しく指示を飛ばしていた。訪ねたのは昼過ぎで、孫や曾孫までいっしょの団欒に時間を忘れて、その夜も次の日も泊めて

いただいている。九〇年九月二十五日にモロンで死亡、九十六歳だった。広島県安佐北区可部（広島市安佐北区可部）の人。いまでも忘れられない一人である。

志水エモ

志水三平の妻で、一九一七年十一月二十七日に神奈川県庁から旅券が下付されていて、キューバに入っていると思うが、たしかでない。二十六歳だった。志水三平は日本から直接キューバに入っていないから、ペルーあるいはメキシコからの転航かもしれない。あるいは吉川勇平の縁戚の可能性もある。熊本県玉名郡梅林村（玉名市）の人。

植原トク

志水エモ同様、一九一七年十一月二十七日に神奈川県庁から旅券が下付されていて、キューバに入っていると思うが、その後のことがわからない。二十五歳だった。熊本県玉名郡鍋村扇崎（玉名市岱明町扇崎）の人。

小川千代蔵

一九一七年にキューバに入っているが、詳しくわからない。小川金子の兄かもしれない。熊

本県の人。

島梅吉

一九〇七年にペルーに渡つたあと、一七年に妻ナカといつしよにキューバに転航し、カマダグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のモロンで理髪店を開いていた。それを同郷の山島庄吉に譲渡したらしい。その後のことはわからないが、戦前も早い時期にキューバを離れていると思う。静岡県の人。

島ナカ

島梅吉の妻で、一九一七年に夫といつしよにペルーから転航している。静岡県の人。

藤重一則

大陸殖民第八回メキシコ移民で一九〇六年十月二十五日に神戸を発ち、南部ベラクルス州オアハケニヤの砂糖耕地に入っている。十八歳だった。二年の契約を終えたあとはオアハケニヤ周辺で、仲間といつしよだったかどうか、農業をしていたと思う。そして妻も呼び寄せたのだろう。だが、革命の動乱がはじまり、ゲリラの襲撃が続いてメキシコを断念したのだろう、一七

年に夫人といっしょにキューバに入っている。その後のことは詳しくわからないが、ラス・ビジャスカカマグエイあたりにいたのではないか。二四年から二六年にかけて計十八回にわたって三百八十人をラス・ビジャスのトリニダーの砂糖耕地に送り込んだ海外興業の現地監督をしていたと思う。「藤重」という人物が監督、「仕事頭」をしていたという記録が、トリニダーを逃亡した一人の証言として残っているし、原田茂作も「藤重」という監督がいたと教えてくれた。山口県玖珂郡通津村（岩国市通津）の人。三〇年前後にはともに帰郷していると思う。

藤重一則妻

夫の藤重一則といっしょに一九一七年に入っているが、名前がわからない。山口県玖珂郡通津村（岩国市通津）の人。

恵比須丈夫

一九一七年にハバナで脱船しているが、その後、ごく早い時期にハバナで死亡していること以外、まったくわからない。慰霊堂の第二号セルに位牌が残っている。和歌山の人。

—安子之作

一八八八年七月十一日生まれで、いつキューバに入ったのかわからないが、一九二二年にメキシコ經由で帰郷している。熊本県球磨郡岡原村（球磨郡あさぎり町岡原）の人。一九〇七年のメキシコのコリマ移民に熊本県の一安という人がいる。

小竹法経

一八八七年十一月二十三日生まれで、いつキューバに入ったのかわからないが、一九二二年に普通旅券でアメリカに出国している。商業関係者だったかもしれないが移民の一人として名簿に加えた。茨城県水戸市大字上市馬口労町（水戸市末広町）の人。

茂木恒三郎

一九一八年一月十八日にハバナに入っている。収容は第三回グループだから本島にいたと思う。戦後はハバナにいたのか、五五年九月六日にハバナで死亡している。秋田県の人。

糸数宗重

一九一八年一月十九日に兄宗吉の呼び寄せでメキシコから転航している。二十一歳だった。兄と山入端萬栄の三人でカマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のクナグアに移り、セントラルの砂糖黍農場で働きはじめた。宗吉の項でも述べたが、日本人も五十人前後いて、最初は、日給二ペソ五十センチタボスから三ペソで雑草刈りや砂糖黍の植え付けをしていたが、その後、下請けで数十町歩にわたる農場経営をはじめ、二人でかなりの貯えができたらしい、宗吉は二年に帰郷。宗重もあとを追う予定だったが、二九年からの世界恐慌の煽りを受けて経済が混乱、モラトリアムが発令され銀行預金が凍結されたため帰れなくなり、一時凌ぎにとロテリアの販売をはじめた。しかし、慣れない仕事で、キューバ人仲間に金を持ち逃げされたり、強盗に遭ったりして失敗。二七年に郷里から妻澄を迎えているが三年で先立たれ、三三年に稔を呼び寄せて再婚。ラス・ビジャス（シエンフェゴス）のピオレタで青果店を開いていたが四〇年二月三日に死亡している。沖縄県国頭郡地村田井等（名護市田井等）の人。夫人の稔には八二年にお会いしたことがあるが、八七年にハバナで亡くなっている。糸数宗信の叔父。

森川誠一

一九一八年三月十四日にハバナに入っている。各地のセントラルを転々としていたが、二〇年代に入って不況で仕事がなくなつたため、カマグエイのフロリダ (Florida) で理髪店を開業した。キューバへは呼び寄せだったが、だれの呼び寄せだったのかわからない。その後、日本人排斥法の一つとして、二九年に理髪試験法が公布され、三〇年に全土で理髪師資格試験が実施されているが、不合格だったのか、自転車の修理販売に転業。日本から自転車や部品を輸入して繁盛した。三六年に妻アヤコを呼び寄せ、翌年、寛 (Rogelio) が生まれている。ただ、アヤコは五三年に単身帰郷。森川は寛と二人で暮らし、八〇年十月十一日に死亡している。山口県玖珂郡川下村向今津 (岩国市今津町) の人。収容は第六回で三階にいた。

比嘉吉村

一九一八年三月二十日付けで神奈川県庁から旅券が下付されていて、比嘉吉助の長男として父の呼び寄せでキューバに入っている。二十一歳だった。その後、二二年に弟の吉次郎をパナマから呼び寄せている。吉次郎は早い時期にシエゴ・デ・アビラで死亡しているから、吉村もそのあたりにいたのではないか。沖縄県国頭郡名護村名護 (名護市名護) の人。父の吉助は二二

年以前に帰郷していると思う。

小川金子

兄の呼び寄せで一九一八年に十八歳でキューバに入っているが詳しくわからない。「金子」と女性名だが、旅券には市太郎の「次男」となっている。兄の呼び寄せだったというから、兄とは小川千代蔵ではないか。熊本県菊池郡泗水村豊水（菊池市泗水町豊水）の人。

田所彦次

大平慶太郎の呼び寄せで一九一八年に二十歳でキューバに入っているが、その後どうしたかわからない。高知県高岡郡北原村（土佐市）の人。

古田恒重

一九一八年にキューバに入っていて、二九年に妻ハルを呼び寄せているが、どこにいたのか、何をしていたのか、まったくわからない。長野県東筑摩郡宗賀村（塩尻市宗賀）の人。「Furuta [Tsuneo]」という人が慰霊堂建立の浄財者名簿に載っている。もしこの人と同一人であれば、戦後、ハバナにいたことになる。

大田三郎

一九一八年にキューバに入り、その後、早い時期にハバナで死亡していること以外、まったくわからない。慰霊堂の第二号セルに位牌が残っている。石川県の人。

水野国穂

一九一八年にキューバに入っていて、収容時は第四回グループで収容されているから、本島のどこかにいたのだろうが、よくわからない。北海道の人。メキシコの榎本移民だった可能性がある。

紅野有明

一九一八年に夫人といっしょにキューバに入っている。その後、マタンサスのマグダレナ(Magdalena)にいたが、収容以前に夫婦で帰郷している。静岡県田方郡中狩野村(伊豆市)の人。紅野市作といって静岡県田方郡中狩野村青羽根(伊豆市青羽根)の人で、大陸殖民第六回メキシコ移民として一九〇六年二月二十日に横浜を発ち、南部ベラクルス州のオアハケニヤに入っている人がいるが、この人の縁戚で、呼び寄せられてメキシコにいたのではないかと思う。

紅野有明妻

夫の紅野有明といっしょに一九一八年に入っているが、名前がわからない。収容以前に帰郷している。静岡県田方郡中狩野村（伊豆市）の人。

菅井イワノ

菅井秀二の妻。二十七歳で、一九一九年に呼び寄せられているが、いっしょに早い時期に帰郷したと思う。新潟県北蒲原郡笹岡村上坂町（阿賀野市上坂町）の人。

山田梅蔵

一九一九年にパナマから転航している。パナマでは理髪師をしていた。ただ、その後のことがわからない。早い時期にキューバを離れていると思う。静岡県安倍郡長田村石部（静岡市駿河区）の人。

永井秀吉

一九一九年にペルーに移民したが、いくらしなで耕地を逃亡、その年のうちにキューバ



日本人会第一回支部長会議（1932.5.22）、最後列左から五人目が永井秀吉

に入っている。そのままイスラに渡って農業をはじめ、三〇年に妻のハルコを呼び寄せている。ハルコは二十五歳だった。アメリカ市場向けに胡瓜や西瓜、ピーマンを栽培して、儉しい暮らしを続けたのだろう。まとまった貯えを手に収容前に帰郷している。広島県安佐郡長束村（広島市安佐南区長束）の人。山陽本線の横川駅から北に三キロほどのところで、原爆の被害もなく、八〇年代には元気で暮らしていた。

村中芳蔵

一九一九年十一月十四日にハバナに入っていて、そのままハバナにいたのではないか。二八年に妻シゲを呼び寄せているが、その後、いくらしもないでハバナで死亡し

ている。シゲは帰郷しただろう。山口県玖珂郡通津村長野（岩国市通津）の人。

芦部安夫

一九二〇年に十八歳でキューバに入っているが、その後どうしたか、詳しくわからない。芦部猪之吉の息子だろう。長野県上伊那郡飯島村（上伊那郡飯島町飯島）の人。

湊永吉

明治半ばの生まれだろう。最初はアメリカの西海岸に渡つたらしいが、一時帰国したあと、アメリカには移民制限で入国できなくなり、どこをどうたどつたか、一九一九年にキューバに入り、そのままイスラに移っている。イスラでのごく初期の農業者だった。ピーマンづくりに成功して、まとまった貯えができたのだろう、二一年に郷里から孫の雪雄を呼び寄せ、あとを託して二六年に帰郷している。広島市安佐南区安古町上安字萩原（広島市安佐南区上安字萩原）の人。息子の徳市（雪雄の父）は一七年にペルーに移民して、そのままペルーで死亡している。

浦野十平

大陸殖民第十回メキシコ移民で、一九〇七年四月二十六日に横浜を発ち、メキシコに入つて

いる。出発のときの契約では中部コリマ州のコリマ鉄道の建設工事に入る予定だったが、工事が完工していたため、オアハケニヤ耕地に入っている。三十歳だったと思う。その後のことはわからないが、一九年にキューバに転航し、二五年に婿養子の初蔵を呼び寄せている。それ以外、まったくわからない。熊本県玉名郡鍋村鍋（玉名郡岱明町鍋）の人。浦野豊記は縁戚だろうか。

内野和市

一九一九年にキューバに入り、三八年に妻キミエを呼び寄せている。収容は第六回グループだから本島にいたことはたしかで、戦後、五四年二月十日にカマグエイで死亡しているほか、詳しくわからない。福岡県浮羽郡船越村船越（久留米市田主丸町船越）の人。大陸殖民によるオアハケニヤ移民か、東洋移民合資のラス・エスペランサス移民か、いずれにしてもメキシコからの転航ではないかと思う。

佐藤質郎

一九一九年にキューバに入っている。メキシコあるいはペルーからの転航だったかもしれない。職業はわからないが、カマグエイのセントラル・ハロヌ（Jaronu）にいた。その後、一時

帰郷し、二五年に海外興業の第九回移民と同船で再渡航。その同航者の一人だった原田茂作（福岡県出身）は、移民地のトリニダの砂糖耕地を逃亡したあと、セントラル・ハロヌの佐藤のもとに身を寄せているが、佐藤のその後のことがわからない。福島県桑折の人。名前はこれまで「七郎」としてきたが、紺野滋氏の指摘で、名前は「質郎」、ペルーからの転航で、戦前に帰郷していることがわかった。佐藤二郎の兄らしい。

門司時雄

一九一九年にキューバに入り、ごく早い時期にハバナで死亡している。慰霊堂の第一号セルに位牌がある。福岡県の人。

岩田繁松

一九一九年にキューバに入っている。その後、一時帰郷したのか、二七年に再渡航している。収容は第五回グループだから、収容時にはイスラにいたのだろう。戦後もイスラのヌエバ・ヘロナにいて五八年に死亡している。石川県の人。

佐藤信一郎

一九一九年に入っていて、二一年に息子の政市を呼び寄せているが、その後のことがわからない。佐藤賢郎と関係があるかもしれない。福島県の人。メキシコあるいはペルーからの転航の可能性もある。

新保孝太

一九二〇年五月二十一日に斎藤弥一の妻で妹の斎藤ヨイといっしょにメキシコから転航している。たぶん弥一のいたカマグエイのシエゴ・デ・アビラに向かったと思うが、その後、ハバナに戻ったのか、翌二一年十一月二十八日、ハバナで死亡している。新潟県北蒲原郡中浦村加治万代（新発田市加治万代）の人。

佐藤庄太郎

一九二〇年にキューバに入り、ずっとハバナにいたのではないか。三〇年代末だろうか、ハバナの日本公使館で、天長節だと思うが、記念写真に姿が見える。収容は第六回グループで四階にいた。七七年八月四日にハバナで死亡している。東京の人。



ハバナの日本公使館で、最後列右から五人目が佐藤庄太郎

土田憲定

一九二〇年にメキシコから転航している。メキシコには一八九七年に南部チアパスのエスクイントラに、のちに榎本移民とよばれるようになる集団移民が入っているが、その関係者だったかもしれない。真鍋直の話では戦前に帰郷して死亡している。東京の人。

元岡徳四郎

一九〇六年に大陸殖民第八回メキシコ移民として南部オアハケニヤの砂糖耕地に入り、二〇年一月にキューバに転航している。三十四歳だった。そして同年四月に妻タミヨもキューバに入っている。それ以外、二人とも、どこで何をしていたのか、キューバで死亡したのか、それとも帰郷した

のか、よくわからない。広島県賀茂郡下野村（竹原市下野町）の人。名前も「徳次郎」だったかもしれない。

田村徳重

一九二〇年に大平慶太郎の呼び寄せでハバナに入っている。二十九歳だった。翌二一年に妻栄枝を呼び寄せている。ハバナの大平商店で働いていたのだろう。その後、カマグエイに移り理髪店を開業、さらに、エスメラルダに移ったあとハバナに戻り、アギラ街とコンコルディア街の角で理髪店を開いていたが、三七年頃に岩間喜一（宮城県出身）に譲っている。その後は何をしていったのかわからないが、収容は第六回で、釈放後、五三年に妻といっしょに帰郷している。高知県高岡郡波介村波介（土佐市波介）の人。

坂口チジユ

一九二〇年に岩崎庄平と結婚する予定で呼び寄せられたが、結婚せず、のちに齋藤弥久太と結婚している。その後のことはわからない。熊本県下益城郡の人。



日本人会第一回支部長会議（1932.5.22）、最後列左から四人目が田村徳重

中沢芳三郎

一九二〇年にキューバに入っていて、ごく早い時期にハバナで死亡している。慰霊堂の一番セルに位牌が納められている。奈良の人だから、中沢保三、中沢勇三の縁戚だと思う。

斎藤ヨイ

メキシコから一九一六年に転航した斎藤弥一の妻で、メキシコから二〇年五月二十一日にハバナに入っている。兄の新保孝太といっしょで、娘の八重子を連れていた。その後、弥一と別れて中沢勇三と結婚した。七二年三月三日にハバナで死亡している。新潟県北蒲原郡中浦村加治万代（新発田市

加治万代)の人。

齋藤八重子

齋藤弥一の長女。一九二〇年五月二十一日に母ヨイに連れられハバナに入っている。のちに、小島三八一と結婚し、ハバナにいたが、小島は七一年に死亡、その後のことはわからない。新潟の人。

小林百輝

一九〇〇年一月二十二日生まれ。二〇年一月三十一日に叔父の芦部猪之吉の呼び寄せでハバナに入っている。二十歳だった。まず、カマグエイ(シエゴ・デ・アピラ)のモロンの砂糖耕地で働いたが、不況で二カ月で仕事がなくなつたため、バラグアのセントラルに移り、労働監督をしていた齋藤幸之進からコシネロの助手の仕事をもらつて四か月勤め、さらにハグエヤルで大工仕事の手伝いをしたあと、ハティボニコに移つてセントラルの雑貨店で働きはじめた。同郷の丸山広司もいたらしい。最初は配達員だったが、二五年には支配人になり、二七年に郷里から妻カツエを呼び寄せている。その後、三八年前後には独立して店を持ち、ほかに、キューバ人と共同で農場を経営していた。子どもは三人いて、長女はピアノがうまく、ハバナの劇場



日本から買い入れた鮪漁船

で演奏したこともあったが、日米戦争前に、カツエと
いっしょに三人とも帰郷している。収容は第六回で、店
舗は接収されたが、農場はキューバ人が続けていたの
で、釈放後も農場経営を続けることができ、職をなく
した日本人仲間を何人も受け入れていた。だが、カス
トロ革命で農場が接収されたため、公営商店の支配人
を務めたあと、六四年からは漁業公社で働いていた。
革命前までのキューバの漁業は小規模な近海漁業だけ
だったのを、カストロ政府は食糧政策の一環として、
日本から大型漁船を買い入れ、鮪の漁業指導者を招い
て、遠洋漁業を整備しようとしていた。

その日本人漁業者の通訳が小林の仕事で、ほかにも
仲間数人がそれにあたっている。いっしょに漁船に乗
り込み、カリブ海はもちろん、遠くはカナリヤ諸島近
海まで出かけるたいへんな仕事だった。その頃、帰郷
したカツエと離婚し、キューバ婦人と再婚している。

訪ねたときは八十歳を過ぎていたが、豊饒として、知性的で紳士然とした人だった。八五年八月二十九日にハバナで死亡。長野県上伊那郡飯島村大字田切（上伊那郡飯島町田切）の人。

今村広美

小林百輝、小林武夫と同航、一九二〇年一月三十一日にハバナに入っているが、いくらかもしないでアルゼンチンに転航している。長野県の人。

小林武夫

小林百輝、今村広美と同航、一九二〇年一月三十一日にハバナに入っているが、いくらかもしないで今村はアルゼンチンに、この人はメキシコに転航している。長野県の人。

田中耕

神戸高商（現、神戸大学）を卒業後、農商務省に入り、商業視察員としてアルゼンチン（チリかもしれない）に派遣されていた。それがどうしたわけか、一九二〇年にキューバに移っている。ハバナで日本商店を開く計画だったらしいが、うまくいかず、薪炭販売のほか職を転々としていた。日本人仲間との交際は少なかつたようで、收容中の話もまったく残っていない。

第四回グループでの収容だったから、めぼしい人物と見られていたのかもしれない。革命後の六年三月七日にハバナで死亡している。京都府の人。収容は哀しい出来事だったが、それまで各地にばらばらだった日本人が、強制であれ、一所に集住したことで、旧交を温め、また、新しい出会いと、さまざまな消息をたしかめる場にもなっている。

山入端久郎

一九二〇年にキューバに入り、ビジャ・クララやカマグエイを転々としていたと思う。収容はかなりあとの第八回グループで三階にいた。革命後の六一年四月十七日にサンクティ・スピリトゥスのハティボニコで死亡している。沖縄県の人。メキシコからの転航だったかもしれない。

本庄忠造

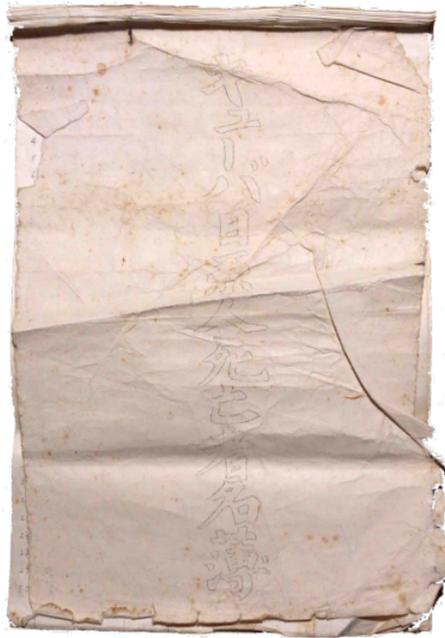
一九二〇年、ハバナで日本船（不詳）から脱船。各地を転々としたあとイスラに渡り、サンタ・バルバラ (Santa Barbara) 地区で農業を続け、生涯独身のまま六〇年五月十五日に死亡している。独身者の多くがそうだったように、叶わぬ帰郷を夢見ながらの一人寂しい最期だったという。石川県の人。第五回収容で二階にいた。

高木伊勢太郎

一九二〇年にパナマから転航している。ただ、パナマは中継地で、ペルー移民だったと思う。パナマでは理髪師をしていたらしい。各地のセントラルを転々としたあと、東部オリエンテ（現、オルギン）のサン・ヘルマン（San German）でハルデイネロをしていた。第六回収容で、釈放後もサン・ヘルマンにいて、八一年に死亡している。熊本県菊池郡合志村福原（合志市福原）の人。

安丸ヨシノ

一九二〇年三月二三日付けで神奈川県庁から旅券が下付されていて、夫金蔵の呼び寄せでキューバに入っている。三十三歳だった。ただ、「キューバ日系人死亡者名簿」には、その前の一七年にオリエンテ（オルギン）のマルカネ（Marcane）で、名前がわからないのだが、「安丸夫人」が死亡していることが記録されている。この「夫人」は金蔵の先妻で、ヨシノは後妻として呼び寄せられたのかどうか、なんともいえない。福岡県三井郡大刀洗村山隈（三井郡大刀洗町山隈）の人。



「キューバ日系人死亡者名簿」

元岡タミヨ

元岡徳四郎の妻で、一九二〇年に呼び寄せられている。二十四歳だった。広島県賀茂郡下野村（竹原市下野町）の人。

千葉円喜治

パナマから一九二〇年に入っている。二十九歳だった。ただ、その後のことはわからない。死亡した形跡はないから早い時期にキューバを離れているだろう。パナマ以前はペルーにいたと思う。宮城県登米郡米山村西野（登米市米山町西野）の人。

松村金太郎

一九二〇年にパナマから、妻クマ、長男操といっしょに転航している。二十八歳だった。その後、どこにいたかわからないが、パナマでは理髪師をしていたから理髪店を開いていたのではないか。そうして日本人理髪師が多くなったからだろう。キューバ人理髪師の突き上げで、二九年に理髪試験法が制定され、三〇年に理髪師に対する資格試験が実施された。といつても、実際には、日本人理髪師を排斥するためのもので、筆記試験と面接試験があつたが、どちらもスペイン語で答えなければならなかつた。だから、日本人のほとんどは試験に合格できず、失業して、キューバを離れる者が多かつた。松村もそんな一人だったかもしれない。静岡県志太郡焼津町城之腰（焼津市城之腰）の人。松村静雄の兄か、縁戚ではないか。

松村クマ

松村金太郎の妻。一九二〇年に夫に同行、長男操を連れ、パナマから転航している。静岡県志太郡焼津町城之腰（焼津市城之腰）の人。

松村操

松村金太郎の長男。一九二〇年に父母といっしよにパナマからキューバに入っている。静岡
県志太郡焼津町城之腰（焼津市城之腰）の人。

山島庄吉

一九二〇年十月十日にハバナに入っているが、このときは再渡航で、それ以前の一七年に
入っていると思う。深沢国太郎の妻シマの弟。收容前にはカマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）の
モロンにいて、理髪店を購入して理髪師をしていた。二五年に妻くにを呼び寄せ、庄太郎と国
夫の二男をもうけている。戦後もモロンに暮らしているが、八六年の年明けに家の中で何かを
吊り上げようとしていたのか、引っ張っていた綱が切れて後ろに転倒、頭を打って二週間後に
入院、手術をしたが、三日後の一月三十日に死亡している。静岡県庵原郡蒲原町蒲原（静岡市
清水区蒲原）の人。一九〇〇年十月二十二日生まれ。收容は第六回で三階にいた。

南原隆一

一九二〇年に二十九歳でパナマから転航、カマグエイのシエゴ・デ・アピラで理髪店をはじ

めた。キューバでも本島にいた日本人のほとんどは、理髪店かハルディネロをしていた。一般のキューバ人労働者の二倍ぐらいの収入があったらしい。南原の店も繁盛し、後続の日本人が何人も見習いとして入り、巣立っている。しかし二九年六月に、理髪師に資格試験を課す理髪試験法が制定され、翌年三月、全国一斉に資格試験が実施され、日本人五十八人中四十七人が不合格になった。不合格といつても技術が悪かったわけではない。地元のセントラルや有力者の口利きがなかつたり、審査官に袖の下を使わなかつたからに過ぎない。キューバの町はスペイン人がつくつた初期の町以外は、すべてがセントラルと呼ばれた製糖工場を中心に生まれたといつてもいいくらい、経済はもちろん、政治は砂糖の力で動いていた。手先の器用な日本人の理髪店はキューバ人に人気があつて、とくに夫婦共稼ぎの店は夫人が顔をあたつてくれるというのでみんなによるこぼれて繁盛した。理髪試験法は、そうした日本人を排除しようとしたキューバ人理髪店組合の政治への働きかけの結果だつた。ただ、法は法であり、不合格になつた者は店を畳まざるを得なくなり、伝を頼つて転職したり、キューバを離れた者も少なくなかつた。南原もその一人で、仲間といつしよに、もといいたパナマに戻っている。が、その後のことはわからない。のちに日米戦争がはじまると、パナマでも四二年には戦時収容があつて、日本人と日系人はアメリカに送られ、交換船で日本に強制送還されている。そのなかに南原もいたかもしれない。広島県芦品郡宜山村大橋（福山市駅家町大橋）の人。

井上豊吉

一九〇一年九月六日生まれの十九歳で一九二一年二月一日にハバナに入っている。そしてラス・ビジャス（シエンフエゴス）のセントラル・コンスタンシアで働きはじめた。かつて小川富一郎が農場経営をしていたところで、一〇年代末から二〇年にかけてキューバ経済はバカ・ゴルダ（太った雌牛）と呼ばれた黄金期で、どこも空前の砂糖景気に沸いていた。それが小川の郷里の新潟県新発田に伝わり、近隣農村から二十一人がキューバに入っているが、その最初の一人だった。仕事はいつぱいあつて、砂糖耕地の整地、除草などを仲間七人と請け負っている。日給も以前は二ドルに満たなかつたのが、五ドルにもなつたという。それが、半年後の七月には砂糖価格が急落。ポンド当たり二十セントを超えていたのが一挙に三セント台に落ち込み、キューバ資本の中小銀行はもちろん、国立銀行までが破産通告を出す始末で、モラトリアムも発令されている。たちまち解雇され、シエンフエゴスで日本商店を開いていた小川未亡人の秀野と小川喜一を頼り店を手伝っていた。ただ、その小川商店も三六年に輸入商品がシエンフエゴス港で船舶火災に遭い、保険をかけていなかったために負債を抱えて破産。小川一家とともにハバナに移り、エラードの製造販売をはじめた。その後、一時、イスラにいたがハバナに戻り、革命後は、内藤五郎の紹介で漁業公社に職を得て、日本からの漁業指導者の通訳として、

いつしよに鮪漁の遠洋漁船に乗り組んでいた。八二年八月二十二日にハバナで死亡。新潟県北蒲原郡新発田町上鉄砲町（新発田市諏訪町）の人。収容は第三回で五階にいた。めぼしい人物とみられたのだろう。

大槻幸雄

一九二一年に従弟の呼び寄せでキューバに入っている。二十三歳だった。従弟というのは伊藤良助かもしれない。その後のことはわからないが、早い時期にビジャ・クララ（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニコで死亡している。宮城県柴田郡船岡村船岡字広小路（柴田郡柴田町船岡）の人。

庄司喜三郎

一九二一年にキューバに入っている。三十四歳だったから郷里に妻子を残しての渡航だっただろう。大槻幸雄と同航だったと思うが、その後のことはわからない。早い時期に帰郷したのだろう。宮城県柴田郡大河原町大谷字戸ノ内前（柴田郡大河原町大谷戸ノ内前）の人。

榎本清

榎本惺の妻。呼び寄せで一九二一年六月十日にハバナに入っている。二十歳だった。惺はラス・ビジャス（シエンフエゴス）のオルキタス（Horguias）で農場を経営していて、同じ二一年に郷里から十七人を農場に呼び寄せているが、不況でやっていけなくなり、収容中の四四年に体を悪くして死亡。清は戦後はハバナに移り、七八年三月十日に死亡している。新潟県北蒲原郡新発田町（新発田市）の人。サヨ、彦雄、三郎、五郎、ヨネ、トミの三男三女がいる。五郎は革命運動の地下活動に参加し、シエラ・マエストラ（Sierra Maestra）では新聞編集をしていて、サンタ・クララ（Santa Clara）の戦いではゲバラ軍にいた。八二年にはサヨさんとともに元気でおられたが、その後どうされたか。三郎は九四年二月二十五日に死亡している。

金子三郎

一九二一年に二十三歳で入っているが、旅券申請には「商用」となっていて、すると短期滞在だっただろうから「移民」とするには無理があるかもしれない。神奈川県高座郡藤沢町大庭（藤沢市大庭）の人。

藤木季隆

兄の呼び寄せで一九二一年に入っている。十七歳だった。その後のことはわからないがキューバで死亡している形跡はなく、現在、同じ戸籍に家が續いているから、きっと帰郷していると思う。また、藤木姓の人はこの人以外にいない。同姓ではないが、高木伊勢太郎の縁戚だと思う。菊池郡西合志村福原（合志市福原）の人。

大兼久ウサ

大兼久安吉の妻。一時帰郷した夫といっしょに一九二一年八月十日に、弟の住光、妹のカマタを連れイスラに入っている。正雄、正春、安雄の三男をもうけているが、ごく早い時期にハバナで死亡している。安吉は六三年二月六日にイスラで死亡しているから、どうしてハバナで死亡しているのか不思議だが、ハバナで入院していたのか、あるいは、正春のいたピナル・デル・リオに移ったかもしれない。沖縄県国頭郡名護村名護（名護市名護）の人。

大兼久住光

大兼久安吉の妻ウサの弟で、一九二一年八月十日に、安吉に連れられ、ウサと姉のカマタと

いっしょにハバナに入っている。十六歳だった。義弟なのに旅券申請では「養子」となっているのは、親子兄弟以外は入国できないと考えたからだろう。アメリカでは移民の入国制限がきびしかったが、キューバでは一九〇二年に全面禁止されていた契約移民の入国禁止も一七年に解除され、中国人の入国でさえも三十ドルぐらいの見せ金があれば入国できたから、偽装の必要はなかったと思う。ごく早い時期にマタンサスのカルデナスで死亡していて、慰霊堂の第一号セルに位牌が残っている。沖縄県国頭郡名護村名護（名護市名護）の人。

大兼久カマタ

大兼久安吉の妻ウサの妹で、一九二二年八月十日に、安吉に連れられ、養女として、ウサ、そして弟の住光といっしょにハバナに入っている。十七歳だった。その後のことはわからない。沖縄県国頭郡名護村名護（名護市名護）の人。

大竹信次

井上豊吉に次いで、榎本惺の呼び寄せで、ラス・ビジャス（シエンフエゴス）のオルキタス（Horquias）に入った榎本移民の一人。「まだ十五やったかね、船のなかで泣いてばかりで」と井上キクノがむかしを教えてくれた。一九二二年八月十日、夫に呼び寄せられたキクノに同

行、ハバナに入っている。そして、オルキタスに向かったが、不況のどん底で仕事がなく、榎本農場も崩壊、呼び寄せられた大竹ら新潟からの仲間も各地に離散した。大竹はシエンフエゴス近辺を転々としたあとマタンサスのセスペデス (Capeden) のセントラルに入り、電気技師をしていた吉川勇平に弟子入りして働いていた。だが、体を悪くして三六年に帰郷、郷里でも電気技師をしていた。新潟県北蒲原郡新発田町下町 (新発田市大手町) の人。八二年に新発田を訪ねてお会いしたときは元気でおられたが、さて、どうされたか。

渡辺ハツノ

小川移民の渡辺重治の妻。呼び寄せで一九二一年八月十日にハバナに入っているが、あとがわからない。収容前に夫婦で帰郷していると思う。二十八歳での渡航だったから郷里に子どもを置いていたかもしれない。新潟県北蒲原郡笹岡村上山田 (阿賀野市上山田) の人。

井上キクノ

小川移民の一人の井上留次郎と結婚、呼び寄せられて、一九二一年八月十日にハバナに入っている。二十一歳だった。留次郎はカマグエイ (シエゴ・デ・アピラ) のモロンで野菜づくりをしていた。戦争がはじまると、長男の敏雄 (フランシスコ) も夫の留次郎といっしょに収容され



前列左から瀬在千恵子、小坂芳枝、井上キクノ

たため、女手一つで残る家族と家を守った。だから、釈放後の留次郎はすぐにモロンに戻る事ができたのだが、その後、本島西部のピナル・デル・リオのコンソラシオンに移っている。だが、留次郎が脳溢血で倒れ半身不随になったため、長女夫婦がいたシエゴ・デ・アピラに戻っていつしよに暮らしていた。

内藤さんに連れられ、シエゴ・デ・アピラを訪ねたのは八二年の九月一日だった。一九〇〇年六月二十六日生まれだから、八十二歳だったはずだが、元気な人で、足腰も達者で、記憶力もよく、むかしのことをいろいろ教えてくれた。調べていたのが新潟移民だったからかもしれないが、孫のように親しくしてくれたの

を忘れない。そのとき、いつしよにいたのが瀬在さんと小坂さんだった。小坂さんは、運転をしてくれていた香川フストさんのお姉さんで、新潟移民の小坂栄寿計と結婚していた。大柄の肝つ玉母さんのような人で、ずいぶんやさしくしていた。瀬在さんは、のちに一時帰郷されたときにはいつしよに旅をしたり、その後も手紙を重ねていろいろ日本人やキューバのことを教えてくれて『峠の文化史』を書くときにはずいぶん助けられた。ぼくには母のような人だった。キクノさんは九五年三月十四日に死亡。九十四歳だった。新潟県北蒲原郡川東村板山（新発田市板山）の人。井上美代さんは姪にあたる。

撫谷勝造

一九二一年二月八日にハバナに入っている。収容は五回グループだから、収容前にはイスラにいらたろう。釈放後にカマグエイに移ったのか、六八年六月十七日にカマグエイで死亡している。広島県の人。

出島巴之治

一九二一年三月十二日にハバナに入り、詳しくわからないが、ずっと本島にいたと思う。第三回グループの収容で、戦後の六五年十二月十三日に、シエンフェゴスで死亡している。和歌

山県の人。

仁科民蔵

一九二一年にパナマから転航している。パナマでは理髪師をしていたが、キューバではどうだったか、詳しくわからないが、収容以前にキューバを離れていると思う。静岡県安倍郡長田村石部（静岡市駿河区）の人。

久保山安吉

仁科民蔵と同航、一九二一年に妻シズといっしょにパナマから転航している。パナマではやはり理髪師をしていたらしいが、その後のことはわからない。三〇年頃だと思いが早い時期にキューバを離れている。静岡県志太郡東益津村浜当目（焼津市浜当目）の人。パナマからの転航者の多くはペルー移民で、ペルーの砂糖耕地から逃亡し、アメリカをめざして海路パナマに入るが、アメリカ入国がむずかしかつたため、一時滞在して転航先をさぐっていたのだった。とりあえずキューバに入れば、アメリカに入国できる機会は、メキシコからよりも多いと考えたのだろう。日本からパナマへの渡航者は、一九〇九年から四一年までの間に（外交史料館資料「移民年表」から算出）、契約移民、自由移民を含めて移民会社による渡航者は一人もいなくて、

それ以外の自由渡航者が四百三十九人いるだけ。ただ、いわゆる呼び寄せは、この自由渡航者のなかに含まれていて、ほかにも商用や観光目的などの一時渡航者も合わさっているため、とくにパナマの場合は、数字のうえではその区分ができず、いわゆる移民の数を特定するのはむずかしい。久保山は二三、四年にキューバからパナマに戻っていて、海外興業のパナマでの現地代理人として、日本からキューバへの海外興業移民をパナマで受け入れ、キューバに送り出す仲介をしていたと思う。移民との間にさまざまトラブルを伝える記録が残っている。

久保山シズ

久保山安吉の妻。一九二一年に夫といっしょにパナマから転航しているが、その後のことはわからない。静岡県志太郡東益津村浜当目（焼津市浜当目）の人。

土屋始

同郷の田中米作、古賀仁作と同航、一九二一年に十九歳でキューバに入り、ラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニコのセントラルで大工をしていた。その後、サンクティ・スピリトゥスに移り、エラードの製造販売をはじめ、キューバ人数人を雇うまでになっていた。二八年に妻トムを呼び寄せ、日米戦争直前だろうか、長男を学業のために郷里に帰し

ている。その長男は日本で大学を出て医師になり、革命後、キューバに戻っていたが、しばらくしてまた郷里に帰った。七三年に夫婦で一時帰郷。その帰路、羽田空港でトムが急死、一人戻った土屋は、氣力をなくしたか、その後は体がすぐれず、八〇年六月六日に死亡している。福岡県浮羽郡田主丸町字力常（久留米市田主丸町）の人。收容は第六回で三階にいた。

田中米作

一九二一年に同郷の土屋始、古賀仁作と同航で入っているが、その後のことはわからない。二十九歳だった。福岡県浮羽郡川会村上原（久留米市田主丸町上原）の人。

古賀仁作

一九二一年に同郷の土屋始、田中米作と同航で入っているが、やはりその後のことがわからない。三十一歳だった。收容前に帰郷していると思う。福岡県浮羽郡川会村上原（久留米市田主丸町上原）の人。

元川堅一

ペルーに一九二〇年十一月十二日に入っていて、その後、キューバに転航しているが、何年

だったか、どこにいたのかもわからない。二七年に妻のチエノを呼び寄せている。ともに早くに帰郷したのではないか。広島県佐伯郡宮内村（廿日市市宮内）の人。

若藤喜作

一九二〇年、ペルーのリマ北方五百キロのチクリンの砂糖耕地に入ったが逃亡。キューバの好況を耳にして、岡田島市といっしょに、翌二二年、キューバに転航しイスラに渡っている。ほかの草分けたち同様、最初はアメリカ人の農園で働いたあとと独立し、サンタ・バルバラ地区で土地を借り、アメリカのニューヨーク市場向けのピーマン栽培をはじめた。そして二七年に一時帰郷、長男達夫を連れて戻ったが、三〇年代に達夫にあとを託して帰郷している。勤勉実直を地で行く人だった。広島県安佐郡安村安（広島市安佐南区上安）の人。あとを受けた達夫は、収容まではそのままサンタ・バルバラで農業を続けたが、収容中に土地を失ったため、戦後は原田茂作の農場に寄宿していた。九七年に帰郷している。

岡田島市

一九二〇年にペルーのチクリンの砂糖耕地に入ったが逃亡。二一年に若藤喜作といっしょにキューバに転航し、イスラに渡って農業をはじめた。アメリカのニューヨーク市場向けにピー

マンを栽培し、少しの貯えができたところでトラックやムラを買い入れ規模を大きくし、二六年に妻キヨコを呼び寄せている。だが、不況で失敗。失地回復しようと、条件のいい土地をさがしてイスラを転々としたがうまくいかず、キヨコは三〇年代末に単身帰郷。たぶん離婚したのだろう。岡田はハバナに出てハルデイネロをはじめた。収容は第六回で、釈放後もハバナでハルデイネロをしていたが、革命前に帰郷している。まとまった貯えができていたのだろう、郷里で再婚し、アパート経営で暮らしていたが、その後、早い時期に死亡している。革命後なら、帰郷できなかっただろう。賢明だったと思う。広島県豊田郡河内町大字中河内（賀茂郡河内町中河内）の人。ムロともいったムラは雄ロバと雌馬の交配種（雌）で、生殖能力はなかったがふつうの馬の二倍近くも体が大きく、とくに足が丈夫で馬力があり、馬より安価だったため、畑を鋤いたり畝立てしたり、硬い土質のイスラでは農耕によく使われた。

池部助右工門

ペルーからの転航で、一九二一年五月十五日にハバナに入っている。収容は第六回グループだから収容時には本島にいたと思う。釈放後はイスラに残ったのだろう、革命前の五五年十二月十八日にイスラで死亡している。鹿児島県の人。

深町某

一九二一年に入っていること以外、わかっているのは性別（男性）だけ。こうした人がキューバへの日本人移民として二十数人いる。これを移民として移民名簿に含めるかどうかはむづかしいところだが、姓だけでも日本名が明らかなのでリストに納めている。九八年にキューバ政府が主唱して日本外務省がタイアップして開いた「キューバ移住百年祭」が日本人移民の嚆矢として挙げている人物は「Osuna Y.」と姓名のローマ字表記と一八九八年九月九日にハバナに上陸していることと出港地がわかるだけで、出身県はもちろん、漢字表記さえもわからない。だから「移民名簿」には、ほかに、Numa Y.、Tatsumaj.、Hame N.、Minzu A.、Sanki H.、Ohinaga J.も含めなごい。さらに、二〇一八年には、今度は日本外務省が率先して「百二十年祭」を開いて、この人物を「大砂」とまで勝手に表記してキューバで記念祭を開いている。なぜそこまでして移民百二十年を祝う必要があったのか。理由は一つだけ。二〇一八年にキューバを訪問した日本の首相がキューバで何を話して何をしたかを調べればすぐにわかる。

大滝直吉

一九二一年に山梨久八といっしょにペルーから転航している。二十八歳だった。収容は第六回グループだから、収容前には本島にいたことはたしかで、そのときからいたのかもしれないが、戦後はピナル・デル・リオのエラドウラに暮らしていた。五三年に帰郷している。ピナルで農業をしていた人には、それなりに貯えをもつて革命前に帰郷する人はけっこういた。もう少し貯えてからにしようか、どうしようか、その選択がむずかしかった。静岡県安部郡不二見村村松（静岡市清水区村松）の人。

山梨久八

大滝直吉と同航、二十六歳で、一九二一年にペルーから転航しているが、その後、どうしたかわからない。静岡県の人。

遠藤慶作

一九二一年にペルーから転航している。イスラに渡って、ピーマンやナスの栽培で基盤をつくと、岡田同様に、トラックとムラを買い入れ、日本からも農機具のほか、陸稲栽培をしてい

たのか、脱穀機も取り寄せるなど、大規模な農園経営をめざした。二五年に郷里から大川績、二六年には弟の松男を呼び寄せている。だが、不況に遭って三〇年前後には丸裸になってしまふ。松男は三八年に帰郷、大川も遠藤のもとを離れ、同じイスラだが、フィンカ・エラドウラ (Finca Herradura) 地区に移った。遠藤はその後、収容を経て革命後も一人で農業を続けたが、七〇年八月三日に盲目に近い状態で死亡している。静岡県 (おそらく旧駿東郡、現沼津市) の人。収容は第五回で二階にいた。

伊藤治三郎

一九二一年にキューバに入っていて、二五年に妻を呼び寄せている。ラス・ビジャス (シエンフエゴス) のオルキタスで農業をしていたのではないか。ごく早い時期にオルキタスで死亡している。広島県の人。夫人はどうしたのか、まったくわからない。

住田滝夫

一九二一年にキューバに入り、ハティボニコのセントラルで働いていた。三年ほどいたらしい。稼ぐ端からロテリア (宝くじ) 買いを繰り返していたが、一万ドルを当てたのを機に帰郷した。切りのいい人だった。ほかにもロテリアにあたった人はけっこういたらしいが、ほとん

どはそれをまたロテリア買いに注ぎ込んで元も子もなくしている。失敗はわかっている。一時であれ、夢を見せてくれるのがロテリアだったが、革命後に廃止されている。広島県安佐郡安村（広島市安佐南区）の人。

藤野米子

米子という名前だが男性で、シリア婦人と結婚して一九二一年頃にキューバに入ったらしいが、夫人の男性問題で諍いになり離婚して、またシリアに戻っていった。和歌山県の人。

金沢某

一九二一年に入っているが、名前がわからない。ただ、イスラで死亡したことがわかっている。慰霊堂の二号セルに位牌が納められているからごく早い時期の死亡だと思う。広島県の人。

森光唯登

一九二一年にスペインからキューバに入っている。収容では第六回グループにいたから収容前には本島にいただろう。戦後、七〇年十月三十一日にハバナで死亡している。どんな人か何をしていただろうと興味津々なのだが、まったくわからない。広島県の人。

中井正登

一九二一年にキューバに入っている。収容では第五回グループだから収容前にはイスラにいただろう。釈放直後の四六年にイスラで死亡している。広島県の人。

佐藤政市

一九二一年にキューバに入っている。三〇年にカマグエイで実施された理髪師資格試験を受けているから、それ以前からカマグエイにいたと思うが、収容では第五回グループだから収容前にはイスラにいたことになる。釈放後もしばらくイスラのマル・パイス (Mal Pais) にいたが、革命前の五〇年代に帰郷している。福島県の人。

斎藤栄吉

一九二一年にキューバに入っている。三〇年にはカマグエイのベルティエンテス (Vertientes) で理髪師資格試験を受けているから、同地で理髪店を開いていたのだろう。試験には不合格で開業できなくなったためイスラに移ったのだろう。収容は第五回グループで、釈放後もイスラのフィンカ・フカロについて、四九年五月二十一日に死亡している。宮城県の人。

土永精三

一九二一年にキューバに入っている。收容は第三回グループだから收容前には本島にいたと思う。第三回の收容だから、それなりに注目されていたのだらう。收容中に病気になりハバナのカリクスト・ガルシア病院に運ばれ四四年二月五日に死亡している。肝臓癌だった。名前は「清造」だったかもしれない。岐阜県の人。加藤政治の兄。

島田為十郎

一九二一年に妻いまといっしょにキューバに入っている。三十九歳だった。ただ、その後のことがわからない。收容前もごく早い時期にキューバを離れていると思う。鳥取県東伯郡橋津村橋津（東伯郡湯梨浜町橋津）の人。

島田いま

島田為十郎の妻。一九二一年に夫といっしょにキューバに入っているが、その後のことはわからない。三十三歳だった。鳥取県東伯郡橋津村橋津（東伯郡湯梨浜町橋津）の人。

長瀬泰雄

和歌山県西牟婁郡串本町（東牟婁郡串本町串本）の人。開業医の家に生まれ、あとを継がねばならなかったが、囲碁に凝って学校にも行かず会所に入り浸りになっていた。ハバナに着いたのは一九二一年八月二十七日で、二十一歳だった。串本は明治中期からカナダに漁業移民をたくさん出しているが、そんなカナダ帰りから、キューバが砂糖景気に沸いていることを聞いたらしい。旅券申請には巽房市の呼び寄せとある。長瀬以前にキューバに入った同郷人は四人いて、うち三人の動向がわずかにわかる。中浜仙太郎と恵比須丈夫は一七年にハバナで脱船し、出島巳之治は長瀬の五カ月前にキューバに入っていて、いずれもキューバで死亡している。ハバナに入った長瀬はすぐに知人を頼って中部のサンタ・クララに移り、エラードの販売をはじめた。その頃、中浜はイスラにいたと思うから、知人というのは恵比須か出島だっただろう。三年ほどエラード売りを続けて二千ドルほど貯まったところで帰郷。結婚したあと、二八年に妻の一枝といっしょに再渡航している。その同じ船に内藤五郎がいて、以後、二人は親しく付き合うことになる。そうしてサンタ・クララに戻ったものの、キューバ経済はどん底で仕事がなく、しかたなくハバナに戻って資産家の家庭に入り、長瀬はハルディネロや執事見習いとして、一枝は家事手伝いとして働きはじめた。長瀬は胃弱で一時は胃潰瘍で寝込んだこともあった

が、一枝が一人働いて支えた。一枝は料理人の野田浅太郎について習っていたので料理がうまかった。そして日米戦争がはじまる。収容は第九回で、資産家のコネクションで逮捕を後らせることができたのかもしれない。日本人のほとんどは収容中に家も土地もなくしているが、長瀬は一枝が続けて資産家邸で働いていたので、釈放後もすぐに身を寄せることができた。資産家はひじょうな親日家で、持ち家を一軒貸すから下宿屋をやってみないかと誘われ、二人ではじめることにした。ちょうど癌専門病院の真ん前で、地方からやってくる患者や付き添い人の宿として繁盛し、数年後には隣家も借りて拡張した。しかし、持病が再発したため引き払い、ベダード (Vedado) 街の日本公使館前にビルを借りてアパート経営に切り替えた。ちょうど日本経済も高度成長に入りかけた頃で日本からやって来る商社員相手に繁盛するはずだった。それが、革命で接収されている。ただ、その一つに住むことだけは許され、家賃も要らなかった。ので、子どももなく、その後はつましく二人仲良く暮らしていた。ところが八〇年に一枝が癌で闘病ののちに死亡したため、気力をなくしたまま四か月後に帰郷している。その後、八二年頃に周参見に移ったらしいことは聞いていて、訪ねてみるよう内藤さんにはいわれたが、ぼくもあの頃は子育ての最中で、機会をなくしてしまっている。

渡辺良三郎

新潟からの榎本移民十七人の一人で一九二二年八月二十七日にハバナに入っている。十八歳だった。そしてラス・ビジャス（シエンフェゴス）のオルキタス（Horguitas）で働きはじめた。カリブ地域屈指の製糖工場だったセントラル・コンスタンシアに属する砂糖耕地で、小川富一郎の同胞だった榎本惺が農場経営をめざしていた。そのため前年に郷里の新発田に一時帰郷して、十七人を募集、年が明けて一足先にキューバに戻った。ところが、その間にキューバ経済は一変していた。あわてた榎本は渡航を見合わせよう郷里に打電するが遅かった。横浜で船待ちしていた十七人は郷里に戻ることできずに出発したのだった。だから、オルキタスに入ったものの仕事がなく、ほとんどが榎本との契約を破棄して耕地を去り、各地を放浪することになり、十七人のうち九人は帰郷している。渡辺は各地を転々としたあとカマグエイ（シエゴ・デ・アボラ）のプンタ・アレグレ（Punta Alegre）に落ち着いたが、二四年に死亡している。新潟県北蒲原郡五十公野村古寺（新発田市古寺）の人。

藤間徳治

榎本移民十七人の一人で一九二二年八月二十七日にハバナに入っている。二十四歳だった。

その後、オルキタスに入っているが、すぐ帰郷したのではないか。詳しくわからない。新潟県北蒲原郡五十公野村古寺（新発田市古寺）の人。

齋藤六之助

榎本移民十七人の一人で一九二一年八月二十七日にハバナに入っている。二十四歳だった。オルキタスのあとは早い時期に帰郷していると思う。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。

増田寅造

榎本移民十七人の一人で一九二一年八月二十七日にハバナに入っているが、オルキタス以後のことは詳しくわからない。片桐留蔵、渋谷定吉、後藤徳蔵とは同郷で、航海途上の甲板でマストの前に四人並んだ記念写真が残っている。片桐はノーネクタイにワイシャツ姿、渋谷はネクタイ背広姿、後藤はネクタイにチョッキ姿、そして増田はネクタイに三揃えで、足元はいずれもぱりつとした革靴に、増田は畳んだ扇子を右手にしている。渋谷同様、最年長の二十八歳だったから郷里に妻子を残していただろう、早い時期に帰郷していると思う。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。四人のうちキューバに骨を埋めたのは片桐だけ



左から片桐留蔵、渋谷定吉、後藤徳蔵、増田寅造

だった。

後藤徳蔵

榎本移民十七人の一人で一九二一年八月二十七日にハバナに入っているが、オルキタス以後のことは詳しくわからない。片桐留蔵、渋谷定吉、増田寅造とは同郷で、後藤は最年少の二十歳だった。早い時期に帰郷していると思う。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。

渋谷定吉

榎本移民十七人の一人で一九二一年八月二十七日にハバナに入っているが、オルキタス以後のことはやはりよくわからない。片桐留蔵、後藤徳蔵、増田寅造とは同郷で、

渋谷は増田同様、最年長の二十八歳で継嗣だったから、早い時期に帰郷していると思う。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。

長谷川謙吉

新潟県新発田からの、いわゆる榎本移民の一人。ラス・ビジャス（シエンフエゴス）のセントラル・コンスタンシアにあった小川農場が崩壊したあと、あとを受けた榎本惺は、コンスタンシアの西のオルキタスに農場を買い入れ、郷里の新発田から移民導入を図った。一九二〇年のことで、十七人が呼びかけに応じている。長谷川もその一人で、翌二一年、郷里を発ち、横浜で船待ちをしていた、そこにキューバの榎本から知らせが届いた。砂糖価格が急落、キューバ経済は大混乱でモラトリアム（支払い停止）も発令されているから出発を見送るように、というのだった。しかし、後戻りもできずに出発、八月二十七日にハバナに入港、オルキタスに入ったが、案の定、仕事がなかった。しかたなくほかでさがそうとしたが、榎本が耕地を離れることを認めなかったらしい。景気回復までしばらくみんな堪えて再起を図ろうとしたのだろう。夜逃げ同然で、同航の片桐留蔵と開田語作を誘って耕地を離れ、少し南のシエナガ・デ・サパタ（Cienaga de zapata）の密林に入って炭焼きをして食いつないでいた。その後、ハティボニコのセントラルに仕事を見つけたあと、オリエンテのサンチアゴ・デ・クーバに移ってエラード

の製造販売をはじめた。帰郷する山本周平から譲り受けたのだった。しかし、うまくいかず、入港する日本船乗員の通訳をしたりして暮らしていた。山本は帰郷せず、ベネズエラに転航している。その後、カマグエイに戻り、開田といっしょにエラード販売を再開。開田は農業をするために離れたが、代わって内野和市が加わっている。三五年に妻ミユキを呼び寄せ、男女二児にも恵まれている。収容は第六回で自治会の委員をしていた。その間、妻が店を守っていてくれたので釈放後はずぐに再開でき、さらにキューバ人を雇い入れて繁盛している。人付き合のいい人だったらしく、店は日本人仲間のサロンのようになっていて、よく人の世話もしたらしい。長谷川は五八年一月三日に死亡。夫人は、革命後、二児とともにハバナに移り、その後、長女はベネズエラに亡命、九二年にそのあとを追って夫人もキューバを離れている。新潟県北蒲原郡五十公野村（新発田市五十公野）の人。

片桐留蔵

榎本移民の一人で、一九二二年八月二十七日にハバナに入っている。ラス・ビジャス（シエソフエゴス）のオルキタスの榎本農場が崩壊したのはすでに述べた通りで、着いてはみたものの不況のどん底で仕事がなく、一日働いても十五セントボスにしかならず、逆に、食費や何やらで三十五セントボスかかったという。たまらず逃げ出し、長谷川謙吉、開田語作と連れ立つ



片桐留蔵と夫人

て南のサパタの密林に入って炭焼きをして暮らしていた。すぐ南は、六一年に反革命軍が侵攻したプラヤ・ヒロンだった。その後、各地を転々としたあと、収容前には、ラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニコにいて、戦後も革命後も変わらずハティボニコで暮らしていた。

八二年に訪ねたときは、八十六歳だった。近くの坂田チジュ宅におじゃまして、いろいろ話を終えたあとだった。ワイシャツの胸のポケットからよれよれの封筒を取り出した。裏書きを見て、まずフストさんがびつくりした。息子さんからの手紙だった。「片桐さん、あんた、息子がいたのか」。すると小さく頷いた。「真面目な人だからなあ、あちこち手紙を書いていたのは知ってた

が……」と内藤さんも目を丸くした。それにしても、手紙を見せたのはどうしたわけだったのか。フストさんと内藤さんに続いて読ませてもらった。写真でも送ったのだろう、感謝の言葉で括られていた。親子というのに、さつぱりとした文章だった。大人の手紙だからか、それとも生身の父を知らないからか。それに余計なこととは思ったが、「息子さんに手紙を書かれますか？ 帰ったら届けますよ」と、もっていたメモ用紙とペンを差し出すと、「うまく書けないが……」とテーブルに向かった。それから三十分近くはかかっている。何度も天井を見上げては脂目をこすってペンを握り直した。白内障が進んでいるらしかった。そんなけしきが、いまも記憶の底に残っている。一八九六年十月二十日生まれで、二十四歳での渡航だったから、妻子を残しても何の不都合もない。その手紙を持って新発田を訪ねると、「あなたが？」と長男の吉一さんが驚いた。移民のことを調べているというからてつきり年輩と思つたらしい。あの頃、ぼくも三十をすぎたばかりだった。奥の座敷の仏壇の前、吉一さんとは二つ違いだったか、妹のトミ子さんも来ていて、母親から聞かされたという話をいろいろ教えてくれた。誘いがあつて村仲間と出かけたものの、何年経つても便り一つなかつたらしい。それが、突然、別れてくれるよう手紙が届いた。小学校に上がった頃だったという。もちろん母親は承知しなかった。しかし、それも長くは続かず、二人を連れて実家に戻り姓も戻したという。どうしてだったのかわからない。ただ、その間も片桐は独身でいたことはたしかで、お会いしたとき、少し

年下らしいキューバ婦人が、そばでやさしく見守っていたが、結婚したのは革命後のこと、帰郷を断念したからだだった。それから四年、言葉数の少ない人で多くを語らないまま、八六年九月十七日にハティボニコで死亡している。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。

桑原トラ

小川移民の桑原寅造の妻。榎本移民の一人として、一九二一年八月二十七日にハバナに着き、オルキタスに入っている。十九歳だった。小川農場の崩壊後も、寅造はずっと榎本といっしょにいたのだろう。ただ、夫婦ともに、その後のことがわからない。たぶん早い時期に帰郷していると思う。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。

加藤喜三

榎本移民十七人の一人で一九二一年八月二十七日にハバナに入っている。十六歳だった。オルキタスのあとはどうしていたのか、まったくわからない。十七人のうち榎本惺と同じ新発田町の人はこの人だけなので、榎本の直接の知り合いか、縁戚だろう。いくらもしないで帰郷していると思う。新潟県北蒲原郡新発田町寺町（新発田市諏訪町）の人。

渋谷如斯平

榎本移民十七人の一人で一九二一年八月二十七日にハバナに入っている。十八歳だった。榎本農場を出たあとは、ごく周辺にいたのではないか。収容は第六回で、釈放後はハバナ西郊のラ・リサ (La Lisa) に移っている。七六年十二月十五日にラ・リサで死亡。独身だったと思う。新潟県北蒲原郡川東村楠川 (新発田市上楠川) の人。

築井勇次

榎本移民の一人で、長谷川謙吉や片桐留蔵らと同航、一九二一年八月二十七日にハバナに入り、オルキタスに向かっている。十七歳だった。前年の空前の砂糖景気が、年が明けると砂糖価格が大暴落、不況の最中で、日給もせいぜい一ドル五十セント、除草作業は四十セントにもならなかった。呼び寄せられたものの仕事がなく、オルキタスをあとに各地を転々とし、二三年にカマグエイのセントラル・シボネイ (Siboney) にいた頃は三ドル五十セントに上がっていたのが、二五年にはまた一ドル五十セント台に落ち込んだと教えてくれた。その後、セントラル・ハティボニコからセントラル・セスペデスに移り、電気技師をしていた吉川勇平について技術を習い、三一年にはカマグエイの発電所 (Planta Eléctrica de Camaguey) に電気技師と

して勤めている。そして三五年に郷里から妻ナミを呼び寄せ、サチ (Virginia) と邦安 (Juan) の二児に恵まれカマガエイに落ち着いた。収容は第四回で五階にいた。この五階にいたのは初期の収容者で、日本人会の関係者や各地でめぼしいと思われた人が多かった。ほかの四階から二階までは一房に二人ずつなのに、五階は一人ずつ入っていた。釈放後は、収容によって職をなくしていたため、モーターの修理業をはじめ、けっこう繁盛したらしい。キューバ人を何人も雇って工場も大きくしている。もちろん革命で接収されてしまったが、どんな伝があつたのか、ゲバラに陳情すると、うまく取り計らってくれ、補償金を出してくれたうえ、月給五百ドルで資財主任にも就けてくれた。そんなこともあつたからか、キューバの日本人の間にゲバラ人気は高かった。ただ、それも、ゲバラに温情があつたからではなく、革命後の技術者不足のなかで、工業相として経済の立て直しに頭を痛めていたゲバラには、電気技師としての築井の腕が必要だったからだろう。八二年に訪ねたときは穏やかに年金暮らしをされていて、ハバナで日本大使館に勤めていた長女の Virginia さんには、一夜、手料理の夕飯をいただいた。以来、築井さんとは手紙のやりとりが続いて、八四年だったか、一時帰郷されたときには成田に迎えて、狭い団地の我が家にも足を延ばしていただいている。キューバからの便りはいつもゲバラの絵葉書だった。九三年五月二十九日に死亡、夫人も二年後の九五年にあとを追っている。新潟県北蒲原郡川東村上羽津 (新発田市上羽津) の人。十一歳上の兄広治は小川移民の一人

で一九一七年にコンスタンシアに入っている。

佐藤末吉

榎本移民の一人として一九二二年八月二十七日にハバナに入り、オルキタスに向かっているが、その後のことがわからない。二十三歳だった。八二年に訪ねたときは、カマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のプンタ・アレグレで、遠藤八十太未亡人のスエのもとに身を寄せて暮らしていた。いかにも越後人らしい、口数の少ない穏やかな人で、詳しくようすを聞けなかったのが残念だった。ただ、あれこれ訊き込んでメモ取りに走るのは好きじゃない。言葉にならない言葉を想う、そんなやり方もあっていいと思う。依頼されたわけでもなかったが、元気なようすを伝えようと、東京に戻ったあと郷里の実家を訪ねると、仏壇に位牌になつておさまっていた。キューバに行つたまま、何の便りもなく、死んだものと思つて出立日を命日に供養していた。と甥御さんは、漆黒の小さな位牌を見せてくれた。笑うに笑えないすれ違いだった。どうして便りをしなかったのか。キューバに入つたはじめから、落ち着く間もなく仕事さがしに追われ、収容、そして革命と、政治に翻弄され、故郷を振り返る余裕などなかったから、とするのも逸りすぎる。家をあとにしたからには、何があるかと、まとまった貯えを持たずには戻れない、それが出稼ぎ移民であつて、純朴な、あまりに過ぎる越後人には、ほかに方法がなかつ



遠藤スエと佐藤末吉

ただけのこと。だから、身は軽くしておく。移民以来六十余年、生涯独身を通じたことがそれを証明している。一九八七年六月三日にプンタ・アレグレで死亡、それを遠藤スエが看とっている。新潟県北蒲原郡川東村板山（新発田市板山）の人。

星野泰次

榎本移民十七人の一人として一九二一年八月二十七日にハバナに着き、オルキタスに入っている。佐藤末吉とは同村だが、その後のことはわからない。新潟県北蒲原郡川東村板山（新発田市板山）の人。

肥田野有作

榎本移民の一人で、一九二二年八月二十七日にハバナに入っている。十八歳だった。オルキタスを出た



ヘミングウェイ一家と

あとはカマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のバラグアでセントラルの支配人宅に入り執事をしていた。その後、ハバナに移り、二七年に弟の勇を呼び寄せている。ハバナでは資産家宅に住み込み、同様に執事をしていて、高山猪熊の妹の松枝と結婚している。人の歴史を文字に綴ることは難しい。それを補ってくれるのが映像で、瀬在さんが一葉の写真を送ってくれたのが手元にある。

レストランらしいテーブルを囲む三人家族の後ろに日本の法被を着た男がこちらを向いて立っている。場所はハバナのよく知られたレストラン・サラゴサ。正面の白い顎髭男を挟んで、右に老齡女性、左に若い女性が座っている。詳しくいえば、男はアーネスト・ヘミングウェイだが、二人の女性はわからない。左

はマーゴだという人もいたが齡が合わない。そして、後ろに立つ法被男が肥田野で、その頃はサラゴサで客案内をしていた。法被を着て提灯片手に客を席に案内する、その不思議な格好と陽気なおしゃべりで人氣があつたという。記念写真として、各地の同僚や知り合いに贈つたらしく、一枚が瀬在さんの手元に残つていた。革命後は日本大使館で執事長をしていたが、六八年三月十四日に死亡している。新潟県北蒲原郡米倉村米倉（新発田市米倉）の人。ヘミングウェイはハバナ郊外のフィンカ・ビヒア (Finca Vigia) に長くいたが、革命後の六一年に自殺している。アメリカとカストロ政権との二重スパイだったとは、キューバの日本人の間ではごくふつうに囁かれていた。

横山芳之助

榎本移民十七人の一人で、一九二二年八月二十七日にハバナに入っている。二十七歳だった。やはりオルキタス後のことはわからない。十七人のなかでは同村人はいない。新潟県北蒲原郡笹岡村次郎丸（阿賀野市次郎丸）の人。

開田語作

広島県佐伯郡観音村千同（広島市佐伯区千同）の人だが、榎本移民と同航、一九二一年八月



左から加藤英一、瀬在藤治、開田語作

二十七日にハバナに入っている。たぶん船上で親しくなったのだろう、榎本移民といっしよにオルキタスに向かった。だが、着いてみると、不況で榎本農場にはまともな仕事がなく、長谷川謙吉、片桐留蔵といっしよに夜逃げ同然でオルキタスを出て、南の湿地帯のシエナガ・デ・サパタの密林に入って炭焼きをして食いつないだ。ただ、それもいくらかも続かなくて、カマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のバラグア（Baragua）のセントラルに移りしばらくコシネロをしたあと、長谷川といっしよにカマグエイでエラード販売をし、元手をつくって農地を手に入れ野菜づくりをはじめた。その前後のことだろう、二八年に妻のチエ子を呼び寄せている。久雄、譲二、秀三、正行の四男をもうけ、チエ子は六三年

に、語作は八一年十月十一日に死亡。九十歳の大往生だった。

カマグエイの開田といえ、知らない者はなく、広島移民の中核的存在で、その豪放磊落な性格はこの写真からもわかるだろう。六五年十一月十四日に開かれた日系人連絡会世話人会の昼食風景で、場所はハバナだと思いが詳しくわからない。

河上慶一

一九二一年八月二十七日にハバナに入っている。二十三歳だった。同郷の湯中藤次と同航だったが、ともにその後がわからない。山口県玖珂郡川下村向今津（岩国市今津町）の人。

湯中藤次

一九二一年八月二十七日に二十四歳でハバナに入っている。同航に同郷の河上慶一がいたが、ともにその後がわからない。山口県玖珂郡川下村向今津（岩国市今津町）の人。湯中姓はほかに四人いるがいずれも鳥取県出身。

山本義吉

一九二一年八月二十九日にハバナに入っている。二十四歳だった。たぶんイスラで農業をし

ていたと思う。第五回收容だからそれがわかる。收容で土地をなくしてしまったのだろう、戦後はピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移っている。独身者は收容中に土地を守ってくれる者がいなかったため土地をなくし、釈放後はピナルに移る者が多かった。山本もそんな一人で、いくらかまとまった貯えができたのだろう、革命前の五〇年代に帰郷している。高知県高岡郡北原村北地（土佐市北地）の人。

白木三吉

一九二一年八月二十九日にハバナに入っている。同郷の山本義吉と同じ二十四歳で、同航だったが、その後のことはわからない。二〇年代ははじめの移民の多くは、二〇年のバカ・ゴルダ（空前の好況）を耳にしての渡航だったが、好況は一年ももたず、入ったときには逆に不況のどん底だったから、早くにキューバを見限った人が多かった。白木もそんな一人だったと思う。継嗣だからなおのこと。高知県高岡郡戸波村積善寺（土佐市積善寺）の人。

渡辺政太

山本義吉、白木三吉、中尾虎喜、阿部和蔵らと同航で、一九二一年八月二十九日にハバナに入っている。二十六歳だった。收容は第六回だから收容前には本島にいただろう。釈放後はど

ここにいたのかわからないが、七四年五月十九日に死亡している。福岡県浮羽郡竹野村竹野（久留米市田主丸町竹野）の人。

中尾虎喜

山本義吉、白木三吉、渡辺政太、阿部和蔵らと同航、一九二一年八月二十九日にハバナに入っている。十九歳だった。その後のことはわからないが、早くに帰郷していると思う。佐賀県三養基郡北茂安村北茂安（三養基郡みやき町）の人。

阿部和蔵

山本義吉、白木三吉、中尾虎喜、渡辺政太らと同航、一九二二年八月二十九日にハバナに入っている。十七歳だった。ラス・ビジャス（サンクテイ・スピリトゥス）のハティボニコで、天長節記念だろう、二六年十月三十一日にハティボニコの日本人が集まったなかに姿が見えるから、ハティボニコかその周辺にいたと思う。その後、シエゴ・デ・アビラで死亡している。日時はわからないが三〇年代ではないかと思う。慰霊堂の第七号セルに位牌が残っている。福岡県伊達郡半田村谷地字南谷地（伊達郡桑折町谷地）の人。阿部耕作の義弟。

沖五郎

沖庄市郎、同妻政理、巽房市、児玉良三郎と同航、一九二一年にキューバに入っている。三十四歳だった。その後、二六年に妻の須磨野を呼び寄せているが、その後のことはわからない。収容前には帰郷していると思う。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。

沖庄市郎

沖五郎、沖庄市郎、同妻政理、巽房市、児玉良三郎と同航、一九二一年にキューバに入っている。三十六歳だったが、その後のことはわからない。キューバで死亡した形跡がないから、収容までに帰郷しているだろう。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。

沖政理

沖庄市郎の妻で、沖五郎、夫、巽房市、児玉良三郎と同航、一九二一年にキューバに入っている。三十五歳だった。やはり収容までに帰郷していると思う。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。

巽房市

沖五郎、沖庄市郎、同妻政理、児玉良三郎と同航、一九二一年にキューバに入っているが、このときは再渡航だったと思う。二十五歳で、ほかの三人と同様、郷里では漁師をしていた。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。

児玉良三郎

沖五郎、沖庄市郎、同妻政理、巽房市と同航、一九二一年にキューバに入っている。最年長の五十一歳だった。ただ、五人のうちこの人だけが、シエゴ・デ・アビラにいたのか、二六年に次男の勇二を呼び寄せ、二九年にシエゴ・デ・アビラで死亡している。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。

敷島新三

たぶん児玉良三郎らと同航だったと思う。二十四歳で一九二一年にキューバに入っている。その後はたぶんハバナにいたと思う。三〇年代の天長節だろう、ハバナの日本公使館での記念写真にその姿が見える。収容は第六回グループで四階にいた。五四年七月九日にハバナで死亡

している。熊本県下益城郡松橋村（宇城市松橋町）の人。

加藤千代三郎

パナマからの転航で、一九二二年六月二十四日にハバナに入っている。二十五歳だった。その後、二〇年代末にはカマグエイのフロリダ（Florida）で理髪店を開いていた。収容は第八回グループで、釈放後もフロリダにいて、六五年四月十三日に死亡している。愛知県愛知郡猪高村高針甲（名古屋市長東区高針）の人。「千代造」かもしれない。

玉城賀吉

一九二一年にパナマから二十四歳で入っている。その後、三〇年までにオリエンテ（サンチアゴ・デ・クレーバ）のパルマ・ソリアノ（Palma Soriano）で理髪店を開いていたことがわかっている。三一年に妻の幸子を呼び寄せていて、戦後はカマグエイのエスメラルダ（Esmeralda）にいたが、理髪師をしていたかどうかはわからない。五〇年五月三十日に死亡。沖縄県国頭郡羽地村川上（名護市川上）の人。収容は最後の第九回でプレシディオでは五階にいた。

高野キヨカ

高野政喜の妻。夫の呼び寄せで一九二二年十一月十七日にハバナに入っている。二十四歳だった。政喜はペルーからの転航で、その頃はイスラの対岸のバタバノにいた。漁師をしていたかもしれない。政喜は六五年に、キヨカは七九年三月九日にバタバノで死亡している。熊本県下益城郡隈庄町宮地（熊本市南区城南町宮地）の人。

佐藤ミトク

福島県耶麻郡長瀬村三郷字三郷（耶麻郡猪苗代町三郷）の人で、一九二二年十一月十七日にハバナに入っている。二十一歳だった。旅券申請では「茂」の妻となっているが、佐藤茂という先行移民はいない。どんな事情があったのか。福島県の出身で佐藤信一郎という人が一九年に入っているが、この人と関係があるのかもしれない。移民史にもいろんなドラマがある。

中川恵迪

一九二一年十一月十七日に、妻金福と養女露を同行、ハバナに入っているが、その後のことがわからない。四十三歳という、移民としては高齢だったから、一時滞在だったかもしれない。

高知県高知市浦戸町（高知市浦戸）の人。露は養女だったというがどうだろう。入国に制限があったから、俄縁組みだったかもしれない。収容までに帰郷しているだろう。

中川金富

中川恵迪の妻。三十三歳で養女露を連れて夫に同行、一九二二年十一月十七日にハバナに入っているが、その後のことがわからない。高知県高知市浦戸町（高知市浦戸）の人。

中川露

中川恵迪の養女。二歳だった。中川夫婦に連れられ一九二二年十一月十七日にハバナに入っている。

中野キサ

夫の中野新蔵の呼び寄せで、一九二二年十一月十七日に新蔵の弟の音吉と甥の藤田乗祐といっしょにハバナに入っている。二十一歳だった。その後、戦前戦後を通じてシエゴ・デ・アビラにいたが、革命後の六四年に新蔵が死亡したあと、家族でアメリカに亡命した。滋賀県伊香郡杉野村金居原（長浜市木之本町金居原）の人。

中野音吉

一九二一年十一月十七日に、兄の中野新蔵の呼び寄せで新蔵の妻キサ、甥の藤田乗祐といっしょにハバナに入っている。三十歳だった。新蔵はシエゴ・デ・アピラで理髪店を開いていたから、同じように理髪師をはじめたのではないか。戦前に帰郷している。滋賀県伊香郡杉野村金居原（長浜市木之本町金居原）の人。

藤田乗祐

中野新蔵の甥で、一九二一年十一月十七日に中野の妻キサといっしょに呼び寄せられハバナに入っている。両親は大反対だったらしい。十九歳だった。カマグエイのシエゴ・デ・アピラで理髪師をしていた中野のもとで技術を見習い、独立してハグエヤルで開業。その後、バラグア (Baragua) に移り、二七年にキューバ婦人のホアキナ (Joaguina) と結婚している。理髪店は自宅の居間や玄関先を使えば簡単に開業できて、たいして元手もかからなかったから、新参者には打って付けの仕事で、日本人は手先が器用だったからか、よく繁盛した。それがキューバ人の同業者の反感を買い、法律で資格試験が課されるようになり、三〇年に全国一斉に資格試験が実施された。日本人を閉め出すのが目的で、日本人は審査官にコネや袖の下を使わなかつ

たため八割近くが不合格になり、転職したり、ほかに移らざるを得なかった。藤田もそんな一人だったのだろう、理髪師をやめ、三八年には、死亡した高山猪熊の農地を買い受けてじゃがいも作りをはじめた。しかし、うまくいかず、飲食店を兼業したりして暮らしていた。収容中は、妻はラス・ビジャス（ビジャ・クララ）のプラセタス（Placetás）の実家に子どもを連れて戻っていた。それで釈放後はプラセタスに移って、しばらく飲食店をしたあと、石鹸づくりをはじめている。戦後の混乱期で物資が不足していたから、おもしろいほど売れたらしい。だが、長くは続かず、今度はゴムの再生業をはじめた。アメリカから航空機の古タイヤを安く仕入れ、砂糖耕地で使う牛車の車輪につけて売るといふ新しの商売だった。それが人気を呼んで、マタンスのホベジャノス（Jovellanos）に工場を建ててずいぶん繁盛したらしい。だが、革命後の接収ですつからかんになっている。子どもは三人いて、長男と次男はアメリカに亡命、長女は結婚してホベジャノスに残ったが、藤田は七〇年に单身帰郷。妻のホアキナは八〇年にアメリカから長男がヨットでハバナ西郊のマリエル港に迎えに来てマイアミに亡命している。この八〇年には、同じようにして、マイアミから家族や縁者を迎えに来るヨットやボートがマリエル港に殺到して話題になった。財産を持ち出すことは許されず、みんな着のままの亡命だった。そして、翌八一年には、藤田も郷里から妻の元に移っている。ものごとく動じない人で、次々といろんなことを思いついては、それを商売というかたちにしていった。



イスラのプレシデ^ンィオ。中央が日本人収容棟
右はドイツ・イタリア人収容棟、左は囚人棟

収容時も、第六回収容で三階の階主任をしていて、栄養不足の解消のために炊事係を買って出ると、みんなの口に合う日本食をつくるなど食事改善に知恵を絞って仲間によるこぼれている。滋賀県伊香郡木之本町金居原（長浜市木之本町金居原）の人。郷里は江州伊吹山の麓でよく知られた薬の里で、帰郷中はけっこう大きく薬草栽培をしていて、そのあとがいまも村で引き継がれているらしい。

稲倉積

一九二一年十一月十七日に、同村の湯中清夫婦といっしょにハバナに入っている。十六歳だったから、湯中に同行というかたちでの渡航だっただろう。カマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のモロンにいたらしく、三〇年代だと思いが、モロンにい

た日本人の集合写真に姿が見える。収容は第六回グループで四階にいて、釈放後もモロンにいたが、五〇年代に帰郷している。同郷人に稲倉賢寿がいるが、積の呼び寄せだろうか、二五年に入っていて、同じように五〇年代に帰郷している。鳥取県西伯郡餘子村竹内（境港市竹内町）の人。

湯中清

同村の稲倉積を同行、一九二二年十一月十七日に妻のれいといっしょにハバナに入っている。三十一歳だった。その後、カマグエイのフロリダ (Florida) で理髪店を開いていた。収容は遅く、第八回グループで四階にいた。釈放後の五二年にフロリダで死亡していて、ハバナの慰霊堂には第二十八号セルに遺骨が残っている。鳥取県西伯郡餘子村竹内（境港市竹内町）の人。

湯中れい

湯中清の妻。一九二一年十一月十七日に夫といっしょにハバナに入っている。いつ亡くなったか、帰郷されたかどうか、詳しくわからない。鳥取県西伯郡餘子村竹内（境港市竹内町）の人。

北崎ミヨ

一九二一年十一月十七日にハバナに入っていること以外、何もわからない。熊本県の人。福岡県の北崎政次郎一族はよく知られているが、熊本県出身の北崎姓はこの人しかない。

鶴丸信市

いつキューバに入ったのか、わからない。カマゲエイのフロリダにいたが、大平慶太郎と関係があったか、あるいは大平商店で働いていたのか、一九二三年四月に大平の球麟荘での集合写真に姿が見える。収容は第六回グループで三階にいた。キューバで死亡した形跡がないから、釈放後の五〇年代に帰郷していると思う。福島県の人。「信一」かもしれない。

前田朝光妻

前田朝光の夫人だが、名前も、いつキューバに入ったのかもわからない。沖縄県国頭郡大宜味間切饒波村（大宜味村饒波）の人。

藤田寅蔵

一九二一年十一月二十二日にハバナに入っている。その後はラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のグアヨス（Guayos）で理髪店を開いていた。第六回收容で、革命後の六六年に死亡している。福島県の人。

西村伊太郎

一九二一年に呼び寄せで入っているが、だれが呼び寄せたのかがわからない。田所彦次だったかもしれない。戸主で、移民としては高齡の四十歳だった。三〇年にはオリエンテ（オルギン）のクエト（Crueto）で理髪店を開いていたことがわかつている。高知県高岡郡川内村大内（吾川郡いの町大内）の人。

中平藤子

一九二一年に夫の呼び寄せで入っている。中平隆晴の夫人だと思う。二十二歳だった。隆晴はオリエンテ（オルギン）のタカホにいて、五五年に死亡している。夫人はその後どうされたか、キューバで亡くなった形跡がないから帰郷していると思う。高知県高岡郡高岡町乙（土佐

市高岡町乙)の人。

田村秀吉

一九二一年に、兄田村徳重の妻栄枝と同行、ハバナに入っている。二十八歳だった。ハバナで日本商店を経営していた大平慶太郎の呼び寄せで、最初は大平商店で働いていたのだろうが、二〇年代末にはカماغエイのエスメラルダ (Esmeralda) に移って理髪店を開いていた。たぶん収容前に帰郷していると思う。高知県高岡郡波介村波介(土佐市波介)の人。

田村栄枝

田村徳重の妻。一九二一年に夫の呼び寄せで、徳重の弟秀吉といっしょにハバナに入っている。二十九歳だった。その後のことは徳重の項に詳しく書いたが、ハバナから、カماغエイ、エスメラルダと移って、戦後の五三年に夫といっしょに帰郷している。高知県高岡郡波介村波介(土佐市波介)の人。

清水梅吉

ハバナの大平商店で働いていた田村徳重と同郷で、その紹介だろう、大平慶太郎の呼び寄せ

で、田村の妻栄枝や弟秀吉といっしょに、一九二一年にハバナに入っている。三十歳だった。大平商店は三〇年代に入ると経済不況の煽りを受けて経営が悪化したため、店員は独立したり、ハバナを離れてカマグエイやシエゴ・デ・アピラに移ったりしているが、清水はどうだったか。三〇年代だと思いが、日本人会役員会の集合写真にその姿が見える。収容は第六回グループで、プレシディオでは四階にいた。この階は本島のハバナ以外の地方の人が多かったから、収容当時はカマグエイあたりになっていたのかもしれない。釈放後、革命前にキューバを離れていると思う。キューバで死亡した形跡がない。高知県高岡郡波介村波介（土佐市波介）の人。

市原源

田村秀吉、清水梅吉と同行、大平慶太郎の呼び寄せで一九二一年にキューバに入っている。二十五歳だった。大平商店で働いて、収容まではハバナにいたと思う。第六回収容で三階にいたからだ。この階はハバナ在住者が多かった。釈放後にカマグエイに移ったと思う。エスメラルダ (Esmeralda) について、革命前の五〇年代に帰郷している。高知県高岡郡波介村波介（土佐市波介）の人。

須山ヤエ

須山藤太郎の妻。二十歳で一九二一年に呼び寄せられている。藤太郎は東洋移民合資のメキシコ移民で、北部コアウイラのエスペランサ炭坑に入ったが逃亡、革命軍の傭兵に入ったりしたあと、一五年にキューバに転航している。その後、ラス・ビジャスのセントラルを転々としたあと、トリニダーで死亡。ヤエはその後もトリニダーにおいて八二年に死亡している。福岡県朝倉郡大庭村入地（朝倉市入地）の人。

北崎好助

北崎政次郎の弟で、一九二一年に二十八歳で呼び寄せられ、二五年に妻オツナを呼び寄せている。収容では、第六回グループの一人だから、本島のどこかにいたのだろうが詳しくわからない。バタバノで漁師をしていた可能性が高い。収容中に病気で倒れハバナの病院に運ばれ、四四年一月二十九日に死亡している。肺結核だった。福岡県糸島郡北崎村宮浦（福岡市西区宮浦）の人。

井上平四郎

いつキューバに入ったのかわからないが、一九二一年八月九日付でハバナの日本領事館に旅券申請して、パナマ経由で帰郷している。一八八〇年五月一日生まれだから四十一歳だった。熊本県玉名郡木葉村稲佐（玉名郡玉東町稲佐）の人。

半沢常吉

この人は一九二一年十一月二十一日付で旅券申請していて、同日、同様に申請した同郷の加藤倉蔵や佐藤三郎は二二年一月二十二日にハバナに入っているが、この人の記録がない。旅券申請だけで、何かの事情でキューバには入っていないかもしれない。二十歳だったが、キューバでのあしどりが見つからない。福島県伊達郡睦合村万正寺字沼田（伊達郡桑折町万正寺沼田）の人。

湊雪雄

祖父湊永吉の呼び寄せで、一九二二年十一月十七日にハバナに入っている。十五歳だった。すぐにイスラに渡り、フィンカ・フカロ地区で祖父について農業をはじめ、五年後、永吉が帰郷し

たあとも一人残ってピーマンを中心に野菜づくりを続けた。二五年に妻のミサオを呼び寄せ、農業も順調にいつて、フォードの乗用車をもつまでになっていた。当時、イスラで車をもつていたのは、ほかに菅原丈之進、若藤喜作、原菅次、大下関三、岡田島市くらいなものだった。だが、収容で農地を接収され、釈放後はもとのように農業ができず、戦後はずっと、同じイスラの原田茂作の農場に寄寓して働いていた。言葉数の少ない、ひたむきな人だったが、お会いした翌年の八三年七月二十六日に死亡している。広島県広島市安佐南区安古町上安字萩原（広島市安佐南区上安字萩原）の人。ミサオは七一年十一月六日に死亡。徳生と邦子のほかに一男一女がいたと思う。

重野直之助

姓は重野でなく「室野」かもしれない。一九二一年七月二十二日付で旅券が下りているが、キューバに入っているかどうか確認がない。三十四歳で、渡航していたとしても、普通旅券だったから商用の可能性が高い。京都府下京区の人。

川手実登

一九二一年にペルーから転航し、イスラ・デ・ピノスで農業をしていた。そして七年後、同

郷の内藤五郎が二八年三月二日にハバナに入つたときに、イスラから引き揚げて帰郷するといふ川手に会っている。清貧な人だつたのだろう、一万ドルを貯めていたという。広島県安佐郡伴村（広島市安佐南区伴）の人。

山本良彦

一九二一年八月二十七日にハバナに入っているが、その後のことがわからない。早くに帰郷しているだろう。和歌山県の人。和歌山出身の山本姓はほかに三人いるが関係がわからない。

渡辺良二郎

一九二一年八月二十七日にハバナに入っていること以外、何もわからない。新潟県の人。新潟からの榎本移民の一人に渡辺良三郎がいるが、その兄かもしれない。良三郎はカマグエイ（シエゴ・デ・アビラ）のプンタ・アレグレ（Punta Alegre）にいたが、二四年に死亡している。

内田良助

一九二一年にキューバに入っている。カマグエイかシエゴ・デ・アビラにいたと思う。日にちはわからないが、カマグエイ（シエゴ・デ・アビラ）のガスパル（Gaspar）で死亡している。

慰霊堂の第八番セルに位牌が残っているから、二〇年代後半の死亡だろう。広島県の人。

井上広美

一九二一年に妻藤子といっしょに入っていること以外、何もわからない。早い時期にキューバを離れていると思う。高知県の人。高知の人でほかに井上姓はいない。

井上藤子

井上広美の妻。一九二一年に夫婦で入っていること以外、やはり何もわからない。高知の人。

井上広美

西村貞虎

一九二一年に妻といっしょに入っているが、その後のことがわからない。高知県の人。高知の人で西村姓はもう一人、オリエンテ（オルギン）のクエト（Cueto）で理髪店を開いていた西村伊太郎がいるが、縁戚がどうか。

西村貞虎妻

一九二一年に夫の貞虎とキューバに入っているが、名前もわからない。高知県の人。

加藤倉蔵

福島県伊達郡桑折町字西町の人で、一九二二年一月二十二日にハバナに入っている。二十一歳だった。その後は、収容が第五回だから収容時にはイスラにいただろう。釈放後もイスラにいてサンタ・アナ地区で農業をしていた。一六年にペルーから転航してイスラに入った加藤倉吉の縁戚ではないか。七六年六月二十日にイスラで死亡している。

佐藤二郎

一九二二年一月二十二日に十五歳でハバナに入っていること以外、何もわからない。福島県伊達郡半田村南半田字田町（伊達郡桑折町南半田田町）の人。早い時期に帰郷しているだろう。これまで名前を「三郎」としてきたが、福島の紺野滋氏の調べで、佐藤質郎の弟の「二郎」とわかった。

小林留八

外交史料館資料では、一九二二年十一月二十一日に横浜からキューバに向かっている。一九二二年一月十日にハバナに入っている。二十四歳だった。その後、イスラに渡って農業を続けたあと、ハバナに移りメルカド・ウニコ（公設市場）で青果店を開いていた。収容は第四回グループの一人で五階にいた。第四回収容者は全員本島にいた人だから、ハバナには収容前に移っていたことになる。店舗を持っていたからめぼしい人物と見られて収容が早かったのだと思う。収容で店舗をなくしてしまったからだろう、釈放後はイスラのヌエバ・ヘロナに戻って、七六年六月十四日に死亡している。外交史料館資料では、一九二二年十一月二十一日に神奈川県庁から旅券が下りていて、戸籍は、北海道紋別郡紋別町紋別と記されている。ただ、紺野茂氏の調べでは、福島県伊達郡桑折町の人で加藤倉吉の妹の夫にあたることがわかっている。もともと紋別生まれの人か、明治期の移民によくあったことだが、移民過少府県に戸籍を移籍しての移民だったかもしれない。横浜からの同航者には福島県出身の半沢常吉、加藤倉蔵、佐藤三郎がいて、ハバナ上陸は小林が一月十日なのに加藤倉蔵は十二日後れの一月二十二日になっている。途中、何かの事情でパナマのコロンからは別船になったのだろう。一方、一九五五年発刊の『全墨日系人住所録』にはメキシコ・シテイのタクバヤ (Tacubaya) 在住に「小林留八」

がいる。出身地がわからないのが残念だが、理髪師をしていた。同姓同名の別人だと思うが、不思議な符合だ。

本田虎喜

一九二二年に入っていて、ずっとハバナにいたと思う。三〇年代半ばの天長節だと思うが、ハバナの日本公使館での集合写真に姿が見える。収容は第六回グループで、プレシディオでは四階にいた。釈放後もハバナにいて、七六年三月二十二日に死亡している。同姓で本田熊喜がいるが、弟か、縁戚ではないか。熊本県の人。

綾田幸次郎

一九二二年に入っていて、すぐにイスラに渡っていると思う。一八九六年十二月二十生まれの二十六歳だった。イスラにどれほどいたのかはわからないが、収容以前に本島西部のピナル・デル・リオに移っている。収容は第六回で、この回は本島各地の人だけの収容だったからそうとわかる。ピナルの土質はイスラとほとんど同じ石灰質で、それをどこで知ったのか、適地をさがし歩いてコンソラシオン・デル・スールに落ち着いた。イスラからピナルに移転した最初の日本人で、それに誘われ、戦後、収容で土地や仕事をなくした日本人が、ほかにもエラドゥ

ラ (Herradura) などピナル各地に移り、一時は五十人を超えるまでになっていた。ピナルからハバナまでの野菜の運送料が、イスラの各地区からヌエバ・ヘロナを経てハバナまでのそれと比べて半額に近く、それだけ安くニューヨーク市場に出荷できるからだ。そうしてピナルの日本人は、いづいぶん成功している。だが、革命で状況が一変する。農地所有は五カバジェリア (六十七ヘクタール) に制限され、政府指定の作物をつくらなければ肥料の配給がなかった。六十七ヘクタールといえば、正方形にすると八百メートル四方で、日本の感覚では十分広く感じるが、キューバでは小農レベルに過ぎず、さらに日本よりは地味も劣る。だから厳しい制限だったと思う。八四年四月二十七日、コンソラシオンで死亡。香川県綾歌郡瑞岡村字新居 (高松市国分寺町新居) の人。……二〇一二年のことだった。キューバから一通のメールが届いた。祖父のルーツをさがしているという。幸次郎の孫子からだ。それが四年後に実現した。二人、列車に揺られ郷里を訪ね歩いた。戸籍がわかっていたから、それにいまは Google がある。さがしあてるのもそんなに難しかなかった。もちろん幸次郎の兄弟姉妹は鬼籍にいたが、姪御さんが健在で、家族、縁者とも歓談でき、屋敷裏山の先祖墓にもお参りした。そして彼はキューバに帰っていった。いい青年だった。四十年前、同じようにキューバを訪ね歩いたのが逆になって、先々でよくしていただいた、そのほんの少しのお礼ができた気がしてうれしかった。香川の人にはほかに宮坂朱実しかない。

長野勇

大陸殖民合資のメキシコ移民として一九〇七年四月二十六日に横浜を発ちオアハケニヤに入っている。オアハケニヤでのことは詳しくわからないが、妻のシゲノを呼び寄せたのだろう、二二年にいつしよにキューバに転航。キューバでは野田浅太郎が借りていたハバナ南西のサン・アントニオ (San Antonio) のキューバ人の農園で、管理人として暮らしていて、子ども (ミツ子) も生まれていたが、三二年二月六日、シゲノとともに某に殺害された。ミツ子 (Ada) は、当時、三歳だった。シゲノが身をもって庇ったのだろう、体の下に隠れて難を逃れている。某は岐阜県出身で、二四年にキューバに入っている。その後、ノイローゼ状態が続いて、事件時には療養のために長野宅に寄寓していた。凶行直後に自殺しているため動機もわからない。一人残されたミツ子は、農園主でミツ子のマドリナ (Madrina、教母) になっていた。キューバ婦人に引き取られて育ったが、革命後、六九年に婦人といっしよにアメリカに亡命している。婦人には男女二人ずつ四人の子どもがいて、その次女がスペイン人と結婚して一足先にアメリカにいた。日本人が殺害される事件はほかにもあったが、日本人の手になる殺害事件はこの一件だけ。某の姓名はわかっているが、ここでは伏せる。福岡県の人。二人の位牌はハバナのコロナ墓地、日系人慰霊堂の第二号セルに納められている。また、某は四百七十一号セ

ルに眠っている。哀しい事件だが、ともに冥福を祈りたい。

長野シゲノ

長野勇の妻。一九二二年に夫といっしょに入っている。勇はサン・アントニオで野田浅太郎の農園の管理人をしていた。三二年二月六日、ともに殺害されている。福岡県の人。

加藤タツオ

加藤勇逸の妻。一九二二年に先夫の遠山正治の呼び寄せでキューバに入っている。十八歳だった。正治のいたカマグエイのエスメラルダ (Esmeralda) で農業をしていたと思うが、正治が死亡したため同郷の加藤と再婚して、いっしょにイスラに渡って農業を続けた。戦後は、ハバナに移り、勇逸は七三年に、タツオは八七年七月十五日に死亡している。宮城県桃生郡川南村迫町 (登米郡迫町) の人。

島崎新平

一九二二年に妻を同行、キューバに入っている。その後は、カマグエイ (シエゴ・デ・アビラ) のバラグア (Baragua) のセントラルで働いていた。収容は第六回グループで四階にいた

が、釈放後の五〇年代に夫婦で帰郷していると思う。静岡県の人。山川一三の甥。

島崎新平妻

島崎新平の妻で、一九二二年に夫といっしょに入り、ともに戦後の五〇年代に帰郷している。静岡県の人。

永井敏夫

一九二二年に入っている。収容は第六回グループで、プレシディオでは四階にいたから、収容前には本島でもハバナ以外の地方にいたと思う。釈放後は、西部のピナル・デル・リオに移り、コンソラシオン・デル・スールで農業をしていたが、四八年に死亡している。熊本県の人。名前は「敏雄」かもしれない。

道上与市

パナマから一九二二年に転航していて、すぐにイスラに渡っていると思う。三年後の二五年四月六日に死亡している。呼び寄せだったのかどうか、仲間がいたのかどうかもわからない。広島県の人。

原菅次

一九二二年にパナマから入っている。ペルーからの転航で、道上与市と同航だったのでないか。その後どうしたか、キューバで死亡した形跡がない。広島県の人。

鈴木清一

一九二二年二月二十八日付で、パナマの日本領事館から旅券が下りている。道上与市、原菅次と同航ではなかったか、二十歳で、パナマでは理髪師をしていた。その後のことはわからないが、早くに帰郷していると思う。愛知県愛知郡猪高村高針（名古屋市名東区高針）の人。

比嘉吉次郎

兄比嘉吉村の呼び寄せで、一九二二年にパナマから転航している。二十一歳だった。その後、早い時期にカマグエイのシエゴ・デ・アビラで死亡していて、ハバナの慰霊堂の第七番セルに位牌が残っている。沖縄県国頭郡名護村名護（名護市名護）の人。吉村は一八年に父の吉助に呼び寄せられている。

安井卓蔵

一九二二年三月二日付でパナマの日本領事館から旅券が下りてキューバに入っている。二十一歳だった。申請書には「兄の呼び寄せ」と記されているが、その兄の名前がわからない。ほかに静岡出身の「安井」姓の人はいない。島梅吉の縁戚か、妻ナカの弟かもしれない。静岡県榛原郡坂部村坂部（榛原郡榛原町坂部）の人。

加藤政治

一九二三年四月二十五日に入っている。その後はハバナにいたのではないか。三〇年代の天長節だと思うが、ハバナの日本公使館での集合写真に姿が見える。収容は第六回グループで四階にいた。革命後の六八年三月四日に死亡している。神奈川県の人。

野瀬達馬

ペルーからの転航で、一九二三年五月二十八日付でリマの日本領事館から旅券が下りているが、キューバに入った日にちが確認できていない。二十歳で、呼び寄せだったが、縁者がわからない。高知県高岡郡高岡町下辻甲（土佐市高岡町）の人。中平隆晴と関係があるかもしれない。

い。

中島應親

一九二三年十二月五日にハバナに入っているが、その後、どこで何をしていたのかよくわからない。妹のケサノがイスラの原田茂作と結婚している。キューバにはそんなに長いなかつたと思う。収容前に帰郷していて、戦後は東京の上中里で夫婦で暮らしていたが、不思議な人で、いわゆる二号さんもいっしょにいた。州嶽を名乗り、日玖友好協会の監事だったか理事だったか役員をしていたと思う。何度もお宅を訪ねているが、笹のような酒豪で、すすめられるまま、いつも深酔いして、細々むかしを訊ねるのを忘れてしまっている。あの頃は子育てに忙しく無沙汰続きをするうちに亡くなってしまった。早くにキューバを離れていたからか、あまり日本人仲間の話はされなかった。鹿児島県始良郡の人。

原米吉

一九二三年十二月十二日にハバナに入っている。収容は第六回グループで三階にいたから、収容時には本島にいただろう。六七年八月五日にピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールで死亡しているが、収容前からいたのか釈放後に移ったのかどうかわからない。群馬県

の人。イスラにいた人は収容で土地を失った人が多く、釈放後はピナルに移る人がずいぶんいた。イスラと土質や気候が似ていたからで、収穫した野菜はハバナまでトラックで運び、船でニューヨーク市場に出荷していた。ハバナまでの距離がイスラよりは短かく、運賃が少なく鮮度も保てたので、土地を広げて手広く経営する人も多かつた。それが、革命で土地所有が制限されたためだめになってしまった。

田島キヌ

田島又兵衛の妻。一九二三年に呼び寄せられている。ごく早い時期にハバナで死亡しているが、日時がわからない。静岡県三島の人。

山本周平

一九二三年に入っているが、三〇年前後にベネズエラに転航している。それ以外、キューバでのことは何もわからない。和歌山県の人。山本良彦の縁戚かもしれない。

津山治吉

一九二三年に入っているが、詳しいことがわからない。福岡県の人。

中村福太郎

一九二三年に夫婦で入っているが、その後のことがわからない。キューバで死亡した形跡がないから帰郷していると思う。兵庫県の人。大陸殖民のコリマ鉄道移民で一九〇六年十月二十五日に神戸港を発った人に同姓同名の人がいる。福岡県八女郡辺春村（八女市立花町）の出身で二十四歳だった。同一人だとすれば、メキシコから転航したことになる。

中村福太郎妻

夫の中村福太郎といっしょに一九二三年に入っているが、名前もわからない。兵庫県の人。

竹本寅吉

一九二三年にハバナで脱船している。その後は、カマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のサンタ・ルシア（Santa Lucia）にいた。第八回收容で、革命前の五〇年代に帰郷している。福井県の人。

伊藤喜平

一九二三年に妻のさつきといっしょにキューバに入っているが、その後のことはわからない。宮城県柴田郡船岡村船岡字袋町（柴田郡柴田町船岡）の人。伊藤良助の縁戚かもしれない。

伊藤さつき

伊藤喜平の妻で、一九二三年にいっしょに入っている。十六歳だった。その後、一時帰郷したのか、再渡航で三〇年六月三日にもキューバに入っている。宮城県柴田郡船岡村船岡字袋町（柴田郡柴田町船岡）の人。

吉村ツマ

吉村半次郎の夫人。一九二三年に呼び寄せられている。その頃、半次郎はラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）州ハティボニコ (Hatibonico) のセントラルにいたのではないか。六五年十一月十二日、ビジャ・クララのサグア・ラ・グランデ (Sagua la Grande) で死亡している。熊本県の人。

二階堂喜一

福島県の人で、一九二三年に入っている。収容は第六回で三階にいた。釈放後はカマグエイ（シエゴ・デ・アビラ）のビオレタ（Violeta）にいたことがわかっているが、収容前からいたと思う。革命前の五〇年代に帰郷している。

田口作一

一九二三年に入っていて、二八年に妻のオイシを呼び寄せているが、ごく早い時期にハバナで死亡していて、慰霊堂の第二号セルに位牌が残っている。広島県御調郡諸田村諸毛（府中市諸毛）の人。

伊藤多次郎

一九二三年に入っていて、カマグエイのシエゴ・デ・アビラで理髪店を開いていた。収容は第六回グループで、釈放後はラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のグアイオス（Guayos）にいた。革命前の五〇年代に帰郷していると思う。広島県の人。

深川浅一

一九二三年に十八歳でキューバに入り、ハバナで大平慶太郎の農園で働いていた。その関係でめぼしい日本人とみられ、収容時には第一回グループで逮捕、収容されている。戦後は、カマグエイのシエゴ・デ・アビラに移り、マルシアル・ゴメス (Marcial Gomez) で暮らしていたが、九一年九月十三日に死亡している。広島県安佐郡中原村中野 (広島市安芸区中野) の人。香川武茂とは従兄弟にあたる。

高橋キワ

高橋祥太郎の妻で、一九二四年に呼び寄せられている。二十一歳だった。祥太郎はメキシコからの転航者で、ラス・ビジャス (サンクティ・スピリトゥス) のハティボニコにいた。祥太郎には先妻の娘だと思いがメキシコで生まれた一女ルカがいた。祥太郎もルカも日には不明だが、ハティボニコで死亡、その後、キワは原田 (甘利か) と再婚している。大分県下毛郡小楠村一ツ松 (中津市一ツ松) の人。

沖田忠

海外興業による第一回キューバ移民二十人の一人で、一九二四年二月三日に東洋汽船の楽洋丸で神戸を発ち、四月一日にハバナに着き、就労地のラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のトリニダーに入っている。二十四歳だった。キューバへの集団移民は、個人によるものは一九一六年の小川移民七十五人と二一年の榎本移民十七人、そして移民会社によるものはこの海外興業移民三百八十二人（うち二人が渡航途上で下船）だけ。ただ、この海興移民はそれまでの集団移民とはちよつとようすがちがって、自由契約移民という、言語矛盾の、不思議な移民だった。なぜそうなったのか。移民会社による移民というのは、本来は就労地での労働期間に年限が決められている契約移民だった。しかし、一九二〇年代に入るとアメリカをはじめ、契約移民の入国を禁止する国が多くなり、キューバでも二二年に外国人労働者規制法が復活して契約移民の送出国はむずかしくなっていた。そこで移民会社が考え出したのが契約期間に縛りをつけない「自由契約」移民だった。だから、この海興移民の募集要項にも、また、外務省に提出する渡航者名簿にも契約年限は記されていない。しかし実際には、自由契約とはいいがら、移民との契約には就労地のトリニダーの砂糖耕地での労働期間は三年と決められていたから、実際は契約移民と同じだった。さらに、現地に着いてみると契約とは情況がちがって、労働

環境はもちろん、日給も半分以下だった。だからほとんどは数週間、長くても一、二カ月で耕地を離れている。といつても、旅券は三カ月間は雇用主に預けることが義務づけられていて、耕地の出入りの検問もきびしかったから、着の身着のままの夜逃げ同然で逃亡、職を求めてカマグエイやラス・ビジャスを転々としている。ただ、不況の最中でセントラル（製糖所）には仕事が無かった。すると自分の腕を活かすしかない。思いついたのが理髪師だった。郷里では小さな頃から髪を刈ることぐらいは両親がしてくれるのを見知っていただろうし、そうでなくてもキューバ人の理髪師の見様見真似で技術はすぐに修得できた。さらに理髪店といつてもきちんとした店舗があつたわけでもなく、家の玄関前に小さな椅子を一つ出せばそれで十分だった。カマグエイに日本人理髪師が多かつたのはこうしたわけだった。だから、海興移民がはじまつた二四年以来、カマグエイやラス・ビジャスに日本人理髪師が急増する。それがキューバ人理髪師の仕事を奪うことになり、三〇年には理髪師試験法が制定され、理髪師資格試験が実施された。キューバ人理髪師が政治に働きかけた結果だった。だから結論も明らかだった。五十八人中合格したのは十一人だけで八十パーセントを超える四十七人が落第している。技術が問題だったわけではない。審査官に袖の下を使わなかつたからだだった。落ちた者はハバナに出て資産家邸のハルディネロをしたり、コシネロとして入ったり、あるいはピナル・デル・リオやイストラに移つて農業をはじめたり、また、キューバを見限つた者も少なくなかつた。沖田のトリ

ニダー後のことは何もわからない。たぶん早くに帰郷していると思う。広島県安佐郡三川村中安古市（広島市中区三川町）の人。

亀田亀一

海外興業第一回移民二十人の一人で、一九二四年四月一日にハバナに入っている。二十歳だった。トリニダーを出たあとは、三〇年にカマグエイで理髪師資格試験を受けているから、同地にいたことがわかる。二九年に妻のシノブを呼び寄せているが、早くに帰郷していると思う。広島県安佐郡伴村伴（広島市安佐南区伴）の人。

湊正美

海外興業第一回移民二十人の一人で、一九二四年四月一日にハバナに入っている。二十二歳の誕生日だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。広島県高田郡根野村上根（高田郡八千代町上根）の人。ほかに湊姓には湊永吉、雪雄親子がいるが、縁戚関係があるかどうか。

大植俣一

海外興業第一回移民二十人の一人で、一九二四年四月一日にハバナに入っているが、トリニダー後のことがわからない。二十二歳だった。広島県安芸郡仁保村妙見(広島市南区仁保)の人。

中本秀雄

海外興業第一回移民二十人の一人で、一九二四年四月一日にハバナに入っている。二十五歳だった。トリニダー後はどうしただろう、大植俣一と同郷で、キューバで死亡した形跡がないから早くに帰郷しているだろう。広島県安芸郡仁保村妙見(広島市南区仁保)の人。仁保村は、明治初期からハワイに多くの移民を出した移民村でよく知られている。

坂原末松

海外興業第一回移民二十人の一人で、一九二四年四月一日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダー逃亡後は、すぐにイスラに渡って農業をしていると思う。イスラには広島出身者が多かったからそれを頼ったのだろう。第五回収容でプレシディオでは二階にいた。この二階にいたのはほとんどがイスラの人だった。釈放後もイスラのフィンカ・フカロにいて、

七五年三月八日に死亡している。広島県安佐郡緑井村（広島市安佐南区緑井）の人。遺骨はヌエバ・ヘロナの日本人墓地にあつて、ハバナの慰霊堂の第一三九号セルに位牌だけがおさめられている。慰霊堂の一号セルから八号セルぐらゐまでは、地方の共同墓地に埋葬され、遺骨が収集できなかつたため、しかたなく位牌だけが納められているが、それ以後の戦後死亡者は、地方の場合は地元墓地に遺体が埋葬され、位牌だけが慰霊堂に納められているのがほとんどで、なかには分骨されて遺骨が納められている人もいる。

上口周市

海外興業第一回移民二十人の一人で、一九二四年四月一日にハバナに入っているが、その後がわからない。二十八歳だったから、郷里に妻子を残しての渡航だっただろうから、早くに帰郷していると思う。広島県安芸郡江田島村（江田島市江田島町）の人。

奥田市太郎

海外興業第一回移民二十人の一人で、一九二四年四月一日にハバナに入っているが、その後がわからない。二十一歳だった。上口周市、秋田秋太郎と同郷だから、いっしょに早い時期に帰郷しているのではないか。広島県安芸郡江田島村（江田島市江田島町）の人。

秋田秋太郎

海外興業第一回移民二十人の一人で、一九二四年四月一日にハバナに入っているが、その後がわからない。二十九歳だった。郷里に妻子を残しての渡航だっただろうし、上口周市、奥田市太郎とはほんの隣仲間だったから、いっしょに早くに帰郷していると思う。広島県安芸郡江田島村（江田島市江田島町）の人。

伊波伝助

海外興業第一回移民二十人の一人で、一九二四年四月一日にハバナに入っている。二十六歳だった。トリニダールのあとはラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニコにいたらしく、天長節記念だろう、二六年十月三十一日にハティボニコの日本人が集まったなかに姿が見える。その後はカマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のマハグア（Majagua）に移って理髪店を開いていたようで、二七年に妻ウトヲを呼び寄せていて、三〇年にカマグエイで実施された理髪師資格試験の受験者一覧にその名がある。合格したかどうか、収容は第六回で、収容前か、釈放後にラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニコに移っていて、革命前の五〇年代に帰郷している。沖縄県中頭郡美里村石川（うるま市石川）の人。



伊波伝助の旅券

渡久地甚一郎

海外興業第一回移民二十人の一人で、一九二四年四月一日にハバナに入っている。二十二歳だった。トリニダー後のことはわからないが、早い時期に帰郷していると思う。沖縄県国頭郡本部村伊野波（国頭郡本部町伊野波）の人。

玉城精徳

海外興業第一回移民二十人の一人で、一九二四年四月一日にハバナに入っている。二十二歳だった。早い時期に帰郷していると思う。沖縄県国頭郡本部村並里（国頭郡本部町並里）の人。

遠山正治

宮城県の人で、一九一六年に入っている。カマグエイのエスメラルダ (Esmeralda) にいたようで、二二年に妻のタツオを呼び寄せているが、その後いくらししないで死亡している。タツオはその後、同県人の加藤勇逸と再婚している。

神田卯一

小川移民三月組の一人。一九一六年三月二十九日にハバナに入っている。二十五歳だった。コンスタンシアの小川農場の崩壊後は、早い時期に帰郷していると思う。新潟県北蒲原郡紫雲寺村福岡（新発田市福岡）の人。同村の人に神田亀作がいる。

菅原与三郎

小川移民三月組の一人で一九一六年三月二十九日にハバナに入っている。三十一歳だった。やはり、小川農場崩壊後は早くに帰郷していると思う。新潟県北蒲原郡五十公野村下内竹（新発田市下内竹）の人。同村に菅原長吉がいる。

齋藤三次郎

小川移民十月組の一人。一九一六年十月十九日にハバナに入っている。三十三歳だった。小川農場崩壊後は早くに帰郷しているだろう。その後の形跡がない。新潟県北蒲原郡聖籠町蓮野（北蒲原郡聖籠町蓮野）の人。

本間サクヤ

小川移民の本間平治の夫人で、呼び寄せられ一九二二年八月二十七日にハバナに入っている。二十一歳だった。平治は小川農場崩壊後はマタンサスのセントラル・ティンガルに移ってハルディネロ（庭師）をしていた。日米戦争がはじまると、平治といっしょに長男の有平トマスも、二世だったにもかかわらず収容されているが、さらにサクヤも、フィリピンのパターン攻略の死の行進を強行した本間雅晴が佐渡の出身だったため同族と疑われ、女性は収容しないとされていたにもかかわらず逮捕され、ハバナ西郊のカンブレヘラに収容されていた。同様に、小川喜一の長女英子エバと山入端萬栄の長女マリアもともに収容されている。革命後、七〇年代半ばに夫と長女アンヘリタの家族といっしょにアメリカに亡命した。

玉城平義

海外興業第一回移民二十人の一人で、一九二四年四月一日にハバナに入っている。三十歳だったから郷里に妻子を残していただろう。キューバで死亡している形跡がないから、早い時期に帰郷していると思う。沖繩県国頭郡本部村並里（国頭郡本部町並里）の人。

松本亀三郎

玉城平義と同航で、海外興業第一回移民二十人の一人で、一九二四年四月一日にハバナに入っている。二十歳だった。キューバで死亡している形跡がないから、早い時期に帰郷していると思う。沖繩県国頭郡本部村並里（国頭郡本部町並里）の人。

森喜之助

海外興業第一回移民二十人の一人で、一九二四年四月一日にハバナに入っている。二十一歳だったが、その後がわからない。和歌山県西牟婁郡串本町（東牟婁郡串本町串本）の人。

飯島壮美

海外興業の第一回移民二十人の一人で、一九二四年四月一日にハバナに入っている。二十一歳だった。同郷の丸山広司、宮坂寛司といっしょで、海興募集での渡航だったが、実際は瀬在藤治の呼び寄せで、就労地のトリニダーには入っていない。なぜか。当時は移民を募集しても思うようには集まらず、海外興業は移民の頭数を揃えるために、主立った移民送出県に声をかけるなど募集に懸命だった。数を揃えればそれだけ船会社から割戻金といつてマージンが入ったからで、儲けの方法はいまの旅行会社とよく似ている。そうした移民会社からの依頼を受けて各府県で実際に動いていたのが教育関係者や、村の名士など、いわゆる先生と呼ばれる人たちだった。先生からいわれれば断われない、先生の発言力は村社会では絶対だった。移民政策と教育政策、移民と教育者は切り離せない、深い関係にあった。これが意外と移民史研究の盲点になっている。三人はその後、瀬在を頼ってカماغエイのセントラルに入り、ハルディネロをはじめた。しかし、不況の最中で日当が安く、まず飯島が、そして丸山も瀬在のもとを去っている。その後のことはわからないが、飯島は戦前にメキシコに転航して、同地で死亡したらしい。長野県埴科郡五旭村内川口（上田市五加）の人。

丸山広司

一九二四年に海外興業の第一回キューバ移民二十人の一人として十九歳でハバナに入っているが、実際は同郷の瀬在藤治の呼び寄せだった。どうしてだったか。移民会社による移民というのは、本来は就労地での労働期間に年限が決めている契約移民だった。しかし、一九二〇年代に入るとアメリカをはじめ、契約移民の入国を禁止する国が多くなり、キューバへも契約移民の送出手はむずかしくなっていた。そこで移民会社が考え出したのが契約期間に縛りのない自由契約移民だった。だから、募集要項にも、また、外務省に提出する渡航者名簿にも契約年限は記されていない。しかし実際には、自由移民とはいいながら、就労地のトリニダールの砂糖耕地での労働期間は三年と決められていたし、最低三カ月は旅券を雇用主に預けることが義務づけられていた。また、就労地の出入りには検問もあつてきびしく拘束されていたから、出ていくには夜逃げしかなく、多くはそうしている。もう一つ、丸山のような呼び寄せが同航していたのは、人が集まらなかつたからだ。移民会社は移民の送出にあつては、募集人員を外務省に申請し、その数の分だけ、船会社から割戻金が受け取れる仕組みになっていた。だから、頭数を揃えなければ利益が出なかつた。一方、呼び寄せられる側でも、移民（労働者）の入国制限が厳しく商用以外は単独での入国がむずかしかつたため、マージンは取られても移民会

社の募集に応じる方が何かと便利だった。この第一回移民には同郷の宮坂寛司と飯島壮美も同行していて、三人はハバナでほかの海興移民と別れたあと、カマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のハグエヤル（Taguayal）に移り、セントラルで労働監督をしていた瀬在のもとで働きはじめた。しかし、労働条件に不服だった丸山は一人、瀬在のもとを離れた。そして二七年に死亡している。肺結核だった。長野県上高井郡保科村（長野市若穂保科）の人。

宮坂寛司

海外興業による第一回キューバ移民二十人の一人として、一九二四年二月三日に神戸港を東洋汽船の楽洋丸で出発し、四月一日にハバナに入っている。ちょうど十七歳の誕生日だった。この海外興業のキューバ移民は、それ以前のペルー移民やメキシコ移民の場合とちがって、応募者のすべてが移民会社が契約した就労地に入っているわけではない。一九〇〇年前後には盛んだった移民送出国、二四年にアメリカで移民割当法（日本人移民排斥法）が成立すると急激に減少し、移民各社は生き残りのために、移民募集に躍起になっていた。そのため、就労地には入らない、呼び寄せ渡航者も合わせて送出するようになっていた。宮坂もそうした単独移民の一人だった。同郷の丸山広司、飯島壮美といっしょにほかの十七人とハバナで別れて、叔父の瀬在藤治のもとに向かっている。その後のことは自身の手記（『移民手記』の「生まれかわった



左から宮坂寛司、長男慎一、妻けさ野、瀬在千恵子、瀬在藤治

ら……」に詳しい。収容は第六回グループで四階にて自治会の階主任をしていた。九七年五月十七日にハバナで死亡。長野県埴科郡埴生村鑄物師屋（更埴市鑄物師屋）の人。

小林暎

小林百輝の弟。一九二四年四月一日に海外興業の第一回移民二十人の一人としてハバナに入っているが、百輝の呼び寄せで、トリニダーには入っていない。二十歳だった。叔父がブラジルにいて、それを頼って戦前にキューバを離れ、ブラジルで死亡している。長野県上伊那郡飯島村田切（上伊那郡飯島町田切）の人。

高橋ヨシ子

一九二四年四月一日にハバナに入っていて、ラス・ビジャス（シエンフエゴス）のオルキタス（Horquias）で早い時期に死亡していることしかわからない。高橋豊作の先妻か、縁戚ではないかと思う。熊本県の人。

土屋敬三

一九二四年四月一日に、海外興業の第一回キューバ移民二十人と同船でハバナに入っている。加藤英一夫人の弟で、ハバナの加藤クリーニング店で働いていたが、三一年二月六日にハバナ南西のサン・アントニオで自殺している。岐阜県の人。

土野矢之助

一九二四年四月一日にハバナに入っている。二十歳だった。加藤英一に呼び寄せられ、加藤の経営するハバナのクリーニング店で長く働いていた。彼は土屋来吉と従兄弟だから、加藤夫人とも従姉弟かもしれない。そして、収容時には主要な日本人として加藤らとともに第一回グループとして逮捕され、イスラに送られている。加藤は玖馬日本人会の初代会長として日本人



土野矢之助とノビア

を代表する人だったが、そのもとで番頭のように働いていたからめぼしい人物と見られたのだろう。生涯独身を通し、八二年に訪ねたときは、ハバナ市内の養老院アシロ・サントベニアに元気でいて、土野を慕うキューバ婦人がやさしい眼差しで傍らにいた。温厚を地で行くような人だったが、翌年十二月二十九日に死亡。一九〇三年九月二十九日生まれ。岐阜県武儀郡上之保村字名倉(武儀郡上之保村名倉)の人。土屋来吉とは従兄弟だった。

伊藤留

一九二四年四月一日にハバナに入っている。収容は第六回で、プレシディオでは四階にいたから、収容前には本島のハバナ以外の地方にいたのではないか。革命後の六八年十月二十八日にハバ

ナで死亡している。熊本県の人。

高野末好

子ども頃は、まちがいなく、悪餓鬼だったと思う。祖父のような年齢の人を軽評して失礼なかぎりだが、丸坊主頭の好々爺然とした風体に、いたずらっぽい目がやさしい人だった。ハバナで日系人連絡会の役員会があるというので内藤さんについていった。最古者（九十三歳）の榊原利一を頭に、宮坂寛司（七十五歳）、肥田野勇（七十四歳）、フスト香川武茂（六十八歳）、そして二世二人に、内藤さんとそろったなかに、初対面のぼくに、まっ先に手を差し伸べてくれたのがこの人だった。七十六歳で、メンバーのなかでは榊原に次いで二番手だったが、一番若く見えた。ただ、ほとんど話を訊けずに終わっている。一九二四年四月一日にハバナに入っている。十七歳だった。収容は第六回グループだったから本島にいたと思う。革命後はハバナにいて、九三年四月二十六日に死亡している。熊本県下益城郡城南町字赤見（熊本市南区城南町赤見）の人。八四年に一時帰郷されたときは成田に迎えに行つて、乗り換えの熊本便にお送りした。故郷では甥御さんたちに大歓迎されたらしい。ただ、健在だったお姉さんが痴呆症で記憶がなくなっていたのが心残りだった。それが、帰り際になって記憶を取り戻し、「おまえも苦労したんだなあ、こんな頭になつて」と丸坊主頭を撫でてくれたのが何よりうれしかった、と、

のちに話してくれた。

加藤子三

加藤英一の妻。一九二四年四月一日に呼び寄せで入り、戦後の六七年に一家で帰郷している。
岐阜県の人。

野田浅太郎

一九〇七年に大陸殖民第十回メキシコ移民として二十歳でオアハケニヤに入っている。そこからの転航だったのか、それとも一時帰郷したあとの渡航だったのかわからないが、二四年に海外興業の第一回移民の宮坂寛司、土野矢之助、高野末好らと同じ船でキューバに入っている。三十七歳だった。ハバナのマリアナオの資産家宅でコシネロをしていて、三七年、資産家の指示でイギリス、フランスに料理研究のために渡航している。料理の腕はキューバ人の間でもよく知られていた。スペイン語に堪能だったらしいが、四九年十二月十二日に、資産家の留守の間に警備員と貸金のこと口論になり、一時はおさまったが、その夜、仕事を終えて帰るとき、門のところで待ち伏せされ射殺された。これには余談があつて、事件の数日前に某宅を訪ね、二十ペソ札がぎっしり詰まったトランクを預けている。そんなことから、警備員による



日系人連絡会役員会（1982.9.2）、左から三人目が高野末好

所持金目当ての殺害だったみられたが、そのトランクがどこに行ってしまったのか、某人も語らないまま、終わっている。第六回收容で四階にいた。福岡県三潴郡大溝村横溝（三潴郡大木町横溝）の人。生家は畳表の卸問屋で、五人兄妹の四番目（次男）、下の妹は、写真結婚でハワイに移民、のちにホノルルに女学校を創立したことで知られる立川サエである。

菅井忠吉

一九二四年四月一日に夫人といっしょにハバナに入っている。東京府出身者は六人しかいないが、そのうちの一人。たぶん、ずっとハバナにいて、何か商店を開いていたのではないかと思う。二七年一月二日に発足した玖馬日本人会では会計役をしていた。また、収容は第六回グループで三階に

いて、自治会委員をしていたが、釈放後の四九年八月九日にハバナで死亡している。三〇年代の天長節だと思うが、日本公使館での集合写真のなかにも姿が見える。

菅井忠吉妻

夫菅井忠吉といっしょに一九二四年四月一日にハバナに入っている。忠吉は戦後の四九年に死亡しているが、夫人はその後どうしたか、たぶん帰郷していると思う。東京府（東京都）の人。

浦塚マサエ

浦塚滝蔵の妻。呼び寄せで一九二四年四月六日にハバナに入っている。滝蔵はピナル・デル・リオの鉱山の町ミナス・デ・マトンブレで大工をしていた。マサエは五六年十二月二十四日に、滝蔵は七二年に死亡している。勇、進 (Pedron)、正雄 (Nilo)、チツ子 (Surima)、ツギ子 (Adelina)、シモ子 (Lidia)、玉子の三男四女がいる。大分県の人。

仲程銀吉

海外興業第二回移民二十人の一人で、一九二四年三月二十四日に東洋汽船の銀洋丸で神戸を

発ち、パナマ経由で五月八日にハバナに入っている。二十三歳だった。ラス・ビジャス（サンクテイ・スピリトゥス）のトリニダー砂糖耕地に入ったことは第一回移民と同じで、やはりほとんどが環境や労働条件に堪えきれず、数週間あるいは数カ月で逃亡し、日本人が多かったカマグエイのセントラルを仕事をさがして転々としていた。仲程はどうだったか。早い時期に帰郷していると思う。沖縄県国頭郡本部村伊野波（国頭郡本部町伊野波）の人。

仲宗根勝吉

沖縄県国頭郡本部村伊野波（国頭郡本部町伊野波）の人。海外興業第二回キューバ移民二十人の一人で、一九二四年三月二十四日、神戸港を東洋汽船の銀洋丸で発ち、五月八日にハバナに入っている。二十一歳だった。海興移民はすべてがパナマ経由だった。沖縄出身者で仲宗根姓はほかに六人いるが、うち二人が同郷（本部村伊野波）で、仲宗根安成は勝吉と同航、仲宗根政三郎は海外興業第五回移民で四カ月後れでキューバに入っている。海外興業によるキューバ移民は、一九二四年二月三日発の第一回移民にはじまり、二六年五月三日発の第二十四回移民まで、二年三か月の間に三百八十人（出国したのは三百八十二人だが、二人が途中で下船）にのぼり全体の三分の一にあたるが、うち百二十九人が沖縄出身者で、全体の三分の一を超えている。記録上は三〇年五月九日出航の第二十六回まで送られているが、第十九回以降は応募者がほとん

どなく、毎回三人以下の呼び寄せを、船会社からの割戻金目当てに送出していたにすぎない。勝吉は、ハバナでは大平慶太郎の仲介でホテル・ポストンに宿泊、トリニダーに入ったが三日目に逃亡。日給は一ドル二十セントで、ポケットには十八ドル残っていたから汽車でシエゴ・デ・アピラに出て、駅からタクシーに乗って前田朝光のもとに身を寄せたという。その後、モロンに移り島梅吉のもとで理髪を覚えて独立した。弟子入りした最初の日は髭剃りが怖くてもたたしていると、客が剃刀をとって自分で剃って帰っていったと笑った。収容は第六回で、釈放後はモロンに戻ったのか、ハバナに出たのかわからないが、革命後はハバナにいて、八三年八月十日に死亡している。ハバナでお会いしたときは、夕方で時間がなく、玄関先での立ち話に終わって詳しく聞けなかったのが残念だった。

与那城久吉

海外興業第二回移民二十人の一人で、一九二四年五月八日にハバナに入っている。トリニダー後はどうしたかわからない。三十歳だったから、妻子を置いての渡航だっただろうから、早くにキューバを離れていると思う。沖縄県国頭郡金武村金武（国頭郡金武町金武）の人。

仲宗根安成

海外興業第二回移民二十人の一人で、一九二四年五月八日にハバナに入っている。二十六歳だった。就労地のトリニダーの砂糖耕地からは、やはり早くに逃亡しているだろう。仲程銀吉、仲宗根勝吉、崎原重助と同郷で、逃亡後、勝吉はカマグエイのモロンで理髪師になったが、安成はどうだったか。その後のことはわからない。早い時期に帰郷していると思う。沖縄県国頭郡本部村伊野波（国頭郡本部町伊野波）の人。

崎原重助

海外興業第二回移民二十人の一人で、一九二四年五月八日にハバナに入っている。二十八歳だった。就労地のトリニダーの砂糖耕地からは、やはり逃亡しているだろう。仲程銀吉や仲宗根安成と同様、早い時期に帰郷していると思う。沖縄県国頭郡本部村伊野波（国頭郡本部町伊野波）の人。

仲問宗清

海外興業第二回移民二十人の一人で、一九二四年五月八日にハバナに入っている。二十九歳

だった。キューバで死亡した形跡がないから、早い時期に帰郷していると思う。沖縄県国頭郡本部村謝花（国頭郡本部町謝花）の人。

中村万平

海外興業第二回移民二十人の一人で、一九二四年五月八日にハバナに入っている。四十二歳だった。ほかの仲間同様、トリニダーはごく短期に逃亡しているだろう。すぐにイスラに渡って農業をはじめたと思う。翌二五年十月二十八日に次男の義人を呼び寄せている。義人は第五回収容だが、万平は収容されていないから収容前に帰郷したのではないか。義人は釈放後はピナル・デル・リオのエラドウラに移って農業を続け、革命前に帰郷している。いい切りをつけたと思う。そうでなければ帰れなくなっていただろう。釈放後、ピナルに移った人は、たいてい四、五年で農業も順調に運ぶようになり貯えもできるようになっていく。その後、五〇年代にどうするかが運命の岐路だった。熊本県上益城郡白旗村白旗（上益城郡甲佐町白旗）の人。

光永蕾

海外興業第二回移民二十人の一人で、一九二四年五月八日にハバナに入っている。二十二歳だった。キューバで死亡した形跡がないから、早い時期に帰郷していると思う。熊本県菊池郡

菊池村西寺（菊池市西寺）の人。同村の光永タケが二五年十月二十八日にハバナに入っているが、妻か妹ではないか。そうでないかぎり単独での入国は原則的にできなかった。タケはのちに加藤千代三郎と結婚している。

坂原一登

海外興業第二回移民二十人の一人で、一九二四年五月八日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダーでは契約に就労期間の規定はなかったが、最低三カ月間は就労地を離れることが許されず、旅券も雇用主に取り上げられていた。炎天下の労働で、賃金は契約の半額にも満たなかったため、三カ月を堪えた者はごくわずかで、ほとんどは数週間で耕地を離れている。坂下はどうだったか、カマグエイあたりで仕事を見つけた者、イスラに渡った者はまだ恵まれた方で、海興移民の大半はキューバを離れている。そうして帰郷する者もいたが、アメリカをめざす者も多かった。まずメキシコに渡り、そこからエージェントを使ってカリフォルニアに密入国しようとするのだが、ほとんどは失敗に終わっている。広島県安佐郡緑井村（広島市安佐南区緑井）の人。

山下幸蔵

海外興業第二回移民二十人の一人で、一九二四年五月八日にハバナに入っている。二十一歳だった。その後の形跡がないから、早くに帰郷していると思う。広島県安芸郡江田島村（江田島市江田島町）の人。

大下関三

海外興業第二回移民二十人の一人で、二四年三月二十四日、東洋汽船の銀洋丸で神戸を出発、五月八日にハバナに入っている。二十六歳だった。トリニダーの砂糖耕地を出たあとは、イスラ・デ・ピノスに渡り、サンタバーバラ地区で農業をしていた。二九年に妻ヨシコを呼び寄せているが、いくらかのまとまった貯えを手に三〇年代半ばに帰郷していると思う。広島県安佐郡伴村（広島市安佐南区伴）の人。

丸本平一

海外興業第二回移民二十人の一人で、一九二四年五月八日にハバナに入っている。二十四歳だった。同航の山下幸蔵、新本勇松と同じでトリニダー後のことがわからない。広島県安芸郡

江田島村（江田島市江田島町）の人。

新本勇松

海外興業第二回移民二十人の一人で、一九二四年五月八日にハバナに入っている。二十七歳だった。トリニダー後は早くに帰郷していると思う。広島県安芸郡江田島村（江田島市江田島町）の人。

沖悟

川手実登と同郷。海外興業第二回移民二十人の一人で、一九二四年三月二十四日、東洋汽船の銀洋丸で神戸港を出港、五月八日にハバナに入っている。二十三歳だった。トリニダーを出たあとはイスラに渡って、サンタ・バルバラ地区で野菜づくりをはじめた。イスラでは同郷仲間が集まって暮らすことが多く、沖も市場與一と隣同士で暮らしていたが、二八年四月の日中、自宅前で暴漢に襲われて死亡。警察は捜査をしたが犯人はわからず終いだった。日本人移民にとって、一万ドルを稼いで帰るといのが夢だった。だから日本人は貯えがあるとみられて、それを狙われ殺害されるという事件が本島各地でも起こっている。市場、川手、沖と、同郷ながら、一人は一万ドルを手に錦衣帰郷、一人はもう少し貯えようと残留して失敗、そして沖は

殺害されるといふ、三者三様に明暗を分けたキューバ行だった。広島県安佐郡伴村（広島市安佐南区伴）の人。玖馬日本人会作成の「キューバ日系人死亡者名簿」を見ると、沖の死亡を届けしたのは甥の市場與一となっている。ただ、市場は一八九五年生まれで、沖は一九〇一年生まれだから、甥の市場の方が年上になる。むかしは子どもが多かったから、こんな逆転もめずらしいことではなかった。いずれにしても叔父、甥の縁戚だからイスラでは隣同士で暮らしていたのだろう。

福原隆徳

海外興業第二回移民二十人の一人。一九二四年三月二十四日に神戸を発ち、五月八日にハバナに入っている。二十一歳だった。海興移民はラス・ビジャス（サンクティスピリトゥス）のトリニダーにあつた砂糖耕地に就労する契約だったが、すべてがそうだったわけではなく、二十人という募集人員を揃えるために、呼び寄せなどの自由移民もいっしょに送り込んでいた。いまの旅行会社といっしょで、予定人員を揃えなければ船会社からの割戻金が入らないからだった。だから、福原がトリニダーに入っていたかどうかは、正直、わからない。収容は第八回グループで三階にいたから、収容前にはハバナにいたと思う。その収容中に体を悪くしハバナの病院に運ばれて四四年一月三十日に死亡している。胃癌だった。広島県比婆郡庄原町庄原（庄

原市)の人。庄原出身者はほかにいない。

前川新次郎

海外興業第二回移民二十人の一人で、一九二四年五月八日にハバナに入っている。二十八歳だった。和歌山県西牟婁郡田並村田並(東牟婁郡串本町田並)の人。田並の人はほかに二十人いるが、すべて二四年から二五年にかけての海外興業移民で、うちキューバで死亡しているのは三人だけ。

前溝彦一

海外興業第二回移民二十人の一人で、一九二四年五月八日にハバナに入っている。二十六歳だった。早くに帰郷していると思う。和歌山県西牟婁郡田並村田並(東牟婁郡串本町田並)の人。

小倉純一

海外興業第二回移民二十人の一人で、一九二四年五月八日にハバナに入っている。二十七歳だった。その後のことはよくわからないが、第六回収容で、プレシディオでは三階にいたから、収容前にはハバナにいたのではないか。釈放後は、そのままイスラに残ったようで、七五年三

月一日に死亡している。ヌエバ・ヘロナの日本人墓地に埋葬されていると思う。和歌山県西牟婁郡田並村田並（東牟婁郡串本町田並）の人。田並出身者はほかに二十人いる。

岩木俊一

海外興業第二回移民二十人の一人で、一九二四年五月八日にハバナに入っている。二十四歳だった。石川県金沢市斗六（金沢市野町）の人。早くに帰郷しているだろう。

山口順蔵

一九二四年五月八日にハバナに入っている。二十四歳だった。海外興業第二回移民と同じ船だったが、海興移民ではない。その後、ラス・ビジャス（サンクテイ・スピリトゥス）のハティボニコにいたのだろう、天長節記念だと思うが、二六年十月三十一日にハティボニコの日本人が集まったなかに姿が見える。その後、二九年に妻の十寿を呼び寄せている。第六回収容で、釈放後もハティボニコのセントラル・ウルグアイで働いていた。八三年三月三日に死亡。撥美（Marcelina）、ノブ子、明（Ignacio）の一男二女がいる。熊本県下益城郡豊野村安見（宇城市豊野町安見）の人。

石川俊雄

一九二四年五月二十四日にハバナに入っている。十九歳だった。この頃には単独での自由移民の入国はきびしかったから、呼び寄せだったと思うが、縁戚がわからない。収容は第六回で四階にいたから、収容前には本島でもハバナ以外の地方にいたと思う。戦後はハバナ郊外のマリアナオ (Marianao) にいて、八八年八月十一日に死亡している。福島県伊達郡小中村大字上手渡 (伊達市月舘町上手渡) の人。

青木為三郎

石川俊雄と同航、一九二四年五月二十四日にハバナに入っている。そのままハバナにいたのではないか。三〇年代の天長節だと思うが、ハバナの公使館での集合写真に姿が見える。第六回収容で三階にいて、釈放後の四六年十二月三十日にハバナで死亡している。群馬県の人。群馬県出身者はほかに、ピナル・デル・リオで農業をしていた原米吉しかいない。

松村馬吉

一九二四年に入っているが、三〇年にカマガエイで実施された理髪師資格試験を受けてい

て、その頃にはカマガエイのピエドレシタス (Piedrectas) にいたであろうことしかわからない。
高知県の人。

松沢等

一九二四年にキューバに入り、二五年に妻サツエを呼び寄せている。三〇年にはオリエンテ (オルギン) のアンティジャ (Antilla) で理髪店を開いていた。収容は第六回で、釈放後は同じオリエンテ (オルギン) でアンティジャより西のクエト (Creto) にいて、何をしていたのかはわからないが、革命前の五〇年代に夫婦で帰郷している。高知県の人。メキシコからの転航ではないか。東洋移民合資のメキシコ移民で一九〇六年にコアウイラ州のラス・エスペランサスに入っている松沢富士馬という人がいるが縁戚かもしれない。

天願三良

海外興業第三回移民二十一人の一人で、一九二四年五月二日に東洋汽船の安洋丸で神戸を発ち、パナマ経由で、六月二十一日にハバナに入っている。二十七歳だった。ただ、トリニダー以後のことがわからない。沖縄県中頭郡具志川村具志川 (うるま市具志川) の人。ここで、断わり。キューバへの海外興業移民は全体で三百八十人いるが、そのうち、この天願のように、ト

リニダー以後のことがまったくわからない人は六割近い二百二十五人いて、キューバ移民全体からすれば二割に上る。それを詳しく書けないのが心苦しいかぎり、以後、キューバに入つた年月日と年齢、出身地だけの羅列になるが、ご容赦いただきたい。

安慶良栄

海外興業第三回移民二十一人の一人で、一九二四年五月二日に東洋汽船の安洋丸で神戸を発ち、パナマ経由で、六月二十一日にハバナに上陸している。その後はトリニダーの砂糖耕地に入っているだろうし、ほかの仲間同様、いくらもしないで逃亡しているだろう。カマグエイ（シエゴ・デ・アヒラ）のバラグア（Baragua）にいたが、二七年に死亡している。沖縄県中頭郡具志川村具志川（うるま市具志川）の人。渡航時は二十八歳だったから郷里に妻子を残していたのではない。いまでも戸籍は続いている。同航に同村の天願三良、安慶徳兵がいて、いずれも帰郷していると思う。

安慶徳兵

海外興業第三回移民二十一人の一人で、一九二四年六月二十一日にハバナに入っている。二十五歳だった。ただ、その後のことがわからない。早い時期に帰郷していると思う。沖縄県

中頭郡具志川村具志川（うるま市具志川）の人。

崎原金永

海外興業第三回移民二十一人の一人で、一九二四年六月二十一日にハバナに入っている。二十三歳だった。トリニダーに入っているだろうが、その後はどこにいたのかわからない。収容は第四回で五階にいた。この第四回収容は、日にちはそれぞれちがうが本島各地で主立った者が十九人逮捕され、四二年十一月二十四日にイスラに送られている。何かそれなりに大きく商売をしていたので、めぼしい人物と見られたのだと思う。釈放後はハバナにいただろう、七九年二月二十日に死亡している。沖縄県国頭郡本部村伊野波（国頭郡本部町伊野波）の人。伊野波出身者は十二人いる。

丸山政次

海外興業第三回移民二十一人の一人で、一九二四年六月二十一日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダーには入っていると思う。逃亡後はカマグエイのヌエビタス（Nuevitas）について理髪店を開いていた。三〇年に実施された理髪師資格試験の受験者リストに名前が見える。その後、三四年に妻房枝を呼び寄せている。収容は第六回で、釈放後はヌエ

ピタスに戻っている。妻が留守を守っていたからできたことだった。七五年一月八日にヌエピタスで死亡。政光 (Clemente)、メリーの一男一女がいる。熊本県菊池郡菊池村西寺 (菊池市西寺) の人。名前は「政治」かもしれない。

小松實蔵

海外興業第三回移民二十一人の一人で、一九二四年六月二十一日にハバナに入っている。二十八歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。兵庫県武庫郡住吉村 (神戸市東灘区住吉) の人。

山田恒太郎

海外興業第三回移民二十一人の一人で、一九二四年六月二十一日にハバナに入っている。二十八歳だった。ただ、その後のことがわからない。早い時期に帰郷していると思う。岡山県吉備郡阿曾村久米 (総社市久米) の人。阿曾村で黒尾の人は三人いるが、久米の人はほかにいない。

鷺見久太郎

海外興業第三回移民二十一人の一人で、一九二四年六月二十一日にハバナに入っている。三十五歳だった。その後のことはわからないが、トリニダーのあとは早い時期にキューバを離れているだろう。岡山県吉備郡池田村見延（総社市見延）の人。身延の人はほかに四人いて、弟だろう、鷺見美登治が、翌二五年に第十回移民で入っている。

山崎義丸

海外興業第三回移民二十一人の一人で、一九二四年六月二十一日にハバナに入っている。二十六歳だった。その後のことはわからないが、トリニダーのあとはそのままキューバを離れているだろう。福岡県八幡市前田（北九州市八幡東区前田）の人。福岡県の人で山崎姓はほかにいない。

永沼健二

海外興業第三回移民二十一人の一人で、一九二四年六月二十一日にハバナに入っている。二十五歳だった。その後のことはわからないが、トリニダーのあとは早い時期にキューバを離

れているだろう。福岡県遠賀郡水巻村伊左座（遠賀郡水巻町伊左座）の人。福岡県の人でやはり永沼姓はほかにいない。

井村保

海外興業第三回移民二十一人の一人で、一九二四年六月二十一日にハバナに入っている。二十三歳だった。トリニダーには入っていると思うが、逃亡後の詳しいことはわからない。たぶんカマグエイを転々としたあとフロリダ (Florida) に落ち着いている。第六回収容でプレシデオでは三階にいた。七〇年五月十八日にフロリダで死亡。独身だったと思う。熊本県鹿本郡山内村霜野（鹿本郡鹿央町霜野）の人。

今井友義

海外興業第三回移民二十一人の一人で、一九二四年六月二十一日にハバナに入っている。二十二歳だった。トリニダーのあとそのままキューバを離れているだろう。和歌山県西牟婁郡田並村田並（東牟婁郡串本町田並）の人。和歌山はいわゆる移民県で、とくに西牟婁郡からの渡航は多く、田並村だけでもほかに二十人いるが、この第三回移民にもほかに三人いる。ただ、今井姓はこの人だけ。

尾古貴政次郎

海外興業第三回移民二十一人の一人で、一九二四年六月二十一日にハバナに入っている。二十四歳だった。その後のことはわからない。トリニダダーのあととはそのままキューバを離れているだろう。和歌山県西牟婁郡田並村田並（東牟婁郡串本町田並）の人。

清野源右衛門

海外興業第三回移民二十一人の一人で、一九二四年六月二十一日にハバナに入っている。二十二歳だった。トリニダダーのあととは早い時期にキューバを離れているだろう。和歌山県西牟婁郡田並村田並（東牟婁郡串本町田並）の人。

津本治太郎

海外興業第三回移民二十一人の一人で、一九二四年六月二十一日にハバナに入っている。十八歳だった。トリニダダーのあととはどうしたか、早い時期にキューバを離れているだろう。和歌山県西牟婁郡田並村田並（東牟婁郡串本町田並）の人。

下梶巖

海外興業第三回移民二十一人の一人で、一九二四年六月二十一日にハバナに入っている。十八歳だった。その後のことはわからない。トリニダーのあとはそのままキューバを離れているだろう。広島県安佐郡伴村大塚（広島市安佐南区大塚）の人。

武田義人

海外興業第三回移民二十一人の一人で、一九二四年六月二十一日にハバナに入っている。二十二歳だった。トリニダー後のことはよくわからないが、収容が第六回で、プレシディオでは四階にいたから、収容前は本島でも地方にいたと思う。釈放後はハバナに移ってハルデイネロをしていた。ハルデイネロをしている人は多かったが、たいはオートバイか自転車ですんでいた。それを武田は、大型のジープを買い入れ、手広くやっていた。ただ、キューバで死亡した形跡がないから、革命前までに帰郷していると思う。広島県高田郡三田村（広島市安佐北区白木町三田）の人。

丹羽初吉

海外興業第三回移民二十一人の一人で、一九二四年六月二十一日にハバナに入っている。三十七歳だった。トリニダー後のことはわからないが、年齢からいって早くに帰郷しているだろう。広島県安芸郡仁保村大原（広島市南区仁保）の人。仁保村大原の人にはほかに上野彦士と上野半之助がいる。広島県も沖繩や熊本、福岡、和歌山とならんでたくさん移民を出している、いわゆる移民県だが、なかでも仁保村はハワイ移民でよく知られている。

上野彦士

海外興業第三回移民二十一人の一人で、一九二四年六月二十一日にハバナに入っている。二十七歳だった。トリニダーのあとは早くに帰郷しているだろう。広島県安芸郡仁保村大原（広島市南区仁保）の人。仁保村大原の人にはほかに丹羽初吉と上野半之助がいる。

沖本信作

海外興業第三回移民二十一人の一人で、一九二四年六月二十一日にハバナに入っている。二十七歳だった。トリニダーには入っているだろうが、やはり逃亡し、早くに帰郷していると

思う。広島県安芸郡仁保村高峯（広島市南区仁保）の人。沖本姓はほかにいない。広島も移民県で、仁保村も古くはハワイ移民をはじめ海外移民をたくさん出している。

市場與一

第三回海外興業移民の二十一人の一人。一九二四年五月二日、横浜を東洋汽船の安洋丸で発ち、六月二十一日にハバナに入っている。二十九歳だった。就労地のトリニダーの砂糖耕地にはどれほどいたのかはわからない。厳しい労働だったから長くても数カ月で離れているだろう。二六年頃にはラス・ビジャス（サンクテイ・スピリトゥス）のハテイボニコにいたが、その後、イスラ・デ・ピノスに移って野菜づくりをはじめた。同郷の川手実登が一九二八年に一万ドルを手に帰郷したとき、市場も四千ドルくらいは貯えていた。だからそれを手に帰郷していればよかったのだが、川手の誘いを拒んで残留。その後、キューバ経済は悪化を続けイスラの農業も低迷して、帰郷の機会をなくしてしまっている。独身を続け、一九六九年に死亡。広島県安佐郡伴村（広島市安佐南区伴）の人。収容は第五回でプレシディオでは二階にいた。沖悟の甥にあたる。

天願亮助

海外興業第四回移民十七人の一人で、一九二四年八月十八日にハバナに入っている。二十六歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことはわからない。沖縄県中頭郡具志川村具志川（うるま市具志川）の人。具志川の人ほかに五人いる。

大城亀

海外興業第四回移民十七人の一人で、一九二四年六月二十五日に東洋汽船の静洋丸で神戸を発ち、八月十八日にハバナに入っている。二十八歳だったから郷里に妻子を残していたと思う。契約通りにトリニダーに入っているだろう。その後はマタンサスのセスペデス（Cespedes）で理髪店を開いていた。収容は第六回で、戦後の五三年に帰郷している。沖縄県島尻郡玉城村奥武（南城市玉城奥武）の人。キューバ移民に沖縄県出身は百九十六人いるが、うち島尻郡玉城村の人は九人。

親川要次郎

海外興業第四回移民十七人の一人で、一九二四年八月十八日にハバナに入っている。二十五

歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことはわからない。早くに帰郷していると思う。沖縄県国頭郡本部村並里（国頭郡本部町並里）の人。

比嘉正勝

海外興業第四回移民十七人の一人で、一九二四年八月十八日にハバナに入っている。三十一歳だった。トリニダー後は早くに帰郷していると思う。沖縄県国頭郡名護町安和（名護市安和）の人。

板本定次

海外興業第四回移民十七人の一人で、一九二四年八月十八日にハバナに入っている。二十九歳だった。トリニダーからはすぐに逃亡しているだろう。その後、二〇年代末にはオリエンテ（ラス・トゥナス）のホバボ（Jobabo）だと思うが、理髪店を開いていた。ただ、三〇年に理髪師資格試験が実施されていて、合格しなかったのではないか。理髪店を続けることができなくなり、帰郷していると思う。熊本県阿蘇郡錦野村岩坂（菊池郡大津町岩坂）の人。この試験は日本人理髪師を排斥するために実施されたもので、実際の試験には不正が多く、八割近くが不合格になっている。のちに日本人会の抗議があつて取り消された者もいたが、それを待てずに、し

かたなく転職したり、イスラに渡って農業をはじめた者も少なくなかったが、その前にキューバを見限って離れた者の方がはるかに多かった。

谷政雄

海外興業第四回移民十七人の一人で、一九二四年八月十八日にハバナに入っている。十八歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことはわからない。和歌山県西牟婁郡田並村田並（東牟婁郡串本町田並）の人。田並の人はほかに二十人もいるが、谷姓はいない。

浅利倉一

海外興業第四回移民十七人の一人で、一九二四年八月十八日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことはわからない。和歌山県西牟婁郡田並村田並（東牟婁郡串本町田並）の人。

前溝増太郎

海外興業第四回移民十七人の一人で、一九二四年八月十八日にハバナに入っている。トリニダーには入っていると思うが、その後のことはわからない。和歌山県西牟婁郡田並村田並（東

牟婁郡串本町田並)の人。

崎秀次郎

海外興業第四回移民十七人の一人で、一九二四年八月十八日にハバナに入っている。トリニダーには入っていると思うが、その後のことはわからない。和歌山県西牟婁郡和深村田子(東牟婁郡串本町田子)の人。

交田金蔵

海外興業第四回移民十七人の一人で、一九二四年八月十八日にハバナに入っている。二十七日だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことはわからない。収容は第六回グループで三階にいたから、収容前にはハバナにいた可能性もある。戦後はハバナにいて、八四年十一月四日に死亡している。和歌山県西牟婁郡田並村田並(東牟婁郡串本町田並)の人。同じ田並村の人は二十一人いて、すべて海外興業移民。

青沼康吉

海外興業第四回移民十七人の一人で、一九二四年八月十八日にハバナに入っている。二十七

歳だった。トリニダーには入っていると思うが、やはりその後のことはわからない。早い時期に帰郷していると思う。和歌山県西牟婁郡田並村田並（東牟婁郡串本町田並）の人。田並の人はほかに二十人いる。

横辻広吉

海外興業第四回移民十七人の一人で、一九二四年八月十八日にハバナに入っている。二十七歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことはわからない。和歌山県西牟婁郡田並村田並（東牟婁郡串本町田並）の人。田並の人はほかに二十人いる。

渡辺国一

海外興業第四回移民十七人の一人として一九二四年八月十八日にハバナに入っている。二十六歳だった。その後のことは詳しくわからないが、たぶんハバナにいて、資産家宅に入つて、コシネロか執事でもしていたのだろうか、収容時には雇主の保証で収容を免れている。六四年三月十一日にハバナで死亡、六十六歳だった。和歌山県西牟婁郡潮岬村上野（東牟婁郡串本町潮岬）の人。収容の対象は一世男子と十八歳以上の二世男子だったが、未収容者には、ほかに斎藤弥一、会沢国助、小島三八一、西村八郎がいる。

大西太郎

海外興業第四回移民十七人の一人で、一九二四年八月十八日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことはわからない。岡山県都窪郡清音村三因（総社市清音三因）の人。

楠木義夫

海外興業第四回移民十七人の一人で、一九二四年八月十八日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことはわからない。岡山県都窪郡清音村軽部（総社市清音軽部）の人。楠木姓はほかにいない。

青木暁夫

海外興業第四回移民十七人の一人で、一九二四年八月十八日にハバナに入っている。十八歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことはわからない。岡山県浅口郡河内町西阿知（倉敷市西阿知町）の人。二五年に入っている人に青木輝夫がいるが縁戚かどうか。

横見毅一

岡山の人で、一九二四年に入っていて、三〇年には妻はるを呼び寄せているが、どこにいたのかもわからない。早い時期にハバナで死亡していて、慰霊堂の第二号セルに位牌が残っている。岡山県上房郡津川村八川（高粱市津川町八川）の人。はるのその後もわからない。

開田米生

開田語作の呼び寄せだろう。一九二四年に入っていて、三〇年にはカماغエイのミナス（Minas）で理髪店を開いていた。収容は第六回グループで三階にいて、釈放後はミナスの東十五キロほどのカماغエイのルガレニョ（Lugareno）に移り、六九年二月三日に死亡している。広島県の人。

平野春茂

高知県の人で、一九二四年に入っている。この頃は単独での自由移民の入国はきびしかったから呼び寄せだったと思うが、縁戚がわからない。高知県出身は三十八人いるが、平野姓はほかにいない。三〇年にはカماغエイ（シエゴ・デ・アビラ）のピラル（Pilar）で理髪店を開いて

いた。収容は第六回グループで、釈放後もピラルにいたのではないか。七三年十月七日に死亡している。

中清登

海外興業第五回移民二十人の一人で、一九二四年七月二十七日に東洋汽船の楽洋丸で神戸を発ち、パナマ経由で、九月十七日にハバナに入っている。二十二歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。広島県安佐郡伴村大塚（広島市安佐南区大塚）の人。

森岡信喜

海外興業第五回移民二十人の一人で、一九二四年七月二十七日に東洋汽船の楽洋丸で神戸を発ち、パナマ経由で、九月十七日にハバナに入っている。三十一歳だった。トリニダーには入っていると思う。ただ、ごく短期に逃亡してラス・ビジャス（サンクティスピリトゥス）のハティボニコにいた。天長節記念だろう、二六年十月三十一日にハティボニコの日本人が集まったなかに姿が見える。収容は第四回グループで、このとき逮捕されてのは本島各地での主立った十九人だったから、何か少しは大きく商店でも経営していたか、日本人会支部の役員でもし

ていたのではないか。釈放後は本島西部ピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移って農業をしていた。渡航時には三十一歳だったから妻子がいたかもしれないが、呼び寄せた気配がない。八〇年二月二十日に死亡している。広島県安佐郡伴村大塚（広島市安佐南区大塚）の人。

重村滝蔵

海外興業第五回移民二十人の一人で、一九二四年九月十七日にハバナに入っている。三十六歳だった。トリニダーに入っていると思う。収容は第六回グループで四階にいた。収容前からシエンフエゴスについて、たぶん漁師をしていたのではないかと思う。釈放後もシエンフエゴスについて、革命前の五八年五月二十二日に死亡している。一八八八年六月二日生まれだから六十九歳だった。渡航時には郷里に妻子を残していたのではないか。もしそうだったなら、トリニダーで三年勤めて帰郷するつもりでいただろうし、その後も早く帰る予定でいただろうが、収容に阻まれ、無念だったと思う。広島県広島郡南竹原町（竹原市）の人。

正田勲

海外興業第五回移民二十人の一人で、一九二四年九月十七日にハバナに入っている。二十六歳

だった。その後は、ほかの仲間同様、早くに逃亡し、仕事をさがして各地を転々としたのだろう。二〇年代末にはラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のカバイグアン（Cabaiquan）で理髪店を開いていた。収容は第六回グループで、プリンシペでは三階にいた。釈放後もカバイグアンにいたと思うが、その後、サンクティ・スピリトゥスに移っている。九八年五月十九日に死亡。一八九八年三月一日生まれだから百歳だった。広島県高田郡坂村（安芸高田市向原町坂）の人。この人には会えなかった。

山崎綾太郎

海外興業第五回移民二十人の一人で、一九二四年九月十七日にハバナに入っている。二十三歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。広島県安芸郡仁保村伏心甲（広島市南区仁保）の人。仁保村の人は十三人いるが、十二人が海外興業移民である。

松本秀夫

海外興業第五回移民二十人の一人で、一九二四年九月十七日にハバナに入っている。二十三歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。広島県安芸郡仁保村伏心甲（広島市南区仁保）の人。

鷺見力男

海外興業第五回移民二十人の一人で、一九二四年九月十七日にハバナに入っている。十九歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。岡山県吉備郡池田村見延（総社市見延）の人。海興第三回移民の鷺見久太郎とは同村だが、縁戚だろうか。

岸本正治

海外興業第五回移民二十人の一人で、一九二四年七月二十七日にハバナに入っている。やはりトリニダー後のことはわからない。四十一歳での渡航だったから郷里に妻子を残していただろう。すぐに帰郷していると思う。岡山県吉備郡久代村（総社市久代）の人。

前田与一郎

海外興業第五回移民二十人の一人で、一九二四年九月十七日にハバナに入っている。三十歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。和歌山県西牟婁郡田並村田並（東牟婁郡串本町田並）の人。和歌山の人で前田姓はこの人だけ。

西熊蔵

海外興業第五回移民二十人の一人で、一九二四年九月十七日にハバナに入っている。二十八歳だった。トリニダーには入っているだろうが、やはりその後のことがわからない。和歌山県西牟婁郡田並村田並（東牟婁郡串本町田並）の人。和歌山の人で西姓もこの人だけ。

中尾杉松

海外興業第五回移民二十人の一人で、一九二四年九月十七日にハバナに入っている。四十一歳だったから、郷里に妻子を残していただろう。トリニダーには入っていると思う。逃亡後はやはりカマグエイかハテイボニコあたりにいたのだろうか。収容は第六回グループで、釈放直後の四六年にハバナで死亡している。六十四歳だった。収容の疲れだろう、無念だったと思う。熊本県阿蘇郡錦野村岩坂（菊池郡大津町岩坂）の人。海外興業第十一回移民で二五年に入っている中尾福永は縁戚かもしれない。

今村末政

海外興業第五回移民二十人の一人で、一九二四年九月十七日にハバナに入っている。三十二

歳だった。トリニダー逃亡後はどこにいたのか、詳しくわからないが、シエンフエゴスで漁業をしていたのかもしれない。収容は第六回グループで、六七年五月二日にシエンフエゴスで死亡している。七十五歳だった。熊本県阿蘇郡赤水村赤水（阿蘇市赤水）の人。

村上亀芳

海外興業第五回移民二十人の一人で、一九二四年九月十七日にハバナに入っている。二十五歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。熊本県阿蘇郡赤水村赤水（阿蘇市赤水）の人。

仲宗根政三郎

海外興業第五回移民二十人の一人で、一九二四年九月十七日にハバナに入っている。三十三歳だった。トリニダーには入っているだろうが、やはりその後のことがわからない。沖縄県国頭郡本部村伊野波（国頭郡本部町伊野波）の人。伊野波の人は十二人いる。

長嶺正義

海外興業第五回移民二十人の一人で、一九二四年九月十七日にハバナに入っている。二十七

歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。沖縄県島尻郡豊見城村高入端（豊見城市）の人。

徳田謙吉

海外興業第五回移民二十人の一人で、一九二四年九月十七日にハバナに入っている。二十七歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。沖縄県中頭郡与那城村平安座（うるま市与那城平安座）の人。海興第七回移民で三カ月後に入っている徳田加那は弟だろう。平安座の人は十六人いる。

石川加那

海外興業第五回移民二十人の一人で、一九二四年九月十七日にハバナに入っている。二十六歳だった。トリニダーのあとラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニコにいたらしく、天長節記念だと思うが、二六年十月三十一日にハティボニコの日本人が集まったなかに姿が見える。その後、シエンフェゴスに移ったのかどうか。収容は第六回グループで三階にいた。釈放後はサンタ・クララで赤比地政芳や松田安定といっしょに暮らしていたが、革命前の五〇年代に帰郷している。沖縄県中頭郡与那城村平安座（うるま市与那城平安座）の人。

同航の石川樽良は兄だろう。

石川樽良

海外興業第五回移民二十人の一人で、一九二四年九月十七日にハバナに入っている。ただ、トリニダー後のことが何もわからない。三十二歳だったから郷里に妻子を残していただろう。収容されていないから早くに帰郷していると思う。沖縄県中頭郡与那城村平安座(うるま市与那城平安座)の人。同航の石川加那は弟だろう。

伊波蒲一

海外興業第五回移民二十人の一人で、一九二四年九月十七日にハバナに入っている。二十七日だった。トリニダーのあとはカマガエイのエスメラルダ (Esmeralda) で理髪店を開いていた。二八年に妻カメを呼び寄せている。だが、三〇年に実施された理髪師資格試験に落ちたのだろう、収容前にイスラに移っている。収容は第五回グループでプレシディオでは二階にいた。この二階はほとんどはイスラの人だった。収容中は妻が土地と家を守っていたのだろう、釈放後もそのままイスラのマッキンレーで農業を続け、五六年五月二十五日に死亡している。カメは八七年まで健在でいた。沖縄県中頭郡美里村石川(うるま市石川)の人。伊波姓の人は六人い

るがすべて美里村石川の出身。

仲程清四郎

海外興業第五回移民二十人の一人で、一九二四年九月十七日にハバナに入っている。二十二歳だった。トリニダーのあとはラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニコのセントラルにいたのではないか。収容は第六回グループで、釈放後もハティボニコにいたが、五〇年代に帰郷していると思う。沖縄県国頭郡本部村伊野波（国頭郡本部町伊野波）の人。

仲程清喜

沖縄県国頭郡本部村伊野波（国頭郡本部町伊野波）の人。一九二四年九月十七日にハバナに入っている。二十歳だった。その後のことは、八三年八月一日にシエンフエゴスで死亡したことだけがわかっていて、ただ、収容された形跡がないから、戦時中はキューバを離れていたか、何らかの方法で収容を逃れていたとしか考えられない。雇主の計らいや所在不明で収容を逃れた一世は五人いる。また、ハバナ入港時の同じ船に海外興業第五回移民で戸籍が同じの仲程清四郎がいるが、兄ではないかと思う。

森中勇

海外興業第五回移民と同航で、一九二四年九月十七日にハバナに入っている。二十一歳だった。同村の三反田定と同航だったが、ともにだれの呼び寄せだったかがわからない。三〇年にはカマグエイのシエゴ・デ・アピラで理髪店を開いていた。理髪師資格試験には合格したと思う。収容は第六回で、釈放後もシエゴ・デ・アピラにいて、九五年五月七日に死亡している。広島県安芸郡奥海田村字東之谷（安芸郡海田町）の人。井上留次郎の長女マルゴさんだったかと結婚して、キクノさんもいっしょに暮らしていた。マルゴさんは八〇年代に癌で亡くなったと思う。

三反田定

同村の森中勇と同航、一九二四年九月十七日にハバナに入っている。二十二歳だった。再渡航か、呼び寄せでなければ入国できなかった時期だから、呼び寄せだったと思うが、縁戚がわからない。カマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のマハグア（Matagua）で理髪店を開いていた。理髪師資格試験に合格したかどうかはわからない。収容は第六回で、戦後はオリエンテ（オルギン）のウルバノ・ノリス（Urbano Noris）に移って八四年六月十三日に死亡している。広島

県安芸郡奥海田村字東之谷（安芸郡海田町）の人。

光岡勇

一九二四年九月十七日にハバナに入っているが、詳しくわからない。カマグエイのシエゴ・デ・アピラにいたと思う。収容は第六回で、釈放後はしばらくフアジャ（Fajá）にいたかもしれない。七四年五月二十九日にシエゴ・デ・アピラで死亡している。広島県の人。

村上留市

海外興業第六回移民二十人の一人で、一九二四年九月二十一日に東洋汽船の銀洋丸で神戸を発ち、十一月十三日にハバナに入っている。二十六歳だった。収容は第六回収容で四階にいたから、イスラでなく本島で暮らしていたと思う。釈放後のことはわからないが、革命前に帰郷しているだろう。和歌山県西牟婁郡田並村田並（東牟婁郡串本町田並）の人。

中筋清五郎

海外興業第六回移民二十人の一人で、一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。三十歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。和歌山県西牟婁

郡田並村田並（東牟婁郡串本町田並）の人。

浅利常五郎

海外興業第六回移民二十人の一人で、一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。三十一歳だった。トリニダーには入っていると思うが、やはりその後のことがわからない。和歌山県西牟婁郡田並村田並（東牟婁郡串本町田並）の人。三カ月前に海興第四回移民で入っている浅利倉一は縁戚ではないか。ともに早くに帰郷していると思う。

小西秀雄

海外興業第六回移民二十人の一人で、一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。二十九歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。熊本県菊池郡瀬田村大森（菊池郡大津町瀬田）の人。

小西元雄

海外興業第六回移民二十人の一人で、一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。二十九歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。熊本県菊池郡瀬

田村大森（菊池郡大津町瀬田）の人。

宮本寅作

海外興業第六回移民二十人の一人で、一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。移民としては高齢の三十三歳だった。契約通りにトリニダーに入っただろうが、逃亡後はラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニコにいたようで、天長節記念だと思いが、二六年十月三十一日にハティボニコの日本人が集まったなかに姿が見える。その後、イスラに渡ったのではないか、収容は第五回で二階にいた。独身だったから、収容中に土地をなくしたのだろう、釈放後はピナル・デル・リオのエラドウラに移って農業を続け、革命前の五〇年代に帰郷している。熊本県阿蘇郡錦野村岩坂（菊池郡大津町岩坂）の人。

川崎幸雄

海外興業第六回移民二十人の一人で、一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。二十三歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。熊本県上益城郡白旗村白旗（上益城郡甲佐町白旗）の人。川崎姓はほかにいない。

山下重雄

海外興業第六回移民二十人の一人で、一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。熊本県上益城郡白旗村白旗（上益城郡甲佐町白旗）の人。熊本の人で山下姓はほかに三人いるが、白旗村ではほかにいない。

浦田久太郎

海外興業第六回移民二十人の一人で、一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。二十七歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。岡山県上房郡川面村（高梁市川面町）の人。

大模良助

海外興業第六回移民二十人の一人で、一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。十九歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。岡山県都窪郡清音村三因（総社市清音三因）の人。

古謝有徳

海外興業第六回移民二十人の一人で、一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。三十一歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。沖繩県中頭郡具志川村上江州（うるま市上江洲）の人。古謝姓はほかにいない。

伊波清孝

海外興業第六回移民二十人の一人で、一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。三十歳だった。トリニダー後はイスラに渡ったのではないか、収容は第五回グループで収容されている。第五回はすべてがイスラにいた人だった。たぶん独身だったと思う。収容中に土地をなくしたのだろう。釈放後はピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移って、革命前の五〇年代に帰郷している。沖繩県中頭郡美里村石川（うるま市石川）の人。

大城朝貞

海外興業第六回移民二十人の一人で、一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。二十三歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。沖繩県中頭郡具

志川村上江州（うるま市上江洲）の人。大城姓はほかに九人いるが、具志川ではこの人だけ。

山城誠豊

海外興業第六回移民二十人の一人で、一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。二十八歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。沖繩県中頭郡美里村石川（うるま市石川）の人。一月後に海興第七回移民で入っている山城仁弘と山城敏雄は弟だろう。

石川勇熊

海外興業第六回移民二十人の一人で、一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。沖繩県中頭郡美里村石川（うるま市石川）の人。

下茂門清次

海外興業第六回移民二十人の一人で、一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。二十三歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。沖繩県中頭郡与

那城村平安座（うるま市与那城平安座）の人。

渡久地政則

海外興業第六回移民二十人の一人で、一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。三十五歳だった。トリニダー後はイスラに渡つてマッキンレー地区で野菜づくりをしていた。収容は第五回で、たぶん独身だったと思うが、だれが土地を守っていたのか、釈放後もイスラにいて、革命前の五〇年代に帰郷している。沖縄県国頭郡本部村伊野波（国頭郡本部町伊野波）の人。戦後はピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールにいたかもしれない。伊野波の渡久地姓はほかに、渡久地甚一郎、渡久地政平がいる。

崎原源吉

海外興業第六回移民二十人の一人で、一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。二十八歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。沖縄県国頭郡本部村伊野波（国頭郡本部町伊野波）の人。崎原姓はほかに崎原重助と崎原金永がいる。いずれも伊野波の人。

伊波久喜

海外興業第六回移民二十人の一人で、一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。二十三歳だった。トリニダー逃亡後はイスラに渡って農業をしていたが、三四年十二月九日に死亡している。沖縄県中頭郡美里村石川（うるま市石川）の人。

石川善栄

海外興業第六回移民二十人の一人で、一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。三十一歳だった。トリニダー後はカマグエイにいたようで、シエゴ・デ・アピラで死亡している。忌日はわからないが、慰霊堂の第七号セルに位牌があるから、収容前も三〇年代までの死亡だと思ふ。郷里には妻子を残していたにちがいない。無念の死だった。沖縄県中頭郡美里村石川（うるま市石川）の人。石川文助の従弟。

南菊造

南善太郎の妻イサといっしょに、一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。十三歳だった。善太郎の弟だろうか。善太郎はカマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のモロンで食料品

店を開いていたから最初はいっしょにいただろう。第六回收容で、戦後はカマグエイのセバジン (Ceballo) にいたが、その後ハバナに移って、郊外のバラコアのホテル (Hotel Marino Baracoa) で働いていた。ハルディネロだったのか、コシネロだったのか、職種はわからない。九六年五月一日に死亡。福井県南条郡河野村甲楽城 (南条郡南越前町甲楽城) の人。福井県出身は南一家以外二人しかない。

島貫七三郎

一九二四年十一月十三日にハバナに入っているが、だれの呼び寄せだったのかわからない。二六年にはラス・ビジャス (サンクティ・スピリトゥス) のハティボニコにいたようで、天長節記念だろう、二六年十月三十一日にハティボニコの日本人が集まったなかに姿が見える。その後、イスラに渡っていると思う。第五回收容で、プレシディオでは二階にいた。二階のほとんどはイスラの人だった。釈放後もそのままイスラのマル・パイス (Mal Pais) にいて、革命前の五五年三月二十九日に死亡している。宮城県の人。

酒井参次郎

福井県の人で、一九二四年十一月十三日にハバナに入っているが、その後のことがまったく

わからない。南イサ、菊造と同航だから、縁戚か、同郷か、いずれにしても関係者だと思ふ。早い時期に帰郷しているだろう。

南イサ

南善太郎の妻。善太郎の弟だろうか菊造といっしよに、一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。善太郎はカマグエイ(シエゴ・デ・アピラ)のモロンで食料品店を開いていた。善太郎の死亡は七年だが、イサはその前の六六年八月二十七日にモロンで死亡。節子(Francisca)、卯太郎(Julio)、菊枝(Juana)、咲子(Ernestina)、二郎(Wenceslao)の二男三女がいる。福井県の人。

竹本徳一

一九二四年十一月十三日にハバナに入っている。呼び寄せだろうが、縁戚がわからない。たぶんカマグエイにいたと思う。二七年に妻シズ子と呼ばせている。その後、シズ子は死亡したのか、三一年に妻チカを呼び寄せている。収容は第四回で、革命前の五八年三月にカマグエイ(シエゴ・デ・アピラ)のサンタ・ルシアで死亡。広島県安佐郡可部町(広島市安佐北区可部)の人。メキシコからの転航の可能性がある。

長谷川与三郎

長谷川与五右衛門の弟。二十四歳だった。一九二四年十二月三日にハバナに入り、イスラに渡つて、与五右衛門のいたサンタ・バルバラ地区でいっしょに農業をはじめた。収容は第五回で、収容中に土地をなくしたのだろう、釈放後は、与五右衛門や肥田野龍次といっしょにピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移っている。七五年九月六日に死亡。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。

西田岩栄

一九二四年にキューバに入っている。その後はどうしたのか、本島にいて第六回グループで収容されていること以外、何もわからない。釈放後、早い時期に帰郷していると思う。鳥取県の人。鳥取県出身者は全部で十三人だが、西田姓はほかにいない。メキシコからの転航かもしれない。大陸殖民第九回メキシコ移民の西田丈吉という人が一九〇六年にオアハケニヤに入っている。その関係者ではないか。

寺守乙平

海外興業第七回移民二十人の一人で、一九二四年十月二十六日に東洋汽船の安洋丸で神戸を発ち、パナマ越えで十二月十七日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。熊本県上益城郡御船町御船（上益城郡御船町御船）の人。

甲斐亀蔵

海外興業第七回移民二十人の一人で、一九二四年十二月十七日にハバナに入っている。三十一歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。熊本県上益城郡甲佐町（上益城郡甲佐町）の人。

緒方甚吉

海外興業第七回移民二十人の一人で、一九二四年十二月十七日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。熊本県下益城郡当尾村萩尾（宇城市松橋町萩尾）の人。

吉岡虎吉

海外興業第七回移民二十人の一人で、一九二四年十月二十六日に東洋汽船の安洋丸で神戸を発ち、パナマ越えて十二月十七日にハバナに入っている。移民としては年長の三十二歳だったから郷里に妻子を残していたと思うが、トリニダー後は、ごく早い時期にラス・ビジャス（サントペイ・スピリトウス）のハティボニコで死亡している。熊本県菊池郡瀬田村吹田（菊池郡大津町吹田）の人。キューバ移民が利用した南米航路は、二六年三月以降は合併によって日本郵船に移るが、海興移民当時は東洋汽船の配船航路で、神戸あるいは横浜を出航するとホノルル、サンフランシスコ、ロサンゼルス、メキシコのマンサニジョと寄港し、パナマのバルボアまでが約四十日、その後はペルーのカジャオ、アリカを経てチリのバルプライソに至る約二カ月の長い航海だった。いずれも九千トン級の、当時としては最新鋭の大型客船の安洋丸、楽洋丸、墨洋丸、銀洋丸の四隻に、ときには静洋丸がピンチヒッターで就航し、それぞれ年二往復の計八便が運航されていた。キューバへは、これをパナマのバルボアで下船しパナマ地峡を鉄道で越え、大西洋側のコロロンからさらに海路を行くことになる。コロロンからハバナまではイギリスとアメリカの客船が就航していたが配船が少なかったため、ときにはユナイテッド・フルーツ社がチャーターしていた貨物船に便乗することもあった。呼び寄せによる単独移民の場合は、

サンフランシスコからアメリカ大陸を鉄道で横断しニューヨークやマイアミから渡ることもあつたが、海興移民はすべてパナマ・ルートだった。そうして海外興業は、第一回が二四年二月三日、第二回同年三月二十四日、第三回同年五月二日、第四回同年六月二十五日、第五回同年七月二十七日、第六回同年九月二十一日、第七回同年十月二十六日、第八回同年十二月十六日、第九回同年一月三十一日と、二六年の第十八回まで二年にわたつてほぼ一カ月半間隔で毎回二十人前後を送り出していた。その後、二十六回まで続いているがそれは二、三人単位の単独移民の送出にすぎず、やがて三〇年代に入つて移民の時代も終わることになる。

江村一男

海外興業第七回移民二十人の一人で、一九二四年十二月十七日にハバナに入っている。呼び寄せだったと思うが縁戚がわからない。二十二歳だった。収容は第五回だから収容前にはイスラにいただろう。釈放後もイスラのヌエバ・ヘロナにいたが、その後、カマグエイに移り、八二年七月七日に死亡している。熊本県阿蘇郡山西村宮山（阿蘇郡西原村宮山）の人。収容で資産接収の苦汁を嘗めた日本人は、革命でも接収に遭つたため、それ以上の危害を怖れてか、キューバ国籍を取る者がけつこういた。いわゆる二重国籍だが、これは法的には問題がなく、日本国籍を棄てる必要はなかつたが、それでも日本国籍を棄てる人もいた。江村は、どうした理由か、

無国籍になっている。

岩木保

江村一男と同村で、同航、海外興業第七回移民二十人の一人で、一九二四年十二月十七日にハバナに入っている。二十歳だった。その後、江村はイスラに渡っているのに、この人はオリエンテ（ラス・トゥナス）のホバボ（Yobabo）にいた。三〇年に実施された理髪師資格試験の受験者リストに名前がある。収容は最終の第九回八人の一人で、残党狩りのようなものだった。七六年十二月二十七日にホバボで死亡している。熊本県阿蘇郡山西村宮山（阿蘇郡西原村宮山）の人。

古庄熊義

海外興業第七回移民二十人の一人で、一九二四年十二月十七日にハバナに入っている。二十歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。熊本県阿蘇郡錦野村外牧（菊池郡大津町外牧）の人。

中原守

海外興業第七回移民二十人の一人で、一九二四年十二月十七日にハバナに入っている。二十八歳だった。トリニダー逃亡後はカマグエイのベルティエントス (Vartientes) にいたようで、三〇年に実施された理髪師資格試験の受験者リストに名前がある。収容は第六回。釈放後もベルティエントスにいて、七六年六月二十八日に死亡している。熊本県菊池郡瀬田村吹田（菊池郡大津町吹田）の人。ベルティエントスにはカリブ海でも最大級の製糖会社のセントラルがあった。もちろんアメリカ資本だったことはいままでもない。

安井庄太郎

海外興業第七回移民二十人の一人で、一九二四年十二月十七日にハバナに入っている。二十五歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。和歌山県西牟婁郡有田村有田（東牟婁郡串本町有田）の人。

大原重生

海外興業第七回移民二十人の一人で、一九二四年十二月十七日にハバナに入っている。二十

歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。福岡県早良郡原村七隈（福岡市城南区七隈）の人。

山城仁弘

海外興業第七回移民二十人の一人で、一九二四年十二月十七日にハバナに入っている。十八歳だった。第六回移民の山城誠豊と第七回移民の山城敏雄は同じ戸籍だからともに兄ではないか。トリニダー後はイスラにいたと思う。収容は第五回で、釈放後もイスラのマル・パイス（Mal Pais）にいたが、革命前までに帰郷している。沖縄県中頭郡美里村石川（うるま市石川）の人。

山城敏雄

海外興業第七回移民二十人の一人で、弟だろう、山城仁弘といっしょに、一九二四年十二月十七日にハバナに入っている。二十六歳だった。第六回移民の山城誠豊は兄ではないか。トリニダー後はどうしたか、誠豊とともにわからないが、収容までに帰郷していると思う。沖縄県中頭郡美里村石川（うるま市石川）の人。

平良良守

海外興業第七回移民二十人の一人で、一九二四年十二月十七日にハバナに入っている。十九歳だった。石川久吉とは同村で隣同士で、トリニダー後は、石川はイスラに渡って農業をはじめめているが、平良はどうしたのかわからない。たぶん収容前に帰郷していると思う。沖縄県中頭郡美里村石川（うるま市石川）の人。

石川久吉

海外興業第七回移民二十人の一人で、一九二四年十二月十七日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダー後はイスラに渡ったのではないか。収容は第五回で、釈放後はピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移っている。農業をしていただろう。七七年七月三十一日に死亡している。沖縄県中頭郡美里村石川（うるま市石川）の人。

平良徳平

海外興業第七回移民二十人の一人で、一九二四年十二月十七日にハバナに入っている。十九歳だった。トリニダー後はカマグエイにいたのではないか。収容は第六回で、釈放後はピナル・

デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移っている。農業をしていただろう。戦後、ピナルで農業をはじめた人にはそれなりの貯えをもつて帰郷する人がけっこういた。平良もその一人で、革命前の五〇年代に帰郷していると思う。沖縄県中頭郡美里村石川（うるま市石川）の人。

石川文助

海外興業第七回移民二十人の一人で、一九二四年十月二十六日に神戸を出発し、十二月十七日にハバナに入っている。二十三歳だった。ラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のトリニダーの砂糖耕地には数カ月もいなかっただろう、セントラルを転々としたあとイスラに渡っている。アメリカ向けに胡瓜やピーマンの栽培をはじめたが、うまくいかなかったらしい。収容で帰郷の機会を失っている。釈放後もイスラのマッキンレーにいたが、革命後は月六十ペソの年金暮らしをして、革命前に帰郷した同郷の山城仁弘の廃屋に暮らしていた。最期は、病気になるに長くは寝つかなくなったようだが、重態でハバナの病院に送られ、七〇年九月十四日に死亡している。一九〇一年十月九日の生まれだから六十八歳だった。沖縄県中頭郡美里村石川（うるま市石川）の人。

仲宗根蒲助

海外興業第七回移民二十人の一人で、一九二四年十二月十七日にハバナに入っている。二十三歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。沖繩県中頭郡美里村登川（沖繩市登川）の人。

徳田加那

海外興業第七回移民二十人の一人で、一九二四年十二月十七日にハバナに入っている。二十三歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。沖繩県中頭郡与那城村平安座（うるま市与那城平安座）の人。海興第五回移民で三カ月前に入っている徳田謙吉は兄だと思ふ。

浜汀

海外興業第七回移民二十人の一人で、一九二四年十二月十七日にハバナに入っている。三十三歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。早い時期に帰郷しているだろう。和歌山県西牟婁郡和深村江田（東牟婁郡串本町江田）の人。

谷石伝次

海外興業第七回移民二十人の一人で、一九二四年十二月十七日にハバナに入っている。二十三歳だった。トリニダー後はどうしていたか、本島にいたと思うが、収容は最終の第九回で四階にいた。釈放後はハバナ近郊にいたと思う。七六年三月十三日に死亡している。福岡県遠賀郡上津役村上津役（北九州市八幡西区上〈下〉上津役）の人。熊本生まれかもしれない。

森ハル

森平吉の妻。呼び寄せで一九二四年十二月十七日にハバナに入っている。平吉はシエンフエゴスにいたと思う。吉春 (Angel)、吉文 (Alberto)、三枝子 (Dolores) の二男一女がいて、ハルは五〇年十月三日に死亡。その後、一家はハバナ郊外に移り、平吉は七六年に死亡している。鹿児島県始良郡霧島村重久（霧島市重久）の人。

萩原清治

森平吉の妻ハルと同航、一九二四年十二月十七日にハバナに入っている。ハルの弟。義兄にあたる森平吉はラス・ビジャス（シエンフエゴス）のセントラル・コンスタンシアでハルデイネ

口をしていたから、いっしょにいたと思う。収容は最終の第九回で二階にいたが、四五年五月十九日にプレシディオで死亡している。鹿児島県の人。

仲田蒲助

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二四年十二月十六日に東洋汽船の墨洋丸で神戸を発ち、翌二五年二月七日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダーには入っていないだろうが、その後のことはわからない。沖縄県中頭郡与那城村平安座（うるま市与那城平安座）の人。

天願松

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。二十五歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことはわからない。沖縄県中頭郡具志川村具志川（うるま市具志川）の人。天願姓はほかに二人いる。すべて具志川の人。

徳田蒲

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。三十二

歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことはわからない。沖縄県中頭郡具志川村仲嶺（うるま市仲嶺）の人。

知念栄弘

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二四年十二月十六日に東洋汽船の墨洋丸で神戸を発ち、翌二五年二月七日にハバナに入っている。二十歳だった。トリニダーのあとはカマガエイ（シエゴ・デ・アピラ）にいたのではないか。収容前までにガスパル（Gaspar）で死亡している。沖縄県中頭郡具志川村具志川（うるま市具志川）の人。

金城徳蔵

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。三十歳だったから郷里に妻子を残していただろう。トリニダーのあとはカマガエイにいて、三四年七月六日にエスメラルダ（Esmeralda）で死亡している。無念だっただろう。沖縄県国頭郡金武村屋嘉（国頭郡金武町屋嘉）の人。

仲間政太郎

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことはわからない。沖繩県国頭郡金武村金武（国頭郡金武町金武）の人。金武村で仲間姓はほかに二人いる。

仲田安一

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。二十歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことはわからない。沖繩県国頭郡金武村金武（国頭郡金武町金武）の人。

金城良保

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。二十六歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことはわからない。沖繩県島尻郡兼城村兼城（糸満市兼城）の人。同じ兼城の人に金城亀がいるが縁戚かどうか。

大城長盛

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。二十三歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことはわからない。沖繩県島尻郡兼城村兼城（糸満市兼城）の人。兼城の人で大城姓はほかにいない。

安座間磨信

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。十九歳だった。トリニダーには入っているだろうが、やはりその後のことはわからない。沖繩県中頭郡具志川村大田（うるま市大田）の人。

金城亀

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。二十九歳だった。トリニダーのあとはハバナにいたのか、ごく早い時期にハバナで死亡していて、慰霊堂の第一号セルに位牌が残っている。沖繩県島尻郡兼城村兼城（糸満市兼城）の人。

大屋亀

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。二十七歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことはわからない。沖縄県中頭郡与那城市平安座（うるま市与那城市平安座）の人。海外興業による渡航者は自由移民も含めて三百九十三人いるが、うち百五人がキューバで死亡していること、三十人がキューバを離れていることがわかっているだけで、残る二百五十八人のトリニダー後はまったくわからない。大屋もその一人で、キューバで死亡した形跡がないから、帰郷したのではないかとしかいえない。

根神亀代

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。二十七歳だった。海興移民はその最初から、経由地のパナマのバルボアや上陸したハバナで、さらに宿泊費や食費や鉄道旅費を徴収され、トリニダーの就労地でも、移民契約には契約期間が明記されていない自由契約だったにもかかわらず、最初の三カ月間は旅券を取り上げられ、耕地を離れることが許されなかった。そんなことから移民からの訴えが多く、それが領事館を通じて日本外務省にも届いて、海外興業の現地代理人をしていた大平慶太郎との間でやりとりした外

交文書がいくつも残っている。海外興業は、それまでの私設の移民会社とはちがって、そうした移民会社を統合した国策機関だったからで、政府も見過ごすわけにはいかなかった。詳しく契約を見ると、移民側が訴えている、バルボアやハバナでの宿泊費や食費、そして鉄道旅費とというのは、すでに徴収されている移民渡航費用に含まれているのだが、断わりとして、不足の場合は追徴するとなっている。問題なのはその額で、通過、上陸諸費用として支払いを済ませている額とほぼ同額だった。これでは二重取りと思われるもしかたがなかった。そして実際には、その費用は海外興業から大平には送金されていなかったのではないかと思う。現地代理人といっても、海外興業の社員でもなく、ハバナで日本商店を開いていて商品を日本から輸入していた関係で入管にも顔の利いた大平に上陸手続きを依頼していただけだった。だから、もちろん移民の受け入れと就労地への送り出しの報酬は海外興業から支払われていただろうが、大平にしてみれば、ハバナでの諸費用は移民自身が支払うものという理解だったと思う。すべては海外興業の欺瞞の結果で、だから、それが移民の郷里にも伝わって、半年後の第十八回を最後に海興移民は激減する。そんな大平に、根神は礼状を出している。トリニダーを逃亡したあとハティボニコのセントラルにいたらしい。トリニダーの耕地で取り上げられていた旅券を返してもらえよう大平に依頼していたのだろう、旅券を受け取ったことと、ハバナでの受け入れ足労に感謝している。自筆ではなく、海外興業が外務省に提出した報告書に添付されたもの

でタイプ打ちに書き直された文書だから信憑性に欠けるが、日付から、半年後の二五年七月には根神がハティボニコのセントラルで働いていたことだけはわかる。ただ、それ以後のことがわからない。沖縄県中頭郡与那城村平安座（うるま市与那城平安座）の人。

安座間磨精

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。二十二歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことはわからないが、早い時期に帰郷していると思う。沖縄県中頭郡具志川村大田（うるま市大田）の人。安座間磨精の縁戚だろうか。

柏野伝左門

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。十九歳だった。トリニダーのあとはマタンサスのカルデナス (Cardenas) にいたようで、収容前のごく早い時期に死亡していて、慰霊堂の第二号セルに位牌が残っている。漁師をしていたのだろう。岡山県吉備郡足守町上足守（岡山市足守）の人。

海老名光蔵

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。十八歳だった。トリニダーのあとはシエンフエゴスにいたようで、ごく早い時期にシエンフエゴスで死亡していて、ハバナの慰霊堂の第二号セルに位牌が残っている。和歌山県西牟婁郡田並村田並（東牟婁郡串本町田並）の人。海興第四回移民の横辻広吉とは同村で隣同士だった。横辻は早くに帰郷していると思う。シエンフエゴスではいつしよにいたのかもしれない。

浜源右工門

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。三十六歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことはわからない。和歌山県西牟婁郡田並村田並（東牟婁郡串本町田並）の人。海外興業第七回移民の浜汀とは関係があるかもしれない。早くに帰郷していると思う。

雑賀三蔵

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。二十三

歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことはわからない。和歌山県西牟婁郡田並村田並（東牟婁郡串本町田並）の人。

中村直

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。二十七歳だった。トリニダーのあとはイスラに渡って農業をしていたと思う。収容は第五回グループでプレシディオでは二階にいた。独身だっただろう。収容の間、土地を守る者がなく、農地はアメリカ人が経営していた管理会社に回収されてしまったため、釈放後は本島西部のピナル・デル・リオのエラドウラ (Heradura) に移って農業を続けていた。ピナルはイスラより出荷先のニューヨークに近いという利点があったから、けっこう成功する者が多かった。中村もその一人だったかもしれない。五三年に帰郷している。賢明な判断だったと思う。もう少し遅かったら革命の接収で何もかもなくしてしまい帰れなくなるところだった。熊本県飽託郡内田村（熊本市内田町）の人。同村の同航者に園田正雄がいる。

園田正雄

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。三十一

歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことはわからない。熊本県飽託郡内田村（熊本市内田町）の人。早くに帰郷しているだろう。

金柿軍蔵

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。二十五歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことはわからない。熊本県上益城郡白旗村白旗（上益城郡甲佐町白旗）の人。

富永直記

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。三十五歳だった。トリニダー後はハティボニコにいたようで、天長節記念だろう、二六年十月三十一日にハティボニコの日本人が集まったなかに姿が見える。収容は第六回で、釈放後はピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移っている。五八年十月十五日に死亡。熊本県鹿本郡大道村藤井（山鹿市藤井）の人。同村の同航者に川上三蔵、富永佐登理がいる。

富永佐登理

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。二十八歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことはわからない。熊本県鹿本郡大道村藤井（山鹿市藤井）の人。同村の同航者に川上三蔵、富永直記がいる。

川上三蔵

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。三十五歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことはわからない。熊本県鹿本郡大道村藤井（山鹿市藤井）の人。同村の同航者に富永直記、富永佐登理がいる。

内山進

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二四年にトリニダーの砂糖耕地に入っている。移民としては年長の三十四歳だった。同航には同郷の下川伊太郎、田代善吉、馬渡虎蔵、増永喜代次がいるが、いずれもごく短期に逃亡しているだろう。内山はイスラに渡ってマツキンレー地区で野菜づくりをはじめた。三三年に妻シボリを呼び寄せている。収容は第五回グルー

プで、収容中には妻が土地を守っていたから、釈放後もすぐに農業ができています。その後もイヌラで暮らして、内山は六九年九月二十七日に、シボリは八八年に死亡している。福岡県八女郡川崎村長野（八女市長野）の人。

田代善吉

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。四十三歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことはわからない。早くに帰郷していると思う。福岡県八女郡川崎村長野（八女市長野）の人。

下川伊太郎

海外興業の第八回移民二十九人の一人で一九二四年に入っている。二十六歳だった。同航に同郷の内山進、田代善吉、馬渡虎蔵、増永喜代次がいる。海興移民はキューバ中部、いまはユネスコの世界遺産で有名になっている、ラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のトリニダーの砂糖耕地に送られている。契約に就労年限がなかったから自由契約移民と呼ばれていたが、三カ月間就労すればハバナからトリニダーまでの旅費は返却するとして旅券を取り上げられていたから、実質は契約移民だった。それにもかかわらず、多くは旅券ももたずに数週間で

逃亡している。下川もそうだっただろう。どこをどうたどったかはわからないが、カマグエイかハティボニコだろうか、理髪店を開いて、いくらか貯えができたところで二十七年に一時帰郷し、妻カツエといっしょに戻ったが、ロテリア（宝くじ）で一万ドルを引き当て、二八年に帰郷している。キューバの日本人のなかではめずらしい、幸運の人だった。福岡県八女郡川崎村長野（八女市長野）の人。

馬渡虎蔵

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。二十五歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことはわからない。福岡県八女郡川崎村長野（八女市長野）の人。四カ月後の二五年六月に海興第十回移民として入っている馬渡金蔵は弟だろう。虎蔵はトリニダーでの惨状を伝えたかどうか。渡航には二カ月かかるが、すぐに手紙を書いていけば金蔵は出発前に受け取ることができたはずで、キューバ行を取りやめることもできただろう。ただ、すでに海興への支払いが済ませていただろうし、やめるといつてすぐにやめられないのが村社会でもあった。いずれにしても二人で早くに帰郷していると思う。

増永喜代次

海外興業第八回移民二十九人の一人で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。二十六歳だった。トリニダーのあとはカマグエイにいたと思う。収容は第四回で五階にいた。釈放後もカマグエイにいて、七〇年十二月十八日に死亡している。福岡県八女郡川崎村長野（八女市長野）の人、同村人はほかに九人いて、同航者に田代善吉、内山進、馬渡虎蔵、下川伊太郎がいる。

原田甘利

一九二五年二月七日にハバナに入っている。二十一歳だった。原田曾次郎の呼び寄せではないか。その後はラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニコにいたようで、天長節記念だろう、二六年十月三十一日にハティボニコの日本人が集まったなかに姿が見える。すると、曾次郎もハティボニコにいたのかもしれない。収容は第六回で三階にいた。戦後はハバナに移ったのだろう、郊外のグアナボ（Guanoabo）にいて、八七年九月二十九日に死亡している。大分県下毛郡耶馬村多志田（中津市耶馬溪町多志田）の人。

中入鉄五郎

原田甘利と同航で、一九二五年二月七日にハバナに入っている。原田曾次郎の呼び寄せだと思
う。甘利と同様、ハテイボニコに移ったのだろう、天長節記念だと思いが、二六年十月三十一
日にハテイボニコの日本人が集まったなかに姿が見える。収容は第六回で、釈放後はシエンフ
エゴスに移ったのではないか、四九年にシエンフエゴスで死亡している。出身地は大分県とし
かわからないが、甘利と同村ではなかったか。

松本勘次郎

熊本県上益城郡御船町字元御船（上益城郡御船町）の人で、一九二五年二月七日にハバナに
入っている。三十三歳だった。その後はカマグエイにいたと思う。だれの呼び寄せだったのか
はわからない。収容は第六回グループで、釈放後はオリエンテ（オルギン）のセントラル・グア
テマラに移り、八九年七月二十八日に死亡している。

神田トメ

神田亀作の妻。呼び寄せで一九二五年二月七日にハバナに入っている。十八歳だった。亀作

は小川移民の一人でラス・ビジャス（シエンフエゴス）のセントラル・コンスタンシアにあつた小川農場に入ったが、小川富一郎の死で農場は一年足らずで崩壊。その後は、各地を転々としたあと、カマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のバラグアでコシネロをしていた。三八年に夫婦で帰郷している。新潟県北蒲原郡紫雲寺村福岡（新発田市福岡）の人。

島袋蒲吉

海外興業第九回移民三十人の一人で、一九二五年一月三十一日に東洋汽船の楽洋丸で神戸を発ち、三月二十五日にハバナに入っている。二十二歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。沖縄県中頭郡具志川村宮里（うるま市宮里）の人。

山城蒲

海外興業第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。十八歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。沖縄県中頭郡具志川村宮里（うるま市宮里）の人。

又吉久松

海外興業第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。早くに帰郷していると思う。沖縄県中頭郡具志川村宮里（うるま市宮里）の人。

喜屋武樽

海外興業第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。十九歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。沖縄県中頭郡具志川村江州（うるま市江洲）の人。

赤比地亀三

海外興業の第九回移民は一九二五年一月三十一日に東洋汽船の楽洋丸で神戸を発ち、三月二十五日にハバナに入っている。その数三十人と、十八回（海興は二十六回送出しているが十九回以降はごく少数の自由渡航者だった）にわたって送られたなかではいちばん多かった。赤比地もその一人。二十六歳だった。トリニダーのあとはイスラに渡ったと思う。野菜づくりもうまく

いったのだらう、三一年に弟の政芳を呼び寄せている。ともに第五回収容で、釈放後は、政芳はハバナに移ったようだが、亀三はそのままイスラのサンタ・フェ地区にいて、革命前の五〇年代に帰郷している。政芳も同時期に帰郷しているが、同行だったかどうかはわからない。沖縄県中頭郡与那城村平安座（うるま市与那城平安座）の人。平安座からはほかに十七人いる。

仲間鎌蔵

海外興業第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。二十八歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。沖縄県国頭郡金武村金武（国頭郡金武町金武）の人。

玉城徳蔵

海外興業第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。二十六歳だった。トリニダー後はイスラに渡って、一九年に弟の徳吉を呼び寄せている。ともに第五回収容で、釈放後もイスラのマル・パイス (Mal Pais) にいたが、徳蔵は革命前の五〇年代に帰郷している。沖縄県国頭郡本部村瀬底（国頭郡本部町瀬底）の人。同郷の瀬底の人はほかに八人いる。

照屋松吉

海外興業第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。二十九歳だった。トリニダー後はイスラに渡ったようだが、釈放後はサンタ・クララに移って、赤比地政芳や石川加那、松田安定らと共同暮らしをしていた。収容は第五回で二階にいた。革命前の五〇年代に帰郷していると思う。沖繩県国頭郡本部村健堅（国頭郡本部町健堅）の人。

大城蒲

海外興業第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。十九歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。沖繩県島尻郡玉城村奥武（南城市玉城奥武）の人。

嶺井武彦

海外興業第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。二十歳だった。トリニダー後はイスラに渡り、三〇年に妻シゲを呼び寄せている。第五回収容で、釈放後もそのままイスラのヌエバ・ヘロナにいた。農業以外の仕事をしていただけではないか。

革命前の五〇年から五七年の間に夫婦で帰郷している。沖縄県島尻郡玉城村奥武（南城市玉城奥武）の人。奥武の人はほかに六人いて、津波古千松・マツ夫婦も同郷。

浜口益一

海外興業第一回移民二十人の一人で、一九二四年四月一日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダーのあとはカماغエイあたりにいて、その後、あるいは戦後かもしれないが、ピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移っている。三〇年に弟の加次郎を呼び寄せているが、二人で農業をしていたのだろう。収容は第六回で三階にいた。ピナルでは広い土地を手に入れて、なかには機械化をめざす者もいて、まとまった貯えを手にする者も少なくなかった。浜口もそうだったかもしれない。革命前の五〇年から五七年の間に帰郷している。加次郎は収容されていないから収容前に帰郷していると思う。和歌山県西牟婁郡串本町（東牟婁郡串本町串本）の人。串本のは二人のほかには長瀬泰雄をはじめ五人いる。

内間善五郎

海外興業第二回移民二十人の一人で、一九二四年五月八日にハバナに入っている。移民としては高齢にあたる三十五歳だった。トリニダー後はカماغエイあたりにいたのではないか。収

容は第六回で、釈放後にハバナに移っていると思う。七〇年十一月二十八日に死亡。沖縄県国頭郡本部村瀬底（国頭郡本部町瀬底）の人。内間姓はほかに同じ瀬底の内間武五郎がいるだけ。

芳谷格次郎

海外興業第四回移民十七人の一人で、一九二四年八月十八日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダーのあとはカマグエイのタブル（Tabor）で理髪店を開いていた。三〇年に実施された理髪師資格試験を受けているが合否はわからない。たぶん合格してそのままタブルにいたのではないか。収容は第六回グループで三階にいた。戦後はどこにいたのかわからないが、六八年八月二十一日に死亡している。広島県安芸郡仁保村大原（広島市南区仁保）の人。名前は「覚太郎」かもしれない。

大城牛

海外興業第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。二十六歳だった。トリニダーのあと、収容前にはイスラのマッキンレーにいたようで、第五回収容で釈放後もイスラで暮らして、六六年七月九日に死亡している。沖縄県島尻郡玉城村奥武（南城市玉城奥武）の人。津波古千松と同村で、ごく近所だった。

中島十五郎

海外興業第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。二十三歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。福岡県八女郡豊岡村本分（八女市黒木町本分）の人。

田代覚蔵

海外興業第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。二十六歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。福岡県八女郡川崎村長野（八女市長野）の人。海外興業第八回移民の田代善吉とは縁戚か。

安田吉蔵

海外興業第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。二十三歳だった。トリニダー後は、ハバナの南、カリブ海側のバタバノで漁師をしていたのではない。ごく早い時期にカリブ海で水死していて、ハバナの慰霊堂の第一号セルに位牌が納められている。福岡県糸島郡一貴山村上深江（糸島市二丈一貴山）の人。同村の人に同じ第九回移民の

安田甚太郎がいるが、収容前にキューバを離れている。

原田茂作

福岡県八女郡黒木町田代（八女市黒木町田代）の農家の生まれで三人兄妹（姉、兄）の末っ子。小学校を出てすぐに母を、三年後に父を失っている。アメリカに行こうと思つたらしいが、移民制限で叶わず、二十歳のとき姉の嫁ぎ先の隣人から海外興業のキューバ移民の募集を聞き、兄から費用を工面し応募した。約四百四十円、いまの貨幣価値にして百万円はかかる。第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。トリニダーの砂糖耕地で五年ほど働いて錦衣帰郷を果たすつもりだった。それが、過酷な労働に一週間と堪えきれず、仲間四人と逃亡。「夜は監視が厳しかったが、白昼堂々と出ていったら捕まらなかつた」と笑っていた。そうしてカマグエイのセントラル・ハロヌ（Central Jaronu）の佐藤質郎を頼つたあと、バラグアの高山猪熊の農場に入っている。そこに高山と同郷の中島應親がいて、のちに妹のケサノと結婚することになる。その後、イスラに渡り、コロンビア地区の山梨元吉の農場に雇われ、支援を受けて二年後に独立。ハバナにいた中島を呼び、さらに三〇年に鹿児島からケサノを呼び寄せている。だが、イスラの農業はニューヨーク市場に頼つていたため、世界恐慌の煽りを受けて価格が暴落、やっていけなくなり、本島に出る者や、よく似た土質で距離的に



イスラのプレシディオ・モデロで
野球帽の人が原田茂作

有利だったピナル・デル・リオに移る者が多かった。

それでも原田は動かなかった。というより、ケサノが我慢を選んだ。それが戦後、とくに革命後に功を奏することになる。そして日米開戦で収容がはじまる。逮捕されたあとの日本人の土地はエンカルガドと呼ばれた管財人が管理することになっていたが、ほとんどが借地だったため、家族のいない者は家屋は焼き払われ、土地はアメリカ人の土地管理会社に取り上げられてしまった。ただ、家族がいた者は家族が続けて農業をしたため難を逃れている。原田もそうだった。ケサノが十一歳の昭男 (Miguel) を頭に六人の幼子をかかえながら、畑に出てムラを遣い鋤を揮って土地と家を守った。最初はたいへんだったが、イスラの農業を支えていたのは日本人だったから、それが収容で

いなくなつたため、野菜の供給不足が起きて価格が高騰、野菜をつくりさえすれば暮らしには困らなかつたという。だから、釈放後は、独身者は丸裸になり仕事がなくて困つたが、原田はすぐに農業をはじめることができて、戦後の好況のなかで半年ばかりで一萬ドルを手にしていく。三〇年代には何をしてもうまくいかなかつたのが嘘のような時代だつたという。それをもとに家屋を新築、土地も広げ、イスラ一番の農業者になつている。そこに革命がやつて来る。農地改革法で私有地は三十カバジェリアスに制限され、肥料も配給制になつた。植え付けの自由もなくなり政府によつて規制されるようになった。ヌエバ・ヘロナで開いていた食料品店とカフェテリアも接収されている。さらに、六五年には第二次土地改革法が施行され、所有地は五カバジェリアスまで制限された。ただ、これには土地も財産も子どもに分散していたため難を逃れている。さらに、不利と思つていた植え付け規制が有利に働くようになってきた。革命前は、いくらたくさん収穫があつても市場価格に左右され、思い通りにいかないことも多かつたが、革命後は、政府の方針通りに植え付ければ、収穫のすべてを買い上げてくれるので、市場価格を気にせず、つくればつくるだけ儲かつたからだ。計画経済の盲点を突いたのだつた。こうしてイスラの原田はキューバの原田になつていった。いかにも福岡県人らしい、物事に動じないおおらかさと機を見るに敏な身のこなしの結果だと思うが、それを陰で支えたのは妻のケサノであつたことは、原田を知るだれもが認めるところである。そんなケサノが先に逝き、

九九年一月十三日にあとを追っている。九十四歳の大往生だった。訪ねたときは、バタバノから日本製のホバークラフトが走っていて、又エバ・ヘロナの港に着くと八男のアンヘルさんがフォードで迎えに来てくれ、その夜は泊めていただいた。ハバナの内藤宅では風呂もシャワーだけでそれもお湯は出なかつたが、原田宅では広さは二畳もあつたか、タイル張りの湯舟で、温かいお湯があふれていた。そして晚餐にはアバナクラブが食卓を飾った。はじめての七年物に目を丸くすると、「カストロが贈ってくれた」と、から、から、笑って指さした、居間には大きな木箱がでんと胡座をかいて座っていた。

安田甚太郎

海外興業第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。三十一歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。福岡県糸島郡一貴山村上深江（糸島市二丈一貴山）の人。

馬渡潔

海外興業第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。二十九歳だった。ごく短期のうちにトリニダーを逃げたのだろう、カマグエイのシエゴ・デ・アピラ

にいたが、砂糖耕地での労働に体を悪くしたのか、その年（二五年）に死亡している。福岡県八女郡川崎村長野（八女市長野）の人。同じ長野の人はほかに九人いる。

富山高

海外興業第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。二十二歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。福岡県八女郡川崎村長野（八女市長野）の人。

丹原洋人

海外興業の第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。二十六歳だった。トリニダーのあとは、本島のカマグエイあたりにおいて、戦後、ハバナに移ったと思う。収容は第六回グループで四階にいて、革命直後の五九年二月七日に死亡している。岡山県御津郡御津村佐山（岡山市佐山）の人。キューバ婦人と結婚したのではないか。長男ラモンは革命の地下運動に参加し、八〇年代に中佐に昇進している。同郷人に同じ第九回移民の丹原直がいるが収容前にキューバを離れている。

坪井兼一

海外興業第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。岡山県御津郡馬屋下村大窪（岡山市大窪）の人。

丹原直

海外興業第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。二十二歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。岡山県御津郡御津村佐山（岡山市佐山）の人。

平田秋一

海外興業第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。二十二歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。岡山県吉備郡水間村中尾（総社市中尾）の人。

上仲実治

海外興業第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。二十七歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。早くに帰郷しているだろう。戸籍は現在も続いている。熊本県上益城郡御船町御船（上益城郡御船町御船）の人。

水間実茂

海外興業の第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。二十九歳だった。トリニダーのあとはイスラに渡って農業をはじめたと思う。独身だったのではない。収容中に土地をなくしてしまったため、釈放後はシエンフエゴスに移って、六七年に死亡している。熊本県下益城郡隈庄町宮地（熊本市南区域城南町宮地）の人。同じ宮地の人に高野政喜がいる。

山下庄太郎

海外興業の第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。移民としてはかなり高齢の四十一歳だったから妻子を残しての渡航だっただろう。トリニダーの

あとはイスラに渡ったと思う。第五回収容で、釈放後もイスラのヌエバ・ヘロナにいた。農業ではなく、何か商業をしていたのかもしれない。革命前の五〇年から五七年の間に帰郷している。熊本県上益城郡甲佐町横田（上益城郡甲佐町横田）の人。

中川熊雄

海外興業の第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。二十二歳だった。トリニダールのあとはラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニコにいたようで、天長節記念だと思うが、二六年十月三十一日にハティボニコの日本人が集まったなかに姿が見える。そのあともハティボニコにいたと思う。収容は第六回でプレシデオでは四階にいたが、収容中の四五年八月三十一日にプレシデオで死亡している。二週間前に戦争は終わっていたが、最初の釈放は四五年十二月の二十日過ぎで、その後、五月雨に数回にわたって続いて、最終的に釈放が終わったのは翌四六年三月末のことだった。もし終戦と同時に釈放されていれば中川も命を落とすことはなかっただろう。熊本県菊池郡菊池村西寺（菊池市西寺）の人。第十五回移民の中川正は縁戚だろうか。

川上一江

海外興業の第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。十九歳だった。トリニダーはごく短期に出ているだろう。中川熊雄といっしょにハティボニコにいたようで、二六年十月三十一日に天長節記念でハティボニコの日本人が集まったなかに姿が見える。ただ、中川とちがつて、収容は第五回だから、その後、収容までにイスラに渡っている。名前は「一江」だが男性で、たぶん独身だっただろう、収容中に土地をなくしたのでらう、釈放後はピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移っている。農業をしていた。六一年二月二十日に死亡。熊本県鹿本郡大道村藤井（山鹿市藤井）の人。第八回移民の川上三蔵とは縁戚だろうか。

笹本熊次郎

海外興業の第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダーのあとはマタンサスのカルデナス (Cardenas) に移ったようで、ごく早い時期に死亡している。中川熊雄とは縁戚だろう。同じ戸籍の熊本県菊池郡菊池村西寺（菊池市西寺）の人。



バナスのセントラル事務所前で
右端が田吉伝蔵

田吉伝蔵

海外興業の第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。三十六歳だった。郷里に妻子を残していたのではないか。トリニダーのあとはハバナ西郊のバナス(Banes)のセントラルでハルディネロをしていた。収容は第六回で、釈放後もバナスにいて、五七年二月二日に死亡している。熊本県菊池郡陣内村陣内(菊池郡大津町陣内)の人。

中尾直

海外興業の第九回移民三十人の一人で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。二十八歳だった。トリニダーのあとは田吉伝蔵といっしょにハバナ西郊のバナス(Banes)に移ったのではない

か。収容は第六回で、釈放後もバナスにいたと思う。五四年十月二十三日に死亡している。熊本県菊池郡瀬田村立野（菊池郡大津町瀬田）の人。

伊藤治三郎妻

伊藤治三郎の妻で、一九二五年三月二十五日にハバナに入っている。治三郎はラス・ビジャス（シエンフェゴス）のオルキタスにいたが、ごく早い時期に死亡していて、その後、夫人はどうされたか、キューバで亡くなった形跡がないから、たぶん帰郷していると思う。広島県の人。

永田某

一九二五年三月二十五日に、妻といっしょにハバナに入っているが、名前もわからない。熊本県の人。岩崎庄平と同航の大陸殖民第八回メキシコ移民に永田為平（熊本県玉名郡）という人が一九〇六年に二十四歳でオアハケニヤに入っている。この人ではないかと思う。

永田某妻

一九二五年三月二十五日に夫といっしょにハバナに入っているが、名前もわからない。熊本県の人。

小川運

一九二五年三月二十八日にハバナに入っている。呼び寄せだったと思うが、縁戚がわからない。収容は第五回だから、収容時にはイスラにいただろう。釈放後はハバナに移って、七四年十月三十一日に死亡している。熊本県の人。

宮本英一

一九二五年に二十二歳でキューバに入っている。旅券申請には吉永政八の呼び寄せとあるが、その人物がキューバにいた形跡が見つからない。二八年に妻ジトを呼び寄せている。カマグエイ(シエゴ・デ・アピラ)のガスパル(Gaspar)にいて理髪師をしていたことはたしかで、三〇年に実施された理髪師資格試験の受験者リストに載っている。それに落ちたのではない。収容以前に帰郷していると思う。熊本県下益城郡東砥用村川越(下益城郡美里町川越)の人。

鈴木信夫

一九二五年に入っているが、だれの呼び寄せだったのか、その後どうしたのかもわからない。十六歳だった。佐藤ミトクの縁戚かもしれない。福島県耶麻郡月輪村堂脇(耶麻郡猪苗代町関都

堂脇)の人。

山島くに

山島庄吉の妻。呼び寄せで一九二五年にカマゲエイ(シエゴ・デ・アピラ)のモロンに入っている。十八歳だった。庄吉は理髪店を開いていた。戦前戦後を通じてモロンにいて、庄吉は八六年に、くには九五年三月十六日に死亡している。静岡県庵原郡蒲原町(静岡市清水区蒲原)の人。八五年だったか六年だったか、一時帰郷されたのを成田に迎えたことがあった。小柄な人で、あのにぎやかで人だらけのロビーにぼつんと一人、おとぎ話からこぼれて落ちたように現われたのが印象的で、いまも忘れない。

大川績

一九二五年六月四日にハバナに入っている。十八歳だった。最初はどこにいたのかはわからないが、収容は第六回だから、収容まではイスラではなく本島のどこか、あるいはハバナにいたかもしれない。釈放後はピナル・デル・リオに移って、フィンカ・エラドウラ(Finca Herradura)で農業をしていた。革命後の農地制限がなければそれなりにうまくいっていたと思う。日本家族会の呼び寄せプログラムで一時帰郷の機会があったが、受け入れる縁戚が見つからず叶わな

いで終わっている。九四年五月二十六日にエラドウラで死亡。静岡県沼津市馬場（沼津市）の人。静岡県出身者は本島ではカマグエイのモロンに数人いて、そのいずれかの呼び寄せだったと思うが特定できない。名前は「いさお」と読む。革命による接収は、アメリカ資本やそれに付随したキューバ資本には当然だったが、やはりはじめると収拾が付かず、日本人移民の場合、少しの自作農や家族経営の写真館や散髪屋やスタンドの珈琲ショップまでが接収されている。外国人だからということもまちがいにあつたと思うが、どう考えても行き過ぎる。革命は一歩誤れば蒙昧に走るから止められない。それが結果として市民の経済活動への意欲を削ぐことになり経済停滞につながっている。

富田藤正

一九二五年五月十日にハバナで脱船している。収容は第五回だから逮捕時にはイスラにいたことはたしかで、釈放後もイスラのサンタ・フェ地区にいたが、五〇年代半ばにピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移っている。独身だったと思う。六八年四月十九日に死亡。愛知県の人。

佐藤カネ

佐藤質郎の妻。質郎はペルーからの転航で一九一九年にキューバに入っている。職業はわからないが、カマグエイのセントラル・ハロヌ (Aronu) にいて、その後、結婚のためだったのか、一時帰郷して二五年に海外興業の第九回移民と同船で再渡航している。カネはこのとき同行していたのだろう。福島県の人。

西新門政光

一九二五年に入っている。イスラにいたのだろう、収容は第五回でプレシデイオでは二階にいた。二階はほとんどがイスラの人だった。釈放後も五〇年代はじめにはイスラのヌエバ・ヘロナにいたようだが、その後のことがわからない。キューバで死亡した形跡がないから、革命までに帰郷していると思う。沖縄県の人。

富樫金太郎

新潟県の人で、一九二五年に入っている。新潟出身者は各地にたくさんいたから呼び寄せだったと思うが、ごく早い時期に死亡していて、ハバナの慰霊堂の第一号セルに位牌が残っている

以外、縁戚もわからない。

大塚清一

一九二五年に入っている。マタンサスのセスペデス (Cespedes) にいたらしく、収容までの早い時期に同地で死亡している。岡山県の人。大塚姓はほかにいない。

大城樽

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年四月二十三日に東洋汽船の安洋丸で神戸を発ち、六月十二日にハバナに入っている。三十一歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。沖縄県島尻郡玉城村奥武（南城市玉城奥武）の人。奥武の人は、大城亀、大城蒲、大城牛の三人いる。

阿波根昌鴻

この人についてはここに記すまでもないだろう。『米軍と農民―沖縄県伊江島』（一九七三年、岩波新書）という著作があつて、いまはどうか知らないが、むかしは沖縄では知らない人がいなかった。米軍基地への伊江島闘争を最後まで貫いた人だった。キューバへは、海外興業第十回移

民二十七人の一人で、一九二五年四月二十三日に東洋汽船の安洋丸で神戸を発ち、六月十二日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダー逃亡後はペルーに転航したが、もちろんペルーでも、逆に北への転航をめざす日本人がカジャオにあふれていたときで、仕事もなく、なけなしの所持金を病気になった友の帰国費用にあてたためすぐに戻れず、ようやく三四年に帰郷している。沖縄県国頭郡本部村浜元（国頭郡本部町浜元）の人。京都の山科に一燈園という生活共同体があつて、その知り合いに話をしたら、「あの人なら、ここにいたんだよ」と教えられてびつくりしたことがあつた。

仲間伝興

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にハバナに入っている。二十歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。沖縄県国頭郡金武村金武（国頭郡金武町金武）の人。

島袋忠蔵

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にハバナに入っている。十九歳だった。トリニダー後はどうしたかよくわからないが、ハバナにいたのだろうか、ごく早い

時期にハバナで死亡していて、慰霊堂の第一号セルに位牌が納められている。沖縄県国頭郡本部村辺名地（国頭郡本部町辺名地）の人。

新川宣富

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にハバナに入っている。二十六歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。沖縄県国頭郡本部村健堅（国頭郡本部町健堅）の人。

平安座良秀

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にハバナに入っている。二十九歳だった。トリニダーには入っているだろうが、やはりその後のことがわからない。沖縄県国頭郡本部村具志堅（国頭郡本部町具志堅）の人。

饒平名知嗣

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にハバナに入っている。二十七歳だった。トリニダーのあとはカマグエイカラス・ビジャス（シエンフエゴス）のピオレタ

(Violeta) にいたと思う。三三年に妻カメ、四〇年に長男知栄を呼び寄せている。第六回收容で、七五年十月十二日にビオレタで死亡。沖繩県国頭郡本部村浜元（国頭郡本部町浜元）の人。

渡久地善次郎

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にハバナに入っている。三十二歳だった。トリニダーのあとはイスラに渡っていて、收容前の四〇年四月二十八日に死亡している。沖繩県国頭郡本部村瀬底（国頭郡本部町瀬底）の人。

玉栄樽良

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にハバナに入っている。二十七歳だった。トリニダーのあとはイスラに渡っている。收容は第五回グループで、釈放後もイスラにいて、六一年四月二十七日に死亡。沖繩県中頭郡与那城村平安座（うるま市与那城平安座）の人。

伊礼門太良

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にハバナに入っている。二十四

歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。沖縄県中頭郡与那城村平安座（うるま市与那城平安座）の人。

西新門加那

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にハバナに入っている。三十歳だった。トリニダーには入っているだろうが、やはりその後のことがわからない。沖縄県中頭郡与那城村平安座（うるま市与那城平安座）の人。西新門姓はほかに西新門政光がいる。

松田太良

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダーには入っているだろう。沖縄県中頭郡与那城村平安座（うるま市与那城平安座）の人。その後のことはよくわからないが、三〇年に入っている松田安定は弟で、呼び寄せたのだろう。安定はシエンフエゴスやイスラで暮らし、キューバ婦人と結婚して家庭ももっていたが、革命後の六七年頃に単身帰郷している。太良は収容までに帰郷していると思う。

齋藤又男

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にハバナに入っている。二十二歳だった。トリニダーのあとはオリエンテ（オルギン）にいたようで、三三年にプレストンで死亡している。熊本県上益城郡木倉村（上益城郡御船町木倉）の人。

木下市喜

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にハバナに入っている。二十五歳だった。トリニダーのあとはイスラでなく本島の地方にいたと思う。第六回収容で、釈放後はハバナに移っている。七九年十月十八日に死亡。熊本県上益城郡白旗村白旗（上益城郡甲佐町白旗）の人。

山城寅喜

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にハバナに入っている。二十二歳だった。トリニダーのあとはハバナにいたのか、収容以前にハバナで死亡していることがわかるだけで、命日も不明。熊本県上益城郡七滝村（上益城郡御船町七滝）の人。

溜淵道雄

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にハバナに入っている。二十七歳だった。この人も、トリニダーのあとはハバナにいたのか、収容以前にハバナで死亡したことがわかるだけで、命日もわからない。慰霊堂の第二号セルに位牌が残っている。熊本県上益城郡白旗村早川（上益城郡甲佐町早川）の人。海興移民は、トリニダー逃亡後は、カマグエイかオリエンテで農業か、理髪師か、エラード販売をするか、あるいはイスラに渡って野菜づくりをはじめめる者が多かった。比べてハバナに出た者はごく少数で、たぶんキューバを離れようとしたのだと思う。ただそれができずに、ハルディネロやコシネロになった者が多かった。そうして旅費はもちろん少しでも多くの貯えをと思つたのだろうか、命を落とす者も少なくなかつた。溜淵のその一人だった。

荒川伍平

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にハバナに入っている。三十四歳だった。トリニダーのあとはカマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のバラグアにいたと思う。二九年に妻のサダメと長女のスマコを呼び寄せている。収容は第二回だから、雑貨店か何かそ

れなりの商店を開いていたのではないか。商業従事者は日本と密接に通じているとして逮捕されるのも早かった。収容中はサダメが店を守っていたのだろう。釈放後もバラグアにいて六八年五月二十四日に死亡している。熊本県菊池郡蘇川村矢護川（菊池郡大津町矢護川）の人。同村の人に今村鶴喜や今村幸、田呂丸幡寮がいる。

井上与三一

海外興業の第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にキューバに入っている。二十五歳だった。トリニダー後のことはよくわからないが、三〇年に実施された理髪師資格試験の受験者名簿に名前が載っていて、サンタ・クララのハティボニコにいたことがわかっている。海外興業の乗船名簿には「井上与三一」とあるが、理髪試験名簿には「井上四三一」とある。どちらが正しいともいいがたいが、同一人物だろう。福岡県八女郡横山村上横山（八女市上陽町上横山）の人。

竹原市蔵

海外興業の第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にキューバに入っている。移民としては高齢の四十歳だったから郷里に妻子を残していただろう。トリニダーのあとはカ

マダエイあたりにいたのではないか。収容は第六回で、釈放後はピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移つて農業をしていた。それなりの貯えができたのだらう、革命前の五〇年代に帰郷している。福岡県糸島郡加布里村油比（前原市油比）の人。福岡県出身者は八十八人いるが加布里はこの人だけ。

馬渡金蔵

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダーには入っているだらうが、その後のことがわからない。福岡県八女郡川崎村長野（八女市長野）の人。馬渡虎蔵は兄だらう。四カ月前の二五年二月に入っている。この兄からトリニダーでの実状が知らされなかつたのかどうか。日本とキューバ間の渡航には約二カ月かかっている。もし虎蔵がすぐに手紙で知らせていたとすれば、長くても一カ月あれば届いただらうから、キューバ行を中止するかどうか、一月の猶予があつたと思うが、どうだったのだらう。

木下武市

海外興業の第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にキューバに入っている。

三十歳だった。トリニダーのあとはカマグエイあたりにはいたのではないか。戦後、ピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移っている。収容は第六回で四階にいた。五七年七月十四日に死亡している。戦後のコンソラシオンでは農業で成功して帰郷する人も多かったが、病気がそれを阻んだのかもしれない。広島県安佐郡三入村下町屋（広島市安佐北区可部町下町屋）の人。

向井公平

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。広島市広島市場町（広島市南区的場町）の人。

鷺見美登治

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にハバナに入っている。十八歳だった。トリニダーには入っているだろうが、やはりその後のことがわからない。岡山県吉備郡池田村見延（総社市見延）の人。第三回移民の鷺見久太郎は兄だろう。収容前の早い時期にともに帰郷していると思う。

小西喜美夫

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にハバナに入っている。二十二歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。早い時期に帰郷していると思う。岡山県吉備郡総社町門田（総社市門田）の人。

富岡蓑夫

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にハバナに入っている。十八歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。岡山県吉備郡阿曾村黒尾（総社市黒尾）の人。富岡姓はほかに一人もいない。

本行岩之丞

海外興業第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にハバナに入っている。二十七歳だった。トリニダーには入っているだろうが、やはりその後のことがわからない。岡山県吉備郡池田村見延（総社市見延）の人。第十一回移民に本行覚治がいるが縁戚かどうか。キューバ移民は海興移民以外は、簡単にいえばほとんどが呼び寄せだったから、縁戚をたどれば、その

あしあとも見えてくるのだが、海興移民にはそれが無い。海興移民も、縁戚がなかったから、トリニダーがだめとなれば早くにキューバを見限るしかなかったのだろう。

柴尾貞三

海外興業の第十回移民二十七人の一人で、一九二五年六月十二日にキューバに入っている。二十三歳だった。トリニダーには入っていないのかもしれない。三〇年代にはハバナにいたよ
うで、三〇年代の半ばの天長節だろうか、ハバナの日本公使館での集合写真に姿が見える。収
容は第六回で三階にいた。この階はほとんどがハバナにいた人だった。ただ、その後のことが
わからない。たぶん革命前に帰郷していると思う。福岡県八女郡北川内村久米原（八女市上陽
町北川内）の人。釈放後、独身者には、すぐに帰郷しようとした人が多かった。ただ、敗戦の
混乱のなかで郷里も疲弊していると考えて思い止まっている。そうして帰郷の機会を待つのだ
が、時期を選ぶのが難しかった。ここらでええか、と五〇年代に切り上げた人はよかったが、
あと少し、とがんばった人が革命によって機会を喪うことになる。移民に運命の女神は平等で
はなかった。

織田半平

一九二五年に入っているが、だれの呼び寄せだったのか、手がかりもつかめない。三重県安農郡片田村久保（津市片田久保町）の人。三重県からは市川喜太郎一族がいるだけで、その縁戚でもなさそうだ。

大城亀康

一九二五年に入っていることがわかるだけ。呼び寄せだったと思うが、縁戚がわからない。沖繩県の人。

坂田幸平

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年六月十日に東洋汽船の墨洋丸で神戸を発ち、八月一日にハバナに入っている。三十三歳だった。トリニダー後はカマグエイにいて、翌二六年に妻チジユを呼び寄せている。理髪店を開いていたのだろう、三〇年に実施された理髪師資格試験の受験者リストに名前がある。その合否はわからない。第六回収容で、釈放後なのか革命後なのか、ラス・ビジャス（サンクティスピリトゥス）のハティボニコに移っている。

七八年十一月十一日に死亡。熊本県八代郡栗木村（八代市泉町栗木）の人。

松本健吉

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年八月一日にハバナに入っている。二十一歳だった。収容は第二回だから、トリニダー後はカマグエイカラス・ビジャスで、何か商店を開いていたのではないか。吉村半次郎の長女と結婚している。釈放後はラス・ビジャス（サンクテイ・スピリトゥス）のハティボニコにいたが、革命前の五〇年代に帰郷している。熊本県下益城郡中山村松野原（下益城郡美里町松野原）の人。

杉本嘉一

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年八月一日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダーのあとはカマグエイカラス・ビジャス（サンクテイ・スピリトゥス）のタグアスコ（Tagasco）にいたのではないか。職業はわからないが、三〇年に妻ミツギを呼び寄せている。収容は第六回。釈放後もタグアスコにいて、ミツギは七四年に、嘉一は九四年二月二十五日に死亡している。熊本県下益城郡年弥村中（下益城郡美里町中）の人。

山下寅喜

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年八月一日にハバナに入っている。二十九歳だった。トリニダーのあとはイスラに渡って農業をしていたと思うが、ごく早い時期にイスラで死亡している。熊本県阿蘇郡山田村鳥子（阿蘇郡西原村鳥子）の人。

中尾福永

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年八月一日にハバナに入っている。三十三歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。熊本県阿蘇郡錦野村岩坂（菊池郡大津町岩坂）の人。第五回移民の中尾杉松は縁戚かどうか。

西村徳次郎

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年にトリニダーに入っている。三十一歳だった。その後のことはあまりわからないが、三十年代にハバナ西郊のバネスのセントラルで永井三雄（広島県出身）、三谷和吉、田吉伝蔵（熊本県出身）らといっしょにハルディネロをしていた。収容以前に帰郷していると思う。「徳次郎」ではなく「徳蔵」かもしれない。熊本県阿蘇



パネスのセントラル事務所前で
左から二人目が西村徳次郎

郡錦野村岩坂（菊池郡大津町岩坂）の人。

緒方佐久義

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年八月一日にハバナに入っている。二十七日のことだ。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。熊本県上益城郡河原村（阿蘇郡西原村河原）の人。

井上米吉

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年八月一日にハバナに入っている。二十二歳だった。トリニダーのあとはどこにいたのかわからないが、玖馬日本人会の役員をしていたようである。三〇年代半ばだと思われる。収容は第六回だった。ただ、その後のことがわ



日本人会の役員

最後列左から二人目が井上米吉

からない。革命までに帰郷しているだろう。福岡県八女郡横山村上横山（八女市上陽町上横山）の人。

上野繁実

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年八月一日にハバナに入っている。二十二歳だった。トリニダーには入っていないかもしれない。三〇年代にはハバナにいたようで、三〇年代半ばの天長節だと思いが、ハバナの日本公使館での集合写真に姿が見える。三四年に妻のタキノを呼び寄せている。収容は第六回で、釈放後もハバナにいて、革命前の五〇年代に帰郷している。井上米吉と同村、福岡県八女郡横山村上横山（八女

市上陽町上横山)の人。

徳永喜八

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年八月一日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダーのあとはハバナにいたのだろうか。ごく早い時期にハバナで死亡している。福岡県八女郡豊岡村本分(八女市黒木町本分)の人。

橋本寅七

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年八月一日にハバナに入っている。二十九歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。長崎県上県郡峰村佐賀(対馬市峰町佐賀)の人。橋本姓はほかにいない。

横田勝一

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年八月一日にハバナに入っている。二十五歳だった。その後は、ラス・ビジャス(サンクティスピリトゥス)のトリニダーの砂糖耕地で就労したことはほかの仲間と同様だが、数週間、長くても数カ月で離れているだろう。カماغエイ

(シエゴ・デ・アピラ)のモロンに移り、農業をはじめた。当時、モロンにいた仲間といつしよの一葉に姿が見える。それからいくらしもない三六年にカマグエイで死亡している。岡山県吉備郡阿曾村黒尾(総社市黒尾)の人。同航の横田栄之進は縁戚だろうか。

横田栄之進

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年八月一日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダールのあとはカマグエイにいたようで、ごく早い時期に死亡している。岡山県吉備郡阿曾村黒尾(総社市黒尾)の人。横田勝一とは縁戚ではないか。

滝本亀治

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年八月一日にハバナに入っている。トリニダールのあとはイスラに渡って野菜づくりをはじめた。収容は第五回で二階にいたが、収容中の四五年十月二十日にプレシディオで死亡している。三十八歳での渡航だったから郷里に妻子を残していただろう。無念の死だったと思う。岡山県吉備郡池田村楨谷(総社市楨谷)の人。ドイツ人は終戦の五月からほぼ二カ月の間に全員が釈放されているのに、日本人の場合は、戦争は八月に終わったが、収容はその後も続いて、最初の釈放は四五年のクリスマス直前で、す

べてが釈放されたのは翌四六年の三月末だった。どうしてだったのか。もし、きちんと釈放が実施されていれば救えた命だった。釈放の期日を明確に記せないのは、釈放時のうれしさと混乱、そしてその後の暮らしへの不安がつのつたからか、不思議とその日を正確に記憶している人がいないからで、内藤さんもその日をおおまかにしか覚えていなかった。

小川桂一

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年八月一日にハバナに入っている。十八歳だった。トリニダーのあとは、すぐにキューバを離れようとしたのだろうか、ハバナにいてごく早い時期に死亡している。岡山県吉備郡服部村金井戸（総社市金井戸）の人。

本行寛治

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年八月一日にハバナに入っている。二十九歳だった。トリニダー後はラス・ビジャス（ビジャ・クララ）のアロヨ・ナランホ（Aroyo Naranjo）にいたが、ごく早い時期に死亡している。岡山県吉備郡池田村見延（総社市見延）の人。見延の人はほかに鷺見久太郎、鷺見力男、鷺見美登治、本行岩之丞がいて、いずれも海外興業移民でトリニダーに入っているが、いずれもその後のことがわからない。たぶん帰郷して

いると思う。

堀亀吉

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年八月一日にハバナに入っている。二十九歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。和歌山県西牟婁郡和深村和深（東牟婁郡串本町和深）の人。

和田崎林次郎

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年八月一日にハバナに入っている。三十歳だった。トリニダーのあとはカマグエイにいたと思う。収容は第八回で、このときは十六人ですべて本島にいた人ばかりだった。釈放後もカマグエイにいて、七八年四月二十八日にシエゴ・デ・アピラで死亡している。和歌山県西牟婁郡和深村和深（東牟婁郡串本町和深）の人。和深からの同航に堀亀吉、木野三郎がいるが、ともに早くに帰郷していると思う。

木野三郎

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年八月一日にハバナに入っている。二十八

歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。和歌山県西牟婁郡和深村和深（東牟婁郡串本町和深）の人。

当山亀吉

一九二五年八月一日にハバナに入っている。二十五歳だった。呼び寄せだと思いが縁戚がわからない。収容前にはオリエンテ（グランマ）のバヤモ（Bayamo）において農業をしていた。収容はおそく第八回だった。バヤモという、ハバナからは遠く離れた地方にいたからだと思う。釈放後もバヤモにおいて、革命の動乱のときに逃げてきた革命軍兵士二人を匿ったことから、革命後は優遇を受け、広い農地を持つて農業をしていた。八四年に帰郷し、八九年二月六日に死亡している。沖縄県島尻郡玉城村仲栄真（南城市玉城富里）の人。

上間利清

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年八月一日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダーのあとはイスラに渡って農業をはじめている。収容は第五回グループで、釈放後もそのままイスラのマッキンレーにおいて、七二年六月十一日に死亡。沖縄県国頭郡本部村瀬底（国頭郡本部町瀬底）の人。結婚していたと思いが夫人の名前がわからない。

上間嘉清

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年八月一日にハバナに入っている。三十歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。沖縄県国頭郡本部村瀬底（国頭郡本部町瀬底）の人。

我喜屋得寿

海外興業第十一回移民二十四人の一人で、一九二五年六月十日、東洋汽船の墨洋丸で神戸を発っている。二十六歳だった。そして八月一日、ハバナに上陸、南東に三百七十キロばかり離れたラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のトリニダーの砂糖耕地に入っている。渡航費四百三十円。その工面のため、妻は父祖伝来の田畑を内緒で売り払って見送っている。契約通りに事が運ばば、二、三年後に、いまの五、六百万円を手には帰郷できるはずだった。だが、炎熱下での重労働に加え、賃金も契約とははるかにちがって、砂糖耕地の草取り作業が一日八十セントボスで、そこから三十セントボスが食費に引かれた。監督は「藤重」だったと明言している。そうして五カ月、我慢したが堪えきれずに逃亡。シエンフエゴスで清涼飲料水の販売をしたあと、イスラに渡って胡瓜づくりをはじめた。だが、価格が暴落、カマグエイに移ってエ



我喜屋得寿とキューバの長男

ライド販売をはじめ、シエゴ・デ・アビラでも続けていた。収容は第六回グループで四階にいたが、ほかの人によくある収容所での逸話が残っていない。釈放後はハバナに出て、革命後は弁護士宅でコシネロをしていた。ようやく帰郷が叶ったのは八二年、五十七年ぶりのことだった。釈放後は、昔仲間との付き合いがなかったらしく、行方がわからなくなっていたのを、ある日、アバナ・ビエハの交差点にぼつんと立っている姿を、偶々、仲間が見つけた。それを知った郷里の長男得一が呼び戻したのだった。おかしなことだが、キューバを訪ねたぼくが、逆に、日本に帰るかれをホセ・マルティ空港に見送ることになった。キューバの家族に囲まれ、ぱりっとしたスーツ姿

で記念写真に収まった笑顔が輝いていた。

ところが、その秋の暮れ、具志川を訪ねたぼくに嘆いた。「息子はほんとによくしてくれる。孫も大事にしてくれる。けどなあ……、おれにはやつぱりクーバがいい」。海に向かつて開け放たれた濡れ縁にぼつんと座り、呟いた横顔がいまも脳裏に焼き付いている。そして二年足らずのうちに逝ってしまった。八二年九月六日、八十五歳だった……。もう三十年あまりもむかしのことになる。忘れ得ぬ一人で、『峠の文化史』にも書いている。それを読んでくださった沖縄の大城永昌さんが、思いを詠って送ってくださいました。「思いやるはるけき人の身のうえに、われを還らす具志川塩屋かな」。さて、冥途でどうされているか、お会いできるのもそんなに先のことではない。沖縄県中頭郡具志川村上江州（うるま市塩屋）の人。

又吉加那一

海外興業第十一回移民二十四人の一人。一九二五年六月十日に神戸を東洋汽船の墨洋丸で発ち、八月一日にハバナに入っている。二十四歳だった。同航に具志川の我喜屋得寿がいた。海興移民には自由渡航者もいたが、我喜屋同様、又吉はいわゆる自由契約移民（就労期間の規定がないという不思議な契約移民）だったから、トリニダーの砂糖耕地に入っているだろうし、多くがそうであったようにいくらししないで逃亡していると思う。三カ月後にはラス・ビジャス

(サンクティ・スピリトゥス)のハティボニコにいたようで、二六年十月三十一日に天長節記念でハティボニコの日本人が集ったなかに姿が見える。その後、雑貨店を開いている。店内の一面にカウンター・バーを設け、日本人仲間も顔を出し、ずいぶん繁盛したらしい。収容は第六回グループで三階にいたが、この三階にはハバナの日本人が多かった。釈放後もハティボニコにいて、一九七二年十月二日に死亡している。沖縄県中頭郡与那城村平安座(うるま市与那城平安座)の人。

堀内一男

一九二五年八月一日にハバナに入っている。海外興業第十一回移民と同船だったが、小川千代蔵の呼び寄せだった。その後、イスラに渡ったようで、収容は第五回グループで、釈放後もイスラにいた。七五年五月一日に死亡している。熊本県菊池郡泗水村豊水(現、菊池市泗水町豊水)の人。

吉沢治男

吉沢正の弟。海外興業第十二回移民八人の一人で、一九二五年九月二十九日にハバナに入っている。十五歳だった。ただ、実質は海興移民ではなく、正の呼び寄せで自由渡航者だった。

この時期の海外興業は移民を募集しても思うように集まらなかったため、呼び寄せなども含めて送り込んでいた。一人でも頭数を揃えればその分、船会社から割戻金というマージンが入るからだった。兄の正はメキシコからの転航者でイスラに渡って野菜づくりをしていたから、最初はいつしよにいたと思うが、その後のことがわからない。正は妻子を戦争前に帰郷させているから、いつしよに帰郷しているのではないか。長野県上伊那郡七久保村（飯島町七久保）の人。

宮沢松男

海外興業第十二回移民八人の一人で、一九二五年八月七日に東洋汽船の樂洋丸で神戸を発ち、九月二十九日にハバナに入っている。ただ、渡航手段に海興を使っただけの自由渡航者でトリニダーには入っていないと思う。十五歳だった。だれの呼び寄せだったかわからないが、小林百輝の縁戚かもしれない。イスラに渡ってサンタ・バルバラ地区で農業をはじめ、三五年に妻がおるを呼び寄せている。収容は第五回で二階にいた。妻が土地と家を守っていたから、釈放後はすぐに戻って農業をはじめることができている。九八年六月十二日に死亡。長野県上伊那郡飯島村田切（上伊那郡飯島町田切）の人。広子、清子、大和、昇、良子の二男三女がいる。

岡本克行

海外興業第十二回移民八人の一人で、一九二五年九月二十九日にハバナに入っている。十九歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。高知県高岡郡高岡町（土佐市高岡町）の人。

岩郷豊年

海外興業第十二回移民八人の一人で、一九二五年九月二十九日にハバナに入っている。二十歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。高知県高岡郡高岡町（土佐市高岡町）の人。

宇賀健三

海外興業第十二回移民八人の一人で、一九二五年九月二十九日にハバナに入っている。二十一歳だった。海興移民には同船しただけで就労地のトリニダーには入っていない者もいるが、宇賀はそうではないと思う。逃亡後はオリエンテ（オルギン）のアンティジャ（Antilla）で理髪店を開いていた。三〇年の理髪師資格試験には落ちたのではないか、開業できなくなり、カマ

グエイに移ったようで、収容までに同地で死亡している。高知県吾川郡弘岡下村（吾川郡春野町弘岡下）の人。

内間武五郎

海外興業第十二回移民八人の一人で、一九二五年九月二十九日にハバナに入っている。三十八歳だった。トリニダーには入っていないと思う。同郷で海興第二回移民の内間善五郎の呼び寄せではないか。イスラに渡ってマッキンレーで農業をしていた。第五回収容で二階にいた。独身だったのではないか、収容で農地をなくしたのだろう、釈放後はしばらくイスラにいたかもしれないが、ハバナに移り、日にちはわからないが七〇年代末に死亡している。沖縄県国頭郡本部村瀬底（国頭郡本部町瀬底）の人。

上間清昌

海外興業第十二回移民八人の一人で、一九二五年九月二十九日にハバナに入っている。十八歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。たぶん収容前に帰郷しているだろう。兄だろうか、戸籍では隣地にあたる上間嘉昇と同航だった。沖縄県国頭郡本部村瀬底（国頭郡本部町瀬底）の人。

上間嘉昇

海外興業第十二回移民八人の一人で、一九二五年九月二十九日にハバナに入っている。二十五歳だった。トリニダーのあとはカマグエイあたりだろうか、本島にいたと思う。第六回收容で四階にいたが、釈放後のことがわからない。たぶん帰郷しているだろう。弟だろうか、戸籍では隣地にあたる上間清昌と同航だった。沖縄県国頭郡本部村瀬底（国頭郡本部町瀬底）の人。

谷本玉一

海外興業第十三回移民六人の一人で、一九二五年九月六日に東洋汽船の銀洋丸で神戸を発ち、十月二十八日にハバナに入っている。三十三歳だった。トリニダーには入っているだろう。その後、イスラに渡っているが、ごく早い時期に死亡している。広島県安芸郡仁保村乙（広島市南区仁保）の人。上野半之助とは従兄弟。

上野半之助

海外興業第十三回移民六人の一人で、一九二五年十月二十八日にハバナに入っている。三十三歳だったから郷里に妻子を残していただろう。トリニダーのあとはイスラに渡って野菜づくり

をしている。收容は第五回で、收容中に土地をなくしてしまつたのだろう、釈放後はピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移っている。戦後、イスラやカマグエイからピナルに移る人がけっこういたが、地代が安く開墾すればいくらでも農地を広げることができたから成功する機会もあり、うまく切りをつければ、まとまつた貯えを手に帰郷することもできた。上野もその一人だつたか、革命前の五〇年代に帰郷している。広島県安芸郡仁保村大原甲（広島市南区仁保）の人。

寺西米一

海外興業第十三回移民六人の一人で、一九二五年十月二十八日にハバナに入っている。三十八歳だつた。ただ、その後のことはわからない。広島県安芸郡仁保村妙見（広島市南区仁保）の人。

黒川市松

海外興業第十三回移民六人の一人で、一九二五年十月二十八日にハバナに入っている。三十二歳だつた。收容は第六回グループだからトリニダーのあと、收容前には本島にいたことはたしかだが、その後、五二年に死亡していること以外何もわからない。慰霊堂の第十七号セルに位牌が納められている。熊本県上益城郡甲佐村大町（上益城郡甲佐町大町）の人。黒川姓はほかに

いない。

松永末熊

海外興業第十三回移民六人の一人で、一九二五年十月二十八日にハバナに入っている。三十六歳だった。トリニダーに入っているかどうかはわからないが、収容は第五回だから、収容前にはイスラにいただろう。釈放後は、対岸のバタバノに移っている。漁業をしていたと思う。七六年四月十日に死亡。熊本県菊池郡泗水村豊水（菊池市泗水町豊水）の人。

小林實四郎

海外興業第十三回移民六人の一人で、一九二五年十月二十八日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダーに入ったかどうかはわからない。ごく早い時期にハバナで死亡している。長野県下伊那郡飯田町（飯田市）の人。小林武夫と縁戚の可能性もある。

廉崎佐一

一九二五年に二十七歳で入っているが、その後のことがわからない。山口県熊毛郡佐賀村佐合島（熊毛郡平生町佐合島）の人。

谷本芳松

一九二五年に入っている。呼び寄せだろうが、縁戚がわからない。二十八歳だった。広島県安芸郡仁保村妙見（広島市南区仁保）の人。仁保村の人はほかに十二人いる。

浦野豊記

一九二五年十月二十八日にハバナに入っている。二十四歳だった。その後、カマグエイで理髪店を開いていたようで、三〇年に実施された理髪師資格試験の受験者リストに名前がある。収容は最終の第九回グループ八人の一人で四階にいた。釈放後はハバナに移ったようで、五六年七月一日に死亡している。熊本県玉名郡鍋村鍋（玉名市岱明町鍋）の人。名前は「豊喜」かもしれない。浦野十平の呼び寄せだろう。

浦野初蔵

浦野十平の婿養子。呼び寄せで、一九二五年十月二十八日にハバナに入っている。二十三歳だった。その後、転々としたあとオリエンテのバナス (Bares) にいたと思う。第六回収容で、釈放後もバナスにいたが、革命後はハバナの西のバウタ (Bauta) で暮らして、八二年九月

二十三日に死亡している。熊本県玉名郡鍋村鍋（玉名市岱明町鍋）の人。浦野豊記と縁戚だろうか。

中村義人

海外興業第二回移民だった父の万平の呼び寄せで、一九二五年十月二十八日にハバナに入っている。十六歳だった。万平はトリニダー後はイスラに渡って農業をしていたと思う。収容は第五回で、プレシディオでは二階にいた。万平は収容されていないからそれ以前に帰郷しているだろう。釈放後は本島西部のピナル・デル・リオのエラドウラ（Herradura）に移って農業を続けている。収容で裸一貫になったイスラの独身日本人には釈放後はピナルに移る人が多かった。イスラでは土地をアメリカ人から借りての農業だったから、収容中に土地を守る者がいないと、土地は取り上げられ、家も焼き払われていたからだった。ピナルは、イスラと気候や土質が似ていたうえ、ハバナまでの野菜出荷の費用がイスラより安かったから、再出発には打つてついで、収容以前から日本人が少しづつ移りはじめていたからそれを頼ることもできた。そうして、いくらかまとまった貯えができたところで帰郷する人も少なくなかった。いい切りをつけたと思う。それを、あと少しと先延ばしにした人は、革命とその後の土地改革で元も子もなくしてしまっている。熊本県上益城郡白旗村白旗（上益城郡甲佐町白旗）の人。

北崎オツナ

北崎好助の妻。夫の呼び寄せで一九二五年十月二十八日にハバナに入っている。三十歳だった。好助は北崎政次郎の弟で二一年に呼び寄せられ、バタバノで漁師をしていたが、收容中の四四年に死亡している。その後、オツナはどうしたかわからないが、三七年十二月十八日生まれの一女ヨシエ (Moraima) がバタバノにいて、いまでも健在でおられると思う。福岡県糸島郡北崎村宮浦 (福岡市西区宮浦) の人。

光永タケ

一九二五年十月二十八日にハバナに入っている。二十歳だった。同村の人で、海外興業第二回移民の光永蓄の縁戚で、その呼び寄せではないかと思う。そうでないかぎり単独での入国は難しかった。その後のことは詳しくわからないが、カマグエイのフロリダ (Florida) で理髪店を開いていた加藤千代三郎と結婚している。熊本県菊池郡菊池村西寺 (菊池市西寺) の人。

湯中増二

一九二五年十月二十八日にキューバに入っている。湯中清の縁戚で、その呼び寄せではない

かと思う。清はカマグエイのフロリダにいたから、増二も最初はフロリダにいただろう。その後、三〇年代だと思うが、カマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のモロンの日本人グループの記念写真に姿が見えるから、その頃はモロンにいたのだろう。三〇年に妻タカを呼び寄せている。収容は第六回グループで、釈放後もモロンにいたと思う。六九年八月二十日にモロンで死亡している。鳥取県の人。

吉川万亀

一九二五年十月二十八日にハバナに入っている。その後はカマグエイにいたのではないかと思うがよくわからない。収容は第八回だから本島にいたことはたしかで、革命後の六六年十月にカマグエイのフロリダで死亡している。鳥取県の人。名前は「万喜」かもしれない。

田村ミツエ

田村徳重の家族か縁戚だと思う。一九二五年十月二十八日にハバナに入っているが、その後のことがわからない。戦後の五三年に徳重・栄枝夫婦といっしょに帰郷している。高知県の人。

市原マサオ

市原源の夫人だと思う。一九二五年十月二十八日にハバナに入っている。田村ミツエ、中田利喜と同航だった。源はハバナの大平商店で働いていた。戦後はカマガグエイのエスメラルダに移って、革命前に夫婦で帰郷している。高知県の人。

真鍋磨

一九二五年十月二十八日にキューバに入り、二年後の二七年に妻直を呼び寄せている。三〇年にはオリエンテ（オルギン）のクエト（Cruco）で理髪店を開いていた。その後、収容前にはピナル・デル・リオに移ってコンソラシオン・デル・スールで農業をしていたと思う。戦後は四カバジェリア（五十二万平米）という広大な土地を買い入れ、半分を牧畜にして農業を続けていたが、四年ほど病気で寝込んだあと、革命直後の五九年七月五日に死亡している。高知県高岡郡高岡町戸波（土佐市高岡町）の人。戦後、政府から、外国籍の農業者は一人当たり七十ペソを支払うことを要求されたらしい。どういう理由だったかはわからないのだが、真鍋は病気を理由に免除を要求すると半額にしてくれたという。革命後は、女手一つでは農業もむずかしくなったため農地を手放すと、革命政府はカバジェリア当たり千ペソで買い上げてくれた。

また、キューバ国籍を持っていると有利なことも多かつたらしく、直はキューバに帰化している。ほかにキューバ国籍を持っていた人は三十三人いた。

湊ミサオ

湊雪雄の妻。一九二五年十月二十八日にハバナに入っている。雪雄はイスラのフィンカ・フカロ地区で農業をしていた。七一年十一月六日に死亡。徳生と邦子のほかに一男一女がいたと思う。広島県広島市安佐南区安古町上安字萩原（広島市安佐南区上安字萩原）の人。

中田利喜

田村徳重の呼び寄せではないか。一九二五年十月二十八日にハバナに入っている。田村ミツエや市原マサオと同航だった。ハバナの太平商店で働いていたと思う。三〇年代の天長節だろう、ハバナの日本公使館での集合写真に姿が見える。収容は第六回で、釈放後もハバナにいて、七九年二月五日に死亡している。高知県の人。

松沢サツエ

松沢等の妻だと思う。一九二五年十月二十八日にハバナに入っている。等はオリエンテ（オ

ルギン)のアンティジャ (Antilla) で理髪店を開いていた。戦後、革命前の五〇年代に夫婦で帰郷している。高知県の人。

浦瀬恒七

一九二五年に二十三歳で入っている。呼び寄せだろうが、縁戚がわからない。兵庫県三原郡福良町 (南あわじ市福良) の人。

浦新造

福岡県の人で、一九二五年に入っているが、それ以外まったくわからない。

青木輝夫

一九二五年に入っていること以外、出身県もわからない。

出羽勝太郎

一九二五年にキューバに入っている。カマグエイ (シエゴ・デ・アピラ) のモロンにいたらしく、三〇年代だと思いがモロンにいた日本人仲間との記念写真に姿が見える。三一年に妻の俊

子呼び寄せられている。収容は第六回で四階にいた。釈放後もモロンにいて、七七年十二月二十九日に死亡している。静岡県庵原郡蒲原町古屋敷（静岡市清水区蒲原）の人。長男久克（Ramon）がモロンで健在かどうか。

岩城直次

鹿児島県の人で、一九二五年に妻タツといっしょに入っている。高山猪熊の呼び寄せかもしれない。

岩城タツ

岩城直次の妻で、一九二五年に夫といっしょに入っている。鹿児島県の人。

高山ツル

高山猪熊の母。一九二五年に呼び寄せられている。カマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のセントラル・バラグア（Baragua）の高山のところに行ったが、三八年に高山が死亡したあととはどうしたかわからない。たぶん帰郷していると思う。鹿児島県始良郡重富村大字平松（始良市平松）の人。

川村直之

姓は異なっているが、高山猪熊の弟ではないか。一九二五年に高山の母ツルといっしょに入っている。カマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のセントラル・バラグアの高山のもとにいたが、高山の死亡のあと、ツルといっしょに帰郷していると思う。キューバに残っていた気配がない。鹿児島県始良郡重富村大字平松（始良市平松）の人。ただ、二四年にキューバからメキシコに「牧畜視察」という目的で渡航していることから考えれば、それ以前に高山に呼び寄せられていて、二五年はツルを同行しての再渡航だったのかもしれない。

仲宗根盛郎

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十月二十六日に東洋汽船の安洋丸で神戸を発ち、十二月十七日にハバナに入っている。二十三歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。沖縄県中頭郡越來村照屋（糸満市照屋）の人。

安座間松

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。

三十三歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。沖縄県中頭郡中城村島袋（中頭郡北中城村島袋）の人。

安座間昌輝

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。十九歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。沖縄県中頭郡中城村島袋（中頭郡北中城村島袋）の人。

上原昇

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。二十九歳だった。トリニダーには入っているだろうが、やはりその後のことがわからない。沖縄県島尻郡糸満町（糸満市糸満）の人。

上原亀

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。三十三歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。沖縄県島

尻郡糸満町（糸満市糸満）の人。

上原徳助

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。三十四歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。沖縄県島尻郡糸満町（糸満市糸満）の人。

登所平

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十月二十六日に東洋汽船の安洋丸で神戸を発ち、十二月十七日にハバナに入っている。二十六歳だった。海興移民はこのあとも第十五回二十人、十六回二十五人、十七回二十三人、十八回二十四人と続くがほぼ全員がトリニダーに入っていると思う。登もトリニダーに入っているが、最低就労期間の三カ月を待たずに逃亡したのではないか。カマグエイあたりにはいたのか、それとも早くにピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移ったのかもしれない。収容は第六回で、釈放後はコンソラシオンにおいて、革命直後の六〇年十月二十日に死亡している。広島県佐伯郡観音村佐方（広島市佐伯区佐方）の人。

重広敬蔵

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。二十二歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。広島県安佐郡八木村（広島市安佐南区八木）の人。

森田茂稔

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。二十一歳で、同村の松田政則、松田薫と同航だった。トリニダー後は本島にいたことはたしかだが、特定できない。収容は第四回で、このときは十九人と少数だったから、何か大きく商店を開いていたのではないか。釈放後はハバナの西のマリアナオ（Marianao）において、八二年八月十五日に死亡している。高知県高岡郡高岡町甲（土佐市高岡町甲）の人。

松田政則

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。二十五歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。早くに帰

郷しているだろう。高知県高岡郡高岡町甲（土佐市高岡町甲）の人。

松田薫

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。同村の森田茂稔と松田政則と同航、二十七歳だった。トリニダールのあとは本島のどこにいたのかわからない。第六回収容で、釈放後の四九年に死亡している。収容疲れだろうか、釈放後数年で死亡する人がけっこういた。高知県高岡郡高岡町甲（土佐市高岡町甲）の人。

福永元義

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。二十六歳だった。トリニダールのあとはイスラに渡っている。収容は第五回で、釈放後もイスラのフィンカ・フカロ（Finca Jucaro）について、七六年一月十二日に死亡している。熊本県菊池郡合志村上庄（合志市上庄）の人。

田呂丸幡寮

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。

三十一歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。熊本県菊池郡蘇川村矢護川（菊池郡大津町矢護川）の人。

前田政次

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。二十三歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。熊本県上益城郡六嘉村上六嘉（上益城郡嘉島町上六嘉）の人。

安座間武信

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。二十七歳だった。トリニダーには入っているだろうが、やはりその後のことがわからない。沖縄県中頭郡中城村島袋（中頭郡北中城村島袋）の人。

安座間亀昌

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。沖縄県中

頭郡中城村島袋（中頭郡北中城村島袋）の人。

喜屋武加那助

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。三十一歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。沖繩県中頭郡中城村比嘉（中頭郡北中城村比嘉）の人。

山川太良

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。三十二歳だった。トリニダーのあとはどうしたか、何もわからない。沖繩県島尻郡高嶺村与座（糸満市与座）の人。

上原保徳

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。二十三歳だった。トリニダーのあととはラス・ビジャスのシエンフエゴスにいたのではないか。二九年に弟だと思うが、亀康、三〇年に亀三を呼び寄せている。ただ、その後のことがわから

ない。沖縄県島尻郡糸満町（糸満市糸満）の人。

玉城章信

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。三十歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。沖縄県島尻郡糸満町（糸満市糸満）の人。

井上八郎

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。二十三歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。福岡県八女郡横山村横山（八女市上陽町上横山）の人。井上徳次は兄だろう。

井上徳次

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。二十六歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。福岡県八女郡横山村横山（八女市上陽町上横山）の人。井上八郎は弟だろうし、井上米吉とも縁戚かもしれない。

れない。

丸本菊市

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。広島県安芸郡江田島村（江田島市江田島町）の人。

大村鶴松

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。二十三歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。広島県安芸郡江田島村（江田島市江田島町）の人。

引越文一

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。三十五歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。広島県安芸郡江田島村（江田島市江田島町）の人。

玉城亀雄

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダー後はシエンフエゴスに移っていて、二六年に弟だろうか、徳太を呼び寄せている。日にちはわからないが、ごく早い時期に同地で死亡していて、慰霊堂の第二号セルに位牌が残っている。沖縄県島尻郡糸満町（糸満市糸満）の人。

安座問亀

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十二月十七日にハバナに入っている。三十六歳だった。トリニダーには入っているだろうが、その後のことがわからない。沖縄県中頭郡中城村島袋（中頭郡北中城村島袋）の人。

稲倉賢寿

一九二五年に入っていて、その後、カマグエイのフロリダ (Florida) で理髪店を開いていた。収容は第六回グループで、釈放後はフロリダに戻っているが、革命前の五〇年代に帰郷している。鳥取県の人。「賢治」あるいは「賢義」かもしれない。

嵯峨里光

一九二五年に入っていて、三〇年にはカマグエイのフロリダ (Florida) で理髪店を開いていたようで、三〇年に実施された理髪師資格試験の受験者リストに名前がある。試験には不合格だったのかもしれない。その後、同じカマグエイのヌエビタス (Nuevitas) に移り、收容以前に同地で死亡している。日にちはわからない。鳥取県の人。

谷口吾市

一九二五年に入っているが、関係者も、年齢も、その後のこともわからない。ただ、二八年に大谷鉄一を呼び寄せている。広島県の人。

井上徳太郎

一九二六年一月六日にハバナで脱船している。二十四歳だった。その後、カマグエイ (シエゴ・デ・アピラ) のステワルテで理髪店を開いていた。三〇年に実施された理髪師資格試験の受験者リストに名前がある。收容は第六回で、釈放後は同じカマグエイのベルティエンテス (Vertientes) にいて、八八年六月二十二日に死亡している。神奈川県横浜市中区山王町 (横浜

市南区山王町)の人。

米倉一八

一九二六年の三月か四月にハバナに入っていると思うが、確認できない。福岡の人。

松浦重実

海外興業第十五回移民二十人の一人で、一九二五年十二月八日に東洋汽船の墨洋丸で神戸を発ち、翌二六年二月九日にハバナに入っている。二十二歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後がわからない。広島県安佐郡三入村下町屋(広島市安佐北区可部町下町屋)の人。

采文治

海外興業第十五回移民二十人の一人で、一九二六年二月九日にハバナに入っている。二十七歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。広島県安佐郡三入村上町屋(広島市安佐北区可部町上町屋)の人。

蒔田有行

海外興業第十五回移民二十人の一人で、一九二六年二月九日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。広島県安芸郡江田島村（江田島市江田島町）の人。

鍵山次一

海外興業第十五回移民二十人の一人で、一九二六年二月九日にハバナに入っている。二十九歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。広島県安芸郡江田島村（江田島市江田島町）の人。

奥本直一

海外興業第十五回移民二十人の一人で、一九二六年二月九日にハバナに入っている。二十三歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。広島県安芸郡江田島村（江田島市江田島町）の人。江田島村の人は全体で二十二人いるが、すべてが海興移民。

伊敷松

海外興業第十五回移民二十人の一人で、一九二六年二月九日にハバナに入っている。三十二歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。沖繩県島尻郡高嶺村与座（糸満市与座）の人。

玉城加那吉

海外興業第十五回移民二十人の一人で、一九二六年二月九日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。沖繩県島尻郡糸満町（糸満市糸満）の人。

安里徳昌

海外興業第十五回移民二十人の一人で、一九二六年二月九日にハバナに入っている。三十一歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。沖繩県中頭郡中城村荻道（中頭郡北中城村荻道）の人。

石川松

海外興業第十五回移民二十人の一人で、一九二六年二月九日にハバナに入っている。三十八歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。沖繩県中頭郡美里村桃原（沖繩市桃原）の人。

安座間松助

海外興業第十五回移民二十人の一人で、一九二六年二月九日にハバナに入っている。三十一歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。沖繩県中頭郡美里村与儀（沖繩市与儀）の人。

宮里徳

海外興業第十五回移民二十人の一人で、一九二六年二月九日にハバナに入っている。三十一歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。沖繩県中頭郡美里村桃原（沖繩市桃原）の人。

比嘉増栄

海外興業第十五回移民二十人の一人で、一九二六年二月九日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。沖繩県中頭郡美里村桃原（沖繩市桃原）の人。

島袋嘉真

海外興業第十五回移民二十人の一人で、一九二六年二月九日にハバナに入っている。四十二歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。沖繩県中頭郡越來村上地（中頭郡読谷村上地）の人。

仲宗根牛

海外興業第十五回移民二十人の一人で、一九二六年二月九日にハバナに入っている。二十七歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。沖繩県中頭郡美里村大里（沖繩市大里）の人。

上里幸政

海外興業第十五回移民二十人の一人で、一九二六年二月九日にハバナに入っている。三十九歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。沖繩県中頭郡中城村瑞慶覧（中頭郡北中城村瑞慶覧）の人。

渡嘉敷眞康

海外興業第十五回移民二十人の一人で、一九二六年二月九日にハバナに入っている。三十九歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。沖繩県中頭郡中城村瑞慶覧（中頭郡北中城村瑞慶覧）の人。

清水喜久二

海外興業第十五回移民二十人の一人で、一九二六年二月九日にハバナに入っている。二十二歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。岡山県都窪郡妹尾町妹尾（岡山市南区妹尾）の人。

柴倉喜一

海外興業第十五回移民二十人の一人で、一九二六年二月九日にハバナに入っている。三十二歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。岡山県上房郡中井村西方（高梁市中井町西方）の人。海興移民ではないが同航の柴倉義雄とは縁戚かもしれない。

野中豊

海外興業第十五回移民二十人の一人で、一九二五年十二月八日に東洋汽船の墨洋丸で神戸を発ち、翌二六年二月九日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダー後はイスラに渡って野菜づくりをしていたが、数年でカماغエイのシエゴ・デ・アビラに戻っている。第六回収容で、釈放後もシエゴ・デ・アビラにいて、八二年には萌やしづくりをしていた。当時の人にしては大柄の寡黙な人だった。八九年二月二十八日に死亡。福岡県八女郡上広川村水原（八女郡広川町水原）の人で、独身だったと思う。

中川正

海外興業第十五回移民二十人の一人で、一九二六年二月九日にハバナに入っている。二十四

歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。熊本県菊池郡菊池村西寺（菊池市西寺）の人。同村の中川熊雄は縁戚かもしれない。

国武定二郎

海外興業第十五回移民と同船で、一九二六年二月九日にハバナに入っている。その後はどこにいたのか特定できないが本島にいたことはたしかで、第六回グループで収容されている。釈放後、四八年に死亡しているが、どこにいたのかわからない。福岡県の人。同県人の国武貞次郎が二六年の十一月頃にハバナに入っているが、縁戚かもしれない。

田中兵次郎

海外興業第十五回移民と同船で、一九二六年二月九日にハバナに入っている。二十六歳だった。その後はハバナで何か商店を開いていたのではないか、あるいはバタバノで漁師をしていたのかもしれない。二九年に妻タカを呼び寄せているが、タカはその後いくらもしないで死亡している。収容は第四回グループで、釈放後はハバナにいた。七八年七月十七日に死亡。福岡県粕屋郡志賀島村志賀島（福岡市東区志賀島）の人。

北崎善三

兄の北崎好助の呼び寄せで一九二六年二月九日にハバナに入っている。二十歳だった。好助はハバナの南、カリブ海側のバタバノで漁業をしていた。善三もいつしよに漁師をしたのだろう。収容は第六回で、釈放後もバタバノにいて、八三年五月十日に死亡している。福岡県糸島郡北崎村宮浦（福岡市西区宮浦）の人。

宮崎三郎

北崎好助、善三兄弟と戸籍が同じだが、関係がわからない。善三に同行、好助の呼び寄せだろう。一九二六年二月九日にハバナに入り、バタバノで漁師をしている。十六歳だった。収容は第六回で、釈放後もバタバノで漁業をしていたと思う。八九年六月十八日に死亡している。福岡県糸島郡北崎村宮浦（福岡市西区宮浦）の人。

上田唯次

一九二六年二月九日にハバナに入っている。その後、ハティボニコにいたのだろう。天長節記念だと思うが、二六年十月三十一日にハティボニコの日本人が集ったなかに姿が見える。収容は

第六回で、釈放後はピナル・デル・リオのエラドウラにいたが、その後、ハバナに移って、革命前の五三年三月二日に死亡している。福岡県の人。夫人は綾子。日野忠造の娘で、一九二二年にメキシコで生まれて父母に連れられキューバに入っているから一世だが、キューバでは二世扱いにしていた。父母（忠造、モモヨ）と弟（良彦）と妹（久子）は三一年に帰郷したが、綾子は結婚していたから上田といっしよに残って、八二年にも元気でおられて、キューバのこゝとをいろいろ教えてくれた。

柴倉義雄

海外興業第十五回移民と同船で、一九二六年二月九日にハバナに入っているが、その後、ごく早い時期にハバナで死亡していること以外何もわからない。岡山県の人。ハバナの慰霊堂の第二号セルに位牌が納められている。海興第十五回移民で同船の柴倉喜一は縁戚だろうか。

西本増造

石田孫市の呼び寄せで一九二六年に入っているが、その後のことがわからない。広島県安佐郡緑井村（広島市安佐南区緑井）の人。渡航時には三十一歳だったから早くに帰郷していると思う。

児玉勇二

父児玉良三郎の呼び寄せで一九二六年に入っている。十四歳だった。良三郎はシエゴ・デアピラにいたが、二九年に死亡している。その後、勇二はどうしたのかわからないが、収容まですでに帰郷していると思う。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。

芝武

一九二六年に入っていると思うが、たしかでない。二十二歳だった。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。大島村からはほかに二十九人いて、そのいずれかの呼び寄せだろう。

安宅直次郎

児玉勇二、芝武、徳原正次と同村、同航で一九二六年に入っているが、詳しくわからない。十九歳だった。カマグエイ（シエゴ・デアピラ）のメルセデス（Mercedes）でなく早い時期に死亡している。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。

徳原正次

児玉勇二、芝武、安宅直次郎と同村、同航で一九二六年に入っているが、詳しくわからない。十九歳だった。ラス・ビジャスのサンクティ・スピリトゥスでごく早い時期に死亡している。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。

花野六市

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年一月二十八日に東洋汽船の楽洋丸で神戸を発ち、三月二十三日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。広島県安芸郡江田島村（江田島市江田島町）の人。

竹中次太郎

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日にハバナに入っている。二十五歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。広島県安芸郡江田島村（江田島市江田島町）の人。

大谷徳雄

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日にはバナに入っている。二十六歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。広島県安芸郡仁保村単田（広島市南区仁保）の人。

中西清人

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日にはバナに入っている。三十三歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。広島県安佐郡三入村上町屋（広島市安佐北区可部町上町屋）の人。

信平喜六

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日にはバナに入っている。二十五歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。広島県安佐郡三入村上町屋（広島市安佐北区可部町上町屋）の人。

内藤健市

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日にはバナに入っている。三十四歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。広島県高田郡長田村(安芸高田市向原町長田)の人。

吉田高登

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日にはバナに入っている。二十二歳だった。トリニダーへの移民でなく呼び寄せだったかもしれない。収容前にはバナにいて、キューバ婦人と結婚して幼子もいた。内藤五郎とは同じアパートの隣同士で、四三年二月四日の夜、仕事から帰ったところを内藤といっしょに逮捕され、第六回グループとして、一時、プリンシペ要塞に拘留されたあと、二十三日にイスラに送られている。房も同じだった。気の合う者同士が二人ずつ好きな房が選べたからで、吉田は大工仕事がうまかったらしく、房の高窓がセメント枠だけで吹きざらになっていたのを、角材と布を手に入れ、上手に窓に扉をつくっている。釈放後もハバナにいて、革命前だったかあとだったか、妻を亡くして再婚。七五年に、すでにアメリカに亡命していた二女と三女を頼って亡命した。スペイン経由での脱

出だったが、途上、スペインで妻を亡くしている。長女は黨員になりその頃は政府の要職に就いていた。広島県安佐郡中原村城（広島市安佐北区可部町城）の人。

水上二一

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日ハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。広島県安佐郡長束村（広島市安佐南区長束）の人。

田中保

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年一月二十八日に東洋汽船の楽洋丸で神戸を発ち、三月二十三日ハバナに入っている。二十一歳だった。特定できないが、カマグエイカラス・ビジャスにいたと思う。第六回収容で、革命前の五七年五月十八日に死亡している。熊本県菊池郡菊池村西寺（菊池市西寺）の人。熊本県出身者は百四十五人いるが、西寺の人はほかに八人いる。

本田熊喜

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日ハバナに入っている。二十五歳だった。トリニダーにいたかどうかはわからない。熊本県上益城郡白旗村糸田（上益城郡甲佐町糸田）の人。二二年に入っている本田虎喜は兄か、縁戚ではないか。そうだとすると、海興移民の募集を使った呼び寄せだろう。

宮城良保

海外興業第十四回移民二十八人の一人で、一九二五年十月二十六日に東洋汽船の安洋丸で神戸を発ち、十二月十七日にハバナに入っている。二十八歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後のことがわからない。沖縄県島尻郡大里村大里（南城市大里大里）の人。

佐藤直記

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日ハバナに入っている。二十五歳だった。トリニダーのあとはカマグエイカラス・ビジャスで何か商店を開いていたのではないか。収容は第三回グループで、この回の逮捕者は各地で商売をしていた人や日本人会

支部の役員が多かった。めぼしい人物と見られたからで、釈放後はビジャ・クララのサグアラ・グランデ (Sagua la Grande) にいた。革命前の五〇年代に帰郷している。熊本県下益城郡杉合村 (熊本市南区富合町) の人。

宮川徳二

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。熊本県菊池郡戸崎村森北 (菊池市森北) の人。

藤田宅巳

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダーのあとは同航の佐藤直紀といっしょだったのではないか。収容は佐藤とはちがって第六回だが、釈放後は同様にビジャ・クララのサグアラ・ラ・グランデの同じ住宅にいた。佐藤は五〇年代に帰郷しているが、藤田はそのまま残り、七三年一月十六日に死亡している。熊本県阿蘇郡山西村小森 (阿蘇郡西原村小森) の人。

齋藤勝喜

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日にはバナに入っている。三十二歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。熊本県菊池郡北合志村小原（菊池郡旭志村小原）の人。

西隈計次

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日にはバナに入っている。二十八歳だった。トリニダー後はイスラに渡って野菜づくりをしていた。収容は第五回で、戦後はサンタ・クララで赤比地政芳や石川加那、松田安定らといっしょにいたが、しばらくしてバナに移っている。日系人連絡会の世話人をしていたのだろう、六一年十一月五日の世話人会議の記念写真に姿が見える。このあといくらしらないで帰郷していると思う。福岡県浮羽郡椿子村朝田（うきは市浮羽町朝田）の人。

石井元作

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日にはバナに入っている。

十三歳だった。ただ、自由渡航者でトリニダーには入っていない。同様に渡航に海興募集を使っただけで、実際には夫の呼び寄せだった大江スエに同行していた。小川移民の石井菊次郎の縁戚だと思ふ。その後はハバナにいただろう。第六回収容で、釈放後もハバナにいて八八年八月六日に死亡している。新潟県北蒲原郡五十公野村七軒町（新発田市五十公野七軒町）の人。

大江スエ

大江亀作の妻。一九二六年三月二十三日にハバナに入っている。二十一歳だった。亀作の呼び寄せだったが、海興移民として渡航している。海外興業も末期には頭数揃えで自由渡航者もいっしょに送出していた。亀作はイスラで野菜づくりをしていたが、釈放後はピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移っている。だが、革命で農地所有が制限されたため、やっていけなくなり七〇年代に夫婦で帰郷。亀作は七四年に死亡、その後、スエは、アメリカに亡命していた長女を頼って郷里を離れている。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。

大城寛順

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日にハバナに入っている。

二十二歳だった。トリニダーのあとはカマグエイカラス・ビジャスのどこかにいたと思う。第六回収容で、釈放後はイスラに残ったらしい。五四年五月三十一日に死亡している。沖縄県島尻郡糸満町（糸満市糸満）の人。

神村盛光

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日にはバナに入っている。三十一歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。沖縄県中頭郡越來村照屋（糸満市照屋）の人。

新里南儀

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日にはバナに入っている。三十一歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。沖縄県島尻郡大里村大里（南城市大里大里）の人。

上原幸一

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日にはバナに入っている。

二十八歳だった。トリニダーに入っていると思うが、その後どこにいたかわからない。三十七年に息子の幸三を呼び寄せているから、その頃まではキューバにいたのだろう。収容されていないし、死亡した形跡もないから、収容までに帰郷していると思う。沖縄県島尻郡糸満町（糸満市糸満）の人。幸三は第二回グループで収容されている。この人たちは第一回グループと同時に逮捕されたのだが、地方にいたためイスラに拘留されるのが後れ、第二回グループになったのだ。だから、彼もハバナではなくどこか地方で何か商店を開いていたと思う。彼は自分をはじめたのを息子の幸三にまかせてキューバを離れたのだろう。

新里正吉

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日にハバナに入っている。二十五歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後がわからない。沖縄県島尻郡大里村大里（南城市大里大里）の人。

上原亀次郎

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日にハバナに入っている。二十歳だったが、郷里に妻子を残しての渡航だった。トリニダーのあとは詳しくわからないが、

收容前にはハバナの南、カリブ海に面したバタバノ (Batabano) で漁師をしていた。收容は第六回グループで四階にいた。釈放後にキューバ婦人と結婚したのではないか、オリエンテに一女がいる。七九年一月五日にバタバノで死亡。渡航時の戸籍は沖縄県島尻郡大里村大里(南城市大里大里)だが、日本大使館からの死亡通知書の本籍は島尻郡兼城村字照屋(糸満市照屋)になっている。妻と長男亀一郎がいた所番地だった。その亀一郎さんから連絡があつて、八九年だったか、東京・信濃町の県人会館でお会いしたことがある。「息子が亀一郎で、親父が亀次郎だよ」とからから笑つておられた。割れるような大きな声の豪放磊落な方だったから、亀次郎もそんな人だったのだろう。子どもの頃は、帰つてこない父を待つての母子暮らしで、小船に乗つて奄美まで行商に行く暮らしが続いたといつておられたのを忘れない。戦後は瀬長亀次郎らと沖縄人民党で活動し、糸満市長を務めたあと長く県議員をされていて、お会いしたあと、沖縄の議員団を引き連れてキューバに行かれ、妹さんにも会われている。手紙はずいぶん前から交わしていたようで、よく見せていただいた。二〇〇七年十一月だったと思うが、亡くなられている。

又吉誠喜

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日にはバナに入っている。

二十五歳だった。トリニダー後はイスラに渡って農業をしていたのではないか。第五回グループで収容されているが、釈放後のことがわからない。沖縄県中頭郡宜野湾村喜友名（宜野湾市喜友名）の人。

上原徳一

海外興業第十六回移民二十五人の一人で、一九二六年三月二十三日にはバナに入っている。二十二歳だった。トリニダー後はイスラでなく本島にいたことはたしかだが、特定できない。第六回収容で、釈放後はバナノにいて、五六年八月二十日に死亡している。収容以前から上原亀次郎といっしょにバナノで漁業をしていたのかもしれない。沖縄県島尻郡糸満町（糸満市糸満）の人。

松場八郎

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年三月五日に東洋汽船の銀洋丸で神戸を発ち、五月五日にバナに入っている。二十四歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後のことがわからない。広島県安芸郡江田島村（江田島市江田島町）の人。

奥村幸太郎

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年五月五日にハバナに入っている。二十八歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後のことがわからない。広島県安芸郡江田島村（江田島市江田島町）の人。

花野惣松

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年五月五日にハバナに入っている。二十七歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後のことがわからない。広島県安芸郡江田島村（江田島市江田島町）の人。

藤崎兼男

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年五月五日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後のことがわからない。広島県安芸郡船越村（広島市安芸区船越）の人。

鉄田聿次郎

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年五月五日にハバナに入っている。二十六歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後のことがわからない。広島県安佐郡中原村城（広島市安佐北区可部町城）の人。

秋山文次

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年五月五日にハバナに入っている。四十四歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後のことがわからない。福岡県京都郡節丸村節丸（京都郡みやこ町節丸）の人。

川辺繁蔵

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年三月五日に東洋汽船の銀洋丸で神戸を発ち、五月五日にハバナに入っている。二十五歳だった。たぶんトリニダーに入っているだろうが、すぐに逃亡したのか、一カ月後にメキシコのメヒカリ (Mexicali) に現われている。アメリカに密入国しようとしたのだろう。うまくいかなかったのか、二九年には西に砂漠を越え

た太平洋岸の港町エンセナダ (Ensenada) にいた。日本からの漁業移民が集住していたところで、その後、三二年にはさらに北の国境の町ティファナ (Tijuana) にいて、カサ・ベルデ・ホテルを購入して経営していた。それで順調にいくはずだったのだろうが、日米開戦で戦時収容がはじまり、メキシコ・シティに転住させられている。日米交換船で帰郷しようとしたらしいが失敗。戦後は、タイヤ修理工場を経営していたが、五二年にシティ郊外のトラネパントラ・デ・バス (Tlahuepantla de Baz) で野菜づくりをはじめ、五六年には少し西のビア・ゲレロ (Via Guerrero) に移って菜園のほかには花卉の栽培もしていた。その後のことはわからないが、七〇年代か、八〇年代はじめに亡くなっている。福岡県京都郡節丸村節丸 (京都郡みやこ町節丸) の人。

幸田藤太郎

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年五月五日にハバナに入っている。三十一歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後のことがわからない。福岡県京都郡節丸村節丸 (京都郡みやこ町節丸) の人。

木田亀蔵

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年五月五日にハバナに入っている。二十七歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後のことがわからない。福岡県京都郡節丸村節丸（京都郡みやこ町節丸）の人。

加来林蔵

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年五月五日にハバナに入っている。三十四歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後のことがわからない。福岡県京都郡節丸村光富（京都郡みやこ町光富）の人。

波田幸次郎

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年五月五日にハバナに入っている。三十五歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後のことがわからない。福岡県遠賀郡岡垣村高倉（遠賀郡岡垣町高倉）の人。

宮本嘉一

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年五月五日にハバナに入っている。三十五歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後のことがわからない。熊本県鹿本郡来民町来民（山鹿市鹿本町来民）の人。

山中福松

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年五月五日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後のことがわからない。熊本県八代郡柿迫村上三門（八代市泉町柿迫）の人。

平野富士男

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年五月五日にハバナに入っている。二十五歳だった。トリニダー後はカマガエイにいたのではないか。収容は第六回で、釈放後はサンクティ・スピリトウスにいた。その後、またカマガエイに戻ったのだろう。六八年七月二十八日に同地で死亡している。熊本県八代郡柿迫村上三門（八代市泉町柿迫）の人。

平野勇

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年五月五日にハバナに入っている。二十二歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後のことがわからない。熊本県上益城郡下矢部村柚木（上益城郡山都町柚木）の人。

山下伝次郎

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年五月五日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダーのあとはハティボニコにいたようで、天長節記念だろう、二六年十月三十一日にハティボニコの日本人が集まったなかに姿が見える。収容は第六回で、釈放後はピナル・デル・リオのオガル・デ・アンシアノス (Hogar de Ancianos) に移っている。八四年六月七日に死亡。熊本県八代郡栗木村字赤根（八代市泉町栗木）の人。

菊川唯次

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年五月五日にハバナに入っている。三十歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後のことがわからない。熊本県下益城郡年弥村

弘川（下益城郡美里町弘川）の人。

窪田清繼

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年五月五日にハバナに入っている。十八歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後のことがわからない。熊本県菊池郡菊池村西寺（菊池市西寺）の人。

芥川一彦

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年五月五日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダーのあとはカماغエイのフロリダで理髪店を開いていた。収容は第六回で、戦後はハバナに移って、八二年二月十一日に死亡している。熊本県上益城郡乙女村麻生原（上益城郡甲佐町麻生原）の人。

玉城牛太郎

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年五月五日にハバナに入っている。二十六歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後のことがわからない。沖縄県島尻郡糸満町（糸

満市糸満)の人。

当山清富

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年五月五日にハバナに入っている。三十二歳だった。トリニダーにいたと思うが、その後どうしたかわからない。沖縄県国頭郡本部村浜元(国頭郡本部町浜元)の人。ただ、二八年に同じ本部の嘉納政栄を呼び寄せている。

渡久地政平

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年五月五日にハバナに入っている。三十一歳だった。トリニダーのあとはカマグエイあたりにはいたのか、ピナル・デル・リオに移ったのか。収容は第六回で、釈放後はピナルのコンソラシオン・デル・スールで農業をしていた。革命前の五〇年代に帰郷していると思う。沖縄県国頭郡本部村伊野波(国頭郡本部町伊野波)の人。伊野波からはほかに渡久地甚一郎、渡久地政則がいる。

仲田実男

海外興業第十七回移民二十三人の一人で、一九二六年五月五日にハバナに入っている。二十九

歳だった。トリニダーにはいたと思うが、その後のことがわからない。沖縄県国頭郡本部村瀬底（国頭郡本部町瀬底）の人。

岡田稔

一九二六年七月一日にハバナに入っている。二十六歳だった。その後のことは詳しくわからないが、同郷に長瀬泰雄がいて、その呼び寄せだったのかもしれない。ハバナにいたと思う。三〇年代の天長節だろうが記念写真に姿が見える。収容は第六グループでプレシディオでは三階にいた。この階はハバナ出身者が多かった。釈放後はどうしていたか。日系人連絡会の世話人のなかに顔が見える。キューバで死亡した形跡がないから、革命までに帰郷していると思う。和歌山県西牟婁郡串本町（東牟婁郡串本町串本）の人。地番は一番地だから古い家系なのだろう、いまでも戸籍が続いている。

山本善太郎

同郷の岡田稔、富田義夫、富田真市、沖須磨野、矢倉義路と同航、一九二六年七月一日にハバナに入っている。十八歳だった。ただ、その後のことがわからない。早い時期に帰郷していると思う。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。

富田義夫

一九二六年に兄真市といっしょに十六歳でキューバに入っている。しばらくイスラにいたと思うが、その後、ハバナに出てメルカド・ウニコ（公設市場）で、野菜の販売ではないかと思うが、二人で店舗を開いていた。真一は収容前に貯えを手に帰郷、義夫は残り、収容は第三回で五階にいた。革命後の六四年四月二十九日にハバナで死亡している。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。

富田真市

一九二六年、弟の義夫といっしょにキューバに入っている。二十四歳、弟は十六歳だった。イスラに渡って農業をしていたのではないか。その後、ハバナのメルカド・ウニコ（公設市場）に店舗を持っていたが、収容前に弟を残して帰郷している。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。

沖須磨野

沖五郎の妻で、同郷の岡田稔、山本善太郎、富田義夫、富田真市、矢倉義路と同航、一九二六

年七月一日にハバナに入っている。十八歳だった。ただ、夫婦とも、その後のことがわからない。早い時期に帰郷していると思う。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。

矢倉義路

同郷の岡田稔、山本善太郎、富田義夫、富田真市、沖須磨野と同航、一九二六年七月一日にハバナに入っている。二十五歳だった。ただ、その後のことがわからない。戸主だったから早い時期に帰郷していると思う。和歌山県西牟婁郡串本町（東牟婁郡串本町串本）の人。

古賀伊太郎

一九二六年七月一日にハバナに入っているが、その後、どうしたかわからない。三十歳だった。熊本県下益城郡の人。古賀歌五郎の縁戚かもしれない。

府内清定

一九二六年七月一日にハバナに入っているが、その後、どうしたかわからない。二十五歳だった。熊本県菊池郡平真城村平川（菊池郡大津町平川）の人。

前門繁栄

一九二六年七月一日にハバナに入っているが、その後、どうしたかわからない。二十四歳だった。沖縄県中頭郡与那城村平安座（うるま市与那城平安座）の人。だれの呼び寄せだったのかわからないが、平安座の人はほかに十七人いる。

久保武夫

高山猪熊の呼び寄せだと思う。一九二六年七月一日に高山の妹の松枝といっしょにハバナに入っている。十八歳だった。カマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のセントラル・バラグア（Baragua）で野菜づくりをしていた高山のもとにいたが、三八年に高山が死亡したため、その後は、中島應親といっしょにイスラに渡り、原田茂作の農場にいたと思う。中島や原田の妻ケサノと同郷だった。その後、独立したのかどうかわからない。収容は第五回で、釈放後に結婚。革命後は原田の農場に寄寓していた。お会いしたときは七十五歳だったが、まだ野良仕事をしておられ、顎髭も埃だらけに、笑顔満面、帰ってこられた姿を忘れない。温厚で言葉少ない人だった。だからか、仲間内にもほとんどむかしを語らないまま逝っている。鹿児島県始良郡蒲生村下久徳（始良市蒲生町下久徳）の人。夫人の和子（Florencia）さんは二回以上も年下

の二世で、政夫 (Alfredo) 、信子 (Josefina) 、静子 (Olga) 、静夫 (Julio) の二男二女がいる。キューバの日本人にはこうした二世女子との結婚もめずらしいことではなかった。

高山松枝

兄の高山猪熊に呼び寄せられ、一九二六年七月一日にハバナに入っている。その後、肥田野有作と結婚。長男耕作が生まれているが三四年に死亡している。離婚したのかどうかかわからないが、戦争前に単身、日本に戻り、戦後は埼玉県の春日部で暮らしていた。肥田野は一人残って革命後の六八年に死亡している。鹿児島県始良郡重富村大字平松（始良市平松）の人。

川瀬文治

一九二六年七月一日にハバナに入っているが、その後、どうしたかわからない。四十四歳だった。長崎県南松浦郡富江町富江郷（五島市富江町富江）の人。樽本十寸水と関係があるかもしれない。

松野直人

同郷の岡田勘右エ門の呼び寄せで、一九二六年七月一日にハバナに入っている。二十一歳だっ

た。岡田はラス・ビジャスのシエンフエゴスで波止場人足をしたあと、エラード（アイスクリームの製造販売をしていたから、松野もシエンフエゴスにいたと思うが、何をしていたのか、よくわからない。収容は第四回だから、まとまった商店を開いていたのではないか。釈放後もシエンフエゴスにおいて、八九年五月十四日に死亡している。山口県大津郡深川村茅（長門市東深川）の人。

神崎武雄

兄の神崎章の呼び寄せで一九二六年七月一日にハバナに入っている。二十四歳だった。兄の章はイスラにいたと思うが、あるいはハバナの西のバネス（Banes）のセントラルにいたのかもしれない。武雄もバネスのセントラルでハルダイネロをしていて、三〇年七月にそこで撮った写真が残っている。収容は第六回グループで、釈放後もバネスにおいて、革命後の六四年五月十五日にバネスで死亡している。広島県豊田郡本郷町（三原市本郷町）の人。

白野善平

海外興業第十八回移民二十四人の一人。一九二六年五月三日に東洋汽船の安洋丸で神戸を発ち、七月五日にハバナに入っている。十九歳だった。同航に同郷で六歳下の白野太市郎と八



パネスのセントラルで、右端が神埼武雄

歳下の白野定吉がいるが、弟か、それとも縁戚か。たぶんともにトリニダーの砂糖耕地に入ったと思う。逃亡後はイスラに渡って二〇年代末にはマッキンレー地区でピーマンづくりをしていた。収容は第五回で二階の階主任をしていた。そして戦後、革命前の五〇年代に帰郷している。白野のように、この頃に、少額であれ、まとまった貯えを手に帰郷した人は幸運だった。あと少し貯めようとする人が帰れなくなった。和歌山県東牟婁郡大島村須江（東牟婁郡串本町須江）の人。

白野太市郎

白野善平の弟か縁戚だろう。二十二歳

で一九二六年七月五日にいつしよにハバナに入っている。トリニダーにはいたと思うが、その後のことがわからない。和歌山県東牟婁郡大島村須江（東牟婁郡串本町須江）の人。

白野定助

白野善平の弟か縁戚だろう。一九二六年七月五日にいつしよにハバナに入っている。トリニダーにいたと思うが、その後のことがわからない。二十一歳だった。和歌山県東牟婁郡大島村須江（東牟婁郡串本町須江）の人。

沖庄三郎

海外興業第十八回移民二十四人の一人で、一九二六年七月五日にハバナに入っている。三十七歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。

瀬川七兵衛

海外興業第十八回移民二十四人の一人で、一九二六年七月五日にハバナに入っている。二十六歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。和歌山県東牟婁

郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。

池田重一

海外興業第十八回移民二十四人の一人で、一九二六年七月五日にハバナに入っている。四十一歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。岡山県小田郡神島内村横島（笠岡市横島）の人。

三宅岩次郎

海外興業第十八回移民二十四人の一人で、一九二六年七月五日にハバナに入っている。三十七歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。岡山県児島郡福田村福田古新田（倉敷市福田町古新田）の人。

古賀歌五郎

海外興業第十八回移民二十四人の一人で、一九二六年五月三日に東洋汽船の安洋丸で神戸を発ち、七月五日にハバナに入っている。二十九歳だった。トリニダーには入っていると思う。その後は、ハティボニコにいたようで、天長節記念だろう、二六年十月三十一日にハティボニ

コの日本人が集つたなかに姿が見える。その後、ピナル・デル・リオのマンガス (Mangas) に移つたのかどうかわからないが、収容は第六回で、釈放後はマンガスにいて、革命後ではないかと思うが、ハバナの南西のアルテミサ (Artemisa) で暮らしていた。九〇年代に亡くなつてゐると思うが日にちがわからない。熊本県下益城郡年弥村坂本字水守 (下益城郡美里町坂本) の人。

中村富太郎

海外興業第十八回移民二十四人の一人で、一九二六年七月五日にハバナに入つてゐる。三十一歳だった。トリニダーには入つてゐると思うが、その後のことがわからない。熊本県阿蘇郡赤水村赤水 (阿蘇市赤水) の人。

松本安美

一九〇四年八月三十一日生まれで、一九二六年七月五日に海外興業の第十八回移民二十四人の一人としてハバナに入つてゐる。二十一歳だった。その後のことはわからないが、収容では第一回のグループに入つてゐるから、ハバナにいて、日本人会の役員をしていたか、何か商店を開いていたのではないか。釈放後もハバナにいて八二年一月十日にハバナで死亡してゐる。

熊本県阿蘇郡山西村（阿蘇郡西原村）の人。

山本寅松

海外興業第十八回移民二十四人の一人で、一九二六年七月五日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダーには入っていると思う。その後は、ラス・ビジャス（シエンフエゴス）のオルキタス（*Orquitas*）にいたようで、ごく早い時期に死亡している。熊本県阿蘇郡山西村小森（阿蘇郡西原村小森）の人。

今村鶴喜

海外興業第十八回移民二十四人の一人で、一九二六年七月五日にハバナに入っている。三十三歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがよくわからない。カマグエイあたりにいたあと、ピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移り農業をはじめたのではないか。熊本県菊池郡蘇川村矢護川（菊池郡大津町矢護川）の人。今村幸の縁戚だろうか。

住永萬平

海外興業第十八回移民二十四人の一人で、一九二六年七月五日にハバナに入っている。二十七歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。熊本県上益城郡七滝村田代（上益城郡御船町田代）の人。「萬平」の「萬」は読み取り違いかもしれない。

住永長平

海外興業第十八回移民二十四人の一人で、一九二六年七月五日にハバナに入っている。四十六歳だった。移民としては高齢で、郷里に妻子を残していただろう。トリニダーのあとはラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニコにいたと思うが、早い時期に死亡している、ハバナの慰霊堂の第七号セルに位牌が残っている。熊本県上益城郡七滝村田代（上益城郡御船町田代）の人。

金林寿男

海外興業第十八回移民二十四人の一人で、一九二六年七月五日にハバナに入っている。二十六歳だった。トリニダーのあとはイスラに渡っている。イスラには同郷人が多かったからそれを

頼つたのだろう。収容は第五回で、釈放後もイスラのフカロ (Uccaro) にいて、四九年十一月二十九日に死亡している。広島県安佐郡伴村伴（広島市安佐南区伴）の人。

浜田貞一

海外興業第十八回移民二十四人の一人で、一九二六年七月五日にハバナに入っている。四十一歳だった。トリニダーには入っているだろう。その後はピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移つて農業をしていたと思う。二七年に妻ツマを呼び寄せているが、ツマは三九年十一月二十三日にコンソラシオンで死亡している。収容もされていらないから、その後、日米戦争までに帰郷したのではないか。広島県安佐郡龜山村大毛寺（広島市安佐北区可部町大毛寺）の人。

大久保芳夫

海外興業第十八回移民二十四人の一人で、一九二六年七月五日にハバナに入っている。三十一歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。広島県安佐郡安村中須（広島市安佐南区中須）の人。

大村十一

海外興業第十八回移民二十四人の一人で、一九二六年七月五日にハバナに入っている。三十三歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。広島県安芸郡江田島村（江田島市江田島町）の人。

島本繁吉

海外興業第十八回移民二十四人の一人で、一九二六年七月五日にハバナに入っている。三十五歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。広島県安芸郡江田島村（江田島市江田島町）の人。

吉田久市

海外興業第十八回移民二十四人の一人で、一九二六年七月五日にハバナに入っている。二十九歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。広島県安芸郡江田島村（江田島市江田島町）の人。

丸子春一

海外興業第十八回移民二十四人の一人で、一九二六年七月五日にハバナに入っている。三十八歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。広島県安芸郡江田島村（江田島市江田島町）の人。

丸子勘一

海外興業第十八回移民二十四人の一人で、一九二六年七月五日にハバナに入っている。二十四歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。広島県安芸郡江田島村（江田島市江田島町）の人。

喜屋武松三

海外興業第十八回移民二十四人の一人で、一九二六年七月五日にハバナに入っている。トリニダーにはいたと思うが、その後のことがわからない。沖縄県中頭郡中城村比嘉（中頭郡北中城村比嘉）の人。

上原亀太郎

海外興業第十八回移民二十四人の一人で、一九二六年七月五日にハバナに入っている。二十一歳だった。トリニダーには入っていると思うが、その後のことがわからない。沖繩県島尻郡糸満町（糸満市糸満）の人。糸満町の上原姓はほかに十一人いる。

巽喜一郎

海外興業第十九回移民で、一九二六年六月十二日に東洋汽船の墨洋丸で神戸を発ち、八月二十日にハバナに入っている。四十歳だった。この第十九回は一人だけだった。海外興業を渡航エージェントとして使っただけでトリニダーには入っていないだろう。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。大島村からはほかに二十九人いて、巽姓も巽房市と巽武平治の二人いるが、関係がわからない。巽武平治は同航だった。

山本吉松

一九二六年八月二十日に、妻はまのといっしょにハバナに入っているが、その後のことがわからない。三十五歳だった。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。兄の山

本芳松は熊本移民合資のメキシコ移民で一九〇六年にコアウイラ州のラス・エスペランサスに入っている。

山本はまの

山本吉松の妻。一九二六年八月二十日に夫といっしょにハバナに入っているが、同様にその後のことがわからない。十八歳だった。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。

巽武平治

一九二六年八月二十日にハバナに入っている。三十三歳で、同村の巽喜一郎に同行していた。巽房市の呼び寄せではないか。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。

岡田キヨコ

岡田島市の妻。呼び寄せで一九二六年八月二十日にハバナに入っている。二十歳だった。島市はイスラで野菜づくりをしていた。トラックやムラを買い入れ大規模経営をめざしたが、不況に遭って失敗。条件のいい土地をさがしてイスラを転々としたがうまくいかなかった。そん

ななかキヨコは三〇年代末に单身帰郷している。広島県豊田郡河内町大字中河内(賀茂郡河内町中河内)の人。島市も帰るつもりだったと思うが、収容に遭い、釈放後、五〇年代に帰郷している。

沖田玉一

一九二六年八月二十日にハバナに入っている。二十六歳だった。ただ、その後のことがわからない。広島県安佐郡沼田村矢口(広島市安佐北区口田)の人。沖田忠の縁戚かもしれない。

遠藤スエ

遠藤八十太の妻。八十太は結婚のために一時帰郷したのだろう、一九二六年八月二十日に八十太といっしょにハバナに入っている。二十二歳だった。八十太はカマグエイ(シエゴ・デ・ピラ)のプンタ・アレグレ(Punta Alegre)で理髪店を開いていた。収容中もスエは店と夫の留守を守っていたが、革命で店舗を接収され、六六年に八十太は死亡。エキエ、富男、愛子、芳次の二男二女がいて、晩年はプンタ・アレグレで娘夫婦といっしょに、独り身だった同郷の佐藤末吉を引き取り、身の回りの世話をしながら、また、助け合いながら暮らしていた。うつくしいと思った。



遠藤スエと佐藤末吉

そんなようすを知らせようと佐藤の郷里に甥御さんを訪ねると、驚いて奥の座敷に走り、手に持って戻ったのは漆黒の位牌だった。移民以来何の便りもないのを、しかたなく郷里出發の日を命日として法要を勤めていたという。スエは翌八三年十一月三十日に死亡。皮肉にも、身を寄せていた佐藤がスエを看送ることになり、四年後の八七年に佐藤も逝っている。いつもキューバをあたたかく思い出させてくれる二人である。新潟県北蒲原郡五十公野村小見（新発田市小見）の人。

下村三太郎

兄の下村与次に呼び寄せられ一九二六年八月二十日にハバナに入っている。二十三歳で、与次の妻ハルと同行だった。与次は小川移民で、コンスタンシアを出たあと、シエンフエゴスで農業を

していたから三太郎も最初はいつしよにいただろう。二八年に妻俊を呼び寄せているがいくらかもしないで離婚している。収容は第六回で、釈放後もシエンフエゴスにいて農業をしていた。七四年八月二十六日に死亡。新潟県北蒲原郡中浦村荒町（新発田市荒町）の人。与次は一人で暮らし、目を悪くして最後は何も見えなくなつたまま八一年に死亡している。

川上潔

一九二六年八月二十日にハバナで脱船。その後、三〇年にはオリエンテ（サンチアゴ・デ・クーバ）のパルマ・ソリアノ（Palma Soriano）で理髪店を開いていた。それ以外のことはわからない。キューバで死亡した形跡がないから収容以前に帰郷していると思う。愛媛県宇摩郡二名村余木（宇摩郡二名村余木）の人。名前は「清」かもしれない。

吉沢栄

吉沢正の妻。再渡航の正といつしよに一九二六年九月十五日にハバナに入っている。二十一歳だった。正は一六年にメキシコからの転航して、イスラに渡つて農業をしていた。その後、戦争前に子どもを連れて帰郷している。正もあとを追うつもりだったが収容に遭い、釈放後、帰郷している。長野県上伊那郡七久保村（飯島町七久保）の人。

遠藤松男

遠藤慶作の弟。呼び寄せで一九二六年九月十五日にハバナに入っている。慶作はペルーから転航してイスラで農業をしていた。松男を呼び寄せ、日本からも農機具を取り寄せ大規模農業をめざしたが、不況に遭って三〇年前後には丸裸になっている。やっていけなくなったのだから、松男は三八年に帰郷。静岡県（おそらく旧駿東郡、現沼津市）の人。慶作は七〇年に死亡している。

小島三八一

一九二六年九月十五日にハバナに入っている。二十一歳だった。シエゴ・デアピラにいたと思うが、詳しくわからない。斎藤弥一の娘の八重子と結婚している。その母ヨイが中沢勇三と結婚していて、中沢が元外相のコレティナ宅でコシネロでもしていたのだろうか、あるいは小島自身がコレティナ宅で働いていたのだろうか、コレティナの身元保証で収容を免れている。七一年六月二十一日、ハバナで死亡。新潟県中頸城郡大湊村百間町新田（中頸城郡頸城村百間町新田）の人。

坂田チジユ

坂田幸平の妻。夫の呼び寄せで一九二六年九月十五日にハバナに入っている。十七歳だった。幸平は海外興業第十一回移民で、前年にトリニダーに入り、その後はカماغエイで理髪店を開いていた。釈放後なのか革命後なのか、ラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニコに移って、幸平は七八年に、チジユは二〇〇〇年に死亡している。熊本県八代郡栗木村（八代市泉町栗木）の人。ミチ子（Pilar）、せ（子）（Rosalia）、幸子の三女がいる。名前は「エジユ」かもしれない。

岩崎サダメ

岩崎庄平の妻。呼び寄せで一九二六年九月十五日にハバナに入っている。十九歳だった。庄平はメキシコではオアハケニヤにいて、一五年にキューバに転航、ラス・ビジャス（シエンフェゴス）のコンスタンシアにいた。その後、ハティボニコ（Jatibonico）に移ってセントラルで働いていた。そこに呼び寄せられたのだろう。釈放後はハティボニコに戻ったが仕事がなく、オリエンテのオルギンに移ってエラード販売をしていたが、ハティボニコに戻って庄平は死亡。晴、等、初美、繁、健、ヨシコの四男二女がいて、サダメは子どもがオルギンにいたのか、オ

ルギンで死亡している。日にちはわからないが、九〇年代の後半か、二〇〇〇年代はじめだと思う。熊本県八代郡栗木村（八代市泉町栗木）の人。

安永忠吉

一九二六年九月十五日にハバナに入っている。十四歳だった。神奈川県庁への旅券申請には兄の呼び寄せとあるが、兄とは吉作だと思う。吉作はイスラで農業をしていたと思うから、いっしょにいたのだろうが、その後のことは何もわからない。福島県伊達郡桑折町字上町（伊達郡桑折町上町）の人。

佐藤源四郎

一九二六年九月十五日にハバナに入っている。二十歳だった。呼び寄せだろうが、縁戚がわからない。福島県伊達郡睦合村万正寺字蛇屋敷（伊達郡桑折町万正寺蛇屋敷）の人。

大越利八

一九二六年九月十五日にハバナに入っている。十六歳で、半沢豊治の呼び寄せだったと思う。その後はイスラのフィンカ・マッキンレーだろう、野菜づくりをしていた。収容は第五回

グループで、半沢と同じ五階にいた。釈放後はコロンビア地区に移ったかもしれない。九八年七月十三日に死亡している。福島県伊達郡桑折村松原字川原（伊達郡桑折町松原川原）の人。

半沢ミヨシ

半沢豊治の妻。呼び寄せで一九二六年九月十五日にハバナに入っている。三十一歳で、大越利八と同行だった。豊治はイスラで野菜づくりをしていた。その後、豊治は七三年に、ミヨシは七五年七月二十七日に死亡している。福島県伊達郡陸合村万正寺沼田（伊達郡桑折町万正寺沼田）の人。豊美、豊三郎の二男がいて、それぞれ、豊喜、アルベルト、アルマンドの三男、エドゥアルド、パブロ、マリアン、ソニア、マリオの三男二女がいる。

玉城徳太

玉城亀雄の弟ではないか。一九二六年に呼び寄せられている。亀雄は海外興業第十四回移民で、二五年十二月十七日にハバナに入り、トリニダーのあとはシエンフエゴスにいた。亀雄は同地でごく早い時期に死亡しているが、徳太はその後、第四回グループで収容されているから、兄弟で何か商店を開いていたのではないかと思う。収容中に体をやられたのだろう、釈放直後の四六年に死亡している。沖縄県島尻郡糸満町（糸満市糸満）の人。

上原亀次

沖繩県の人で、一九二六年に入っていること以外、残念だが、何もわからない。

上原牛治

沖繩県の人で、一九二六年に入っている。収容は第六回で四階にいたから、本島の地方にいたのだろう。戦後の五〇年六月三日に海で死亡している。たぶん遺体は見つからなかったのだろう。漁師をしていたのではないか。するとハバナの南、カリブ側のバタバノか、東のシエンフエゴスか、あるいはマタンサスのカルデナスにいた可能性もある。

国武貞次郎

一九二六年に二十一歳で入っているが、その後のことがわからない。福岡県浮羽郡船越村長栖（久留米市田主丸町長栖）の人。日野忠造の縁戚で、その呼び寄せだと思う。

西村八郎

一九二六年にキューバに入っているが、その後のことはさっぱりわからない。日本人だけでな

く、キューバの官憲も所在がわからなかったのか、収容時には行方不明で収容を免れている。戦後はマタンサスのギネス (Guines) に暮らして、四九年に死亡。熊本県の人。ほかに、斎藤弥一、小島三八一、渡辺国一、会沢国助も未収容だった。

中平隆晴

一九二七年一月十九日にハバナに入っている。このときは再渡航で、二一年以前にキューバにいたかもしれない。中平藤子が二一年に夫の呼び寄せで入っているが、夫の名前がわからない。この「夫」がこの人だといいいのだが、そうでなければ、「中平某」としてもう一人「名簿」に加えなければならぬことになる。オリエンテ (オルギン) のタカホ (Tajio) にいたのではないか。収容は第六回。釈放後もタカホにいて、五五年六月九日に死亡している。高知県の人。名前は「高晴」かもしれない。

尾長妻

沖縄県の人で、一九二七年一月十九日にハバナに入っていること以外、名前もわからない。呼び寄せだろうが、夫の「尾長」の名前も、いつ入ったのかもわからない。

青柳亮平

北崎好助の呼び寄せだろう。一九二七年にキューバに入っている。二十歳だった。好助のいたバタバノで漁業をはじめたと思う。収容は第六回グループで、釈放後もバタバノにいて、九二年四月三日に死亡している。福岡県糸島郡北崎村宮浦（福岡市西区宮浦）の人。好助の妻オツナの弟ではないか。キューバ婦人と結婚していて、革命前までは鯛漁でずいぶん儲かったらしい。だが、革命後は伊勢海老漁に転換するように政府から規制されている。伊勢海老は豊富に捕れたが、政府の外貨稼ぎの一品目で、加工して身は輸出に回されるため、庶民の口に入るのは頭だけだった。それは果物にもいえて、キューバは果物の国で、たとえばグレープフルーツも、イスラではかつてはアメリカ人の農園がいつぱいあって、それを受けて革命後も豊富で山のように穫れるのだが、ほとんどが外貨稼ぎの輸出に回され、庶民の口には入っていない。政治家は市民を喰わせるのが大きな仕事。カストロは革命家だったかもしれないが、政治家としては、どんなに美辞麗句を並べても、政治家になろうとしてなれなかったただの人だった。

竹本シズ子

竹本徳一の妻で、一九二七年一月二十二日にハバナに入っている。徳一は二四年に入ってい

て、たぶんカマガエイにいたと思う。シズ子はその後、四、五年で死亡したのではないか、三一年に妻チカを呼び寄せている。広島県安佐郡可部町（広島市安佐北区可部）の人。

香川武茂

「香川武茂」といって首を傾げる人がいても、「フスト」といって知らない人はいなかった。香川吾一一族の惣領で、父吾一は郷里では鍛冶職人だったが、一九一五年にペルーに移民、翌年キューバに転航してラス・ビジャス（シエンフェゴス）のビオレタ（Violeta）に落ち着いた。野菜づくりをし、妻静代は野菜と雑貨の販売店を切り盛りして四男四女を育てている。ただ、キューバで生まれたのは下の一男二女だけで、上の三男二女は郷里の祖父母のもとで育っている。それを呼び寄せたから、上の五人は第二世代であるのに移民史上は一世扱いになっている。二世はほとんどだれもが西名（スペイン名）をもっているが、一世ではめずらしい。そのようにフスト（Justo）と名付けたのはキューバで生きやすしようという吾一の計らいだった。二七年に十三歳で呼び寄せられている。夫婦二人に子どもが八人の十人家族。数少ないファミリー移民で、イスラは別にしても本島では香川一族としてよく知られていた。それはこの人の行動によるものではなかったか。晩年にもその風貌は残っていたが、若い頃は、いわゆる瘋癲漢で、本島ならほとんど隈無く渡り歩いている。人なつこい性格で、小柄だったからかわいが



日系人連絡会役員会（1982.9.2）、右から二人目が香川武茂

られたと思う。職を転々としながら青年時代を過ごしていた。だから、キューバのどこに、だれがいて、何を、どうしたのか、善きも悪しきも日本人のことなら、眉唾ものも含めてたいいことは知っていた。それがこの『物語』にも生きている。もしこの人に出会わなければ、キューバの日本人移民史の「い」の字もわからなかっただろう。

出会ったのは八二年の夏だった。日本大使館から借りた車を運転して、キューバ各地を走って日本人を紹介してくれた。そんな話を記録しておこうとカセットテープを十本以上も用意していたが、とうてい足りなくて途中で諦めてしまい、あとは記憶に頼ることにしたのだが、そうしていまは後悔している。いまならUSBやSDにずいぶん記録できたことだろう。内藤（五郎）さんは父

のような人だったが、フストさんは、父の年代にあたるのに、どこか兄のような人だった。だから気も若かったのか、戦後は、二回り近く年下のキューバ婦人と結婚して、革命後はハバナの日本大使館で運転手をしていた。二〇〇一年二月十日、ハバナで死亡。広島県安佐郡可部町（広島市安佐北区可部）の人。三五年に妻マツコを呼び寄せているが、戦前に離婚しマツコは帰郷している。

吉田伍一

榊原利一の呼び寄せで、一九二七年にハバナに入っている。二十二歳だった。榊原商店で働いていただろうが、戦争前までに帰郷していると思う。熊本県菊池郡清水村亀尾（菊池市七城町亀尾）の人。

井手重人

吉田伍一と同郷で、一九二七年にいっしょにハバナに入っている。二十三歳で、榊原利一の呼び寄せだった。その後は、吉田と同様に、ハバナの榊原商店で働いていただろうが、やはり戦争前までに帰郷していると思う。熊本県菊池郡清水村亀尾（菊池市七城町亀尾）の人。

土永喜代治

富山県西砺波郡東石黒村前田（南砺市前田）の人で、一九二七年三月十五日にハバナに入っている。十七歳だったから、呼び寄せだろうが縁戚がわからない。富山県の人ほかに広瀬久次郎しかない。

石川善俊

高山猪熊の呼び寄せで、一九二七年三月十七日にハバナに入っている。十九歳だった。高山はカマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のセントラル・バラグアで野菜づくりをしていたから、最初はそれを手伝っていただろう。その後、シエゴ・デ・アピラで理髪店を開いていた。三〇年に実施された理髪師資格試験の受験者リストに名前が見える。この試験は日本人移民を排斥するために行なわれたようなものだった。二四年からはじまった海外興業移民は、ラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のトリニダダーの砂糖耕地に入っているが、契約とはちがつて賃金が半額にも満たなかったうえ、炎天下での労働の厳しさからほとんどがごく短期に耕地を逃亡している。そしてカマグエイやオリエンテで仕事をさがすのだが、不況でなかなか見つからず、見様見真似で理髪師になる者が多かった。店舗といっても、家の玄関前に丸椅子一つ出せば

はじめられたからで手つ取り早かった。それがキューバ人理髪師を圧迫することになり、政府に働きかけて理髪師試験法が制定され、資格試験が実施されたのだった。試験といつても、技術試験ではなく、スペイン語での質問に答えるというものだった。だから言葉がわからず、袖の下を使うことも知らなかった日本人は軒並みに落ちてしまい、営業ができなくなり、ハバナに移ってハルディネロやコシネロをしたり、ピナル・デル・リオやイスラに渡って農業をはじめめる者がずいぶんいた。石川もそんな一人で、ピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移って農業をはじめた。収容は第六回で、釈放後もコンソラシオンにいたと思う。その後、ハバナに移って八七年四月二十二日に死亡している。沖縄県中頭郡美里村字石川（うるま市石川）の人。

吉沢忠

吉沢正の甥ではないか。トクヨと同行、一九二七年五月にハバナに入っている。十六歳だった。トクヨは正の義姉だろう。正はイスラにいたから、その後はイスラでいっしょにいたと思うが、その後のことはわからない。戦争前に帰郷しているだろう。長野県上伊那郡七久保村（飯島町七久保）の人。

吉沢トクヨ

吉沢正の義姉ではないか。忠と同行、一九二七年五月にハバナに入っている。四十歳だった。正はイスラにいたから、その後はイスラでいつしよだったと思うが詳しくわからない。戦争前に帰郷していると思う。長野県上伊那郡七久保村（飯島町七久保）の人。

上中二三

永井秀吉の呼び寄せで、一九二七年六月二十二日にハバナに入っている。二十歳だった。永井はイスラで野菜づくりをしていたから、上中もイスラに渡つただろう。ただ、いくらもしないでピナル・デル・リオのエラドウラに移っている。収容は第六回で、釈放後もエラドウラで農業をしていた。一九七二年十一月二日に死亡。広島県安佐郡亀山村勝木（広島市安佐北区亀山）の人。

若藤達夫

一九二一年にペルーから転航した若藤喜作の長男で、二七年六月二十二日にハバナに入っている。十八歳だった。イスラのサンタ・バルバラ地区で父といっしよに野菜づくりをしていた

が、三〇年に喜作は達夫を残して单身帰郷している。喜作は勤勉実直を地で行くような人で、それなりの貯えをもつて帰つたらしく、あとにはきちんと農業基盤を残していたから一人で行つていくのも問題なかったが、独身だったため、戦時収容では土地を守る者がなく、すべてをなくしている。そのため、釈放後は苦しく、フィンカ・フカロで大きく農業をやっていた原田茂作のもとに寄寓していた。八二年にお会いしているが、父親譲りか、物静かな人だった。その後、九七年だったか帰郷しているが、あとをどうされたかわからない。広島県安佐郡安村上安字萩原（広島市安佐南区上安）の人。

山崎悦二

吉田高登の呼び寄せで、一九二七年六月二十二日にハバナに入っている。吉田はハバナにいたが、山崎はその後どこで何をしていたのかわからない。収容前に帰郷していて、郷里で吉田の妹と結婚している（のちに離婚）。広島の人で詳しく所番地はわからないが、吉田と同郷なら安佐郡中原村城（広島市安佐北区可部町城）の人だろう。

宮坂救治

宮坂寛司の弟。いつ呼び寄せられたのか詳しくわからないが、二〇年代後半だと思ふ。寛司



パネスのセントラル事務所前で、左端

は二四年に入り、叔父の瀬在藤治のいたカマガグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のハグエヤルのセントラルで働いていたから、たぶんいっしょにいただろう。その後、ハバナに移り、数年後に死亡している。二十八歳だったらしい。長野県埴科郡埴生村鋳物師屋（更埴市鋳物師屋）の人。

松平某

和歌山県の人だが、名前も、いつ入ったのかもわからない。松平姓もこの人しかない。

永井三雄

広島県の人だが、いつ入ったのかわからない。ただ、写真が残っていて、一九三〇年の七月にはハバナ西郊のパネスにいたことだけがわかっている。収容前にキューバを離れているだろう。

重岡認

一九二七年に呼び寄せで入っているが、縁戚がわからない。二十一歳だった。広島県安芸郡の人。

大橋忠太郎

一九二七年にキューバに入っている。二十歳だった。小川富一郎の同朋だった吉村半次郎の娘と結婚し、ハバナの公設市場メルカド・ウニコで果物店を経営していた。ずいぶん繁盛したらしい。玖馬日本人会の役員をしていて、三二年の支部長会議の写真に姿が見える。だからハバナの日本人を代表する一人と見られ、収容時には第一回グループで逮捕されている。戦後は、革命後に一家でアメリカに亡命し、そこで死亡。福島県伊達郡桑折町字上町（伊達郡桑折町上町）の人。

島津ナミ

島津岩吉の妻で、一九二七年に呼び寄せられている。十八歳だった。岩吉は小川移民の一人でコンスタンシアに入ったあと、その頃は、カマグエイのモロン (Moron) で理髪店を開いて



日本人会第一回支部長会議 (1932.5.22)

最後列左から三人目が大橋忠太郎

いた。九年後の三六年に二女を残して死亡している。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野(新発田市五十公野)の人。「浪子」か。

石崎吾一

同郷の森川誠一の呼び寄せで、妻のキヌヨといっしょに一九二七年六月二十二日にハバナに入っている。二十四歳だった。森川はカماغエイのフロリダ(Florida)で理髪店を開いていて、石崎も同様にフロリダで理髪店をはじめた。その後、二九年に理髪試験法が公布され、三〇年に全土で資格試験が実施されたが、その受験者リストに名前がある。二人ともそれに不合格だったのではない

か。営業できなくなり、石崎はピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移って農業をはじめている。収容は第八回で三階にいた。キヌヨは六〇年に、石崎は八三年七月一日に死亡。山口県玖珂郡川下村向今津（岩国市今津町）の人。

石崎キヌヨ

石崎吾一の妻で、一九二七年六月二十二日にいっしょにハバナに入っている。十七歳だった。最初はカマグエイのフロリダにいて、その後、ピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移って、六〇年十二月三十一日に死亡している。山口県玖珂郡川下村向今津（岩国市今津町）の人。

伊波ウトヲ

伊波伝助の妻。夫の呼び寄せで一九二七年六月二十二日にハバナに入っている。二十五歳だった。伝助はカマグエイで理髪店を開いていた。その後、収容前か、釈放後にラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニコに移っているが、革命前の五〇年代に、一男貞雄（Manuel）を残して夫婦で帰郷している。沖縄県中頭郡美里村石川（うるま市石川）の人。

上野松一

北野惣吉の呼び寄せで、一九二七年に入っている。二十二歳だった。北野はペルーからの転航で、本島にいたと思うが詳しくわからない。上野も同様で、収容前に帰郷しているのではない。山口県熊毛郡佐賀村佐合島（熊毛郡平生町佐合島）の人。

松本安太郎

岡田島市の呼び寄せで、一九二七年八月八日にハバナに入っている。二十一歳だった。岡田はペルーからの転航で、この頃はイスラで野菜づくりをしていた。松本はイスラには渡らず本島のどこか地方にいたのではない。収容は第六回で、釈放後はハバナにいて、九五年二月二十七日に死亡している。兵庫県明石郡垂水村山田（神戸市垂水区）の人。岡田は広島の人なのに、どうして兵庫の松本を呼び寄せているのか、不思議だがよくわからない。

西敬三

永井秀吉の呼び寄せで、一九二七年八月八日にハバナに入っている。二十五歳だった。永井はイスラで野菜づくりをしていたから、西もイスラに渡ったのだろうが、その後どうしたかわ

からない。収容前に帰郷しているだろう。広島県安佐郡長束村（広島市安佐南区長束）の人。

元川チエノ

元川堅一の妻。呼び寄せで一九二七年八月八日にハバナに入っている。二十八歳だった。堅一はペルーからの転航だが、いつ入ったのかどこにいたのかもわからない。ともに早くに帰郷したのではないか。広島県佐伯郡宮内村（廿日市市宮内）の人。

岡田早苗

広島県の人で、一九二七年八月八日にハバナに入っている。名前は「早苗」だが男性。岡田島市の縁戚ではないか。

田村勇

広島県の人で、一九二七年八月八日にハバナに入っている。岡田早苗と同航だった。収容までに帰郷しているだろう。

大江三郎

大江亀作の甥。呼び寄せで一九二七年八月二十一日にハバナに入っている。十八歳だった。亀作は小川移民で、コンスタンシアのあとはイスラに渡り、サンタ・バルバラ地区で同郷の長谷川与五郎門や肥田野龍次といっしょに野菜づくりをしていた。三郎も最初はそこにいたのだろうが、本島の地方に移ったようで、収容は第六回グループで四階にいた。釈放後はハバナの西のマリアナオにいて、九〇年九月五日に死亡している。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。

糸数澄

糸数宗重の妻。再渡航の宗重といっしょに、一九二七年八月二十一日にハバナに入っている。二十歳だった。宗重はメキシコから転航で、カマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のクナグアで農業をしていたあとモロンでロテリアの販売をしていた。ただ、澄はわずか三年ばかりでモロンで死亡している。沖縄県国頭郡羽地村田井等（名護市田井等）の人。

岩間喜一

一九二七年十月十九日にハバナに入っている。その後、三七年頃には、ハバナのアギラ街とコンコルディア街の角に、田村徳重の理髪店を譲り受けて独立している。四〇年に妻千恵を呼び寄せ、収容時は日本人会の会計をしていた関係か、第一回グループで逮捕、収容されている。収容番号は一番だった。戦後も、そのまま理髪店を続け、人柄がよかつたので、日本人仲間が集うサロンのようになつて繁盛したが、カストロ革命の接収ですべてをなくし、六五年にアメリカのヒューストンに一家で亡命、八六年十二月に死亡している。宮城県柴田郡槻木町字船迫飯又坂（柴田郡柴田町船迫飯又坂）の人。

下川カツエ

下川伊太郎の妻で、再渡航の伊太郎といつしよに一九二七年十月十九日にハバナに入っている。三十一歳だった。伊太郎は海外興業の第八回移民で二四年にトリニダーに入っているが、すぐに逃亡して、カマガエイだったと思うが、理髪店を開いて二七年に一時帰郷、妻を連れて戻つたのだった。ところが、その後すぐにロテリア（宝くじ）で一万ドルを引き当て、翌二八年に夫婦で帰郷している。福岡県八女郡川崎村長野（八女市長野）の人。



亡命の日

前列左から二番目が喜一、四番目が千恵

岩戸迅一

一九二七年十月十九日にハバナに入っている。すぐにイスラに渡ってサンタ・バルバラ地区の大下関三のもとに寄寓して野菜づくりをはじめ、翌年、弟の内藤五郎を呼び寄せ、二人で独立している。ただ、不況続きで思うようにはいかず、五郎は数年後に一人、イスラを出て、カマグエイやオリエンテを転々としたあとハバナに落ち着いている。迅一は一人で続けたが、収容で土地をなくしてしまったため、釈放後はピナル・デル・リオのエラドウラ (Herradura) に移って再開。うまくいくかに見えた矢先に交通事故で負傷し、五三年に帰郷、二年後に怪我も

とで死亡している。広島県安佐郡安村高取（広島市安佐南区高取南）の人。収容は第五回で二階の階主任をしていた。

中芝文助

小山規

、小山喬兄弟と同航、一九二七年十月十九日にハバナに入っている。三十八歳だった。呼び寄せだろうが、縁戚がわからない。戸主だったから早い時期に帰郷しているだろう。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。

小山規

小山喬の弟で、兄に同行、一九二七年十月十九日にハバナに入っている。十八歳だった。二人いっしょにハバナにいたのではないか。喬はずっとキューバにいて六三年に死亡しているが、規は収容以前に帰郷していると思う。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。

小山喬

和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人で、弟の規といっしょに一九二七年

十月十九日にハバナに入っている。二十五歳だった。呼び寄せだろうが、大島からの人は二十一人もいて特定できない。最初からハバナにいたのではないか。第六回收容で、釈放後もハバナにいて六三年十二月二十日に死亡している。

小林カツエ

小林百輝の妻。呼び寄せで一九二七年十一月十一日にハバナに入っている。二十歳だった。百輝はラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニコにいて、セントラルの店舗の支配人をしていた。その後、独立して店を持ち、ほかにも、キューバ人と共同で農場も経営していたが、カツエは三人の子どもといっしょに日米戦争前に帰郷している。長野県上伊那郡飯島村田切（上伊那郡飯島町田切）の人。

土屋来吉

一九二七年十一月十一日にハバナに入っている。加藤英一（岐阜県出身）の呼び寄せだろう。ハバナの加藤のクリーニング店で働いていた。その後、吉村半次郎の娘と結婚し、独立してクリーニング店を開いている。しかし、戦後は、岩間喜一同様、革命で店舗を接収されたため、六七年に妻子は吉村一家といっしょにアメリカのサンフランシスコに亡命。土屋も同行のはず

だったが、手続きミスで出国できず、三年間待ったあと七〇年に亡命している。その後の消息はわからない。収容時は、日本人会の会長だった加藤との関係で、第一回グループの一人として四一年十二月十二日に逮捕され、翌年四月十六日にイスラに送られている。岐阜県の人。

肥田野勇

一九二七年十一月十一日に兄の肥田野有作の呼び寄せでハバナに入っている。十九歳だった。カマグエイのセントラル・バラグアでハルデイネロをはじめ、アメリカ人の熱帯植物試験場で働いていた。収容は第六回で三階にいた。釈放後はハバナでハルデイネロとして再出発。その後、店舗を持って造園業をはじめ、官庁や大手銀行に観賞用の鉢植えを置いたり、キューバ人を雇って手広く経営していた。五六年にキューバ婦人と結婚している。しかし、革命で仕事ができなくなり、しばらく政府の菜園指導員を務めたあと、イギリス大使館でハルデイネロをしていた。詳しくは手記(「亡兄の遺骨を……」)を参照。八二年に訪ねたときは夕飯に呼んでくださった夫人手造りのチキンライスをいただいた。キューバ独特の料理の一つで、日本のそれとはちがって、チキンの丸焼きがそっくりそのまま、トマト風味のご飯のなかに隠れて眠っている。最初はどきつとするが、味と豪華さがいまも忘れられない。

キューバへは二七年十月十一日に横浜を東洋汽船の安洋丸で発ち、サンフランシスコに上



日系人連絡会役員会（1982.9.2）、右から四人目が肥田野勇

陸、大陸横断鉄道でニューヨークに出で、海路、ハバナに入っている。再渡航の榊原利一と横浜から同航だった。それが縁で榊原にはずいぶん助けられている。同じ時期、海外興業移民はすべてパナマ運河経由だったが、呼び寄せなど自由渡航にはアメリカ経由が多かった。九三年二月二十二日、ハバナで死亡。新潟県北蒲原郡米倉村米倉（新発田市米倉）の人。八五年だったか、一時帰国されるというので、郷里の引き受け先さがしに走ったのを覚えている。親はもちろん兄弟姉妹も亡くなっている場合が多く、甥姪世代では疎遠になるのも当然で、受け入れ同意が得られないことが多く、一時帰郷が叶わない人もずいぶんいた。肥田野さんも同じで、「手記」の時点では一時帰郷を諦めていた。それが運よく実現して、元気に帰って行かれた、その後ろ姿を成田空港に見送っている。

党秀三

北崎政次郎の呼び寄せで、一九二七年十一月十一日にハバナに入っている。二十二歳だった。北崎はハバナの南、カリブ側のバタバノで漁師をしていたから、いつしよに漁業をしていたと思うが、その後どうしたかわからない。福岡県糸島郡北崎村宮浦（福岡市西区宮浦）の人。北崎とは縁戚で、たぶん従兄弟だろう。同じ姓で党丈平がいるが、この人も従兄弟だと思う。

糸数宗牛

仲宗根勝吉の呼び寄せで、一九二七年十一月十一日に妻のナベといっしよにハバナに入っている。三十四歳だった。仲宗根は海外興業第二回移民で、トリニダーのあとはカマガエイ（シエゴ・デ・アピラ）のモロンでハルディネロをしていたから、同じようにモロンにいたと思うが、三五年に次男の宗信を呼び寄せたあと、収容前に夫婦で帰郷している。沖縄県国頭郡羽地村親川（名護市親川）の人。

糸数ナベ

糸数宗牛の妻。仲宗根勝吉の呼び寄せで、一九二七年十一月十一日に夫といっしよにハバナ

に入っている。二十九歳だった。その後は、カマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のモロンにいたようで、三五年に呼び寄せた次男の宗信を残して、収容前に夫婦で帰郷している。沖縄県国頭郡羽地村親川（名護市親川）の人。

吉川幸

若藤喜作の呼び寄せで、一九二七年十一月十一日にハバナに入っている。二十九歳だった。若藤はイスラのサンタ・バルバラ地区で野菜づくりをしていたから、吉川もその近くで農業をはじめたと思う。収容は第五回で、釈放後はピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移っている。独身だったのか、収容中に土地をなくしてしまったのだろうか。戦後のピナルでは農業で成功する者が多かったから、うまくいくはずだったが、四九年十一月十九日に死亡している。収容の疲れが拭えなかったのかもしれない。広島県山県郡中野村細見（山県郡芸北町細見）の人。

木村武

加藤英一の呼び寄せで、一九二七年十一月十一日にハバナに入っている。二十二歳だった。ハバナの加藤のクリーニング店で働いていたのだろうが、その後のことはわからない。収容以

前に帰郷していると思う。岐阜県土岐郡多治見町（多治見市）の人。

真鍋直

真鍋磨の妻。呼び寄せて一九二七年十一月二十六日にハバナに入っている。二十三歳だった。磨はオリエンテ（オルギン）のクエト（Cueo）で理髪店を開いていて、その後、収容前にはピナル・デル・リオに移ってコンソラシオン・デル・スールで農業をしていた。釈放後もコンソラシオンで農業を続けていたが、革命直後の五九年に死亡。直はその後、ハバナに移って暮らしていたが、九〇年代後半だったか、帰郷して二〇〇四年十一月二十三日に亡くなっている。お会いしたことはなかったが、力行会の会員で、機関紙の「力行世界」によくキューバ便りを書かれていた。高知県高岡郡高岡町戸波（土佐市高岡町）の人。娘さんの繁子（Erena）はハバナで健在だと思う。

井上又蔵

叔父の井上留次郎の呼び寄せで一九二七年十一月二十六日にハバナに入り、カマグエイ（シエゴ・デ・アヒラ）のモロンで野菜づくりをはじめた。二十四歳だった。三年後に郷里から妻三代を呼び寄せている。郷里の祖父母のもとに長女八重を残しての渡航だった。その後、日米

戦争がはじまったため帰郷しようとモロンを引き払い、一家でハバナに出たが乗船できず、といつてモロンにも戻れないので、しかたなく西のピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移った。そして収容。第六回グループで、釈放後はコンソラシオンで野菜づくりを続けた。コンソラシオンでは政府からかなり広い土地を借り、夫婦はもちろん子どももいつしよに懸命に働いたから、貯えもずいぶんできていたと思うが、それも革命で貨幣価値が變つて元も子もなくしてしまっている。六六年一月五日に死亡。新潟県北蒲原郡川東村板山（新発田市板山）の人。

香川渉

一九二七年十二月にハバナに入り、イスラに渡つてピーマンづくりをはじめた。ムラを買い入れ、ずいぶん手広くやっていたらしい。そのときのようすが残っている。好きな一葉で、この「キューバ日本人物語」の表紙にもイラスト化している。収容後は、やはり土地をなくしたからだろう、ハバナに移り、革命前の五四年七月十五日に死んでいる。広島県の人。ところで、収容時の農業者のようすはどうだったか。妻子がいて農業をそのまま続けられた者はよかつた。だが、独身者は丸裸になっている。まず、政府からエンカルガードと呼ばれた管財人が指定され、そのエンカルガードによつて家財道具から收穫物まで、売れるものはすべて売り



ムラと香川渉

払われる。その売上金はエンカルガードによって保管されることになっていたが、実際はほとんどが着服されている。そして土地は、日本人には自前で持っている者など皆無で、ほとんどがアメリカ人農園主からの借地だったため、家屋は焼き払われ、土地は回収されている。だから、戦後は、釈放されたものの行き場がなく、本島に移ってコシネロやハルディネロをはじめるか、イスラでなら、妻子が土地を守っていた仲間を頼り、雇われ者として寄寓に甘んじるしかなかった。例えば、原田茂作はそうした彼らを何人も受け入れている。香川はそれを好まなかったのだろう、ハバナに出たのだが、何をしていたのかがわからない。

笹本専一

一九二八年一月九日にハバナに入っている。十九歳だった。呼び寄せだが、縁戚がわからない。東京市牛

込区原町（東京都新宿区原町）の人。菅井忠吉の関係かもしれない。早い時期に帰郷しているだろう。

内藤五郎

この人については、正直、どう綴っていいかわからない。あまりにも知りすぎて、話しはじめてら切りがなく、といつて、自分を語ることの少なかつた人だけに、意外と何も知らなかつたことにいま気づいている。父のことを知らない子のことを思い浮かべていただければいいと思う。そのように父のような人だったから、言葉より思いばかりが先走つて文字にしにくい。広島県安佐郡安村相田（広島市安佐南区相田）の農家に生まれ、中学を出たあと、兄岩戸迅一と呼び寄せで一九二八年三月二日にハバナに入っている。十九歳だった。姓がちがうのは、岩戸家の五男として生まれたが、小学四年のときに、一度、遠縁のアメリカ帰りの野平家に養子に入つたあと六年後に復籍して、さらに縁戚の内藤家の養子に入つたからで、ハバナに上陸すると、すぐにイスラに渡り、サンタ・バルバラ地区で野菜づくりをしていた同郷の太下関三のもとに転がり込み、隣に十エーカー（約二百メートル四方）の土地をアメリカ人の土地会社から借り、二人で農業をはじめた。まず井戸を掘り、小屋を建て、畑をつくる。兄から畑の耕し方から農業のいろはを習い、夕方になると近所の日本人の畑に走っては観察、夜はノートに記録し

て野菜づくりを覚えたという。だが、二〇年代はじめからの不況はひどくなるばかりで、出荷しても手元にはいくらかも残らなかつた。そこで兄と別れて本島に出て、カマグエイではエラード販売、ハバナ西郊のバネスではセントラルのハルディネロなど、各地を渡り歩いて職も転々としたあとハバナに落ち着き、アバナ・ピエハのメルカド・ウニコ（公設市場）で田島又兵衛の青果店を譲り受け、西瓜や胡瓜、トマトなどイスラから仕入れた野菜販売をはじめた。三十九年のことで、これが順調にいつて、あと二、三年もすれば帰郷できると算段していた矢先の日米開戦だつた。

今日か明日かと怯える日々を過ごしながら一年二カ月後の四十三年二月に逮捕され、イスラに送られプレシディオ・モデロに収容されている。釈放されたのは戦後も五カ月を過ぎていた。それでも早い方で、最後のグループはさらに二カ月も後になっている。そうしてハバナに戻つた直後に、キューバ婦人のドロレス (Luisa de Jesus Maria Dolores) と結婚している。父はスペイン移民の商人で、収容前に住んでいたアパートの隣家の二人姉妹の姉娘だつた。収容中は何度も面会に通い、早期の釈放もドロレスの嘆願活動の結果だつた。二人でインフアンタ通りに小さなカフェテリアを買つて日夜働き、二年後に長男マリオが生まれている。その店舗は道路拡張で立ち退きになり、メルカド・ウニコの二階にあつたボールを兼ねたカフェテリアを七千ドルで買つて再出発。以前より広がつたが、その分、人を雇わなければならなかつたから



バネスのセントラルで

収益はほとんど変わらなかった。兄迅一は交通事故で負傷し、五三年に帰郷、二年後に死亡している。そして革命がやって来る。店舗は接収され、所有者が一転して国家の雇われ者になったことはほかの仲間と同じで、そのまましばらく働いたが、六〇年代半ばからは新しくできた漁業公社に通訳として働いた。革命後の食糧増産政策の一環として政府は鮪の遠洋漁業を推進、日本から鮪漁船を買い入れ、和歌山や長崎から日本人漁師を漁業指導者として受け入れはじめた、その通訳として声がかかったのだった。内勤だけでなく、漁船に同乗して近海はもちろん、カナリア諸島など遠く大西洋漁場にまで出かけている。そんな暮らしが、日



ドロレス夫人と

本人指導者が引き揚げる七六年まで続いて、その後は日系人連絡会のまとめ役を務めながら、日本人移民の名簿づくりをはじめていた。お会いしたのはそんな頃だった。キューバの日本人会は収容によって解散したまま戦後も復活することはなかった。ブラジルやメキシコとちがって日本の財界との仲介の機会がなかったからで、代わって仲間内の行事の開催や大使館との連絡機関として五七年にできたのが日系人連絡会だった。そうして仲間の日本への一時帰郷の実現に奔走していた。当時、日本外務省の外郭団体だった日本海外移住家族会連合会が旅費を負担して日本への一時帰郷者を受け入れていた。それはよかったが、連合会がかかわるのは往復旅費の支給と東京での歓送迎会だけで、あとは日本の縁戚に頼るしかなかった。革命の接収と貨幣価値の下落でまともった貯えを持っている人など一人もいなかった。

兄弟姉妹が健在な場合は話も早かった。だが、それがいない場合は引受人がなかなか見つからず、泣く泣く断念する人も少なくなかった。そんな縁戚との交渉や送り出しをするのが内藤さんの役目だった。ぼくも何度かお手伝いをして成田に送り迎えをしたが、移民以来半世紀を経て、郷里は甥姪からその孫子の時代になり、見知らぬ叔父叔母大叔父叔母の受け入れを渋るのも道理で、だからたいへんだった。

そんな努力が二十年近く続いたか、最晩年はドロレス夫人に先立たれ、二〇〇五年七月二十一日に亡くなっている。肺炎だったらしい。駆けつけたかったが、まだまだ子育ての最中で余裕がなかった。イスラ時代はもちろん、その後も本島各地を転々としていたこと、そして、そのおほかで人好きな性格から、老若問わず各地に知り合いが多く、だれよりもキューバの日本人の動向をつかんでいる人だった。もしこの人がいなかったらキューバの日本人の歴史はほとんど何もわからないままに終わっていただろう。ぼくがこうして綴ることができているのも、この人の足と記憶力によるもので、ぼくはただ助手として、その遺した言葉の一つ一つを代わって記録しているにすぎない。

寺野格

宮本英一の呼び寄せで、一九二八年三月二十二日にハバナに入っている。二十歳だった。宮

本はカマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のガスパル（Gaspar）にいて理髪師をしていたから、寺野もガスパルにいたのだらうが、その後どうしたかわからない。熊本県下益城郡豊野村砂川（宇城市松橋町砂川）の人。

島津三一郎

叔父の島津岩吉の呼び寄せで一九二八年五月六日にハバナに入っている。二十歳だった。妹のナミは岩吉の妻で、前年に呼び寄せられていた。岩吉は小川移民の一人で、セントラル・コンスタンシアの小川農場が崩壊したあとはカマグエイのモロン（Moron）で理髪店を開いていた。そこに転がり込むのだが、不況で仕事がなく思うようにいかなかったのか、イスラで農業をしていた同郷の長谷川与五エ門を頼ってイスラのサンタ・バルバラ地区に入って農業をはじめた。当時、イスラの土地を所有していたのはアメリカ人で、かれらからカバジェリアス単位で土地を借りると、まず井戸を掘り灌漑設備を整えて農業をはじめるのが日本人の流儀だったが、それでも二、四年もすれば土壤が痩せて大量に肥料を投入しないと作物が育たなくなる。その肥料代がばかにならなかつたため、多くは、次々と新しい土地を借りて移っていった。島津もそうだったと思う。転々と移転ばかりの暮らしだった。それだけでもたいへんだったが、さらに収容で何もかも失ってしまう。家族がいた者は家族が土地や家を守っていたから、釈放後

はすぐに戻って農業を続けることができた。しかし、独身者は戻るところもなく、戦後は、本島西部のピナル・デル・リオに移る者が多かった。長谷川もそうしている。イスラとよく似た土質で、ニューヨーク市場に出荷するのもイスラよりはいくらか有利だった。ただ、島津はそのままイスラに残っている。理由はわからない。いかにも越後人らしい、あまりむかしを話さない人だった。そうしていくらかの貯えを手に帰郷するつもりだったのだろうが、革命に阻まれる。その後は、フィンカ・フカロ地区の原田茂作の農場に寄寓して暮らしていた。お会いしたときは七十五歳だったか、三十を過ぎたばかりの若造に、背筋をしゃんと伸ばし、まるで一兵卒が上官に向かうかのように顎を引いて胸を張り、「島津三一郎であります」と挨拶されたのを忘れない。勤勉実直を地で行くような人だった。そして、別れの際にこういった。「最近の新潟はどうですか」。それを、故郷を見てみたい、と受け取ったばかりは郷里の新発田を訪ね、一時帰郷の受け入れ先をさがし歩いた。ただ、それはうまくいかず、せめてもの思いで、新発田の里やら街やらを撮った写真をキューバに送った。それがよかったかどうか。思いも叶うことなく、二〇一六年七月十日、ヌエバ・ヘロナの養老院 (Hogar de Anciano Panchita) で死亡している。百八歳、最後の日本人(二世)だった。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野(新発田市五十公野)の人。「移民史考」の「最後の男」に詳しく書いた。

樽本ツル

樽本十寸水の妻で、一九二八年五月六日にハバナに入っている。三十五歳だった。夫も再渡航で同行していたと思う。断定できないのは、兵庫県庁へは妻同行再渡航と申請しているのに、ハバナでの入管リストに記録が見られないからで、途上、死亡したのか、何があったのか、このときの入国は確認できないが、再渡航はたしかなので、それ以前には入国しているわけだから「名簿」には加えている。ただ、ともにその後のことがわからない。長崎県南松浦郡富江町富江郷（五島市富江町富江）の人。

土屋トム

土屋始の妻。呼び寄せで一九二八年五月六日にハバナに入っている。十七歳だった。始はラス・ビジャスのサンクティ・スピリトゥスでエラードの製造販売をしていた。革命後、七三年に夫婦で郷里に一時帰郷しているが、その帰路の八月二十五日、トムは羽田空港で急死。始は一人戻り、八〇年六月六日に死亡している。福岡県浮羽郡水分村常盤（久留米市田主丸町常盤）の人。

村中シゲ

村中芳蔵の妻。呼び寄せで一九二八年五月六日にハバナに入っている。二十歳だった。芳蔵はハバナにいたと思うが、その後、早い時期に死亡していて、シゲもそのあと帰郷していると思う。山口県玖珂郡通津村長野（岩国市通津）の人。

島津三郎

小川移民の一人だった兄二郎の呼び寄せで一九二八年五月六日ハバナに入っている。二十三歳だった。すぐにイスラに渡り、サンタ・バルバラ地区にいた同郷の長谷川与五郎と肥田野龍次のもとで野菜づくりをしていた。収容以前だと思いが、本島に行くといって出かけたまま行方不明になっている。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野（新発田市五十公野）の人。

開田チエ子

開田語作の妻。呼び寄せで一九二八年九月十五日にハバナに入っている。二十一歳だった。語作は二一年にキューバに入り、最初はラス・ビジャス（シエンフェゴス）のオルキタスにいたが、その後、カマグエイ（シエゴ・デ・アビラ）のバラグア（Baragua）のセントラルにいたあ

と、カマグエイで野菜づくりをしていた。久雄、讓二、秀三、正行の四男をもうけ、六三年一月二十八日に死亡している。語作は八一年に死亡、九十歳の大往生だった。広島県佐伯郡観音村千同（広島市佐伯区千同）の人。

松本輝雄

若藤喜作の呼び寄せで、一九二八年九月十五日にハバナに入っている。十七歳だった。若藤はイスラのサンタ・バルバラ地区で野菜づくりをしていたから、最初はいっしょにいたのだろうが、その後、フィンカ・フカロ地区に独立している。収容は第五回で二階にいて、釈放後もフィンカ・フカロで野菜づくりをしていた。八二年にお会いしたが、八四年五月二十三日に帰郷している。健在なら百十歳になられるがどうされているか。広島県安佐郡安古町上安字鍋山（広島市安佐南区上安字鍋山）の人。

佐々木時一

松本輝雄といっしょに若藤喜作の呼び寄せで、一九二八年九月十五日にハバナに入っている。二十八歳だった。松本同様、最初は若藤のいたイスラのサンタ・バルバラ地区でいっしょに野菜づくりをしていたと思う。その後もイスラにいたが、どこだったかはわからない。第五

回収容で、釈放後もイスラのフィンカ・フカロにいて、七七年五月二十日に死亡している。広島県山県郡戸河内村（山県郡戸河内町）の人。

甲賀春登

藤本土郎の呼び寄せで、一九二八年九月十五日にハバナに入っている。十九歳だった。その後、三〇年にはカマグエイのシエゴ・デ・アピラで理髪店を開いていた。三〇年に実施された理髪師資格試験の受験者リストに名前が見える。ただ、合格できなかったのではないか。理髪試験の実施を決めた理髪試験法は一種の日本人排斥法で、ねらい通りにほとんどが不合格になっている。その後、日本人会が抗議したことで見直されることになったが、それを待てずに廃業し、イスラやピナル・デル・リオに移って農業をはじめた者が多かった。甲賀はどうしたかわからない。収容前までにキューバを離れていると思う。広島県豊田郡河内町河内（東広島市河内町）の人。

徳永昇

高橋豊作の呼び寄せで、一九二八年九月十五日にハバナに入っている。二十一歳で、高橋の妻サヨと同航だった。高橋は小川富一郎の同朋で、コンスタンシアのあとは近くのタマリンド

で米作や野菜づくりをしていたから、最初はいつしよにいただろう。第三回収容だから、シエンフエゴスあたりで何か商店を開いていたのかもしれない。釈放後はイスラに残ったようで、七二年一月二十二日にフィンカ・フカロで死亡している。熊本県菊池郡砦村流川（菊池市七城町流川）の人。三〇年に兄の茂を呼び寄せている。

高橋サヨ

高橋豊作の妻。呼び寄せで、徳永昇と同行、一九二八年七月二十日に東洋汽船の銀洋丸で神戸を発ち、九月十五日にハバナに入っている。二十五歳だった。日本出立日までわかるのは海外興業第二十二回移民として渡航しているからで、その渡航者名簿には一九〇九年十月四日生まれとあつて、そうだとすると十八歳での渡航になる。タエ子、タカ子、秀雄、スミ子の一男三女がいて、子どもたちが独立したあとは、視力をなくした豊作とラス・ビジャス（シエンフエゴス）のヤグアラマスで二人暮らしていた。豊作は耳も聞こえなくなっていて、ぼくの問いかけに表情も変えない。その耳元で、声を荒げて「通訳」してくれた、笑顔の穏やかな人だった。その後も二、三度お便りして元気にしておられたが、二〇〇〇年前後に亡くなっている。熊本県阿蘇郡錦野村外牧（菊池郡大津町外牧）の人。



高橋豊作（右端）とサヨ夫人、左端は内藤五郎

大谷鉄一

谷口吾市の呼び寄せで、一九二八年九月十五日にハバナに入っている。十八歳だった。ただ、谷口のことも含めて、その後のことは何もわからない。ともに収容までに帰郷していると思う。広島県安佐郡祇園村北下安（広島市安佐南区祇園）の人。

吉田 彥次郎

京都府の人で、一九二八年九月十五日にハバナに入っている。収容は第六回だから、本島の地方にいたと思うが、三階にいたからハバナにいたのかもしれない。釈放後はカマガエイにい

て、五九年二月十六日に死亡している。

嘉納政栄

同郷の当山清富の呼び寄せで、一九二八年に二十五歳で入っているが、その後のことがわからない。収容前にキューバを離れていると思う。沖繩県国頭郡本部村謝花（国頭郡本部町謝花）の人。

藤野芳人

香川吾一の呼び寄せで、一九二八年に入っている。二十一歳だった。香川はラス・ビジャス（シエンフェゴス）のビオレタにいたから、藤野も最初はそこにいたと思うが、その後、ハバナに移ったのか。ごく早い時期にハバナで死亡していて、慰霊堂の第二号セルに位牌が納められている。広島県安佐郡緑井村（広島市安佐南区緑井）の人。

田口オイシ

田口作一の妻。呼び寄せで二八年に入っている。二十五歳だった。作一は二三年に入っているが、ごく早い時期にハバナで死亡していて、オイシのその後のこともわからない。広島県御

調郡諸田村諸毛（府中市諸毛）の人。

宮野祐四郎

同郷の井上留次郎の呼び寄せで一九二八年十月十七日にハバナに入っている。十七歳だった。ただ、ハバナでの入国のときに同航者五人（百田政経、道免武吉、下村貞二、下村俊、西沢治三郎）といっしょに上陸を拒否され、一時、移民収容所に拘留されている。キューバでは二二年から移民の入国制限が復活し、在留者本人の再入国と家族の入国しか、原則的に許されなかったからだ。ただ、多くは二、三十ドルの見せ金を示せば大目に見られて入国できていた。このときは大平慶太郎が移民局と折衝して、無事釈放され入国も叶っている。大平はハバナで日本商店を経営していたが、海外興業移民の現地代理人をしたりしていたから、官憲とのつながりが深かった。その後の宮野は井上を頼ってカマグエイのシエゴ・デ・アビラにいたと思う。収容は第六回で四階にいたが、釈放後はオリエンテのセントラル・バナス(Banes)に移り、七九年六月二十一日にグランマのニケロ(Niquero)で死亡している。独身だったと思う。新潟県北蒲原郡川東村大友（新発田市大友）の人。

百田政経

同郷の貝原吉三郎の呼び寄せで二十六歳で、一九二八年十月十七日にハバナに入っているが、ハバナでの入国るときに同航者五人（宮野祐四郎、道免武吉、下村貞二、下村俊、西沢治三郎）といっしょに上陸を拒否され、一時、移民収容所に拘留されている。二二年から移民の入国制限が復活し、在留者本人の再入国と家族の入国しか、原則的に許されなかつたからだった。ただ、多くは大目に見られていた。このときは大平慶太郎が移民局に折衝して、無事釈放され上陸が叶っている。大平はハバナで日本商店を経営していて、日本商品を輸入したり、海外興業移民の現地代理人をしたりしていたから、入管にも顔が利いた。このときの史料では貝原はシエンフェゴスで漁業をしていて、その手伝いとして呼び寄せたとあるから、百田もシエンフェゴスに入ったのだろうか、その後のことがわからない。早い時期に帰郷していると思う。福岡県粕屋郡須恵村佐谷（糟屋郡須恵町佐谷）の人。

道免武吉

田村勇の呼び寄せで一九二八年十月十七日に入っている。二十三歳だった。このとき、同航者五人同航者五人（宮野祐四郎、百田政経、下村貞二、下村俊、西沢治三郎）といっしょに上陸を

拒否され、一時、移民收容所に拘留されている。二二年から移民の入国制限が復活し、在留者本人の再入国と家族の入国しか、原則的に許されなかったからだった。ただ、多くは大目に見られていた。このときは大平慶太郎が移民局にかけ合つて、無事釈放され上陸が叶っている。田村はイスラで農業をしていたから、道免もイスラに渡つているだろう。ただ、收容は第六回で三階にいたから、收容前にはたぶんハバナにいたと思う。吉田高登と親しかつたらしく、八一年十二月十七日にハバナで死亡している。出身地は島根県だが、入国拘留のときの史料では「兵庫県明石郡垂水村」（神戸市垂水区）となつている。

下村貞二

小川移民だった下村与次の弟三太郎の呼び寄せで三太郎の妻俊に連れられ、一九二八年十月十七日にハバナに入っている。十五歳だった。ただ、このとき、同航者五人（宮野祐四郎、百田政経、道免武吉、下村俊、西沢治三郎）といつしよに上陸を拒否され、一時、移民收容所に拘留されている。二二年から移民の入国制限が復活し、在留者本人の再入国と家族の入国しか、原則的に許されなかったからだった。ただ、多くは大目に見られていた。このときは大平慶太郎が移民局に折衝して、無事釈放され上陸が叶っている。三太郎はラス・ビジャスのシエンフェゴスにいたからそれを頼っているだろうが、その後はどうしたか。收容が第三回のグループだ

から本島にいて、何か商店を開いていたのではないか。吉村半次郎の娘と結婚し、釈放後はオリエンテ（オルギン）のオルギンにいたが、五年二月十日、トラックを運転中に転倒事故を起こして死亡している。新潟県北蒲原郡中浦村荒町甲（新発田市荒町）の人。

下村俊（立川）

下村三太郎の妻で、夫の呼び寄せで一九二八年十月十七日にハバナに入っている。十九歳だった。何度も書くが、このとき、同航者五人（宮野祐四郎、百田政経、道免武吉、下村貞二、西沢治三郎）といっしょに上陸を拒否され、一時、移民収容所に拘留されている。二二年から移民の入国制限が復活し、在留者本人の再入国と家族の入国しか、原則的に許されなかったからだ。ただ、多くは大目に見られていた。このときは大平慶太郎が移民局に折衝して、無事釈放され上陸が叶っている。その後はシエンフエゴスにいたが、離婚して立川金治と再婚、マタンサスのカルデナスで暮らし、八五年四月九日に死亡している。大男の立川とは対照に小柄で、立川より七歳年下だったが、天真爛漫で子どものような性格の立川をやさしく包み込むような立ち居振る舞いの人だった。新潟県北蒲原郡中浦村荒町（北蒲原郡豊浦町荒町）の人。ロサ、セリア、清治の一男二女がいる。

西沢治三郎

大平慶太郎の呼び寄せで、一九二八年十月十七日に入っている。ただ、このとき、同航者五人（宮野祐四郎、百田政経、道免武吉、下村貞二、下村俊）といっしょに上陸を拒否され、一時、移民收容所に拘留されている。二二年から移民の入国制限が復活し、在留者本人の再入国と家族の入国しか、原則的に許されなかったからだ。ただ、多くは大目に見られていた。このときは大平が移民局に折衝して、無事釈放され上陸が叶っている。その後は、ハバナの大平商店で働いていただろうが、三〇年代に入って不況で大平商店の経営がむずかしくなったためか、イスラに渡っている。收容は第五回で、五三年九月二十三日にイスラのフカロで死亡している。長野県下伊那郡飯田町（飯田市）の人。

小川ヨシミ

小川富一郎の姪で、小川移民の一人だった同郷の窪田忠雄と結婚し、呼び寄せで一九二八年十月十七日にハバナに入っている。二十一歳だった。窪田は崩壊する小川農場に小川家族を助けて最後まで残っていたが、家族がシエンフエゴスに出たあとはビジャ・クララ（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニコに移り、結婚当時は、セントラルが経営していた雑貨店で働いて

いた。しかし、三〇年代に入って不況が激しくなったためセントラルにいられなくなり、オリエンテ（グランマ）のシエラ・マエストラにほど近いサン・ラモン（San Ramon）に移って、農業のかたわら行商暮らしをしていた。民子（Isabel）、佳子（Lourdes）、君子（Lidia）、晃一、稲雄の二男三女がいて、晃一は革命の地下活動に参加していた。夫忠男は八二年に死亡、九八年にヨシミもあとを追っている。小柄で細面の美しい人だった。新潟県北蒲原郡新発田町上鉄砲町（新発田市諏訪町）の人。

立川金治

福岡県糸島郡北崎村宮浦（福岡市西区宮浦）の人。一九〇一年十月二十二日生まれで、二八年にキューバに入っている。北崎政次郎の呼び寄せだと思う。マタンサスのカルデナス（Cardenas）で漁師をしていた。収容時には演芸部において、月一回の興行の舞台装置に腕を揮ったことは日本人の間で語り草になっている。物がなければ知恵が働く。器用な人で、古新聞を貼り重ねて緞帳や舞台幕をつくり、鍋墨や消毒用の赤チンを使って絵を描いた。少年時代から絵が好きで、漁に出るかたわら、生涯、絵筆を放さない人だった。カルデナスの自宅のすぐ前が白い砂浜続きの青い海。はつきりいって粗末なつくりで、寝室二つに居間と台所という家だったが、小綺麗にした部屋の中にはいくつも油絵が、あちこちにさりげなく架かっていたり、床に立てかけ

られていたりして、風景画が多いなかに、点々と婦人の肖像画があつた。一目でわかる夫人のそれだつた。妻は下村三太郎と結婚していたが、いろいろあつたらしく、別れて立川と再婚している。時代が時代である。離婚しての再婚はいろいろ陰口を叩くのがふつうだったが、二人の場合、それが無い。いかにも海の男らしい、上背のある大男で、割れるような声で豪快に笑う姿がいまもきれいに脳裏に残っている。それを傍で夫人がおだやかに見守っていた。俊は八五年四月九日に先を逝き、立川は九八年三月三十一日にあとを追っている。

宮本ジト

宮本英一の妻。一九二八年に呼び寄せで、カマグエイ(シエゴ・デ・アピラ)のガスパル(Gaspar)に入っている。二十四歳だつた。英一は理髪師をしていて、三〇年までは同地に入ったことはたしかだが、二人とも、その後のことがわからない。早くに帰郷しているだろう。熊本県下益城郡東砥用村川越(下益城郡美里町川越)の人。

大城次良

沖縄県島尻郡糸満町(糸満市糸満)の人で、一九二八年に入っている。三十一歳だつた。旅券申請には「漁業」とあるから、バタバノの上原亀次郎か、シエンフエゴスの上原保徳の呼び寄

せではないか。やはり収容以前に帰郷しているだろう。

伊波カメ

伊波蒲一の妻で、一九二八年にキューバに入っている。三十一歳だった。蒲一はカマグエイのエスメラルダ (Emerald) で理髪店を開いていたが、三〇年に実施された理髪師資格試験に合格できなかったため、仕事ができなくなり、イスラに渡って農業をはじめた。不合格といつても、腕がだめだったわけではなく、日本人理髪師を排斥するのが目的だった。それほどまでにカマグエイでは日本人理髪師が多くなっていた。そのほとんどが海外興業移民だった。トリニダー逃亡後も不況続きでセントラルには仕事がなかったため、見様見真似で理髪を覚えたのだった。収容中は夫に代わって土地と家を守っていたから、蒲一は釈放後もイスラで農業を続けることができた。蒲一は五六年に、カメは八七年一月一日にイスラで死亡している。沖縄県中頭郡美里村石川（うるま市石川）の人。

大島源八

熊本県菊池郡合志村栄（合志市栄）の人で、一九二九年に入っている。四十歳だった。旅券申請には「店員」とあるから、榊原利一の呼び寄せだと思う。

荒川サダメ

荒川伍平の妻。呼び寄せで海外興業第二十三回移民の募集に乗っかり、一九二八年十二月二十六日に東洋汽船の銀洋丸で神戸を発ち、一九二九年二月十五日にハバナに入っている。三十二歳で、長女のスマコ（四歳）を連れていた。伍平は海外興業第十回移民で、二五年にトリニダーに入り、その後はカマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のバラグアにいた。伍平は六八年に死亡。サダメのその後がわからない。熊本県菊池郡蘇川村矢護川（菊池郡大津町矢護川）の人。次女貞美（Zaidai）はハバナにいたと思う。

荒川スマコ

荒川伍平の長女で、母のサダメに連れられ一九二九年二月十五日にハバナに入っている。四歳だった。伍平は六八年に死亡しているが、母のサダメとともにその後のことがわからない。熊本県菊池郡蘇川村矢護川（菊池郡大津町矢護川）の人。

伊藤幸雄

海外興業第二十三回移民三人の一人で、一九二八年十二月三十一日に東洋汽船の銀洋丸で横

浜を発ち、二九年二月十五日にハバナに入っている。二十歳だった。海興の募集を利用しただけでトリニダーには入っていない。ハバナにいたと思う。第二回収容だから何か商店を開いていたのかもしれない。釈放後もハバナにおいて、七二年十二月二十九日に死亡している。熊本県下益城郡豊野村塚原（熊本市南区城南町塚原）の人。

安達勝次

福岡県八女郡笠原村（八女市黒木町笠原）の人で、一九二九年五月九日に、妻のキクエといっしょに入っている。再渡航かもしれない。カマグエイにいたのではないかと思う。収容は第四回グループで、それなりにめばしい人物と見られたのだろう、商店を開いていたのではないか。釈放後もカマグエイにおいて、八〇年十一月二十五日に死亡している。オリエンテのセントラル・サンタ・ルシア（Central Santa Lucia）にいたことがあるかもしれない。

安達キクエ

一九二九年五月九日に、夫の勝次といっしょにハバナに入っている。二十二歳だった。カマグエイにおいて、勝次は八〇年に、キクエは二〇〇三年だったと思うが、死亡している。福岡県八女郡笠原村（八女市黒木町笠原）の人。一男、勝利（Victor）がいる。

津上栄吉

一九二九年五月九日にハバナに入っている。二十四歳だった。その後のことはわからないが、旅券申請には「漁業」とあるから、バタバノの北崎政次郎の呼び寄せだと思ふ。福岡県糸島郡北崎村宮浦（福岡市西区宮浦）の人。

党丈平

一九二九年五月九日にハバナに入っている。二十歳だった。北崎政次郎か、従兄弟ではないかと思ふが党秀三の呼び寄せだと思ふ。北崎も秀三もバタバノで漁師をしていたから、丈平もいつしよにいただろう。収容は第六回で、釈放後はイスラに移ってヌエバ・ヘロナにいた。八六年十二月九日に死亡。福岡県糸島郡北崎村宮浦（福岡市西区宮浦）の人。

日野良彦

一九二九年五月九日にハバナに入っている。十八歳だった。そのままハバナにいたのか、ピナル・デル・リオのエラドウラに移ったのかどうか、第六回収容で、釈放後はエラドウラにいた。その後、ハバナに移ったのか、七二年十二月五日にハバナで死亡している。福岡県浮羽郡

船越村長栖（久留米市田主丸町長栖）の人。日野忠造の甥ではないか。

古田ハル

古田恒重の妻。呼び寄せで一九二九年に入っている。二十四歳だった。ただ、夫婦ともその後のことがわからない。長野県東筑摩郡宗賀村（塩尻市宗賀）の人。

田中タカ

田中兵次郎の妻。一九二九年に呼び寄せられている。二十五歳だった。兵次郎は三年前の二六年にハバナに入り、ハバナで何か商店を開いていたと思う。タカはごく早い時期にハバナで死亡、兵次郎は七八年に同様にハバナで死亡している。福岡県粕屋郡志賀島村志賀島（福岡市東区志賀島）の人。

香川芳枝

香川吾一の長女、というより、フストの姉、といった方がキューバの日本人の間ではよく通じた。それほど弟のフストは知られていた。若い頃から本島各地を転々としていたからだ、二人とも郷里の祖父母のもとで育ち、フストのあと二年後れの一九二九年に呼び寄せられてい



前列左から瀬在千恵子、小坂芳枝、井上キクノ

る。十九歳だった。だから、第二世代でありながら、移民としては一世扱いになっていて、両親のいたラス・ビジャス（シエンフエゴス）のビオレタ（Violeta）に入っている。父はセントラルから農地を借りて野菜づくりをして、母の静代が青果店を開いてその野菜を売っていた。その後、ハティボニコ（Tatibonico）のセントラルにいた小坂栄寿計と結婚。収容後は、シエゴ・デ・アビラに移って、夫といつしよにエラード販売や、米作りをしたこともあった。しかし、革命で中断したままになっている。

栄寿計は七一年五月十七日に死亡。喜久栄（Marta）と美栄子（Nita）の二女がいて、晩年は喜久栄の家族といっしよに

暮らしていた。訪ねたときは、井上キクノさんや瀬在千恵子さんといっしょで、女三人寄れば姦しい、うまく質問もできないぼくを尻目に、昼前から陽の暮れまで喋り続け、むかしのことを教えてくれた。それが「日本人物語」として実っている。以来、何度も手紙のやりとりを続けて元気なようすをたしかめていたが、ぼくの不精で途切れてしまい、二〇〇三年に亡くなったことを人伝に知った。九十三歳になっていただろう、いけないことをしたと墓前に詫びたい思いでいっばいだが、考えてみれば、いまからキューバに出かけるより、冥途でお会いする方が早いような気がしている。瀬在千恵子同様、母のような人だった。だから『峠の文化史』（『忘れ難く去り難し』）の表紙にも、ずっと笑顔でいてくれている。

大下ヨシコ

大下関三の妻。呼び寄せで一九二九年に入っている。二十五歳だった。関三は海外興業第二回移民で、トリニダダーのあとは、イスラに渡り、サンタバーバラ地区で農業をしていた。夫婦で收容前に帰郷していると思う。広島県安佐郡伴村伴（広島市安佐南区伴）の人。

亀田シノブ

亀田亀一の妻。呼び寄せで一九二九年に入っている。十八歳だった。同村の大下ヨシコと同



日本人会第一回支部長会議（1932.5.22）

前列左端が吉岡稔

航だっただろう。亀一は海外興業第一回移民で、二四年に入り、トリニダのあとは、カマグエイで理髪師をしていた。夫婦いっしょに収容までに帰郷していると思う。広島県安佐郡伴村伴（広島市安佐南区伴）の人。

吉岡稔

加藤英一の呼び寄せだろう。一九二九年に十八歳で入っていて、ハバナの加藤クリーニング店で働いていたと思う。収容は加藤の關係で早い時期の第四回グループだった。加藤は日本人会の会長をしていた。釈放後はカマグエイのシエゴ・デアピラに移って、何をしてたのかわからないが、革命前の五〇年代に帰郷している。岐阜県土岐郡多治見町（多治見市）の人。

上原久治

一九二九年に入っている。三十歳だった。その後のことは詳しくわからないが、旅券申請には「漁業」とあり、上原亀康と同航だから、上原保徳の呼び寄せだろう。シエンフエゴスで漁師をしていたと思う。沖縄県島尻郡糸満町（糸満市糸満）の人。

上原亀康

上原保徳の呼び寄せだろう。一九二九年に入っている。二十二歳だった。シエンフエゴスにいて漁師をしていたのではないか。三〇年には弟だと思いが亀三を呼び寄せ、収容は第六回とともに四階にいた。釈放後もシエンフエゴスにおいて、革命前の五〇年代に帰郷している。沖縄県島尻郡糸満町（糸満市糸満）の人。

前桃泉哲

一九二九年に呼び寄せられているが、縁戚がわからない。二十九歳だった。沖縄県中頭郡与那城村平安座（うるま市与那城平安座）の人。平安座の人はほかに十八人いる。

市原敏晴

市原源の呼び寄せで、一九二九年に入っている。十六歳だった。源は大平慶太郎の呼び寄せでハバナの大平商店で働いていたから、いっしょにいただろう。収容は第六回で三階にいた。釈放後は源はカマグエイのエスメラルダ (Esmeralda) に移ったが、敏晴はそのままハバナにて、四九年七月一日に死亡している。高知県高岡郡波介村波介 (土佐市波介) の人。釈放のあと四〇年代に亡くなった人は二十人いる。釈放後の混乱はもちろん、収容疲れがあったと思う。当時、健在でいた人は四百三十一人、収容者 (一世) は三百四十三人だから、かなりの高率になる。

明神正美

一九二九年に入っているが、だれの呼び寄せだったかわからない。二十一歳だった。高知県高岡郡高岡町甲 (土佐市高岡町甲) の人。

小橋川嘉吉

糸数宗重の呼び寄せで、一九二九年に入っている。二十歳だった。その後のことは詳しくわ

からないが、三四年に妻のカナを呼び寄せている。沖縄県国頭郡名護町屋部（名護市屋部）の人。糸数はメキシコからの転航で、カマグエイ（シエゴ・デ・アビラ）のクナグアでセントラル向けの砂糖黍農場を経営していた。小橋川はその頃に呼び寄せられたのだろう。ただ、直後の世界恐慌の煽りを受けて農場もだめになっている。それを機に小橋川はキューバを離れたのではないか。

玉城徳吉

兄の玉城徳蔵の呼び寄せで、一九二九年に入っている。十八歳だった。徳蔵は海外興業第九回移民で、二五年にトリニダーに入ったあとはイスラに渡って農業をしていたから、徳吉もいっしょにいただろう。ともに収容は第五回で、釈放後もイスラのマッキンレーにいたが、徳蔵は革命前までに帰郷、一人残った徳吉はハバナの南東のギネス（Guines）に移って、七六年一月十四日に死亡している。沖縄県国頭郡本部村瀬底（国頭郡本部町瀬底）の人。

瀬在千恵子

長野県埴科郡五加村（上田市）の人。一九〇九年二月十九日生まれ。夫は瀬在藤治。生家が隣同士で、藤治は一七年にキューバに入っているが、最初の妻を亡くしていて、再婚で呼び寄

せられた。三〇年二月二十八日にハバナに入っている。二十一歳で、藤治の甥で中学出たての宮坂三郎（十七歳）を同行していた。ハバナでは藤治のキューバ行を仲介した大平慶太郎宅に招かれ最初の歓迎を受けている。カーニバルの最中で夢のようなにぎわいだった。そうして四日間を過ごし、列車でカماغエイ（シエゴ・デ・アピラ）のハグエヤルに向かった。最初に見えたのは遠くに白く天を劈く煙突だった。新居はたしかに新しくあった。けれど、寝室に居間と食堂と炊事場があるきりの侘びしいかぎりで、歩くと床が、かた、かた、鳴いて、窓を開けると一面、青いだけの砂糖黍畑が広がっていた。その果てに大きな夕陽が沈んだ。長い移民暮らしのはじまりだった。そして暮れには長男敏夫が生まれている。さらに三年、次男の修二がお腹にいるとき、セントラルが閉鎖され、藤治は失業。その後のことは「瀬在藤治」の項に詳しく紹介した。収容では、藤治はハバナ以外では最初となった第二回グループでイスラに送られている。日本人会の役員をしていたからで、千恵子は二人の子どもをかかえて洗濯婦をしたり遣い走りをしたりして夫の帰りを待った。その間のことは手記（「私は行かなかった」）に淡々と語っている。上田高女（上田染谷丘高校）を出ているからだけではないだろう、心情を伝えてあまりある、うつくしい文章だと思う。はじめてお会いしたのは、八二年の夏だった。九月一日だったとはつきり覚えている。内藤さんとフストさんに連れられ、朝一番にシエゴ・デ・アピラのピナ（Pina）に迎えに行き、いっしょにシエゴ・デ・アピラの井上キクノさんを訪ねた。キクノ



前列左から瀬在千恵子、小坂芳枝、井上キクノ

さんはすでに紹介したが、新潟移民の井上留次郎の夫人で、その日は、日本から移民のことを調べている若いのが来る、というのでおしゃべり仲間のもう一人、小坂芳枝さんも見えていた。女三人寄れば姦しい。にぎやかに、けれど、やさしく、初見の若造に「無駄話ばかりで」と話してくれた。

それがぼくの宝物になっている。人に話を訊くのが大の苦手で、意気込んでキューバに出かけたものの、ほとんど大した聞き取りもできないでいた。それを助けてくれたのが、この三人、なかでも瀬在さんには感謝しかない。いまは書棚の上に厚いファイルになって収まっているが、やりとりした手紙は数知れない。

質問にはいつも適確に、論すかのように、事細かく応えてくれた。いまなら、メールですぐだろう。それがあの頃は往復に短くても一月、悪くすれば六週間もかかっている。古い写真はもちろん、個人史料も送ってくれた。この移民史講座に掲載しているほとんどはそれである。だから、瀬在さんとの想い出はいっぱいあって、八五年だったか、一時帰郷されたときも成田に迎えて、キクノさんの郷里に様子を伝える、という小さな旅にも案内して、宿も一つ部屋に枕を並べた。だから、母のような人だった。あの頃、ぼくも結婚五年目だったか、団地の狭い我が家も覗いてくれて、よちよち歩きの長男の相手もしてくれた。そうして十余年、教えを受けることもできなくなっている。九七年六月十一日のこと、八十八歳だった。こうしてキューバの日本人を物語れるのも、内藤さんはもちろん、瀬在さんがいたからで、ぼくはただ二人の声を綴っているにすぎない。

宮坂三郎

宮坂寛司の弟。呼び寄せで一九三〇年二月二十八日に、叔母にあたる瀬在千恵子に同行、ハバナに入っている。十七歳だった。その後、瀬在の夫藤治や兄の寛司がいたカマガエイ（シエゴ・デアピラ）のハグエヤルにいたが、いくらもしないでハバナに移っている。三〇年代後半の天長節だろう、ハバナの日本公使館での集合写真に姿が見える。日本人会の役員でもしていた

ののだろうか、収容は第一回グループで、釈放後はイスラに残ったと思う。七〇年十一月二十九日にイスラで死亡している。長野県埴科郡埴生村寂蒔（更埴市寂蒔）の人。

久保田庄五郎

一九三〇年に入っているが、だれに呼び寄せられたのかわからない。三十歳だった。福岡県浮羽郡千年村橘田（うきは市吉井町橘田）の人。

浜口加次郎

浜口益一の弟で、一九三〇年に呼び寄せられている。二十五歳だったが、分家して妻子もいたのではない。益一は海外興業第九回移民で、二五年にトリニダーに入り、最初はカマグエイあたりにいたと思うが、その後、ピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移って農業をしていた。加次郎もいっしょだったかどうか。益一は収容されているが、加次郎はされていないから、収容前に帰郷していると思う。和歌山県西牟婁郡串本町（東牟婁郡串本町串本）の人。

大城亀徳

一九三〇年に二十六歳で入っているが、だれの呼び寄せだったかわからない。シエンフエゴスにいたようで、ごく早い時期に同地で死亡している。沖縄県島尻郡糸満町（糸満市糸満）の人。糸満の人はほかに十九人いる。

宮城友吉

宮城当清の呼び寄せではないか。一九三〇年六月三日にハバナに入っている。十八歳だった。最初はイスラにいたと思うが、収容以前に本島に移っている。収容は第六回グループで、釈放後はカマグエイのプエルタ・フカロ (Puerta Jucaro) にいたが、ラス・ビジャスのシエンフエゴスに移って、六〇年九月三十日に死亡している。沖縄県国頭郡大宜味村塩屋（国頭郡大宜味村塩屋）の人。

永井ハルコ

永井秀吉の妻。呼び寄せで一九三〇年六月三日にハバナに入っている。二十五歳だった。秀吉はペルーからの転航で、すぐにイスラに渡ってアメリカ向けの野菜づくりをしていた。夫婦二

人で儉しい暮らしを続けたのだろう、まとまった貯えができたところで戦前に帰郷している。広島県安佐郡長束村（広島市安佐南区長束）の人。

蔵本土郎

一九三〇年に三十六歳で入っているが、このときは再渡航で、最初の渡航日がわからない。広島県豊田郡戸野村戸野（東広島市河内町戸野）の人。

嶺井シゲ

嶺井武彦の妻。呼び寄せで一九三〇年にイスラに入っている。二十五歳だった。武彦は海外興業第九回移民で、トリニダールのあとは二五年にイスラに入っていた。戦後もそのままイスラにいて、革命前の五〇年代に夫婦で帰郷している。沖縄県島尻郡玉城村奥武（南城市玉城奥武）の人。

又吉ミツ

又吉加那一の妻。呼び寄せで一九三〇年に入っている。二十七歳だった。加那一は海外興業第十一回移民で、トリニダールのあとはラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニ

コで雜貨店を開いていた。店内の一面にカウンター・バーを設けてずいぶん繁盛したらしい。戦後もハティボニコにいて、加那一は七二年に、ミツは八一年十二月十五日に死亡している。沖繩県中頭郡与那城村平安座（うるま市与那城平安座）の人。

光岡高夫

一九三〇年六月三日にハバナに入っている。光岡勇の弟で、その呼び寄せではないか。カマグエイのシエゴ・デ・アピラカカマグエイにいたと思う。収容は第六回で、釈放後はカマグエイのファジャ（Fallá）にいたようで、五六年四月二十六日に死亡している。広島県の人。

井上三郎

井上又蔵の弟で、又蔵の妻三代に同行、一九三〇年六月三日にハバナに入っている。二十三歳で、又蔵のいたピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに入り、いつしよに野菜づくりをしていた。収容は第四回で五階にいた。第四回に逮捕されたのは、めぼしいと思われた人物で、兄の又蔵は第六回なのにどうしてなのか、よくわからない。釈放後もずっといつしよだったと思う。革命後の六八年十二月五日に死亡している。新潟県北蒲原郡川東村板山（新発田市板山）の人。

井上三代

井上又蔵の妻。呼び寄せで一九三〇年六月三日にハバナに入っている。二十三歳で、郷里の祖父母のもとに長女八重を残しての渡航だった。又蔵はカماغエイ（シエゴ・デ・アピラ）のモロンで農業をしていた。その後、日米戦争がはじまったためモロンを引き払い、一家で帰郷を決めハバナに出たが、乗船できず、モロンに戻ることもできず、しかたなく西のピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移っている。ピナルはイスラと農業環境が似ていたうえ、市場のニューヨークへはイスラよりも距離的に近かったため、戦後は、イスラからピナルに移転する人が多く、それなりに貯えができた農家も多かった。又蔵一家も同様で、そうして、そろそろ帰郷しようとした矢先の革命だった。貨幣価値が変わったためそれまでの銀貨は価値がなくなり、さらに農地改革によって土地所有が制限され、帰郷ができなくなった。又蔵は六六年に死亡したが、長男進、次女美恵子、次男昇、三男浩、三女多美子といっしょに農業を続けている。九八年五月二十二日に死亡。新潟県北蒲原郡川東村板山（新発田市板山）の人。

訪ねたときも、七十も半ばを過ぎているというのに、炎天の畑に出て真っ黒になって野良仕事をしていた。それから三年、一時帰郷が叶い、郷里に二カ月あまり滞在。別れには、八重さんや



井上三代と隣家の今村幸

夫の文吉さんから、そのまま残るよう懇願されたが、振り切ってキューバに戻った。背筋も足腰もしゃんとして、八重さんとは親子であるのに姉妹のように見えた。

村田大蔵

一九三〇年六月三日にハバナに入っている。四十歳だった。呼び寄せだろうが、縁戚がわからない。熊本県菊池郡合志村福原(合志市福原)の人。恵濃元平と同航で、恵濃と同様、イスラにいた同郷の福永元義の誘いがあったのかもしれない。

惠濃元平

海外興業第二十五回移民として、一九三〇年四月十三日に東洋汽船の銀洋丸で神戸を発ち、六月三日にハバナに入っている。四十一歳だった。ただ、海興の募集に乗っただけでトリニダーには入っていない。海興移民も十八回までは毎回二十人前後の応募があったが、就労地での劣悪な状況が先行移民から伝わったのか、応募が少なくなり、たんなる旅行エージェントのようになっていた。このときも惠濃ともう一人、同郷の村田大蔵の二人だけだった。イスラにいた同郷の福永元義の誘いがあったのかもしれない、すぐにイスラに渡っている。収容は第五回で、釈放の翌四七年九月十六日にイスラで死亡している。渡航時の年齢からいつて郷里に妻子を残していただろうから、早くに帰郷するつもりでいたと思う。それを戦争と収容が阻んでいる。熊本県菊池郡合志村福原（合志市福原）の人。

熊倉武次

一九三〇年六月三日にハバナに入っている。十八歳だった。井上又蔵の妻三代や弟の三郎と同郷で同航だったから、最初は井上又蔵といっしょにカマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のモロン（Moron）にいたのかもしれないが詳しくわからない。第六回收容で、釈放後はカマグエイに

いて、八八年五月二十二日に死亡している。新潟県北蒲原郡五十公野村上新保（新発田市上新保）の人。

島本大吉

妻やす（五十六歳）、養子伊太郎（二十六歳）、その妻こぎく（二十一歳）の一家四人で一九三〇年六月三日にハバナに入っている。五十九歳だった。これはキューバ移民のなかではわかるかぎりの最高齢での渡航になる。一家挙げての移民ではなく、郷里には継嗣をきちんと残しているだろう。伊太郎は養子となっているが、俄縁組みではなかったか。キューバも二〇年代後半以降、移民制限がきびしくなり、親子兄弟関係しか入国できなくなっていた。そこまでの渡航だから、キューバには確とした受け入れがあつたはずで、詳しくわからないが、富田義夫か、白野善平の呼び寄せのような気がする。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。大島村出身者はほかに二十六いる。

島本やす

島本大吉の妻で、夫に同行、養子伊太郎（二十六歳）とその妻こぎく（二十一歳）といつしよに一九三〇年六月三日にハバナに入っている。五十六歳だった。その後のことはわからない。

和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。

島本伊太郎

島本大吉の養子で、大吉夫婦に同行、妻こぎく（二十一歳）といっしょに一九三〇年六月三日にハバナに入っている。二十六歳だった。その後のことはわからない。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。大吉とは俄養子だった気がする。

島本こぎく

島本伊太郎の妻で、夫に同行、義父の大吉夫婦といっしょに一九三〇年六月三日にハバナに入っている。二十一歳だった。その後のことはわからない。和歌山県東牟婁郡大島村大島（東牟婁郡串本町大島）の人。

原田ケサノ

兄の中島應親の呼び寄せで一九三〇年にイスラに入り、フィンカ・フカロで農業をしていた原田茂作と結婚。渡航のときの旅券申請には原田の戸籍が記されているから、入籍したうえで渡航だったと思う。十八歳だった。収容中は、十歳を頭に九歳、六歳、二歳の子どもをかか

え、夫に代わって農業を続け、土地と家を守った。独身者はそれができなくて丸裸になり、釈放後はピナル・デル・リオやハバナなどに移転せざるを得なくなるのだが、原田は釈放の日から再開することができた。その後の原田の成功ぶりは原田の項に述べた通りで、まちがいにケサノの働きによるものだったことは仲間のだれもが認めている。鹿児島県始良郡の人。骨太だったが小柄な人で、この人のどこにそんな耐力があつたのか不思議なくらい。にぎやかで底抜けに明るい原田とは対照に、物静かで穏やかな笑顔の人だった。散々お世話になつたのに無沙汰続きで最期を知らない。原田は一九九九年の死亡だが、その数年前に、心臓病だったか、急逝している。

岩崎久雄

たった一人の海外興業第二十六回移民として、一九三〇年五月九日に東洋汽船の平洋丸で神戸を発っているが、ハバナ着の日にちがわからぬ。たぶん七月半ばだろう。四十一歳だった。海興移民に応募したのは呼び寄せ人がいなかったからだろう。最初はカマグエイあたりにいてピナル・デル・リオに移ったのか、最初からピナルに入ったのかわからないが、収容は第六回で、釈放後はコンソラシオン・デル・スールにいた。キューバ婦人と結婚していて、八一年八月十四日に死亡している。熊本県菊池郡泗水村吉富（菊池市泗水町吉富）の人。

杉本ミツギ

杉本嘉一の妻で、一九三〇年に呼び寄せられている。十六歳だった。嘉一は海外興業第十一回移民で、二五年にトリニダーに入っていて、その後はラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のタグアスコ（Taguasco）にいた。嘉一は九四年に、ミツギはその前の七四年十一月十七日に死亡している。熊本県下益城郡年弥村中（下益城郡美里町中）の人。まよ子（Mirta）、勝子、照夫の一男二女がいる。

斎藤弥一郎

斎藤弥久太の甥だと思う。一九三〇年八月二十五日にハバナに入っている。十六歳だった。弥久太は小川移民で、小川農場崩壊後はラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニコのセントラルでコシネロをしていたから、弥一郎も最初はハティボニコにいたのかもしれない。その後、収容前か釈放後にオリエンテ（オルギン）のマヤリ（Mayari）に移っている。収容は第六回。一九九七年だと思うがマヤリで死亡している。新潟県北蒲原郡米倉村米倉（新発田市米倉）の人。

湯中タカ

湯中増二の妻。呼び寄せで一九三〇年八月二十五日にハバナに入っている。三十四歳だった。増二はカマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のモロンにいた。戦後もそのままモロンにいて、増二は六九年に、タカは九〇年七月一日に死亡している。鳥取県西伯郡境港町竹内（境港市竹内町）の人。

山口十寿

山口順蔵の妻で、海外興業第二十四回移民の一人として、一九二九年六月八日に東洋汽船の銀洋丸で神戸を発っているが、ハバナ着の日にちがわからない。二十五歳だった。この回の渡航者はこの人ただ一人で、海興移民として入っているが、実際は夫の呼び寄せだった。この頃にはキューバへの移民はいくら募っても集まらず、海外興業も移民会社とはいえ、渡航手続きを代行してマージンをとる、ただの旅行会社のようになっていた。二四年にはじまった海興移民も、このあと二十五回が二人、二十六回が一人ですべてを終えている。順蔵はカマグエイかハティボニコにいたと思う。順蔵は八三年に、十寿は九四年三月三日にハティボニコで死亡。撥美（Marcelina）、ノブ子、明（Ignacio）の一男二女がいる。熊本県下益城郡豊野村安見（宇

城市豊野町安見の人。

徳永茂

弟の徳永昇の呼び寄せで一九三〇年に入っている。昇は高橋豊作の呼び寄せで、二八年に高橋のいたラス・ビジャス（シエンフェゴス）のタマリンドにいたようだから、茂もいっしょにいただろう。その後、昇は収容され釈放後はイスラに残って暮らしているが、茂は収容以前に帰郷している。熊本県菊池郡此石村流川（菊池市七城町流川）の人。

横見はる

横見毅一の妻で、呼び寄せで一九三〇年に入っている。二十三歳だった。その後、早い時期に毅一はハバナで死亡している。ただ、夫婦ともにどこにいたのかわからず、はるのその後もわからない。戦争前に帰郷していると思う。岡山県上房郡津川村八川（高梁市津川町八川）の人。

下西泰

開田語作の呼び寄せで一九三〇年に入っている。二十四歳だった。開田はカマグエイ（シエゴ・デ・アビラ）のバラグア（Baragua）のセントラルでコシネロをしたあと、カマグエイでエ

ラード販売をしながら野菜づくりをしていたから、それを手伝っていたのだろうか。その後どうしたかわからないが、キューバ経済も不況続きだったから戦争前に帰郷していると思う。広島県佐伯郡八幡村中地（広島市佐伯区八幡）の人。

長嶺松雄

一九三〇年に二十一歳で入っている。収容は第六回だからイスラでなく本島にいたことはたしかだが、釈放後もどうしたか、まったくわからない。革命までに帰郷しているだろう。沖縄県島尻郡糸満町（糸満市糸満）の人。

松田安定

一九三〇年の末か、三一年のはじめにキューバに入っている。松田太良は兄で、その呼び寄せだろう。ラス・ビジャスのシエンフエゴスにいたあとイスラに渡り、ヌエバ・ヘロナでエラードの製造販売をしていた。その後もずっとイスラで暮らしていたと思う。収容は第五回で二階にいた。戦後はサンタ・クララに移り、キューバ婦人と結婚し一女（Teresa）をもうけているが、革命後の六七年頃に単身帰郷している。沖縄県中頭郡与那城村平安座（うるま市与那城平安座）の人。

上原亀三

上原保徳の呼び寄せだろう。一九三一年に入っている。十九歳だった。ラス・ビジャスのシエンフエゴスにいたと思う。前年に兄だろう、亀康も呼び寄せられていて、ともに収容は第六回で四階にいた。釈放後もシエンフエゴスにいて、革命前の五〇年代に帰郷している。沖縄県島尻郡糸満町（糸満市糸満）の人。

竹内憲治

広島県豊田郡北生口村中野（豊田郡瀬戸田町中野）の人。竹原の忠海中学（現、忠海高校）から盛岡高等農林学校（現、岩手大学農学部）を卒業。神戸の郊外で養鶏と園芸を兼ねた農場を友人と共同ではじめた。しかし、意見が合わず、あとを友人に譲ってアメリカに留学するために出発。ニューヨークのコーネル大学に、農林学校の友人の紹介で入学できることになっていたらしい。その途中、一九三一年一月十四日にハバナに立ち寄り、そのまま住みつくことになってしまった。二十七歳だった。蘭に惹かれたからで、知り合いの井口善太郎（兵庫県出身）のもとに身を寄せたというが、その頃、井口はイスラにいて六月に死亡している。そうして、農事試験場や国立図書館に通って蘭研究をはじめた。ハバナ近隣だけでなく、遠くオリエンテのシエ

ラ・マドレにも調べ歩いている。ほんとうは三か月ばかりでニューヨークに向かうつもりだったらしい。ところが、所持金を使い切ったうえに、食あたりで入院。旅費をつくるために働きはじめ、それが日常になって居ついてしまった。ただ、蘭の研究を続けることは捨てられず、アメリカ留学の資金づくりのために花卉栽培をはじめた。キューバでもイスラや西部のピナル・デル・リオは石灰質の砂質土壌で、いくらか花卉栽培に向いていたが、ハバナ周辺は土質が悪かった。そうして適地をさがしているうちに、バラデロのデュボン家から仕事の話が舞い込んできた。六六ナイロンを開発し大財閥にのし上がっていたアメリカのデュボン財閥はバラデロのイカコス (Hicacos) 半島全域を私有して別荘を新築したばかりで、その庭づくりのハルディネロをさがしていたのだった。資金もふんだんに与えられ、竹内にとつては蘭研究の格好の場になった。キューバ産はもちろん、中南米各地から蘭の苗を取り寄せ植え付けている。それが当主によるこぼれ、万事うまくいくかと思えたが、収容が阻んでいる。日本人のプレシディオでの暮らしぶりは、さまざまで、自由もなく栄養不足が続くなかでも多くはけっこう陽気にすごしていた。ただ、竹内の場合は、研究肌だったせいも、仲間と付き合うことも少なく房に籠もることが多かったという。釈放後は、バラデロに戻れなくなり、ハバナで仕事をさがしていたが、ふと入ったバールの経営者が大きな農場を持っていて、いっしょに花づくりをしないかと誘われた。もちろん一つ返事です承。花の栽培と改良研究を続け、五〇年に日本百合の栽培

に成功した。それをホセ・マルティと名付けている。百合はキューバにはなかったから、大量栽培してかなりの利益を上げたらしい。そうした一日、吐血して倒れる。胃潰瘍で、入院が続いて療養費もかかったが小山喬の援助で切り抜けた。その後、ハバナの西のソロア (Sora) の農園に住み込み、また蘭栽培を続けている。農園主のカマツチヨはカナリア諸島出身の蘭好きで、巨額を注ぎ込み、六〇年代には世界でも一二といわれる蘭の収集者になつている。その頃、竹内を慕つて弟子入りしたのがホセイトだった。以後、助手としていつしよに暮らし、日本の菊や百合づくりも習つて、のちにハバナの日本大使館のハルデイネロになつている。だが、革命によつて農園は接収され、カマツチヨはカナリアに帰つていった。その後、農園は植物園のほか、宿泊施設やレストラン、プール、各種遊具を備えて大遊園地になつている。一方、竹内は独自に農場を借り、蘭栽培を続けて、七年後に蘭の無菌栽培に成功している。そうして栽培した第一号分四千本を革命政府に寄付したのだった。それがきっかけでカストロの片腕で補佐官のような存在だったセリア・サンチェスと親しくなり、さまざま便宜を受ける一方、政府の農産物増産計画にも協力している。例えば、葡萄もキューバでは、育つには育つが酸っぱくて食べられなかったのを、サンクティ・スピリトゥスのバナオ (Banao) 高地で甘くて大粒の食用種栽培に成功している。そして人生の最後の仕上げに竹内はかかる。平和な理想郷をつくることで、ソロア近くのシエラ・デ・ロサリオに実現している。もちろんセリアの支援があつて

のことで、セリアにすれば農業政策のプロパガンダでもあったのだろうが、いまはどうなっているか、七〇年代の末には二百家族ほどが入植して暮らしていた。どこか日本の農村風景にも似ていて、郷里の風景に重ねたのかもしれない。それを区切りとしたのか、その後の竹内は研究成果の記録の整理と自分史の執筆に没頭した。それが一九七七年に『花と革命—キューバ革命を生きた日本人園芸家の手記』（学苑社）になっている。二百八十頁そこそこの四六判だが、じつはもともとの原稿はその三、四倍もあつたらしい。原稿は郷里の兄に送られ、大阪の甥の手で出版社に持ち込まれた。ただ、その送付にも竹内は過剰なほどに神経を使つたらしく、内藤五郎を通じて、日本とキューバを行き来する商社員に預けている。検閲を嫌つたからだつた。実際、原稿を日本に送つたあと、家宅捜査が入っている。その巻頭にカストロが推薦文を寄せている。場違いというか、ちよつと異様で、それが竹内の遺志に合つたかどうか、正直、疑問を持つている。読めばすぐにわかる。竹内はキューバを生きたのであつて、革命を生きたのではない。さらに革命を賛美しているのでは毛頭なく、むしろ神経を尖らせている。カストロの一文を巻頭に拝したのはまちがいなく編集者だろう。そして原稿をカットして手を加えているらしいことも同様だろう。ほかでもない、ぼくも編集者として同じことを何度もしてきたからよくわかる。書籍は営業はもちろん編集者の志向と嗜好に左右される。哀しい性で、だから偉業も悪行に変わることもある。そんなことを冥途でどう見ているか、七七年八月三十日に死亡

している。

今村幸

竹内憲治と同航、一九三一年一月十四日にハバナに入っている。二十一歳だった。海外興業第十八回移民の今村鶴喜の呼び寄せではないか。たぶん最初からピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに入って農業をはじめたと思う。ピナルの土壤はイスラと似ていて、三〇年代後半に、不況でイスラの農業がきびしくなるとピナルに移転する日本人が多かった。最初は、気に入った土地を見つけて借地し、四年も耕作すれば雑草の方が多くなって除草剤に費用がかかるので新しい土地をさがして移るといふ移転暮らしを繰り返していた。そうした跡地にキューバ人が入り、乳牛を飼って牧畜をはじめたのだった。日本人は土地を見つけるとすぐに仲間と手助けして井戸を掘り、灌漑設備を整えていたから、荒地地にも牧草が生え、牧畜には最適だったからで、しばらくすると日本人もそれに倣って土地を購入して定着するようになった。野菜づくりのかたわら牧牛もはじめ、なかには乳牛を五十頭、六十頭と飼う者も出はじめている。土地の値段はカバジェロ当たり五百ペソから七百ペソくらいだったらしい。一カバジェロは約十三万平米だから、甲子園球場三個半くらいで、三〇年代のセントラルでの日給は一・五ドル前後だったから、ほぼ一年から一年半の給料にあたる。簡単にいえば二百日足らず



今村一家と内藤五郎（左端）

の給料で甲子園球場一つ分の土地が買えたことになる。安いといえば安い飲まず食わずでの二百日分だから、ふつうの暮らしで、うまくいっても三年前後の貯えが必要だっただろう。今村もかなり広い土地で、牛を飼い、野菜づくりのほかにはピナル特産の煙草づくりもしていた。

訪ねたときも、隣家と数キロも離れての暮らしでびっくりしたが、ピナルではそれもごくふつうのことらしく、ほとんど掘っ立て小屋のような家に一家三代で元気でおられた。その後、二度ばかり便りをしたが、無沙汰続きのうちに亡くなっている。九〇年代末か二〇〇〇年代ははじめではなかったか。熊本県菊池郡蘇川村矢護川（菊池郡大津町矢護川）の人。収容は第六回でプレシディオでは四階にいて、竹内憲治と同房だった。

玉城幸子

玉城賀吉の妻。呼び寄せで一九三一年一月十四日にハバナに入っている。二十八歳だった。賀吉はパナマからの転航で、オリエンテ（サンチアゴ・デ・クーバ）のパルマ・ソリアノ（Palma Soriano）で理髪店を開いていた。幸子は四八年九月二十五日に、賀吉は五〇年に死亡している。沖縄県国頭郡羽地村川上（名護市川上）の人。

玉城賀盛

玉城賀吉の呼び寄せで、賀吉の妻幸子に同行、一九三一年一月十四日にハバナに入っている。十八歳だった。三七年に妻美重を呼び寄せている。収容は第六回で、釈放後から八七年四月二十日の死まで、ずっと、賀吉のいたオリエンテ（サンチアゴ・デ・クーバ）のパルマ・ソリアノ（Palma Soriano）にいた。沖縄県国頭郡羽地村川上（名護市川上）の人。

海野当松

加藤英一の呼び寄せで一九三二年に入っている。三十八歳だった。ハバナの加藤のクリーンク店で働いていたのだろうが、その後、どうしたかわからない。早くに帰郷しているだろう。

和歌山県東牟婁郡大島村須江（東牟婁郡串本町須江）の人。加藤は岐阜の人なのにどういっつながらだったのか。

出羽俊子

出羽勝太郎の妻で、一九三一年に呼び寄せられている。十九歳だった。勝太郎は二五年にキューバに入り、カマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のモロンにいた。そのままずっとモロンにいて、農業をしていたと思う。勝太郎は七七年に、俊子は八一年九月二十六日に死亡している。静岡県庵原郡蒲原町古屋敷（静岡市清水区蒲原）の人。一男久克（Ramon）がモロンにいたと思う。

竹本チカ

竹本徳一の妻で、一九三一年に呼び寄せられている。二十歳だった。徳一は二四年にキューバに入り、カマグエイにいたと思うが、何をしていたのかわからない。徳一は戦後の五八年に死亡しているが、チカは収容前に亡くなっていると思う。広島県安佐郡可部町（広島市安佐北区可部）の人。

赤比地政芳

赤比地龜三の弟。一九三一年に呼び寄せられ、兄のいたイスラのサンタ・フェ地区に入っ
ていっしょに農業をはじめている。二十一歳だった。収容はともに第五回で、釈放後は兄と別れて
サンタ・クララで、石川加那や松田安定らと共同で暮らしていたが、その後ハバナに移つて、
革命前の五〇年代に、兄といっしょだったかどうかかわからないが、帰郷している。沖縄県中頭
郡与那城村平安座（うるま市与那城平安座）の人。

津波古千松

一九三一年にキューバに入っている。呼び寄せだったと思うが、詳しくわからない。ほかに
同村人が六人いる。イスラのマツキンレー (Mackinley) で農業をしていて、三五年に妻マツを
呼び寄せている。収容は第五回で二階にいた。七九年二月十三日に死亡している。沖縄県島尻
郡玉城村奥武（南城市玉城奥武）の人。

安永タケ

安永吉作の妻で、一九三一年に呼び寄せられている。二十六歳だった。吉作はイスラで農業

をしていたと思う。その後のことは、夫婦ともによくわからないが、タケは三〇年代だろう、ごく早い時期にイスラで死亡していて、ハバナの慰霊堂の第二号セルに位牌が残っている。福島県伊達郡桑折町字上町（伊達郡桑折町上町）の人。

内山シボリ

内山進の妻。一九三六年に呼び寄せられてイスラに入っている。二十一歳だった。夫は海外興業移民で、トリニダーを逃亡したあと、イスラに渡ってマッキンレー地区で農業をしていた。日米開戦の半年前に長男進が生まれている。そこに収容がはじまり、不安と乳飲み子をかかえての野良仕事したいへんだったにちがいない。心労続きに精神をやられ、戦後も長く施設で療養生を送っていた。進は六九年に死亡、その後はヌエバ・ヘロナに移ったのか、八八年十二月十九日にヌエバ・ヘロナで亡くなっている。福岡県八女郡黒木村字長野（八女市長野）の人。収容は男だけでない、むしろ女に負担が大きかったのではないか。

糸数稔

糸数宗重の妻。呼び寄せで長女孝を連れて一九三三年九月二十一日にハバナに入っている。十九歳だった。宗重は二七年に妻澄を呼び寄せていたが、三年で先立たれ、その後、シエンフ

エゴスで青果店を開いていた。そして、稔を迎えたあと收容前の四〇年に死亡している。その後、稔はハバナに移り、八二年にお会いしたときは豊饒としておられたが八七年五月七日に亡くなっている。沖縄県国頭郡羽地村田井等（名護市田井等）の人。

糸数孝

糸数宗重と稔の長女で、稔といっしょに一九三三年九月二十一日にハバナに入っている。数カ月の乳飲み子だった。八二年には母の稔といっしょにハバナのビボラ (Vibora) におられたが、その後どうされたか。沖縄県国頭郡羽地村田井等（名護市田井等）の人。

饒平名カメ

饒平名知嗣の妻で、一九三三年九月二十一日にハバナに入っている。三十一歳だった。知嗣は海外興業第十回移民で、二五年にトリニダーに入り、その後はラス・ビジャス (シエンフェゴス) のビオレタ (Violeta) にいた。知嗣は七五年に、カメは八三年十一月十七日に死亡。沖縄県国頭郡本部村浜元 (国頭郡本部町浜元) の人。四〇年に長男知栄を呼び寄せていて、ビオレタでは千代子 (Violeta) とマノロが生まれている。

大沢勇吉

キューバへの日本人移民はこれまでわかるだけで千百四十一人(2020.06.05)。ハワイ、アメリカ、カナダやペルー、ブラジルのそれと比べればわずかだが、その一人一人がどう生きたかを追うとなると天文学的な数字に思える。ただ、調べれば調べるほど、言葉は悪いが、おもしろく、百人百様、いろんな生き方をして、それぞれちがったあしあとを残している。ただ、この人を越える人はほかにいない。謎に包まれた不思議な人である。たしかなことは一九三四年にキューバに入っていること、そして収容はもちろん、七〇年十月十五日にハバナで死亡していることだけで、その行く先々で語り草になる話について回るのだが、生まれも育ちもわからない。三七年に入っているとわかるのは、旧日本海軍の練習船がハバナに寄港したときに、突然、現われて、アメリカの軍人だといって練習船に出入りしていたと伝える人がいるからで、といっても、着ていた軍服は米軍のものでも日本軍のものでもなかった。そんな奇妙な話は日本人ならだれでも一つや二つは知っていた。ただ、それをどうのこうのと非難する者もいなかった。ハバナのベダード(Vedado)街にあったアングロアメリカという病院に出入りし、医者をしていたということもだれも疑っていない。それが、アメリカ人専用の食料品店で支払いが滞って告訴され、裁判になつて、医師免許がないことがわかつた。と思えば、革命直後に、ド



プレシディオの囚人棟

独房が円形に並んでいる、中央は監視塔

ミニカ革命軍がカマグエイのカジヨ・コンフィッテ (Cayo Confite) でゲリラ戦の訓練をしていたが、そこにも姿を見せていたという話もある。収容時には医師として仲間の診療、治療に率先している。だから医師としての腕は確かだっただろうし、神崎章が結核で危篤に陥り、輸血が必要になったときも自ら進んで提供者になっている。神崎のそばに大沢が並んで横になり、自ら仲間に指示をして、大沢から注射器で抜いた血液を神崎にそのまま注射器で移すという荒治療だった。また、プレシディオには中国人が二人収容されていたが、その一人がひどい皮膚病にかかったときも、自ら湯を沸かして硫黄

消毒するなど、あんなに患者に親身な医者を見たことがない、というのがだれもの大沢評だった。野中豊も危なかつた命を救われている。

そして政界でも、戦後、バチスタのクーデターで追われたプリオ・ソカラスとも親しい仲間だった。その関係でハバナ大学から医師の資格をもらっている。かと思えば、カストロ革命の直後は、革命軍の軍服を着て、中尉を名乗っていた。それが、突然の自動車事故で死亡している。七〇年十月十五日のことだった。出会い頭に横から突っ込まれて避けようがなかったらしいが、不思議な事故だった。両親が静岡県出身のアメリカ二世の二重スパイで、収容されたのも最終の第九回で、日本人を監視するためだったという噂もある。そして、堪能だった英語も移民のように田舎臭くなく、都会育ちらしいきれいな英語だったという人もいた。

上野タキノ

上野繁実の妻で、一九三四年に呼び寄せられている。十九歳だった。繁実は海外興業第十一回移民だが、トリニダーには入らず、ハバナにいたと思う。そのまま戦後もハバナにいたが、革命前の五〇年代に夫婦で帰郷している。福岡県八女郡横山村上横山（八女市上陽町上横山）の人。

小橋川カナ

小橋川嘉吉の妻で、一九三四年に呼び寄せられている。二十八歳だった。嘉吉は糸数宗重の呼び寄せで二九年に入っている。その後のことは詳しくわからないが、カماغエイ（シエゴ・デアピラ）のクナグアにいたあと、夫婦で早い時期にキューバを離れている。沖縄県国頭郡羽地村田井等（名護市田井等）の人。

仲宗根幸春

叔父の糸数宗重の呼び寄せで一九三五年一月二十四日にハバナに入っている。十九歳だった。宗重はメキシコからの転航で、カماغエイ（シエゴ・デアピラ）のクナグアにいたあと、ラス・ビジャス（シエンフェゴス）のビオレタで青果店を開いていたからそこで働いていたのかもしれない。第六回収容で、釈放後はカماغエイのセントラル・ベラスコ（Central Verasco）にいたが、その後、ハバナの西のマリアナオに移っている。沖縄県国頭郡羽地村田井等（名護市田井等）の人。

糸数宗信

父糸数宗牛の呼び寄せで、一九三五年一月二十四日にハバナに入っている。十六歳だった。宗牛は仲宗根勝吉の呼び寄せで、妻のナベといっしょに二七年にキューバに入り、仲宗根のいたカマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のモロンにいただろうから、宗信もモロンにいたと思う。収容は第六回で、釈放後はカマグエイのセントラル・ベラスコ（Central Verasco）にいたが、五三年に帰郷している。沖縄県国頭郡羽地村親川（名護市親川）の人。

築井ナミ

築井勇次の妻。一九三五年二月二十一日、夫に呼び寄せられハバナに入っている。十八歳だった。勇次はカマグエイのセントラルで電気技師をしていた。三四年に長男邦安（Yuan）、三八年に長女サチ（Virginia）が生まれている。新潟県北蒲原郡川東村上羽津（新発田市上羽津）の人。八四年だったか、夫婦で一時帰郷され、帰りは狭いぼくらのアパートにも寄ってくださった。まだ小さかった長男を笑顔であやしてくれたのを忘れない。それから何度も手紙のやりとりをしていろいろ教えていただいたが、勇次は九三年に死亡、二年後にあとを追っている。移民というと、出稼ぎ、貧困という言葉がつきまとう。ただ、それがすべてではなかった。ナミ

の旧姓は渋谷、実家は農家だったが、豪農とはいかないまでもかなりの自作農で、立派な屋敷に大きな蔵も備えた代々続く有力農家だった。キューバ移民には、じつはそうした家筋からの渡航者がずいぶんいる。これはキューバに限ったことではなく、ほんとうは戦前移民の多くはそうした渡航者だった。たしかに、現状よりもいい暮らしを求めての出稼ぎにはちがいがなかった。だが、移民には資金がいる。貧困からはけっして海外移民は生まれえない。理屈でなく、ぼくの実感であり、お会いしたキューバの日本人、そのだれにも、見かけでは読み取れない、高貴さといつてもいい、気品が見えた。とくに妻たちがそうだった。ナミさんもたしかなその一人。

宮沢かおる

宮沢松男の妻。呼び寄せで一九三五年三月二十二日にハバナに入っている。十九歳だった。松男はイスラのサンタ・バルバラ地区で農業をしていた。いっしょに畑に出て、松男の収容中も二人の子どもをかかえ、土地と家を守っていた。松男は九八年に死亡、その後、二〇〇〇年代に入ってからだと思いが、かおるも死亡している。広子、清子、大和、昇、良子の二男三女がいる。長野県上伊那郡飯島村田切（上伊那郡飯島町田切）の人。

長谷川ミユキ

榎本移民の一人長谷川謙吉の妻。呼び寄せで一九三五年六月十三日にハバナに入っている。十九歳だった。謙吉はカماغエイにいただろう。戦後、五八年に謙吉が死亡したため、一家でハバナに移っているが、その後、長女がベネズエラに亡命、ミユキも九二年に、ベネズエラだと思うが、亡命している。新潟県北蒲原郡五十公野村五十公野村下村（新発田市五十公野）の人。旧姓は田中。実家は製糸工場を経営していて、小川富一郎の実家とも親しかったらしい。

吉岡吾市

岐阜の人で、一九三五年に呼び寄せられている。吉岡稔の縁戚だと思う。早い時期に帰郷しているだろう。

丸山房枝

丸山政次の妻で、一九三四年に呼び寄せられている。二十歳だった。政次はカماغエイのヌエビタスで理髪店を開いていた。政光（Clemente）、メリーの一男一女がいて、収容中も店を守っていた。政次は七五年に死亡しているが、房枝のその日がわからない。政次よりあとだと

思う。ハバナの慰霊堂の第六十一番セルに政次といっしよに位牌が納められている。熊本県菊池郡菊池村西寺（菊池市西寺）の人。

津波古マツ

津波古千松の妻。一九三五年に呼び寄せられ、二十八歳でイスラに入っている。千代子 (Maria)、喜代子 (Elena)、千代松 (Tomas)、ツル子 (Cristina)、シゲ子 (Mercedes)、代士男、トヨの二男五女がいる。八二年にはお昼をいただいた。いまでもそうだが、沖繩移民のことをよく知らなくてたいした質問もできずに終わっているが、沖繩の家屋をそっくり思わせる風通しのいい家で、庭には屋根を覆わんばかりに大きなバナナの木が二本植わっていた。別れ際にそれを指さし、「これさえあればキューバでは生きていけるの」と笑ったのを忘れない。そんな話をずっとほんとうだと思っていたのが、いまは気恥ずかしい。九八年十二月七日に死亡している。沖繩県島尻郡玉城村奥武（南城市玉城奥武）の人。

香川豊子（光岡）

香川吾一の二女で、一九三五年に義姉マツコ（武茂の妻）、弟茂といっしよに呼び寄せられている。十五歳だった。子どもだから二世だが、日本生まれだから一世にあたり、日本人名簿に

も含めている。戦後、光岡勇と結婚、Giraldo Jorge の二男がいる。広島県安佐郡可部町（広島市安佐北区可部）の人。八二年には元氣にされていたが、どうされたか。

香川マツコ

香川武茂の妻で、一九三五年に義妹豊子、義弟茂といっしょに呼び寄せられている。十八歳だった。ただ、その後、離婚して、戦前に帰郷している。広島県安佐郡可部町（広島市安佐北区可部）の人。

香川茂

香川吾一の次男で、一九三五年に義姉マツコ、姉豊子といっしょに呼び寄せられている。十三歳だった。吾一の子どもだが、キューバでは一世扱いだったから収容も第八回グループで逮捕され、イスラのプレシディオに送られている。戦後はマタンサスのバラデロにいたが、その後どうされたか。広島県安佐郡可部町（広島市安佐北区可部）の人。香川家では、キューバで生きやすいように、と吾一の計らいで一世だった子どもには西名がつけられ、キューバ国籍ももたせていた。茂はホセ (Jose) だった。

饒平名知政

饒平名知嗣の弟で、一九三六年に呼び寄せられている。三十一歳だった。知嗣は海外興業第十回移民で、二五年にキューバに入りトリニダーのあとはラス・ビジャス（シエンフェゴス）のビオレタ（Viola）にいた。知政もいつしよにいただろう。収容は第六回で、釈放後はシエゴ・デ・アピラにいたが、その後のことがわからない。たぶん革命前に帰郷していると思う。沖縄県国頭郡本部村浜元（国頭郡本部町浜元）の人。

森川アヤコ

森川誠一の妻。一九三六年に呼び寄せられ、カマグエイのフロリダに入っている。二十一歳だった。翌年、長男寛（Rogelio）が生まれているが、戦後の五三年に単身、帰郷している。どういう事情があったのか、一家で帰郷するつもりが、とりあえずは妻だけを帰し、誠一はあとを追うつもりだったのが機会を失ってしまったとも考えられる。銀貨で持っていた貯えは革命で価値がなくなり、出るに出入れなくなった日本人はたくさんいる。山口県玖珂郡川下村向今津（岩国市今津町）の人。

上原幸三

父の上原幸一に一九三七年に呼び寄せられている。十六歳だった。幸一は、海外興業第十六回移民で、二六年に入っているが、トリニダダーのあとはどこにいたのかわからないが収容以前に帰郷していると思う。幸三は第二回グループで収容されている。このときは七人だけで、いずれもハバナ以外の地方にいた人で、それなりにめぼしい人物とみられた人だったから、何か商店でも開いていたのではないか。幸一がはじめたのを受け継いでいたのかもしれない。ただ、それも収容で接収されているから、釈放後は丸裸になっていただろう。その後、早い時期に帰郷していると思う。沖縄県島尻郡糸満町（糸満市糸満）の人。

玉城美重

玉城賀盛の妻で、一九三七年に呼び寄せられている。二十四歳だった。賀盛は玉城賀吉に三一年に呼び寄せられ、ずっとオリエンテ（サンチアゴ・デ・クーバ）のパルマ・ソリアノ（Palma Soriano）にいた。賀盛は八七年四月二十日に死亡、その五カ月後の九月十一日に美重もあとを追っている。沖縄県国頭郡羽地村川上（名護市川上）の人。

宮坂けさ野

宮坂寛司の妻。呼び寄せで、一九三八年一月十一日にハバナに入っている。二十五歳だった。寛司は叔父の瀬在藤治のいたカマガグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のハグエヤル（Jaguyal）のセントラルで働いていた。その後、モロンに移り、収容を経て釈放後はハバナで暮らしている。寛司は九七年に死亡、けさ野は二〇〇〇年代だと思いがハバナで亡くなっている。長野県埴科郡埴生村寂蒔（更埴市寂蒔）の人。ここで断わっておくが、結婚女性の場合、旅券申請には夫の戸籍が記されているため、ほんとうの出身地がわからない。そのため、多くは夫の戸籍から「〇〇の人」と記している。逆に、男性でも婿養子の場合と同じことになるだろう。この人の場合も、そうして長野県の人としているが、ほんとうはたしか東京の人だったと思う。

内野キミエ

内野和市の妻で、一九三八年に呼び寄せられている。二十九歳だった。和市は一九年に入っていて、収容は第六回グループだから本島にいたことはたしかだが、詳しくわからない。和市は五四年にカマガグエイで死亡。キミエはどうしたかわからないが、和市の死後、早い時期に帰郷したと思う。福岡県浮羽郡船越村船越（久留米市田主丸町船越）の人

饒平名知栄

饒平名知嗣の長男で、一九四〇年に呼び寄せられている。十五歳だった。知嗣は海外興業第十回移民で、二五年にトリニダーに入ったあと、ラス・ビジャス（シエンフェゴス）のビオレタ（Violeta）にいた。三三年に妻カメを呼び寄せている。収容は父といっしょの第六回グループで、釈放後もビオレタにいたが、七五年の知嗣の死のあと母子ともに帰郷している。沖縄県国頭郡本部村浜元（国頭郡本部町浜元）の人。

岩間千恵

岩間喜一の妻。一九四〇年に呼び寄せられている。十九歳だった。喜一は二七年にキューバに入り、ハバナで理髪店を開いていた。収容は日本人会の役員をしていたため第一回グループでプレシディオに送られている。釈放後もそのまま理髪店を続けていたが、革命の接収ですべてをなくし、六五年に一家でアメリカに亡命している。宮城県柴田郡槻木町字船迫飯又坂（柴田郡柴田町船迫飯又坂）の人。

武田ミヤコ

武田義人の妻。一九四一年に呼び寄せられている。義人は海外興業第三回移民で、二四年にト
リニダーに入り、その後はカماغエイだろうか、本島の地方にいたが、釈放後はハバナに移つ
てハルデイネロをしていた。ともに革命前に帰郷していると思う。広島県高田郡三田村（広島
市安佐北区白木町三田）の人。

宮坂朱実

香川県の人だが、入った年も含めてまったくわからない。

高柳藤磨

福岡県の人で、ハバナの南、カリブ側のバタバノでごく早い時期に死亡していること以外、
何もわからない。ハバナの慰霊堂の第二号セルに位牌が納められている。北崎政次郎と関係が
あるかもしれない。

岡本藤太郎

大陸殖民第八回メキシコ移民で、一九〇六年に南部ベラクルス州のオアハケニヤに入っている。三十歳だった。キューバへはいつ入ったのかわからないが、一五年前後ではないかと思う。早い時期にシエンフエゴスで死亡していること以外、何をしていたのかもわからない。オアハケニヤでは小川富一郎や高橋豊作といっしょだったのではないかと思う。ハバナの慰霊堂の第二号セルに位牌が納められている。熊本県菊池郡西合志村（合志市）の人。

若山某

岡本藤太郎と同じ熊本県の人で、シエンフエゴスで死亡していること以外、名前もわからないし、ほかに若山姓もない。高橋豊作と関係があるかもしれない。

小林栄治

高知県の人で、ラス・ビジャス（シエンフエゴス）のオルキタスで死亡していて、慰霊堂の第二号セルに位牌が残っている。それ以外何もわからない。ほかに小林姓は七人いるが、高知県はこの人だけ。メキシコからの転航者かもしれない。

半崎乙蔵

和歌山県の人で、ごく早い時期にシエンフエゴスで死亡している。慰霊堂の第二号セルに位牌が納められている。キューバ日系人慰霊堂は仲間の浄財を集めて、六四年の暮れに完工している。その設計図が手元にあつて、間口四、奥行き五メートル、地下一階三・一メートル、地上二階八・三五メートル。キューバらしいすべて大理石を使った四角な建物で、内部は中央に地下から二階まで螺旋状に階段があつて、周囲の壁に納骨房（セル）が埋め込まれている。その数は、地階は四辺に八房ずつ上下十段、一階は前後二辺に八、左右二辺に六房ずつ上下七段、二階は前後二辺に八、左右二辺に六房ずつ上下九段あり、総数は理論上は七百六十八房になるが、入口部分などは除かれるため、地階二百七十五、一・二階合わせて四百四十九の計七百二十四房が設えられている。その一つ一つに基本的に一家族の遺骨あるいは位牌が納められるわけだが、第一号と第二号セルには、建設当時に、キューバ各地の無縁墓地に葬られていた人の位牌が合葬するかたちで納められている。合わせて七十九位、三十年代や五〇年代に亡くなった名の知れた人のそれもあるが、ほとんどは縁戚のわからない人たちで、この半崎も半崎姓はほかになく、戸籍の地番もわからないため縁戚の類推のしようもない。

岸本某

和歌山県の人で、ごく早い時期にカマグエイ(シエゴ・デ・アビラ)のシエゴ・デ・アビラで死亡している。名前もわからない。岸本源太郎という人が一九〇六年に熊本移民合資のメキシコ移民として北部コアウイラ州のラス・エスペランサスに、岸本常吉と岸本杉松(ともに日高郡湯川村)という人が一九〇七年に大陸殖民のメキシコ移民として一九〇七年にオアハケニャ(契約ではコリマ)に入っているが、このいずれかではないかと思う。

比嘉敬蔵

沖縄県の人で、カマグエイ(シエゴ・デ・アビラ)のシエゴ・デ・アビラで死亡している。慰霊堂の第七号セルに位牌が納められている。比嘉吉村、比嘉吉次郎の兄弟か縁戚だと思う。

富松辰造

福岡県の人で、ラス・ビジャス(シエンフエゴス)のクマナヤグア(Cumanayagua)で死亡している。慰霊堂の第二号セルに位牌がある。富松姓はこの人しかいなくて、クマナヤグアにいたという人もほかに知らない。

中原藤次郎

福岡県の人で、カマガエイ（シエゴ・デ・アビラ）のシエゴ・デ・アビラで死亡している。第七号セルに位牌がある。中原姓にはもう一人、中原守がいるが、熊本の人だから縁戚ではないだろう。

笹尾金吾

神奈川県の人で、一九二一年にカマガエイ（シエゴ・デ・アビラ）のシエゴ・デ・アビラで死亡している、第七号セルに位牌がある。笹尾姓はこの人だけ。

松村静雄

静岡県の人で、カマガエイ（シエゴ・デ・アビラ）のシエゴ・デ・アビラで死亡している、第七号セルに位牌が残っている。松村金太郎の次男か、縁戚ではないか。

高橋祥太郎

東洋移民合資のメキシコ移民で、一九〇七年五月十八日に神戸を発ち、北部コアウイラ州の

ラス・エスペランサスに入っている。十八歳だった。キューバにはいつ転航したかはわからないが、十五、六年から二〇年にかけての頃だろう。ラス・ビジャス（サンクテイ・スピリトゥス）のハティボニコにいて、二四年に妻キワを呼び寄せている。一女ルカがいたが、祥太郎もルカも日にちは不明だが、早い時期にハティボニコで死亡している。大分県下毛郡小楠村一ツ松（中津市一ツ松）の人。ルカはキワの子ではなく、メキシコで生まれていると思う。だから二世だが、キューバでは一世になるから日本人名簿に含めている。キワは、その後、原田（甘利か）と再婚している。

高橋ルカ

高橋祥太郎の長女。メキシコ生まれで、父に連れられキューバに入ったのではないか。早い時期にハティボニコで死亡していて、父といっしょにハバナの慰霊堂の第七号セルに位牌が納められている。母はメキシコ人かもしれない。下毛郡小楠村一ツ松（中津市一ツ松）の人。

小松準妻

小松準の夫人で、呼び寄せだったのかどうか、一九一五年前後にキューバに入り、カマグエイ（シエゴ・デ・アビラ）のシエゴ・デ・アビラにいたが、一八年に死亡している。長野県の人。

第二号セルに位牌が残っているが、名前がわからない。

山口徳江

山口県玖珂郡柳井町（柳井市）の人（女性）だが、それ以外、いつ、どこで亡くなったのかもわからない。山口姓はほかに三人いるが、山口県の人ではない。もし夫婦で入っていたなら、もう一人キューバ移民が増えることになる。

三枝兵蔵

鳥取県東伯郡泊村字泊（東伯郡湯梨浜町泊）の人。いつ入ったのかわからないが、一九二三年に二十四歳でパナマ経由で帰郷している。三枝姓はこの人だけ。

津田喜太郎

熊本県下益城郡東砥用村川越（下益城郡美里町川越）の人だが、いつ入ったのかわからない。どこか資産家で執事かコシネロをしていたのではないか、一九二三年に主人に同伴してアメリカに渡航している。津田姓はほかにいない。ドラマのあった人だと感じるが、記せないのが残念だ。

日森平蔵

いつ入ったのかわからないが、一九二三年にパナマ経由で帰郷している。熊本県下益城郡東砥用村（下益城郡美里町）の人。

木村光太郎

福岡県筑紫郡太宰府町大字内山（太宰府市内山）の人で、一八九〇年生まれ。二十五歳でペルーに渡り、砂糖耕地で三年間働いたあと、アメリカ密入を目的にメキシコに移ったが、一九一六年頃にキューバに入っている。その後、二三年に一時帰郷。さらにメキシコに再渡航し、バハ・カリフォルニアで棉作をしていた。エンセナダではなかったかと思う。

朝戸松彦

いつ入ったのかわからないが、一九二三年にパナマ経由で帰郷している。鹿児島県大島郡和泊村大字後蘭（大島郡和泊町後蘭）の人。

原田静子

原田曾次郎の妻。曾次郎は一九一六年にメキシコから転航しているが、いっしょに入ったのか、その後、呼び寄せられたのかわからない。一九二六年にハテイボニコで死亡している。大分県の人。

吉岡寅吉

福岡県の人で、慰霊堂の第七号セルに位牌が納められていること以外何もわからない。吉岡姓はほかに三人いるが、福岡県はこの人だけ。

谷久太郎

岐阜県の人で、カマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のモロンで死亡していることしかわからない。谷姓は和歌山県にもう一人いるだけ。

塩谷甚蔵

鳥取県の人で、カマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のバラグアで死亡している。塩谷姓はほか

にいない。

福迫義

鹿児島県の人で、一九二六年にカマガグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のバラグアで死亡している。福迫姓はほかにいない。

大平忠男

大平慶太郎の長男。日本で生まれ、祖父母のもとで育ち、三〇年代だろうと思うが、呼び寄せてキューバに入り、ハバナの父の日本商店を手伝っていた。しかし、不況続きで業績が思わしくなく、日米戦争がはじまる少し前に、慶太郎夫婦は、忠男と、キューバで生まれた次男麟三にあとを託して帰郷。しばらく二人で店を続けたが、ともに戦時収容で一九四一年十二月十二日に逮捕され、第一回収容者として翌年四月十六日にイスラのプレシディオに収容されている。当時、大平商店は日本人の店舗では榊原商店と並んで一番大きく、商品の輸入など日本とのつながりが深かったことから重要人物と見られたのだろう。ただ、忠男は一年足らずで釈放され、四三年八月二十二日にハバナを出て、ニューヨークからの第二次交換船で日本に戻っている。日本外務省が後押ししていたと思う。横浜到着の日はわからないが、四四年二月十二



右端が大平忠男、中央の幼児が麟三

日に外務省に出向いて、収容のようすを伝えている。長野県飯田の人。

大平トヨエ

大平忠男の夫人だと思う。キューバに入った日も、その後のこともわからないが、忠男といっしょに交換船で帰郷しているのではないか。長野県の人。

緒方久雄

いつキューバに入ったのかはわからないが、一九三〇年に実施された理髪師資格試験の受験者リストに名前が残っていて、オリエンテ（オルギン）のカコクン（Cacocum）で理髪店を開いていたことがわかってい。不合格で営業できなくなったのではないか。収容以前に帰郷していると思う。熊本県の人。緒方甚吉か、緒方佐久義の呼び寄せかもしれない。

上原某

沖繩の人で、いつ入ったのか、名前もわからない。沖繩の人で上原姓はほかに十四人いるが、いずれかの呼び寄せだと思う。

桃原哲

いつ入ったのか、出身県もわからないが、沖繩の人だと思う。東洋移民合資のメキシコ移民で北部コアウイラ州のラス・エスペランサスに入っている人が何人かいるが、その一人だと思う。一五年から二〇年前後の転航だろう。

吉田鼎

兵庫県の人で、いつ入ったのかわからないが、ハバナで死亡している。慰霊堂の第一号セルに位牌が納められているからごく早い時期の死亡だろう。吉田姓はほかに四人いるが、兵庫県はこの人だけ。

上中宇作

広島県の人で、ハバナで死亡している。上中二三の縁戚かもしれない。第二号セルに位牌が残っている。

片山恂逸

山口県の人で、ラス・ビジャス（ビジャ・クララ）のサグア・ラ・グランデで死亡している。片山姓はほかにいない。

手柴光次郎

福島県の人。日にちはわからないが、ラス・ビジャス（シエンフエゴス）のシエゴ・モンテロ（Ciego Montero）で死亡している。手柴姓はほかにいない。

横山某

いつ入ったか、名前も出身地もわからない。横山姓はほかに三人いて、すべて新潟県笹岡村の同郷人。このいずれかの縁戚ではないかと思うが、メキシコからの転航者の可能性もある。

中本某

いつ入ったか、名前も出身地もわからない。中本秀雄の縁戚かもしれないが、メキシコからの転航者の可能性もある。

城下初太郎

熊本県の人。いつ入ったかはわからないが、三〇年に実施された理髪師資格試験の受験者リストに載っているのです、三〇年にはカマガエイのベルティエンテス (Vertientes) で理髪店を開いていたのだろう。そのベルティエンテスで死亡していて、慰霊堂の第八号セルに位牌が残っている。城下姓はほかにいない。

松本実之助

山口県の人で、一九一七年にオリエンテ (オルギン) のマルカネ (Marcane) で死亡している。松本姓はほかに七人いるが、山口県はこの人だけ。第八号セルに位牌がある。メキシコからの転航者ではないかと思う。縁戚がオアハケニヤにいた可能性がある。

山城善太郎

沖縄県の人で、オリエンテ（オルギン）のクペイ（Cupéy）で死亡している。沖縄県出身で山城姓はほかに四人いるが、関係がわからない。

木下藤吉

長崎県の人で、ラス・ビジャスのサンクティ・スピリトゥスで死亡していて、慰霊堂の第八号セルに位牌が納められている。木下姓はほかに二人いるが、長崎県はこの人だけ。

草西幸十

大陸殖民第八回メキシコ移民の一人で、一九〇六年十月二十五日に川崎汽船の第二琴平丸で神戸を発ち、十二月七日にメキシコのサリナ・クルスに上陸、オアハケニヤ耕地に入っている。二十歳だった。その後のことは『峠の文化史』に詳しく書いた。草西はそれからどうしたかわからないが、早くても一九一二、三年、たぶん一五年頃だと思うがキューバに入ったのだろう。一六年にオリエンテ（オルギン）のマルカネ（Marcane）で死亡していて、慰霊堂の第八号セルに位牌が納められている。熊本県八代郡栗木村（八代市泉町栗木）の人。草西姓はほかにい

ない。

林春吉

福岡県の人で、ハバナで死亡していること以外まったくわからない。慰霊堂の第二号セルに位牌がある。福岡の人で林姓はほかにいない。

中村ルツ

東京府の人で、ごく早い時期にハバナで死亡している。第二号セルに位牌がある。中村直八の関係者かもしれない。

伊東治子

鹿児島県の人で、ハバナで死亡している。ごく早い時期だろう、第一号セルに位牌がある。伊東進と関係があるかもしれない。

鬼塚某妻

いつキューバに入ったかわからないが、夫は一九二〇年代半ばにはラス・ビジャス（シエン

フエゴス)のピオレタで菓子店を開いていた。三六年に二人の子どもといっしょに夫婦で帰郷している。福岡県の人だが、ともに名前がわからない。メキシコからの転航の可能性が高い。

下村ハル

下村与次の妻で、与次の弟三太郎といっしょに一九二六年八月二十日にハバナに入っている。二十二歳だった。与次は小川移民で、一六年にコンスタンシアに入り、その後はシエンフエゴスでエラード(アイスクリーム)販売をしたあと、農業をしていた。長男義雄が生まれているが、幼いうちに死亡していると思う。与次は八一年にシエンフエゴスで死亡しているが、ハルはどうしたかわからない。キューバで死亡した形跡がないから戦争前に帰郷したのではない。新潟県北蒲原郡中浦村荒町(新発田市荒町)の人。

小川親

榊原利一の呼び寄せで、一九二七年に入っている。十七歳だった。最初はハバナの榊原商店で働いていただろう。収容は第六回で、釈放後だと思いが、ピナル・デル・リオのセントラル・オロスコ(Orosco)に移っている。二〇〇三年だったかに死亡している。熊本県菊池郡泗水村豊水(菊池市泗水町豊水)の人。

浜田ツマ

浜田貞一の妻。一九二七年六月二十二日にハバナに入っている。四十四歳だった。貞一は海外興業第十八回移民で、二六年にキューバに入り、トリニダーのあとはピナル・デル・リオのコンソラシオン・デル・スールに移つて農業をしていたと思う。ツマは三九年十一月二十三日に死亡。貞一はその後、帰郷したのではないか。広島県安佐郡亀山村大毛寺（広島市安佐北区可部町大毛寺）の人。

長瀬一枝

長瀬泰雄の妻。夫に同行、一九二八年三月二日にハバナに入っている。まだ十六歳だった。長瀬はサンタ・クララにいたが、不況で仕事がなくハバナに移り資産家宅に入り長瀬はハルディネロを、一枝は家事手伝いをしていた。戦後もそのまま資産家宅で働いていたが、その後、アパート経営をして暮らしている。一枝は八〇年三月三十日に癌で死亡。長瀬はそれを看送り、四カ月後に帰郷している。和歌山県西牟婁郡周参見（西牟婁郡すさみ町周参見）の人。慰霊堂の第四百六十九号セルに遺骨が納められている。どういふ馴れ初めだったのか、長瀬より一周年下で、だれもが認める鴛鴦夫婦だった。子どものようにかわいい仕草なのに物事に動じない

人だったらしく、そんな性格はここにそのまま表われている。

杉田義男

一九三〇年に開田語作の呼び寄せで、同村の下西泰と同航、キューバに入っている。二十三歳だった。開田はカマグエイ（シエゴ・デ・アピラ）のバラグア（Baragua）のセントラルでコシネロをしたあと、カマグエイでエラード販売をしながら野菜づくりをしていたから、杉田も最初はそれを手伝っていたのだろう。戦後はサンタ・クララで岡田勘右衛門のもとに寓居している、六五年二月二十一日に同地で死亡している。収容は第六回グループだった。杉田は収容されていないから、収容前に帰郷していると思う。広島県佐伯郡八幡村中地（広島市佐伯区八幡）の人。

森田清

熊本県の人で、ごく早い時期にハバナで死亡している。慰霊堂の第一号セルに位牌が納められている。森田姓はもう一人いるが高知県の人。メキシコからの転航者ではないか。

川瀬某

長崎県の人で、ごく早い時期にハバナで死亡していること以外、名前も、いつ入ったのかもわからない。第一号セルに位牌がある。

木場喜一

和歌山県の人で、早い時期にハバナで死亡している。第二号セルに位牌がある。木場姓はほかにいない。

佐伯逸次郎

広島県の人というだけで、いつ入ったのか、キューバで死亡しているのかどうかもわからない。佐伯姓もほかにいない。

安村キシノ

女性というだけで、出身県もわからない。安村姓もほかにいない。ただ、「キューバ日系人死亡者名簿」には、一九一七年にオリエンテ（オルギン）のマルカネ（Marcane）で、名前がわか

らないが、「安丸夫人」が死亡していると記録されている。これは想像に過ぎるかも知れないが、この二人は同一人物のような気がする。とすれば、リストの日本人の総数も一つ減ることになる。

杉山義三郎

出身県はわからないが、カマグエイ（シエゴ・デ・アビラ）のモロンで死亡していて、慰霊堂の第七号セルに位牌がある。ただ、杉山儀三郎という人が東洋移民合資のメキシコ移民で、一九〇七年に北部コアウイラ州のラス・エスペランサスに鉱夫として入っている。「義」と「儀」がちがうが、記録の書き違いということもある。岐阜県羽島郡上羽栗村字平島（羽島郡岐南町平島）の人で、同一人物かどうか。ぼくは可能性が高いと思っている。戦前史料を手繰っているところ番地や氏名の書き違いによく出会う。

山川一三

いつ入ったのかはわからないが、一九二五年にカマグエイ（シエゴ・デ・アビラ）のバラグアで死亡している。静岡県の人。島崎新平は甥にあたる。

大橋常次郎

滋賀県の人で、ごく早い時期にハバナで死亡している。大橋姓では大橋忠太郎がいるが、滋賀県の人ではほかにいない。第二号セルに位牌がある。

吉村諭吉

いつ入ったのかわからないが、オリエンテ(オルギン)のセントラル・タカホ(Central Tacajo)にいたのではないか。第六回収容で、釈放後もタカホにいて、革命前の五〇年代に帰郷している。山口県の人。

清水某

ラス・ビジャス(サンクティ・スピリトゥス)のハティボニコでハルデイネロをしていた。ごく初期にキューバに入っている。どこの人かわからないが、清水幸吉か、清水梅吉の縁戚かもしれない。そしてメキシコからの転航の可能性もある。

松原久治

一九二一年九月にハバナに入っている。榊原利一の呼び寄せだろう。ハバナの榊原商店で働いていたが、四年後の二八年に帰郷している。それ以外、出身県もわからない。

深沢国太郎

一九二〇年にメキシコから転航している。たぶん妻シマも同行していただろう。メキシコではチアパスのソコヌスコにいたかもしれない。ラス・ビジャス（シエンフェゴス）のビオレタで、香川吾一のもとで野菜づくりをはじめ、シマは菓子店を開いて、夫がつくる野菜もいっしょに売っていた。その後、鬼塚某に店舗を譲渡して二五年十二月に夫婦で帰郷している。静岡県庵原郡蒲原町蒲原（静岡市清水区蒲原）の人。山島庄吉はシマの弟。

深沢シマ

深沢国太郎の妻。山島庄吉の姉。一九二〇年三月に夫といっしょにメキシコから入っていると思う。ラス・ビジャス（シエンフェゴス）のビオレタで、菓子店を開いて、夫がつくる野菜を売っていたが、二五年十二月に夫婦で帰郷している。静岡県庵原郡蒲原町蒲原（静岡市清水区蒲

原)の人。

鬼塚某

いつキューバに入ったかはわからないが、一九二〇年代半ばにはラス・ビジャス(シエンフエゴス)のビオレタにいて、深沢国太郎から菓子店舗を購入している。その後もビオレタにいただろうが、三六年に妻と二人の子どもといっしょに帰郷している。福岡県の人だが、夫人とともに名前がわからない。メキシコからの転航者ではないか。

清水某妻

夫がラス・ビジャス(サンクテイ・スピリトゥス)のハティボニコでハルデイネロをしていたこと以外、いつ入ったのか、名前も出身府県もわからない。

大平麟三

大平慶太郎の次男で、キューバ生まれの二世。慶太郎はハバナ旧市街(Habana Vieja)のオビスポ(Obispo)街とビジェガス(Villagas)街の交差点北東角に竹細工店を開いていた。しかし、一九三〇年を境に砂糖価格の下落でキューバ経済が悪化、さらにアメリカの干渉でキュー

バ政府がすべての輸入品に百パーセントの関税を課すようになったため商店経営がきびしくなり、多額の負債を抱えたまま、大平は体を悪くし、日米戦争がはじまる少し前に、長男忠男と麟三にあとを託し、夫人といっしょにキューバを去っている。二人はその後も店を続けたが、ともに戦時収容で四一年十二月十二日に逮捕され、第一回収容で翌四二年四月十六日にイスラのプレシディオに送られている。ただ、忠男は一年足らずで釈放され、四三年の第二次交換船で日本に戻った。麟三は釈放後も店を続けていたが、革命で店舗を接収され、六六年にアメリカに亡命している。

小川武

小川喜一の長男。一九一八年頃の生まれだと思ふ。コンスタンシアの小川農場が崩壊したあと、喜一夫婦はシエンフエゴスで、富一郎の妻秀野一家といっしょに日本商品を開いていたが、輸入商品が船舶火災に遭い保険をかけていなかったために負債を抱えて破産、ハバナに移って暮らしていた。だが、三八年に秀野が、翌三九年に富美が死亡、太郎もパナマの日本公使館に職を得てキューバを出たため、喜一家だけになり、喜一は事故で手が不自由だったため武(Angel)と妹の英子(Eva)が弁護士事務所働いて家計を支えていた。戦時収容では二世だったにもかかわらず喜一とともにイスラに収容され、エバも同様、ハバナ西郊のカンブレ

へラに収容されている。釈放後は五七年に、スペイン語の速記者として国連に採用されてアメリカに出国。六八年に父母と英子を呼び寄せている。妻は中野新蔵の二女。

上田綾子

日野忠造の長女。忠造は一九〇六年に大陸殖民第八回メキシコ移民でベラクルス州のオアハケニヤ耕地に入っていて、その後、一六年に妻モモヨと娘の綾子を連れてキューバに転航している。詳しくいえば、綾子はモモヨの先夫との間に生まれた子どもで、Ana Maria と西名もあり、本来なら一世にあたるが、日本国籍を取っていなかったのだろう、日本人の間では二世扱いになっている。三〇年前後だろう、上田唯次と結婚。その後、忠造夫婦は、キューバで生まれた弟と妹を連れて三一年に帰郷したが、綾子は上田といっしょにそのまま残った。上田は収容を経て五三年に死亡。綾子は八二年にはハバナにおいて、夕飯に誘ってくださって、いろいろむかしを教えてくれた。小柄で気品のある理知的な人だった。一男正敏 (Roberto) がいる。

小川富美

小川富一郎の長女で二世にあたる。一九一七年十月二十九日生まれ。富一郎はその年の夏にはキューバを離れているから父を知らない。富一郎の死後、妻の秀野は長男太郎と富美を連れ、

シエンフエゴスで日本商品の雑貨店を開いていたが、発注商品を積んだ船が火災に遭い、保険をかけていなかったため負債を抱えて破産。ハバナに移ってつましく暮らしていたが、三八年に肺結核で死亡。翌三九年八月二十三日に富美も盲腸手術の手遅れであとを追っている。

小川英子

小川喜一の長女で、一九二〇年過ぎの生まれだと思う。小川農場崩壊のあと、喜一夫婦はシエンフエゴスで、富一郎の妻秀野一家（秀野、太郎、富美）といっしょに暮らして日本商品を経営していたが、商店は負債を抱えて破産したため、ハバナに移っている。しかし、三八年に秀野が、三九年に富美が死亡、その後、太郎はパナマの日本公使館に就職したため、喜一一家だけになり、喜一は事故で手が不自由だったため兄の武（Angel）といっしょに弁護士事務所働いて家計を助けていた。戦時収容では喜一のほかに武と英子も二世だったにもかかわらず、武は喜一といっしょにイスラに、英子はハバナ西郊のカンブレヘラに収容されている。ここは特別な施設ではなくて、一般家屋を使っていたようで、ほかにドイツ婦人十一人もいっしょに収容されていた。釈放後は五七年に、武がスペイン語の速記者として国連に採用されてアメリカに出国。喜一はハバナの日本大使館で働いていたが、六八年に妻ミヨセと英子といっしょにアメリカに亡命している。

小川太郎

小川富一郎の長男で、一九一五年二月八日にメキシコのオアハケニヤで生まれている。富一郎は同月か翌月にキューバに渡っているが、妻の秀野は、郷里に戻って太郎のお披露目をすませたあと、翌年、太郎を胸に富一郎のいたコンスタンシアに入っている。帰郷は夫に代わって、コンスタンシアへの移民を募るためだった。その後の詳しいことは、富一郎や秀野の項にゆずるとして、ハバナで富一郎の従兄弟の小川喜一家と助け合って、母と妹の富美といっしょに暮らしていたが、三八年に秀野が、三九年に富美が死亡、一人になったため、富一郎の仲間の支援でパナマの日本公使館に職を得て四〇年にキューバを離れている。ところが翌年には日米戦争がはじまり、戦時収容で、バルボアだったと思うが、一時収容されたあとアメリカに送られ、日米人質交換プログラムの交換船で東京に送還されている。東京では、日本政府が三九年十二月に東京の中野に中南米の日系二世を集めて、諜報員養成機関としてつくった蔽之館に入りしていた。そんな関係か、戦後は占領軍の通訳として青森の三沢基地にいたが、その間のこととは、遠回しにいくら訊いても、小さく笑って話を振った。その点、謎の人でもあった。晩年は国立において、横田基地で米軍相手の小間物店を開いていた。教えてくれたのは内藤さんだった。「小川さんのことなら、息子のパンチョ（太郎）が東京にいるよ、たしか……」と机の引き



左から太郎、武、富美

出しからアドレス帳をさぐってくれた。八二年ハバナでのことだった。そのメモを頼りに国立を訪ねたのが事のはじまりだった。

当事者だから当然だが、それだけではないだろう、この人の情報力はすごかった。おかげで痒いところまで手が届いてずいぶんすつきりした。森電三をはじめ当時の軍関係の縁故者にもずいぶん紹介された。記憶というのは一つ思い当たると芋蔓のように手繰り出せるものなのか、「ゆうべ、また思い出したよ」と電話がかかって訪ねたり、庭の芍薬がきれいに咲いたからといっては昼食に呼んでくれたり、我が子のように接してくれたのを忘れない。二〇〇三年一月三十日に死亡。正しくいえばメキシコの人で、そんないろんな人に出会わせてくれるのが移民史の醍醐味でもある。

る。

今井某

一九二〇年頃に入っていて、ラス・ビジャス（サンクティ・スピリトゥス）のハティボニコのセントラルで三年ほど働いていたが、三千ドルのロテリア（宝くじ）を引き当て、そのまま帰郷した。名前はわからないが、広島県の人。

安永吉作

この人の存在はずつとわからなくて「名簿」にも洩れていた。いつキューバに入ったのか不明だが、二六年に弟の忠吉、三一年に妻タケを呼び寄せている。そのタケはイスラで死亡しているのがわかってから、吉作もイスラにいたのだろう。収容以前に帰郷していると思う。福島県伊達郡桑折町字上町（伊達郡桑折町上町）の人。

樽本十寸水

一九二八年五月六日に、再渡航で妻のツルといっしょにハバナに入っているとと思う。四十四歳だった。断定できないのは、兵庫県庁へは妻同行再渡航と申請しているのに、ハバナでの入管

リストに記録が見られないからで、途上、死亡したのか、何があったのか、このときの入国は確認できないが、再渡航はたしかなので、それ以前に入国しているということだから「名簿」には加えている。ただ、ともにその後のことがわからない。長崎県南松浦郡富江町富江郷（五島市富江町富江）の人。

藤本土郎

甲賀春登がこの人の呼び寄せで、一九二八年九月十五日にハバナに入っている。兵庫県庁への同年七月十八日付の旅券申請にも藤本の名前が明記されているから、キューバにいたと思うが、出身県も、入った期日もわからない。

比嘉吉助

いつキューバに入ったのかわからないが、一九一八年に次男の吉村を呼び寄せている。どこで何をしていたのか、その後、二二年までに帰郷していると思う。沖縄県国頭郡名護村名護（名護市名護）の人。

安丸夫人

いつキューバに入ったのかよくわからないが、一九一七年にオリエンテ（オルギン）のマルカネ（Marcane）が死亡していて、ハバナの慰霊堂の第八号セルに位牌が納められている。ただ、安丸ヨシノが二〇年に夫金蔵の呼び寄せでキューバに入っていることから考えると、この「夫人」は金蔵の先妻で、ヨシノは後妻として呼び寄せられたのではないかと思うが、なんともいえない。福岡県の人。

安丸金蔵

いつキューバに入ったのかわからないが、一九二〇年に妻ヨシノを呼び寄せている。福岡県の人。

吉永政八

熊本県の人ではないかと思うが、いつ入ったのか、どこにいたのか、まったくわからない。宮本英一がこの人に呼び寄せられていることが旅券申請の記述からわかつていて、メキシコからの転航者ではないだろうか。

島袋常成

大陸殖民第八回メキシコ移民で一九〇六年十月二十五日に神戸を発ち、南部ベラクルス州のオアハケニヤに入っている。その後、キューバに転航し、二二年頃にメキシコに戻っている。沖縄県那覇区泉崎町（那覇市泉崎）の人。

宮崎仁一

一九一八年にメキシコに入っていて、翌一九九年にキューバに転航している。その後、場所はわからないが、五年ほどセントラルで働いて貯えたあと、メキシコに戻りベラクルス州のプルト・メヒコ（コアツァコアルコス）で雑貨店を開いた。しかし、強盗に遭って負傷、二四年にメヒコ州のトルーカに移って再開している。埼玉県の人。

川嶋広三郎

キューバに行くつもりで一九一九年にメキシコのサリナ・クルスに入ったが資金が足りず、オアハケニヤやミナチトランに日本人を頼って仕事をさがし、貯えができたところでキューバに転航している。それが一九年だったか、二〇年だったかがわからない。イスラに渡りカナダ

人が経営していたグレープフルーツ農園で二年間働いたが、キューバ経済も思わしくなくなつたため、メキシコに戻り、チアパスの榎本殖民地に入った。その後、医師になろうと日本に戻り、大阪の済生会病院で医師の見習いをしたあと、二六年にメキシコに再渡航。ゲレロ州のイグアラで薬店を開いていた。滋賀県の人。

小松準

大陸殖民第九回メキシコ移民で、一九〇六年十二月十日に横浜を発ちオアハケニヤ（契約ではコリマ）に入っているが、いくらもしないで逃亡して、キューバに渡っている。そして六年ほどいたようだが、メキシコに戻り、サリナ・クルスやプエルト・メヒコ、オリサバを転々として商店を開いたあと、また、キューバに渡っている。一四、五年だと思ふ。カマグエイ（シエゴ・デ・アビラ）のシエゴ・デ・アビラにいたのではないか。夫人はこのときに呼び寄せたのか、それともメキシコからいっしょに入ったのかわからないが、夫人は一八年に死亡している。その後、二〇年前後ではないか、またメキシコに戻り、雑貨店を開いたりして、老後はクエルナバカで暮らしていた。長野県北佐久郡施村（佐久市布施）の人。名前は「隼人」かもしれない。

目次

阿波根昌鴻、阿部耕作、阿部和蔵、芦部安夫、芦部猪之吉、綾田幸次郎、安井庄太郎、安井卓蔵、安永夕ヶ、安永吉作、安永忠吉、安丸ヨシノ、安丸金藏、安丸夫人、安慶徳兵、安慶良栄、安座間亀、安座間亀昌、安座間昌輝、安座間松助、安座間武信、安座間磨信、安座間磨精、安村キシノ、安宅直次郎、安達キク工、安達勝次、安田吉蔵、安田甚太郎、安里徳昌、伊東治子、伊東進、伊藤さつき、伊藤喜平、伊藤幸雄、伊藤治三郎、伊藤治三郎妻、伊藤多次郎、伊藤留、伊藤良助、伊波ウトヲ、伊波カメ、伊波蒲一、伊波久喜、伊波清孝、伊波伝助、伊敷松、伊礼門太良、井口善太郎、井手重人、井上キクノ、井上広美、井上三代、井上三郎、井上藤子、井上徳次、井上徳太郎、井上八郎、井上兵之丈、井上平四郎、井上米吉、井上豊吉、井上又蔵、井上与三、井上留次郎、井村保、磯岡貫一、一安子之作、稻倉賢寿、稻倉積、引越文一、宇賀健三、宇佐川弥六、浦新造、浦瀬恒七、浦塚マサ工、浦塚滝蔵、浦田久太郎、浦野十平、浦野初蔵、浦野豊記、永井ハルコ、永井三雄、永井秀吉、永井敏夫、永沼健二、永田某、永田某妻、榎本清、榎本惺、園田正雄、遠山正治、遠藤入工、遠藤慶作、遠藤松男、遠藤八十太、塩谷甚蔵、奥村幸太郎、奥田市太郎、奥本直一、横見はる、横見毅一、横山福蔵、横山芳之助、横山某、横山林次郎、横川某、横辻広吉、横田栄之進、横田勝一、岡田ウメ、岡田キヨコ、岡田勘右工門、岡田早苗、岡田島市、岡田稔、岡本克行、岡本藤太郎、沖五郎、沖悟、沖庄三郎、沖庄市郎、沖須磨野、沖政理、沖田玉一、沖田忠、沖本信作、下梶蔵、下西泰、下川カツ工、下川伊太郎、下村ハル、下村三太郎、下村俊(立川)、下村盛次、下村貞二、下村与次、下茂門清次、加藤タツ才、加藤子ヨ、加藤英一、加藤喜三、

加藤信造、加藤政治、加藤千代三郎、加藤倉吉、加藤倉蔵、加藤勇逸、加来林蔵、嘉納政栄、嘉陽宗智、河上慶一、河東某、花野惣松、花野六市、我喜屋得寿、会沢国助、海野当松、海老名光蔵、芥川一彦、開田子工子、開田語作、開田米生、貝原吉三郎、丸山広司、丸山政次、丸山房枝、丸子勘一、丸子春一、丸本菊市、丸本平一、岸本正治、岸本某、岩間喜一、岩間千恵、岩郷豊年、岩戸迅一、岩崎サダメ、岩崎久雄、岩崎庄平、岩城夕ツ、岩城直次、岩田繁松、岩淵治郎吉、岩木俊一、岩木保、喜屋武加那助、喜屋武松三、喜屋武樽、鬼塚某、鬼塚某妻、亀田シノブ、亀田亀一、菊川唯次、菊地武三、吉永政八、吉岡虎吉、吉岡吾市、吉岡寅吉、吉岡稔、吉川幸、吉川万亀、吉川勇平、吉村ツマ、吉村半次郎、吉村諭吉、吉沢トクヨ、吉沢栄、吉沢治男、吉沢正、吉沢忠、吉田久市、吉田桑次郎、吉田伍一、吉田高登、吉田鼎、久保山シズ、久保山安吉、久保田庄五郎、久保武夫、宮下幸太郎、宮坂けさ野、宮坂寛司、宮坂救治、宮坂三郎、宮坂朱実、宮崎三郎、宮崎仁一、宮城勝、宮城代八、宮城当清、宮城文八、宮城友吉、宮城良保、宮川徳二、宮村明治、宮村留吉、宮沢かおる、宮沢松男、宮本ジト、宮本英一、宮本嘉一、宮本寅作、宮野祐四郎、宮里徳、橋本寅七、玉栄樽良、玉城加那吉、玉城賀吉、玉城賀盛、玉城亀雄、玉城牛太郎、玉城幸子、玉城章信、玉城精徳、玉城徳吉、玉城徳蔵、玉城徳太、玉城美重、玉城平義、金柿軍蔵、金子三郎、金城亀、金城徳蔵、金城良保、金沢某、金沢諭吉、金林寿男、窪田清繼、窪田忠雄、熊倉敬一郎、熊倉徳松、熊倉武次、桑原トウ、桑原寅造、恵濃元平、恵比須丈夫、鍵山次一、元岡タミヨ、元岡徳四郎、元川子工ノ、元川堅一、原作市、原菅次、原田ケサノ、原田甘利、原田静子、原田曾次

郎、原田茂作、原武一、原米吉、古賀伊太郎、古賀歌五郎、古賀仁作、古謝有徳、古庄熊義、古田ハル、古田恒重、五十嵐吉次郎、五十嵐八百蔵、後藤徳蔵、交田金蔵、光永夕ケ、光永蕾、光岡高夫、光岡勇、向井公平、幸田藤太郎、広瀬久次郎、江村一男、甲賀春登、甲斐亀蔵、紅野有明、紅野有明妻、荒井喜四郎、荒川サダメ、荒川スマコ、荒川伍平、香川マツコ、香川吾一、香川涉、香川静代、香川武茂、香川芳枝、香川豊子（光岡）、香川茂、高橋キワ、高橋サヨ、高橋ヨシ子、高橋ルカ、高橋祥太郎、高橋豊作、高橋与四蔵、高山ツル、高山松枝、高山猪熊、高田進、高田留吉、高木伊勢太郎、高野キヨカ、高野ヒロ子、高野政喜、高野寅次郎、高野末好、高柳藤磨、国武貞次郎、国武定二郎、黒川市松、今井某、今井友義、今村幸、今村広美、今村鶴喜、今村末政、根神亀代、佐々木時一、佐藤力ネ、佐藤ミトク、佐藤源四郎、佐藤宏太、佐藤弘、佐藤質郎、佐藤庄太郎、佐藤信一郎、佐藤政市、佐藤直記、佐藤定太郎、佐藤二郎、佐藤末吉、佐伯逸次郎、嵯峨里光、采文治、斎藤ヨイ、斎藤栄吉、斎藤幸之進、斎藤三次郎、斎藤勝喜、斎藤精五郎、斎藤八重子、斎藤又男、斎藤弥一、斎藤弥一郎、斎藤弥久太、斎藤六之助、坂原一登、坂原末松、坂口チジユ、坂田チジユ、坂田幸平、榎原マサ、榎原利一、崎原金永、崎原源吉、崎原重助、崎秀次郎、桜井幸之進、笹尾金吾、笹本熊次郎、笹本専一、雑賀三蔵、三枝兵蔵、三宅岩次郎、三谷和吉、三反田定、山下幸蔵、山下重雄、山下庄太郎、山下伝次郎、山下寅喜、山口国太郎、山口十寿、山口順蔵、山口徳江、山崎綾太郎、山崎悦二、山崎義丸、山崎武、山城蒲、山城仁弘、山城誠豊、山城善太郎、山城寅喜、山城敏雄、山川一三、山川太良、山中福松、山田恒太郎、山田梅蔵、山島くに、山

島庄吉、山入端久郎、山入端萬栄、山本はまの、山本義吉、山本吉松、山本周平、山本善太郎、山本竹一、山本寅松、山本良彦、山梨久八、山梨元吉、市原マサオ、市原源、市原敏晴、市場與一、市川はしの、市川喜太郎、市川金蔵、市川勇之進、志水工毛、糸数ナベ、糸数孝、糸数宗吉、糸数宗牛、糸数宗重、糸数宗信、糸数澄、糸数稔、児玉菊夫、児玉勇二、児玉良三郎、寺守乙平、寺西米一、寺野格、蒔田有行、柴倉喜一、柴倉義雄、柴田新太郎、柴尾貞三、芝武、若月正朝、若山某、若藤喜作、若藤達夫、手柴光次郎、酒井参次郎、秋山文次、秋田秋太郎、住永長平、住永萬平、住田滝夫、渋谷定吉、渋谷如斯平、重岡認、重広敬蔵、重村滝蔵、重野直之助、出羽俊子、出羽勝太郎、出島巳之治、緒方久雄、緒方佐久義、緒方甚吉、小橋川力ナ、小橋川嘉吉、小坂栄寿計、小山規、小山喬、小松準、小松準妻、小松實蔵、小西喜美夫、小西元雄、小西秀雄、小川ミヨセ、小川ヨシミ、小川運、小川英子、小川喜一、小川金子、小川桂一、小川秀野、小川親、小川千代蔵、小川太郎、小川富一郎、小川富美、小川武、小倉純一、小竹法経、小島三八一、小平悦吉、小林力ツ工、小林栄治、小林貫四郎、小林百輝、小林武夫、小林留八、小林暎、庄司喜三郎、松浦重実、松永惣之丞、松永末熊、松原久治、松場八郎、松村クマ、松村金太郎、松村静雄、松村操、松村馬吉、松沢サツ工、松沢等、松田安定、松田薫、松田政則、松田太良、松田鷹松、松平某、松本安太郎、松本安美、松本勘次郎、松本輝雄、松本龜三郎、松本健吉、松本実之助、松本秀夫、松野直人、照屋松吉、上間嘉昇、上間嘉清、上間清昌、上間利清、上原亀、上原亀康、上原龜三、上原亀次、上原亀次郎、上原龜太郎、上原久治、上原牛治、上原幸一、上原幸三、上原昇、上原

徳一、上原徳助、上原保徳、上原某、上口周市、上中宇作、上中二三、上仲実治、上田綾子、
 上田唯次、上野夕キノ、上野松一、上野半之助、上野繁実、上野彦士、上里幸政、城下初太
 郎、植原トク、織田半平、信平喜六、新井田鉄治、新川宣富、新保孝太、新保与市郎、新本
 勇松、新門亀、新里正吉、新里南儀、森ハル、森岡信喜、森喜之助、森光唯登、森川アヤコ、
 森川誠一、森中勇、森田清、森田茂稔、森平吉、深川浅一、深沢シマ、深沢国太郎、深町某、
 真鍋直、真鍋磨、神崎章、神崎武雄、神村盛光、神中某、神田トメ、神田卯一、神田亀作、
 親川要次郎、仁科民蔵、須山ヤエ、須山藤太郎、水間実茂、水上二一、水野国穂、杉山義三
 郎、杉田義男、杉本ミツギ、杉本嘉一、菅井イワノ、菅井秀二、菅井忠吉、菅井忠吉妻、菅
 原文之進、菅原長吉、菅原与三郎、瀬在千恵子、瀬在藤治、瀬川七兵衛、星野泰次、星野留
 吉、正田勲、清水喜久二、清水幸吉、清水梅吉、清水某、清水某妻、清瀬貞雄、清野源右工門、
 清野藤三郎、清野藤四郎、西熊蔵、西隈計次、西敬三、西新門加那、西新門政光、西村伊太
 郎、西村貞虎、西村貞虎妻、西村徳次郎、西村八郎、西沢治三郎、西田岩栄、西本増造、青
 沼康吉、青木為三郎、青木輝夫、青木暁夫、青野久四郎、青柳亮平、石井菊次郎、石井元作、
 石井兵蔵、石原某、石崎キヌヨ、石崎吾一、石山寿蔵、石川加那、石川久吉、石川俊雄、石
 川松、石川善栄、石川善俊、石川樽良、石川文助、石川勇熊、石川由太郎、石田勘助、石田
 孫市、赤間政、赤比地亀三、赤比地政芳、千葉円喜治、川崎幸雄、川手実登、川上一江、川
 上潔、川上三蔵、川上某、川瀬吉次郎、川瀬文治、川瀬某、川村直之、川嶋広三郎、川辺繁
 蔵、浅香徳治、浅利常五郎、浅利倉一、前溝増太郎、前溝彦一、前川新次郎、前田政次、前

田朝光、前田朝光妻、前田与一郎、前桃泉哲、前門繁栄、相島豊三郎、草西幸十、増永喜代次、
 増田倉蔵、増田寅造、蔵本土郎、村上亀芳、村上留市、村中シゲ、村中芳蔵、村田大蔵、大
 越利八、大屋亀、大下ヨシコ、大下関三、大久保彦吉、大久保芳夫、大橋常次郎、大橋忠太
 郎、大兼久ウサ、大兼久カマタ、大兼久安吉、大兼久住光、大原重生、大江ス工、大江亀作、
 大江広三、大江三郎、大沼次郎、大城蒲、大城寛順、大城亀、大城亀康、大城亀徳、大城牛、
 大城次良、大城樽、大城朝貞、大城長盛、大植俣一、大西太郎、大川績、大村十一、大村鶴松、
 大滝直吉、大沢勇吉、大谷鉄一、大谷徳雄、大竹信次、大塚清一、大槻吉貞、大槻幸雄、大
 田三郎、大島源八、大平トヨ工、大平慶太郎、大平慶太郎妻、大平忠男、大平麟三、大槇良
 助、滝場某、滝本亀治、巽喜一郎、巽武平治、巽房市、谷久太郎、谷口吾市、谷政雄、谷石
 伝次、谷本玉一、谷本芳松、樽本ツル、樽本十寸水、丹羽初吉、丹原直、丹原洋人、知念栄弘、
 池田重一、池部助右卫門、築井ナミ、築井広治、築井勇次、竹原市蔵、竹中次太郎、竹内憲
 治、竹本シズ子、竹本チカ、竹本徳一、竹本寅吉、中井正登、中筋清五郎、中原守、中原藤
 次郎、中芝文助、中清登、中西清人、中川金富、中川熊雄、中川恵迪、中川正、中川露、中
 村ルツ、中村義人、中村直、中村直八、中村藤吉、中村富太郎、中村福太郎、中村福太郎妻、
 中村万平、中沢保三、中沢芳三郎、中沢勇三、中田利喜、中島十五郎、中島應親、中入鉄五郎、
 中尾虎喜、中尾杉松、中尾直、中尾福永、中浜仙太郎、中平藤子、中平隆晴、中本秀雄、中
 本某、中野キサ、中野音吉、中野新蔵、中野癸一、仲間鎌蔵、仲間宗清、仲間政太郎、仲間
 伝興、仲宗根安成、仲宗根蒲助、仲宗根牛、仲宗根幸春、仲宗根勝吉、仲宗根政三郎、仲宗

根盛郎、仲程銀吉、仲程清喜、仲程清四郎、仲田安一、仲田蒲助、仲田実男、朝戸松彦、朝
 倉徳次郎、長瀬一枝、長瀬泰雄、長谷川ミユキ、長谷川謙吉、長谷川与五郎門、長谷川与三
 郎、長野シゲノ、長野勇、長嶺松雄、長嶺正義、津山治吉、津上栄吉、津田喜太郎、津波古
 マツ、津波古千松、津本治太郎、坪井兼一、鶴丸信市、鉄田聿次郎、天願三良、天願松、天
 願亮助、天野熊太、田吉伝蔵、田口オイシ、田口駒右エ門、田口作一、田所彦次、田村ミツエ、
 田村栄枝、田村秀吉、田村徳重、田村勇、田代覚蔵、田代善吉、田中夕力、田中一太、田中
 耕、田中兵次郎、田中米吉、田中米作、田中保、田島キ又、田島庄三郎、田島又兵衛、田呂
 丸幡寮、渡嘉敷真康、渡久地甚一郎、渡久地政則、渡久地政平、渡久地善次郎、渡辺ハツノ、
 渡辺磯哉、渡辺国一、渡辺重治、渡辺政太、渡辺鶴吉、渡辺鶴蔵、渡辺良三郎、渡辺良二郎、
 登所平、土永喜代治、土永精三、土屋トム、土屋敬三、土屋始、土屋来吉、土田憲定、土野
 矢之助、党秀三、党文平、唐戸金蔵、島ナカ、島實七三郎、島崎新平、島崎新平妻、島袋嘉真、
 島袋蒲吉、島袋常成、島袋忠蔵、島津ナミ、島津岩吉、島津三一郎、島津三郎、島津甚三郎、
 島津二郎、島田いま、島田為十郎、島梅吉、島本こぎく、島本やす、島本伊太郎、島本大吉、
 島本繁吉、嶋徳次郎、桃原哲、湯中夕力、湯中れい、湯中清、湯中増二、湯中藤次、当山亀吉、
 当山清富、藤間惣三郎、藤間徳治、藤崎兼男、藤重一則、藤重一則妻、藤代健一、藤田乗祐、
 藤田宅巳、藤田寅蔵、藤本土郎、藤木季隆、藤野米子、藤野芳人、道上与市、道免武吉、徳
 永喜八、徳永昇、徳永茂、徳原正次、徳田加那、徳田蒲、徳田謙吉、内間善五郎、内間武五郎、
 内山シボリ、内山進、内田要之助、内田良助、内藤健市、内藤五郎、内野キミ工、内野和市、

南イサ、南菊造、南原隆一、南善太郎、楠木義夫、二階堂喜一、日森平蔵、日野モモヨ、日野忠造、日野良彦、波田幸次郎、馬場亮平、馬渡金蔵、馬渡潔、馬渡虎蔵、萩原清治、柏野伝左工門、白木三吉、白野善平、白野太市郎、白野定助、八木源一郎、半崎乙蔵、半沢ミヨシ、半沢常吉、半沢豊治、板本定次、飯塚平吾、飯島壮美、比嘉吉次郎、比嘉吉助、比嘉吉村、比嘉敬蔵、比嘉正勝、比嘉増栄、肥田野鉄四郎、肥田野勇、肥田野有作、肥田野龍次、尾古貴政次郎、尾長妻、百田政経、浜源右工門、浜口益一、浜口加次郎、浜汀、浜田ツマ、浜田貞一、富永佐登理、富永直記、富岡蓑夫、富樫金太郎、富山高、富松辰造、富田義夫、富田真市、富田藤正、府内清定、敷島新三、撫谷勝造、武田ミヤコ、武田義人、武藤琢一、福永元義、福原隆徳、福手房吉、福迫義、平安座良秀、平田秋一、平野春茂、平野富士男、平野勇、平良徳平、平良良守、柄沢うめ、柄沢豊次、米倉一八、別府貞治、片桐留蔵、片山恂逸、芳谷格次郎、北崎オツナ、北崎ミヨ、北崎好助、北崎政次郎、北崎善三、北野惣吉、堀亀吉、堀内一男、本間サクヤ、本間清作、本間平治、本行寛治、本行岩之丞、本庄忠造、本田熊喜、本田虎喜、又吉ミツ、又吉加那一、又吉久松、又吉誠喜、湊ミサオ、湊永吉、湊正美、湊雪雄、明神正美、茂木恒三郎、木下市喜、木下藤吉、木下武市、木場喜一、木村喜一、木村光太郎、木村武、木田亀蔵、木野三郎、門司時雄、野瀬達馬、野中豊、野田浅太郎、矢倉義路、与那城久吉、立川金治、溜淵道雄、林磯吉、林光逸、林春吉、嶺井シゲ、嶺井武彦、鈴木信夫、鈴木清一、廉崎佐一、和田崎林次郎、鷺見久太郎、鷺見美登治、鷺見力男、饒平名力メ、饒平名知栄、饒平名知嗣、饒平名知政

倉部きよたか

一九五一年生まれ。中学卒業後、京都・紫野大徳寺に入るが、二年で破門され京都を転々とする。関西学院大学中退、早稲田大学卒業。国連関連の文化団体に入り出版と機関紙編集を担当。そのころからラテンアメリカの日本人移民史を調べはじめ。著書に『峠の文化史―キューバの日本人』（PMC出版）、『京都人は日本―薄情か』（文藝春秋）、『母棄―京都禅寺小僧物語』（ポプラ社）ほか。

キューバ日本人物語

著作者 倉部きよたか

発行日 二〇二四年七月二十一日

発行者 倉部きよたか

連絡先 shogen@nethome.ne.jp